

博士学位論文

自然会話における「ノダ（+終助詞）」の手続き的意味の考察

－具現化形式と音調に注目して－

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語文化専攻

市村 葉子

平成 28 年 4 月

表記について

1. 本論文で使用する「(∅)」は後接する形式がない「ゼロ標識」であることを示す。
2. 発話例の「*」、「?」は、それぞれ当該発話とその発話状況においては文法的に非文、不自然であることを示す。
3. 発話例において考察の対象とする発話文には「→」を付記し、注目するノダ形式及びその他の形式はゴシック体で記す。その他、考察に関わる個所には「.....」を引く。ただし、他の論文からの引用の際は、原則としてそのまま引用する。
4. 既存の話し言葉コーパスを引用した場合、表記及び記号はそのまま使用する。左端に行番号（ライン番号）を付す。また、引用した各発話例は、data 番号、注目する発話（→を附した発話）の話し手の性別、年代を明記する。なお、使用したコーパスは本文中において宇佐美まゆみ（監）「BTSJ による話し言葉コーパス」は「BTSJ」、「名大会話コーパス」は「名大」と表記する。

主な記号は以下の通り。

<>は同時発話を示す。重なった部分双方を<>でくくり、重ねられた発話には、<>の後に、{<}をつける。また重ねた方の発話には、<>の後に、{>}をつける。「≡」は改行される発話と発話の間が当該の会話の平均的な間の長さより相対的に短いか、全くないことを示す。（ ）は相手の発話に重なる、短く、特別な意味を持たないあいづちを示す。***は発話が不明瞭で文字化ができなかったことを示す。第1話者の発話文が完結する前に、途中で挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合には【 【 】】をつける。音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は‘ ’の中に正式な表記をする。詳しくは「基本的な文字化の原則 2011年版」(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf>)を参照されたい。

5. 引用される話者の M は男性、F は女性であることを示す。
6. コーパス中の { } は、筆者による加筆であることを示す。
7. コーパス中の (()) は発話の理解を容易にするため筆者が説明を加筆したことを示す。
8. 本論文では、各章ごとに発話番号を付す。

初出一覧

本論文に収録された各論の初出は以下のとおりである。いずれもその後の研究の成果を取り入れて大幅に加筆・修正を施した。

第1章 序論 書き下ろし

第2章 本論文の枠組み（関連性理論 Relevance Theory） 書き下ろし

第3章 先行研究 書き下ろし

第4章 「の(∅)」「んだ(∅)」「んです(∅)」の手続き的意味

「「のだ文」を用いた日本語母語話者の伝達方略—話し言葉コーパスの分析に基づいて」『日本語用論学会第16回大会発表論文集』9, 1-8, 日本語用論学会 (2014年)

「若者の自然会話における「の(∅)」の伝達的機能—男女間の使用差と「んだ(∅)」との機能分担に着目して—」『語用論研究』16, 57-66, 日本語用論学会 (2015年)

第5章 自然会話における「だ」の使用実態 書き下ろし

第6章 裸の形式の手続き的意味の考察 書き下ろし

第7章 「ノダね」「ノダよね」の手続き的意味の考察

7.3 「「ノ(ダ)ね」の語用論的機能—具現化形式と音調の観点から—」『日本語用論学会第17回大会発表論文集』10, 9-16, 日本語用論学会 (2015年)

7.4 「「んだよね」の発話意図を解釈する手がかりとは?—発話意図と音調との対応 関係に注目して—」『日本語/日本語教育研究』6, 149-164, ココ出版 (2015年)

「「んだよね」の手続き的意味の考察—「ね」の音調と発話解釈との対応に基づいて」『日本語用論学会第18回大会発表論文集』11, 日本語用論学会 (近刊)

第8章 総合考察

「「んだよね」の発話意図を解釈する手がかりとは?—発話意図と音調との対応 関係に注目して—」『日本語/日本語教育研究』6, 149-164, ココ出版 (2015年)

以上

目次

第1章 序論	1
1.1 研究背景と研究動機	1
1.2 本論文の意義	6
1.3 本論文の構成	10
第2章 本論文の理論的枠組み（関連性理論 Relevance Theory）	12
2.1 語用論とは	12
2.2 関連性理論の概要	13
2.2.1 関連性の原則とその有効性	13
2.2.2 関連性があるということ	14
2.2.3 関連性理論が考察対象とする伝達とは	15
2.2.3.1 発話による意図明示的伝達	15
2.2.3.2 発話の解釈的用法（interpretive use）と記述的用法（descriptive use）	19
2.2.4 認知環境の修正（認知効果）	21
2.2.5 明意（explicature）と暗意（implicature）	23
2.2.5.1 明意（explicature）	23
2.2.5.1.1 （基礎）明意（basic-level explicature）	23
2.2.5.1.2 高次明意（higher-level explicature）	26
2.2.5.2 暗意（implicature）	27
2.2.6 概念的意味（conceptual meaning）と手続き的意味（procedural meaning）	29
2.3 関連性理論を援用した日本語研究	33
第3章 先行研究	34
3.1 発話文におけるノダの位置付け	34
3.1.1 陳述とは	34
3.1.2 渡辺（1953）以前の「陳述」	35
3.1.3 渡辺（1953, 1971）の「陳述」	35
3.1.4 芳賀（1954）の「陳述」	37
3.2 ノダの構文的特徴	39
3.3 ノダの意味	40
3.3.1 「説明（・判断）」説	40
3.3.1.1 先行研究	40
3.3.1.2 意義と問題点	43

3.3.2	「既定命題」説	4 4
3.3.2.1	先行研究	4 4
3.3.2.2	意義と問題点	4 6
3.3.3	「関連づけ」説	4 7
3.3.3.1	先行研究	4 7
3.3.3.2	意義と問題点	4 9
3.4	関連性理論を援用した研究	5 1
3.4.1	先行研究	5 1
3.4.2	意義と問題点	5 3
3.5	明らかにすべき課題	5 8
第4章 「の (の)」 「んだ (の)」 「んです (の)」 の手続き的意味		6 1
4.1	はじめに	6 1
4.2	問題の所在	6 2
4.2.1	先行研究	6 2
4.2.1.1	ノダの具現化形式	6 2
4.2.1.2	ノダの伝達的機能	6 2
4.2.1.3	ノダの性差	6 3
4.2.2	問題の所在	6 4
4.3	「の (の)」 「んだ (の)」 の分析	6 5
4.3.1	調査概要	6 5
4.3.2	調査結果	6 5
4.3.2.1	使用数と分析対象数	6 5
4.3.2.2	使用されたノダ形式	6 6
4.3.2.3	「の (の)」 の使用に関する性差	7 0
4.3.2.3.1	情報提示のノダにおける「の (の)」 使用の性差	7 0
4.3.2.3.2	疑問文のノダにおける「の (の)」 使用の性差	7 1
4.3.3	考察	7 2
4.3.3.1	ノダ形式の使用実態	7 2
4.3.3.2	「の (の)」 の使用に関する性差	7 3
4.3.3.3	自然会話における「の (の)」 及び「んだ (の)」 の使用分布	7 4
4.3.3.3.1	「んだ (の)」 の伝達的機能－「だ (の)」 が示す意味－	7 4
4.3.3.3.2	「の (の)」 の伝達的機能－「聞き手配慮」と「聞き手目当て性」－	7 5
4.3.4	結論	7 6
4.4	敬体「んです (の)」 の使用実態	7 6
4.4.1	調査概要	7 6

4.4.2	調査結果	77
4.4.2.1	ノダ形式の使用数と分析対象数	77
4.4.2.2	使用されたノダ形式	77
4.4.2.3	「んです (∅)」の使用場面	78
4.4.3	考察	79
4.4.3.1	ノダ形式の使用数と使用形式	79
4.4.3.2	「んです (∅)」の使用場面	80
4.4.3.3	常体の裸の形式との関係	80
4.4.3.3.1	情報提示のノダの「の (∅)」と「んです (∅)」	80
4.4.3.3.2	「だ (∅)」と「です (∅)」	81
4.5	自然会話におけるノダの手続き的意味についての仮説	83
4.5.1	ノダの語用論的機能の類型化	83
4.5.2	裸の形式「の (∅)」「んだ (∅)」「んです (∅)」の手続き的意味 (仮説)	86
4.6	ノダは明意, 暗意を制約するのか	87
4.7	第4章のまとめ	92
第5章 自然会話における文末の「ダ」の使用実態		94
5.1	はじめに	94
5.2	ダに関する先行研究	94
5.2.1	ダの構文上の機能	94
5.2.2	ダの意味	96
5.2.3	本論文におけるダの位置付けと解決すべき課題	100
5.2.3.1	ダの品詞	100
5.2.3.2	解決すべき問題	101
5.3	文末の「ダ」の分析	106
5.3.1	研究課題	106
5.3.2	調査概要	106
5.3.3	調査結果	107
5.3.3.1	「だ」の使用数と対象数	107
5.3.3.2	「だ」に前接する品詞	108
5.3.3.3	「だ」の類型化	109
5.3.3.4	品詞, 共起語にみる各「だ」の使用数	115
5.3.3.5	「だ」の使用場面	117
5.3.4	ムード別にみる「だ」の使用的意味	118
5.3.4.1	伝達的ムードの「だ」	118
5.3.4.2	述定的ムードの「だ」	123

5.3.4.2.1	「だ」に前接する語及び各用法別使用数	1 2 3
5.3.4.2.2	述定的ムードの「だ」にみる必須の「だ」と任意の「だ」	1 2 4
5.3.4.2.3	「だ」の省略容認度からみるノダの二面性	1 2 8
5.3.4.3	「その他」の「だ」	1 3 0
5.4	第5章のまとめ	1 3 3

第6章 裸の形式の手続き的意味の考察 1 3 5

6.1	はじめに	1 3 5
6.2	音調に関する先行研究	1 3 5
6.2.1	用語の定義	1 3 5
6.2.1.1	アクセント	1 3 5
6.2.1.2	プロミネンス	1 3 6
6.2.1.3	イントネーション	1 3 6
6.2.1.4	「音調」の定義	1 3 7
6.2.2	音調の分類	1 3 8
6.2.2.1	終助詞が付加されない音調	1 3 8
6.2.2.2	「の」が付加された音調	1 4 0
6.2.3	本論文が援用する知見と解決すべき問題	1 4 1
6.2.3.1	援用する知見	1 4 2
6.2.3.2	解決すべき問題	1 4 2
6.2.3.3	本論文の立場	1 4 4
6.3	調査	1 4 5
6.3.1	調査概要	1 4 5
6.3.2	調査結果	1 4 7
6.3.2.1	「の (∅)」の音調と連想する発話意図	1 4 7
6.3.2.2	「んだ (∅)」の音調と連想する発話意図	1 4 8
6.4	考察	1 5 1
6.4.1	許容される音調	1 5 1
6.4.2	音調と発話意図の対応	1 5 3
6.4.2.1	「の」の音調と発話意図の対応	1 5 3
6.4.2.2	「んだ」の音調と発話意図の対応	1 5 4
6.5	「の (∅)」「んだ (∅)」の手続き的意味	1 5 5

第7章 「ノダね」「ノダよね」の手続き的意味の考察 1 5 8

7.1	はじめに	1 5 8
7.1.1	「ノダ+終助詞」を分析する意義	1 5 8

7.1.2	各終助詞との共起と具現化形式	160
7.2	終助詞の音調に関する先行研究	163
7.2.1	「ね」の音調	164
7.2.1.1	先行研究	164
7.2.1.2	援用する点と今後明らかにすべき点	168
7.2.2	「よね」の音調	169
7.2.2.1	先行研究	169
7.2.2.2	援用する点と今後明らかにすべき点	171
7.2.3	解決すべき問題と本論文の立場	171
7.3	「ノダね」	172
7.3.1	問題のありか	172
7.3.2	先行研究および研究課題	172
7.3.2.1	「ノダね」の用法	172
7.3.2.2	「ノダね」の使用場面及び研究課題	174
7.3.3	調査	176
7.3.4	調査Ⅰ（具現化形式に関する調査）及び結果	176
7.3.4.1	調査概要	176
7.3.4.2	調査結果	176
7.3.5	調査Ⅱ（「ね」の音調に関する調査）及び結果	178
7.3.5.1	調査概要	178
7.3.5.2	調査結果	180
7.3.6	考察	181
7.3.6.1	具現化形式と使用場面	181
7.3.6.2	具現化形式と「ね」の音調との対応	182
7.3.7	結論	185
7.4	「ノダよね」の手続き的意味	185
7.4.1	はじめに	185
7.4.2	先行研究と研究課題	187
7.4.2.1	先行研究	187
7.4.2.2	研究課題	188
7.4.3	調査Ⅰ：コーパス分析及び読み上げ実験を用いた調査	189
7.4.3.1	調査概要	189
7.4.3.2	調査結果	189
7.4.3.2.1	「ノダよね」の具現化形式	189
7.4.3.2.2	「んだよね」の発話意図	190
7.4.3.2.3	発話意図と音調との関係	192

7.4.3.3	考察	193
7.4.3.3.1	「んだよね」の使用	193
7.4.3.3.2	「んだよね」の発話意図と音調との関係	194
7.4.3.4	結論	196
7.4.4	調査Ⅱ：「ね」の音調に関する聞き取り調査	196
7.4.4.1	先行研究と本調査の仮説呈示	196
7.4.4.1.1	「よ」が伝達する発話意図	196
7.4.4.1.2	仮説	197
7.4.4.2	調査	197
7.4.4.3	調査結果	198
7.4.4.3.1	自然度判定	198
7.4.4.3.2	「ね」の音調と連想する発話意図	199
7.4.4.4	考察	201
7.4.4.4.1	「ね」の音調と自然さ	201
7.4.4.4.2	「ね」の音調と発話解釈	201
7.4.4.4.3	「ノダよ」と「ノダよね」の手続き的意味の違い	205
7.4.4.5	結論	207
7.4.5	第7章のまとめ	208
第8章 結論及び日本語教育への示唆		209
8.1	本論文の議論のまとめ	209
8.2	日本語教育への示唆	213
8.2.1	ノダ形式の困難点と解決案の呈示	213
8.2.2	日本語教育への示唆	216
8.2.2.1	裸の具現化形式「の (∅)」「んだ (∅)」の指導	216
8.2.2.2	「ノダね」「ノダよね」の指導	220
8.2.2.3	ノダの過剰使用を防ぐために	223
8.3	課題と展望	224
参考文献		226

第1章 序論

1.1 研究背景と研究動機

外国人に日本語を指導する際、その運用上の規則により明確に誤用を訂正できるものと、そうでないものがある。例えば、(1)のような活用上の誤りは規則を呈示して訂正することはできるが、(2)の場合なぜ使用が不適切なのかを説明するのは難しい。

(1) *私は中国語が話されません。(← 話せません) (作例)

(2) ?先生、明日も大学へ来るんですか。(← 来ますか) (作例)

(2)のような質問は次の日が休日でない場合「来てほしくないのに来るのか」のような含みがあるため不自然であるが、発話した方には大意はない。「ノダ」は強調と指導されることもあるため、「すごく聞きたいときにはノダを使う」と考える外国人は多い。「来るんですか」と言われると責められているようで違和感を覚えるものの、筆者自身なぜそこでノダを使用すると違和感を持つのか、という点をうまく指導できず歯がゆい思いをする。二十数年日本語教育に携わる中で、ノダは常に筆者にとって「気になるが説明できない」項目であった。一方で、ノダを上手に使いこなしている留学生がいる。なぜそんなに上手にノダを使うのか、と聞くと、「感覚です」と言う。ノダは「説明できない」と筆者が思うのと同じように、学習者にとっても「説明できない」形式なのである。

ノダはムード(寺村, 1984)形式であるため、場合によっては使用が任意であり、危険な言い方をすれば、必要な情報はノダを取り除いても情報内容は変わらない。しかし、発話された聞き手の印象は大きく違う。(2)の発話がそうである。ノダは日本語教育において、扱いの難しい項目の一つである。そのノダを学習者にわかりやすく、「使用して損をしない」指導をしたい、というのが本論文の出発点である。

このような研究動機から、本論文は、日本語教育への提言を最終目的に、自然会話で使用されるノダ形式の具現化形式を分析、考察し、その手続き的意味(Blakemore, 1987; Wilson & Sperber, 1993)を明らかにする。なお、本論文では、片仮名表記の「ノダ」をその本質的意味を記述する抽象形式とするのに対し、平仮名表記の「の」「んだ」「んです」を話し言葉で実際に使用される「具現化形式」と呼ぶ。本論文の「ノダ」とは文末に使用される「んだ(の)」「の(の)」「んです(の)」(以下、これらの具現化形式を「裸の(ノダ)形式」とする)などの具現化形式の総称であり、「ノダ形式」とは、裸の形式だけでなく、それらと終助詞「よ」「よね」「ね」の複合形式を意味する。

Maynard (1993), メイナード (2005) によると「のだ文」は「日常会話でも 25.48% 使われて¹」おり、「かなりの頻度で日本語のディスコースの広範囲にわたって使用されている」(p.356)。実際の自然会話をみると「のだ文」が会話中に頻繁に表れている。

- (3) F11: 韓国料理も, 食べに行きたいな, どっか。
F12: やっぱ, なんか, あたしは韓国じゃないって感じが。
F11: あ, ほんとに。
→F12: なん, こっちでそんな食べたことないんだけどね。うん。高いからさー。
→ 韓国の, 2 倍なんだよね, 値段が。
→F11: そうなの。
F12: <ちょうど 2 ばん‘倍’>{<}。
→F11: <あ, 安いんだ, >{>}向こう。
→F12: うんうんうん, なんかもう, 冷麺とかさ, ほんとでっかいんだけど,
→ (うん), 400 円ぐらいなんだよ。
F11: はえー。

(BTSJ² data15-1-F11-F12 女性 10 代後半~20 代)

ノダは, 使用頻度が高く, かつ, 文脈によって「説明」「発見」「理由」(庵他, 2001) といったように多様な発話意図を表明するムード形式である。その多様性からこれまで多くの研究者の関心を引いてきた(三上, 1953; 寺村, 1984; 田野村, 1990; 益岡, 1991; 野田, 1997; 石黒, 2003; 名嶋, 2007 など)。そして膨大な研究の蓄積によりノダの本質的意味も明らかになりつつある。先行研究を概観すると, ノダの本質的意味を説明するキーワードとして, 「説明・判断」「既定(既成)命題」「客体化」「関係づけ」「認識の隙間」といったものが挙げられる。これらのキーワードはそれぞれが独立したものではなく, ノダの性質を別の角度から捉えて記述しているようにも思える³。

しかしその一方で, 従来の研究はノダの構文的特徴と機能とを「必要以上に関連させて考察する傾向が強い」(名嶋, 2007: 14) ため, ノダの語用論的機能についての考察は十分になされているとは言えない。ノダは話し手の主観的態度を示すムード形式であるため, 特に対話場面では当該形式の使用が時と場合によって「両刃の剣」(国広, 1984:

¹ Maynard (1993) の 20 ペアの会話各 3 分を文字化した資料に基づく。Maynard (1993) では文末のみを対象としてノダ形式を調査し, 調査対象の 1244 発話(男性 698 発話, 女性 546 発話)中, 317 発話(男性 180 発話, 女性 137 発話)にノダ形式が使用されたことを示した。

² BTSJ とは宇佐美まゆみ監修 (2011) 『BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声 2011 年版)』の略称で, 294 会話, 総時間 4000 分 31 秒 (約 66 時間) の友人, 初対面の雑談の録音資料を文字化したものである (注 34 参照)。

³ たとえばノダの意味を「説明」とする益岡 (1991) は, その下位分類である「背景説明」文は「真であることが確定した文である」(p.143) とし, ノダと「(命題の) 既定性」との関連を述べている。

8) となる。つまり、使用することで配慮表現にもなり、逆に「対人関係を損なう危険な面を持っている」(同)。こうした使用に関する判断は話し手及び聞き手の主観に大いに依存しており、どういった場合に使用が好まれ、逆に支障を来すのかといった語用論的な側面は重要ではあるものの、一方で記述が難しくなる要因にもなっている。

本章の冒頭で述べたように、日本語教育においてもノダ形式は指導の難しい形式であり、学習者にとっては習得が難しい形式と言われている(例えば佐治, 1991; 新屋他, 1999; 菊地, 2000; 近藤, 2002; 市川, 2005 など⁴)。しかし, Maynard (1993) らが指摘するように、当該形式が使用頻度の高い、かつ国広 (1992) が指摘するように、ノダの使用が人間関係の構築に関わる形式であるならば、日本語学習者に指導しやすい形で明示する必要がある。

本論文は日本語教育に提言することを最終目標に、まず、ノダの適切な使用を考える前段階として、話し言葉のどのような場面でノダが使用されているのか、という点を分析、考察する。そうしたノダの対人的な性質を考察するには、名嶋 (2007) のいう「聞き手の発話解釈」という視点が重要であると考えられる。この主張は、人は常に関連性を求めているという「関連性理論」(Sperber & Wilson, 1986/1955) に基づくものであるが、それは本形式が話し手の主観的態度を示すムード形式であり、当該形式の使用により聞き手に当該発話をどのように解釈させたいか、という話し手の意図が明示されるためである (2.1 で詳述)。

また、ノダ研究は「のね」「んだよね」といった複合形式の研究はほとんど手付かずの状況である。筆者がノダ形式の使用実態を調査した結果、ノダ形式の裸の形式で頻用されているのは「の (∅)」のみで、その他は「んだよ」「んだよね」といった他形式との共起表現が使用の上位を占めることが明らかになった (第 4 章)。しかし、先行研究では、ノダ及び終助詞は複合形式での記述は少なく、たとえ記述されたとしても、基本的にはノダの意味と終助詞の意味を単純に加算したものとして捉えられているようである。例えば、野田 (2002) では、「んですよね」について次のような記述がある。

(4) 「結婚、しているんですよね？」

突然彼女が僕にそう聞いた。どくと心臓が嫌な音を打つ。

「指輪」

そう彼女は呟く。僕は黙ったまま、脂肪に埋もれた銀色の指輪に目を落とす。

「右手にしているから、もしかしたら違うのかなって思ってたんです」

(野田, 2002 : 287 (85))

⁴ 市川 (2005) では、「「～の(ん)だ」(会話では「～んだ」「～んです」になりやすい)は、日本人がよく使用するのに、学習者がうまく使えない表現です」(p.150)と記述されている。新屋他 (1999) では、「「んです」の意味・用法は、十分明らかにされているとは言えませんが、必須の場合と必須でない場合があるため、日本語教育で取り扱う項目の中でも、教えるのが難しいものの一つでしょう」(p.22)とある。

野田（2002：288）によると、この場合、聞き手が指輪をしているという状況の〈事情〉を「結婚している」と把握していることが「のだ」で、その把握が当然のことであるという見込みが「よ」で、その見込みと聞き手の知識の一致を問うことが「ね」で表されているという。

(4) (野田, 2002 では (85)) の例は「んですよね」を「「のだ」 + 「よ」 + 「ね」といった形式の単純な意味の加算で説明が可能である。しかし、これですべての「んですよね」が説明できるとは言えない。たとえば日本語記述文法研究会（2003：267）では、(5) の例を挙げ、「話し手の個人的な知識や考えを表す文に「よね」を用いることは難しい」が、「このような文は「のだ」によって、聞き手に対して説明しようとする態度を明示すれば、自然な文になる⁵」としているものの、「なぜそのような時に「よね」が使用されるのか」についての記述はない（第7章で後述）。

(5) A 「海外旅行中に財布を落としたそうですが、大丈夫でしたか？」

B 「あの時は困ったんですよね」

（日本語記述文法研究会，2003：267）

もし単純に両形式の意味を複合させたものとするならば、複合形式を記述することは余り効率的ではない。しかし、自然会話では(5)のように両形式の意味の加算とは言えない使用も散見される。ここで、山内（2004）の主張を提示する。山内（2004）は N グラム統計⁶を用いて、日本語学習者の中級，上級，超級の各レベルを特徴づける文字列の抽出を行った。その結果をふまえ、「超級話者の特徴は「んです」を「けど」「ね」「よ」「よね」などうまく結びつけて使用できることだと言えるかもしれない」（p.156）と記述している。つまり、これらの形式は初級および中級の日本語教科書で提示されている⁷ため、もし単純な意味の加算で説明できるのであれば、それほど産出は困難ではないと推察されるが、実際には超級話者でしか使用できないのが現状なのである。従って、この論考は、「ノダ+終助詞」が純粋な意味の加算では説明できないことを示唆していると考えられる。

さらに、先行研究ではノダという抽象形式に注目し、記述しているが、特に終助詞や「つけ」などのような文末詞が後接しない裸の形式である「の (∅)」「んだ (∅)」「んです (∅)」の差は「基本的に文体差であり、機能はほぼ同じである」（日本語記述文法研究会，2003：195）と記述されるにとどまり、詳細に性質の違いを論じた研究は管見

⁵ 蓮沼（1992）にも同様の記述があるが、なぜ「んだよね」が説明場面で使用されるかといった点についての詳しい記述はない。

⁶ 山内（2004：151）によると、N グラム統計は「テキストデータの中の、任意の長さの文字列の出現頻度を知ることができる手法」である。

⁷ 例えば『みんなの日本語 初級』（1998）では「ね」は第4課、「よ」は第5課、「けど」は第20課、「んです」は26課でそれぞれ新出語（文型）として呈示されている。

の限り少ない。しかし、先述したように、裸の形式の使用数に差があるということは、これらの形式には使用上の差があることを示している。

また、本論文が考察対象とする「ノダ+終助詞」はある規則に基づいて具現化形式が使い分けられており、これは共起形式についても同様であると考えられる。(6)を参照されたい。

(6) (F131 と F051 の会話。二人は大学院の同級生。F131 が大学で非常勤講師をしており、その学校の学生について話している場面)

F131 : そう。で、全然 (うん) まだ 1 回しか来てないとかね、(あー) いるから、もう、(なんでかねー) もう成績あげないよとか思うんだけど。

F051 : ふーん。来年、またかな。

→F131 : でも B さんの方には出てるのね {?んだね}。(えっ、本当) でも私の方には全然来ないの。

F051 : えーっ、何かほかの授業入れてるんじゃないのとか、思っちゃうよね。

(名大 data117 女性 20 代)

これは、F131 が F051 に対し、自分が担当する学生について話している場面である。F131 が自分の担当する授業が始まって数回経つにもかかわらず、1 回しか来ていない学生がおり、「成績 (単位) をあげたくない」と不満を漏らしたのに対し、F051 が、「来年またかな」と言ったところ、「(F131 の授業には出ていないのに) B さんの方 (他の担当教員の授業) には出てるのね」と、「ノダ+ね」の形式を用いて状況説明を続ける場面である。当該の形式は聞き手に当該命題を確認するというより、聞き手に命題を言明しており「のよ」に近い表現である。

ここで本論文が目にするのは、「ノダ+ね」の具現化形式が、「のね」であって「んだね」ではないという点である。この発話を「出てるんだね」とすると、「知らなかったけど、B さんの授業には出てるんだ」と、自身の認識が修正されたような発話意図を伝達することになる。しかし、先行研究には管見の限りにおいて複合形式の使用上の制限についての記述がみられない。こうした具現化形式に着目した分析、考察を行うことにより、先行研究で見過ごされたノダの意味を記述することができると思う。

また、本論文が考察対象とするのは文末であるため、発話時に産出される音調も発話意図によって異なると考えられる。「日本語の話し言葉においては、文末表現やそれに伴う音調が大きな役割を果たしており」(轟木・山下, 2008 : 68) とあるように、ムード形式である文末表現の発話意図を記述するためには、その産出音調にも注目する必要がある。しかし、ノダ形式の表す発話意図と産出音調との対応関係について記述している研究は管見の限りほとんどみられない⁸。本論文では、各形式が「聞き手の発話解釈

⁸ 新屋他 (1999) でも、「んです」はイントネーションによっては、詰問しているように聞

を制約（聞き手の解釈をある方向へ導く）」する「手続き的意味」（Blakemore, 1987 ; 2002）を持ち、その派生的意味（発話意図）の違いを分析する際に、産出音調が有用な手がかりを与えてくれると考える。

先行研究でノダの本質的意味が明らかになりつつある今、今後明らかにすべきはその具現化形式と産出音調の示す具体的な発話意図である。本論文はこの点に着目し、自然会話の分析及び日本語母語話者に対する調査を基に、「ノダ形式の具現化形式と産出音調」を体系的に記述する。そして、研究成果を日本語学習者にわかりやすい形で提示する。そして、そこからノダ形式の「手続き的意味」を明らかにしたいと考える。

1.2 本論文の意義

本論文の意義について、以下の5点を主張する。

I. 使用実態に基づいた語用論的観点からの分析

まず、本論文が主張するのは、当該形式が使用される文を、その発話で使用された文脈を踏まえて分析することの必要性である。これは多くの語用論者が主張しているが、「ある話し手（発話者）が他者とのコミュニケーションの中である発話をした場合、話し手の目的は当該発話を単純にコード化した意味を聞き手に復号化させることではなく、当該発話により発話状況に応じた発話意図を聞き手に解釈させることである」という考えによる。本論文の場合、ノダ形式を使用した話者を「話し手（発話者）」、被使用者を「聞き手（相手）」と呼ぶが、本論文が対象とする形式を用いて、事例を提示する。(7)を参照されたい。

(7) A ごめん。待った？

B 1時間立ってるのは結構疲れるんだ {よね／？⁹ね}。→

(庵他, 2001 : 276 (6))

庵他(2001)では、当該の「よね」について「話し手の意見などを述べる場合にも「よね」が使われることがあります。この場合もイントネーションは自然下降調になりますが、こうした場合(7)(原文では(6))のように聞き手に対する非難を表す場合があります。」(p.276)と指摘している。これは今までの「よね」の用法に関する先行研究で

こえることもあるので注意が必要です」(p.27)といった記述がある。ただし、どのようなイントネーションが詰問調なのかといった具体的な記述はない。

⁹ 庵他(2001 : vi)では、当該記号は「その例文(または例文の一部)が、全く文法的に正しくないわけではないが、不自然であるとする日本語話者もいる場合」に附される。

はみられない重要な指摘であるが、残念なことに庵他（2001）では、「非難を表わす場合がある」という記述のみで、なぜ当該文で使用されている「よね」が聞き手に対する非難を表わす場合があるのか、という点についての言及がない。興味深いのは、当該の発話状況の場合、この B の発話の後に A が「そうだよね」と同意して発話を終えることは適切ではない。この場合、A は B の「1 時間立ってるのは結構疲れる」という発話によって、「B が自分を非難している」と推論し、謝罪の言葉を述べるだろう。そして、ここでの B の発話は「ノダ」が必須である。それはなぜなのか。

本論文では、庵他（2001）からさらに考察を深め、「なぜ「ノダよね」に非難を表わす場合があるのか」「ノダよね」がどのような手続き的意味を持ち、当該形式の使用により聞き手の解釈をどのように制約するのか」といった点を議論する。コミュニケーションにおける形式の使用的意味を明らかにするためには、話し手が「その発話状況において、当該発話により聞き手に何を解釈させようとしているのか」という語用論的視点が必須であると考えられる。

II. 発話時の音調を踏まえた語用論的分析

本論文が語用論的観点から分析を行うことを述べたうえで、二点目の主張として文末音調を踏まえた分析を行うことについての意義を述べる。本論文が考察対象とするのは聞き手目当て性を持った文末のムード形式である。特に話し言葉を考察対象とする場合、聞き手の発話解釈は使用される形式同様、文末形式の産出音調に大きく依存する。本論文では、文末形式の上がり下がりを示す語として、広義のイントネーションと区別するため、「音調」という用語を用いる（第 6 章で詳述）。文末の発話意図は音調の違いにより異なるため、産出音調は聞き手の発話解釈を制約する。次の例を見られたい。

- (8) (A と B が旅行の計画を立て、旅行会社にいる。そこで旅行会社のスタッフにあるホテルを薦められている場面)

A: うーん、私たちが思ってるイメージとちょっと違うんだよね。

B: うん、なんか違うよね。 (作例)

- (9) (B が以前レストランで食べた料理の味が忘れられず、同じ味の料理を作ろうとしている場面)

A: どう？イメージ通りできた？

B: うーん、なんかちょっと違うんだよね。 (作例)

(8) (9) の会話では、同じ「ちょっと違うんだよね」という表現が使用されているが、(8) の「ね」は上昇下降調（拍内でいったん上昇した後下降する音調）が可能で

あるのに対し、(9)の「ね」は上昇下降調で産出すると不自然である。これは両場面で使用される当該文の発話意図が異なるからであるが、こうした音調の使い分けについても、先行研究には十分な説明がないように思われる。本論文は聞き手目当て性を有する文末形式を記述するには音調の分析が必須であると考え、文末音調も考察対象とし分析を行うことで、新たな視点でノダ形式の記述を目指す。

Ⅲ. 具現化形式に着目した分析

3点目に、具現化形式に注目した分析を行うことの意義を述べる。本論文は、従来その区別があまり重視されてこなかった具現化形式に着目する。「具現化形式」とは、先述したように、「実際の発話で使用される実現形式」を意味する。詳細は第2章以降で述べるが、例えば「のだ」には「の」「んだ」「のだ」「のである」「んです」のように様々な具現化形式がある。しかし、その形式の違いについては「文体差」とされるにとどまり、各具現化形式の使用的意味にまで踏み込んだ研究は管見の限り少ない。例えば日本語記述文法研究会（2003）では、以下のように記述されている。

（説明のムード形式）「のだ」は平叙文の文末には「のだ」「んだ」「のです」「んです」「のである」「の」の形で現れる。これらは基本的に文体差であり、機能はほぼ同じである。話しことばでは「んだ」「んです」「の」の形をとる。

（pp.195-196（ ）内および下線筆者）

しかし、筆者が調査したところ「のだ」の具現化形式「の(Ø)」及び「んだ(Ø)」は使用場面が異なり、前者は「情報提示（自身が有する情報を（当該状況においてその情報を必要と話し手が想定する）相手に提示する）」場面（例（10））で、後者は「情報受容（ある情報を受けとり、自身の認識が変化したことを示す）」場面（例（11））での使用が有意であった（第4章で後述）。

(10) (スーツケースを持って大学の研究室に入ったところ、B がこちらをじっと見ているのに気付いて) 今日授業の後、実家に帰るの。 (作例)

(11) (スーツケースを持って研究室に入ってきた A を見ていたら)
A : 今日授業の後、実家に帰るの。
B : ああ、だからスーツケースなんだ。 (作例)

終助詞が付加された形式においても、使用に制限があったのは本章2節で述べたとおりである。

このように、具現化形式はその使用により発話意図が異なるため、当然聞き手の発話解釈を制約するものと考えられる。そこで、本論文は既存の話し言葉コーパスを用いて、裸のノダ形式「の (Ø)」と「んだ (Ø)」が有する発話意図について考察する。また、両形式の違いは「だ」の有無であるため、文末の「だ」の使用的意味についても分析、考察する。

IV. 性差に着目した分析

野田 (1993) では常体の裸の形式「の (Ø)」の使用には性差がある、とする。敷衍すると、疑問文の「の」は性差なく使用されるが、平叙文の「の」は使用が女性に限られ、男性は「んだ」を使用するという。しかし、本調査の結果、特に若者の男性には使用が一定数観察された。また、三枝 (2011) では「んだ」は女性の使用が多いと指摘しているが、使用傾向をみると、情報受容のノダは性差なく使用されるが、情報提示のノダはむしろ、男性の使用が多いことが明らかになった (4 章, 5 章で後述)。これは単に形式の使用数のみに着目しただけではみえない点である。

三枝 (2011) の指摘と本調査から女性が何らかの意図を持って情報受容のノダを多用しているとも考えられる。本論文は、今まで大まかに「性差がある」とされてきた具現化形式の男女の使用傾向の差異とその理由について、コーパス分析に基づき検証する。

V. 日本語教育への提言

最後に、明らかになった「ノダ (+終助詞)」の手續きの意味、及び音調と発話意図の対応を体系化し、日本語教育への示唆として呈示する。1.1 で述べたように、「超絶話者でしか使用できない」(山内, 2004) という当該形式は、実際の自然会話では頻用され、かつ、筆者が調査したところ、例えば「ノダよね」は新日本語能力試験 4 級 (N4) の聴解問題にさまざまな発話意図で使用されていることが分かった (第 8 章で詳述)。N4 は旧日本語能力試験の 3 級とされ、初級修了レベルである。つまり、当該形式は「産出は非常に難易度が高いが、理解は初級修了レベルで求められる」形式と推察される。このように、産出レベルと理解要求レベルの差が大きい場合、例えば「のね」「んだよね」といった一つの形式として学習者に呈示した方が負担も少なく効率的であると考えられる。

実際に日本語教科書でノダ形式を一つの表現として扱っているのは「んですけど (んですけど)」のみである。本論文は自然会話を基に「ノダ (+終助詞)」を分析し、さらに文末音調と発話意図との対応関係を考察することで、客観的、かつ具体的なノダ形式の整理ができると考える。そして、学習者にとってわかりやすいノダ形式の音調と発話意図を呈示することで、日本語学習者が母語話者と円滑にコミュニケーションできるよう

になるための一助となると考える。

1.3 本論文の構成

本章の最後に、本論文の構成を述べる。まず第2章で本論文の理論的枠組みとなる「関連性理論」について、その理論の有効性とキーワードを確認する。特に、関連性理論が「発話による意図明示的伝達行為」を考察対象としており、その行為は「聞き手にとって当該発話が認知効果を与える（当該場面で聞き手にとって関連性がある）」というものであることを確認し、本論文の分析対象であるノダ形式を考察するうえで有効であることを示す。次に第3章でノダに関する先行研究を、それぞれの研究のキーワードとなる「説明（・判断）」「既定命題」「関連づけ」「聞き手の発話解釈」に分けて概観し、今後ノダの使用場面をより実践的に記述するためには今まで目が向けられていなかったノダの具現化形式、さらに複合形式と産出音調からノダの手続き的意味を記述する必要があることを述べる。

第4章では第3章を踏まえ、自然会話でノダがどのような形で使用されているかといったノダ形式の使用実態を調査し、その中で、特に裸のノダ形式に着目し、異形態とされてきた当該形式の使用的意味に差異があること、また、「んだ」と「んです」は単なる変異形ではないことを確認する。

また、平叙文の（情報提示の）「の」について、先行研究では使用が女性に限られるとされていたが、本章の調査において男性は「んだよ」を選好するものの、「の」の使用も観察されたことを指摘する。

第4章を受けて、第5章では自然会話における文末の「だ」の使用実態を調査する。そして、話し言葉コーパスを用いた分析から、自然会話においては、文末の「だ」は特定の語との結びつきが強いこと、そして、当該形式は特に女性については聞き手の認知環境（当該発話時の顕在的知識の集合）を修正する意図で使用される伝達的モード形式としてより、話し手自身の認知環境が修正されたことを示す述定的モード形式として使用される傾向が強いこと、そしてその場合は主に「んだ」として使用されることを示す。

第6章、第7章では第5章までの考察を受けて、ノダ形式の手続き的意味を文末音調の分析に基づき考察する。第6章では、第4章の「の」「んだ」の手続き的意味の仮説を検証し、両形式に語用論的機能分担の傾向があることを音調の面から指摘した。また、情報提示の「の」「んだ」について、「の」の使用については男性の使用は許容度が下がり、使用に制約がある一方、「んだ」については、上昇音調を伴うと性差なく使用されることがそれぞれ示された。

第7章では「ノダ+（ね、よね）」について、その発話意図と文末の産出音調との対応を分析する。そして、特に「ノダ+ね」は裸のノダの機能を引き継いで会話を継続させる役目を担っていること、「よね」は「(命題) ノダよ」という、聞き手の認知環境を

修正する意図があることを聞き手に伝達するといった発話意図を持ち、それをどう相手に差し出し会話を継続していくかを「ね」の音調により明示していると結論づけた。

第8章では、総合考察として第4章から第7章までの分析調査をまとめ、日本語（会話）教育でのノダ形式の呈示方法を提案する。具体的には、日本語学習者の会話力を向上させるためにはレベルに応じて使用場面と音調に留意しながらノダ形式を明示的に指導していくべきであること、そしてそれぞれの形式は特徴的な発話意図を担う傾向があることから、語形式を個別に指導するのではなく、一つの表現形式として呈示した方が効率的であることを述べる。そして、第6章、第7章で得られたノダ形式の発話意図と音調との対応関係を体系的に示す。そして、今後の課題及び展望を述べ、本論文のまとめとする。

本章の最後に、本論文の構成を図1で示す。

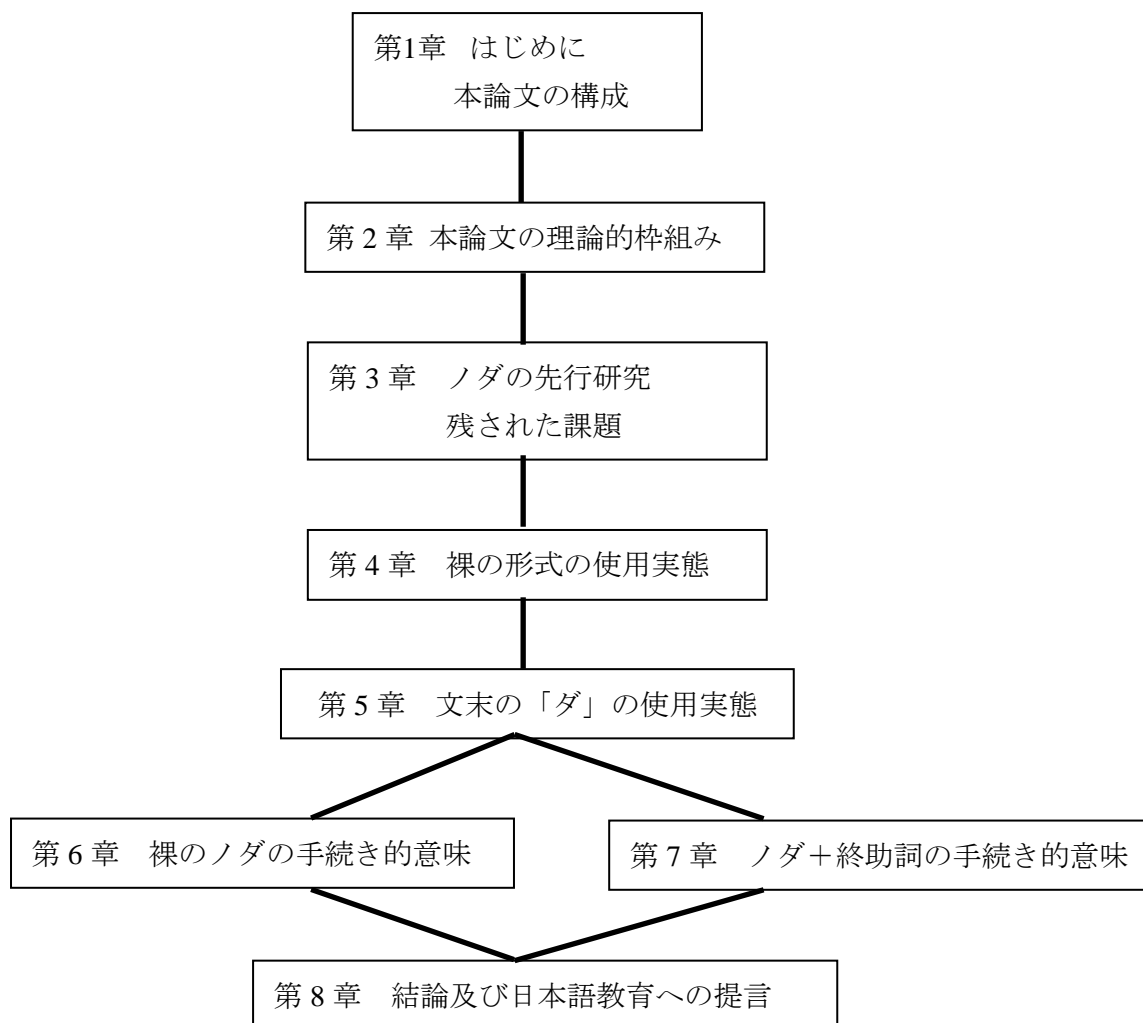


図1 本論文の構成

第2章 本論文の理論的枠組み（関連性理論 Relevance Theory）

2.1 語用論とは

本論文は自然会話で使用されるノダ形式の手続き的意味を記述することを目的とする。その前提となるのは、「文脈を伴った「発話（文）」を考察対象とする」という点である。そのため、まず、田窪（1999）を援用し「「発話（する）とはなにか」「文脈を踏まえた考察の重要性」を確認する。

発話する：特定の文脈で実際にその文を使うこと

発話（文）¹⁰：発話された文のトークン（token, それぞれの実例）（田窪, 1999：x）

田窪（1999）は、「文は単語を統語論の規則にしたがってつらねた抽象的な実体で、聞いたり見たりすることはできないが、発話は、主空間を占める具体的な事象であり、その解釈は文脈に依存する」（同）と述べる。そして、文脈を踏まえた考察の重要性を次のように指摘する。

意味論、特に形式意味論では、文の意味は基本的にそれが使用される文脈から切り離された形で取り扱われてきた。しかし、実際の使用場面では、言語表現は文脈に依存して決まるのであり、我々が意識できる言語表現の具体的な意味は、使用的意味であるといえる。（略）文の統語論や意味論の研究をする際にも、どこまでが文脈によっているのか、どこまで文脈と独立して考えることができるのかは、一般化にとって非常に大きな要因となる。つまり、言語に関してどのような分野の研究をする場合でも、文の使用文脈に関する知識は必須の要素であり、避けて通ることはできないのである。（同：ix）

具体的な例を挙げる。(1)を見られたい。

(1) あした試験があるの。

(作例)

(1) が文法的で、使用語に符号化された意味から「発話時の次の日、何らかの試験がある」ことは伝達されるが、それ以外の、いわゆる話し手の発話意図は伝達されない。これが「文」である。一方、「発話（文）」は状況により話し手の異なる意図を伝達する。

¹⁰ ただし、田窪（1999：v）は「発話」を「書かれた文に対しても使う」としており、話し言葉に限っていない。

(2) (必死に参考書を見ている友人 B に対して) A : 忙しそうね。

B : うん, あした試験があるの。(=私はあした試験を受けるから忙しい)

(3) (研究室で) A : 今晚ご飯でも食べに行かない?

B : あ, ごめん, あした試験があるの。(=だから一緒に食べに行けない)

このように, 同じ文でも発話状況に応じて話し手の伝達意図は異なる。話し言葉を考察するという事は「その文がなぜその状況で発話され, それにより聞き手に何を解釈させようとしているのか」を明らかにすることであると考えられる。そしてそれを明らかにするためには, 語用論的視点が必要である。語用論は「話し手が発話に託したメッセージを聞き手がいかにして解釈するか, という問題を扱う」(西山, 1999:2) 学問である。従って, 「話し手のメッセージを符号化して送信し, 聞き手は受信したメッセージを復号化することをコミュニケーション」と捉えるコードモデルとは異なり, 受信したメッセージを聞き手がどのように推論し解釈するか, といった推論過程を重視している。

本論文は, 関連性理論が言語を使用した意図明示的伝達行為を研究対象としており, かつ「すべての意図明示的伝達行為は, その行為自体の最適な関連性の見込みを伝達する」(Sperber & Wilson, 1986¹¹/1995 : 158) という原則を援用し, ノダ形式の手続き的意味を考察する。つまり, 「話し手がノダ形式を使用することで, 聞き手は当該の発話状況において当該発話をどのように解釈するのか」というノダの語用論的意味に着目し, ノダ形式を記述する。

本章の構成は以下のとおりである。2.2 では関連性理論の概要及びキーワードを確認する。2.3 では, 関連性理論を援用した日本語形式の研究を紹介し, 関連性理論が本論文の考察対象とするノダ形式の手続き的意味を記述するうえで有効な理論であることを述べる。

2.2 関連性理論の概要

2.2.1 関連性の原則とその有効性

関連性理論とは, Sperber & Wilson (1986/1995) によって提案された認知と伝達に関する理論である。この理論の根底にあるのは「人間の認知は傾向として関連性を最大にするように構成されている」(p.262) という考え方にある。関連性理論は以下の2つの主要な原則に基づいている。

¹¹ ページ数は原著である Sperber & Wilson (1995) に基づく。本論文の日本語による引用は内田聖二他訳 (1999) 『関連性理論 - 伝達と認知 -』(第二版) からのものである。

- (4) 認知的関連性原理 (Cognitive Principle of Relevance) :
人間の認知は関連性が最大になるようにできている。
- (5) 伝達的関連性原理 (Communicative Principle of Relevance) :
全ての意図明示的伝達行為は、それ自身の最適の関連性を見込みを伝達する。
(Sperber & Wilson, 1995 : 260)

本論文は、他者とのコミュニケーションにおいて、話し手は必ず何らかの伝達意図を有していると考えられる。特に、従来「説明のムード」と記述されてきたノダ、「伝達態度のムード」と記述されてきた終助詞は相手に何らかの発話意図を伝えるために使用される形式である。従って、関連性理論は本論文にとって有益な知見を提供すると思われる。

本章では、関連性理論の中でも特に本論文にとって重要な意味を持つ主張を順に記述する。

2.2.2 関連性があるということ

では、意図明示的伝達場面において「関連性がある」とは具体的に何を意味するのだろうか。Sperber & Wilson (1986/1995) は、「関連性があること」を具体的に定義している。例えば、次の二つの状況を考えてみる。

(6) (3時に来客がある日の3時前に、部下が上司に) あ、もう3時前ですね。

(7) (仕事をしている部下がふと時計に目をやり、上司に) あ、もう3時前ですね。
(作例)

関連性理論の枠組では部下の(6)の発話は(7)の発話より聞き手(上司)にとって関連性があると考えられる。それは、(6)の場合、部下は「そろそろ取引先の客が来る時間である」ことを伝達するために発話しているが、(7)はそのような意図は感じられない。

関連性理論では、その人がその時に真として受け入れることのできる顕在的な想定集合を「認知環境 (cognitive environment)」と呼んでいる。この二つの発話による上司の認知環境の変化の違いは先述した通りで、(6)の場合、部下には「取引先が間もなく来る」ということを伝える意図があり、その発話により上司の認知環境に何らかの変化を与えることを意図しているのに対し、(7)はこの発話が単に自分の認知環境に新情報(この場合発話時の時刻)が登録されたことを示すのみで、他者の認知環境に変化を与える意図がない。

(6)のように、聞き手の既存の想定に正の効果を与えることを「認知効果(文脈効

果¹²⁾」とよび、ある発話（やその他の刺激）が認知効果を持つなら、その発話（やその他の刺激）は関連性を持つことになる（「認知効果」については2.2.4で詳述）。

このような観点から、Sperber & Wilson（1986/1995）では、関連性を以下のように定義している。

関連性：ある想定がある文脈中で何らかの文脈効果をもつとき、そしてそのときに限りその想定はその文脈中で関連性を持つ。 (p.122)

そして、関連性の程度は以下の2条件により決定されると主張する。

関連性：

程度条件1：想定はある文脈中での文脈効果が大きいほど、その文脈中で関連性が高い。

程度条件2：想定はある文脈中でその処理に要する労力が小さいほど、その文脈中で関連性が高い。 (p.125)

(6)の例に戻ると、当該発話は「3時前である」という伝達は、「3時に来客がある」という状況において聞き手にとって認知効果が大きい。しかも、話し手である部下が「なぜ今自分にこの発話をしたのか」ということは明白であり、その点において発話の処理に要する労力は高くない。従って、(6)の発話は聞き手（上司）にとって非常に関連性が高いものと言える。

本論文ではこの知見を援用し、「ある発話やその他の刺激が話し手（または聞き手）にとって関連性がある」ということを「話し手（または聞き手）の認知環境に正の効果が生じること」と定義する。

2.2.3 関連性理論が考察対象とする伝達とは

2.2.3.1 発話による意図明示的伝達

では、話し手は聞き手の認知環境を修正させるためにどのような手段を使うのか。関連性理論では、この手段として「意図明示的刺激 (ostensive stimuli)」という用語を用いている。Sperber & Wilson（1986/1995）によると、これは情報意図を話し手と聞き手相互に顕在化するのに使われる刺激のことである (p.153)。ある情報が意図明示的刺激

¹²⁾ Sperber & Wilson（1995：265）では「個人における文脈効果というのは認知効果（1986年以降の論文で使ってきた言い方）である」と述べている。発話などによる認知環境の修正（処理）は常に文脈において行われることから、「文脈効果 (Contextual effects)」は「認知効果 (Cognitive effects)」と同義とされる。本論文では、先行研究の引用以外は「認知効果」という用語を用いる。

となるためには、以下2つの条件を満たすことが必要である。一つは、その情報が聞き手の注意をひかねばならないということであり、もう一つは聞き手の注意を伝達者の意図に集中させなければならないということである。

関連性理論では発話による「意図明示的刺激」を研究対象とする。そこで、本節では発話による「意図明示的刺激」、つまり「意図を明示した情報伝達」とは何かを確認する。「情報伝達」とは、他者に自身が有するある情報を伝えることであるが、伝達の方法はウィルソン・ウォートン（2009）に従えば、以下のように区別される。

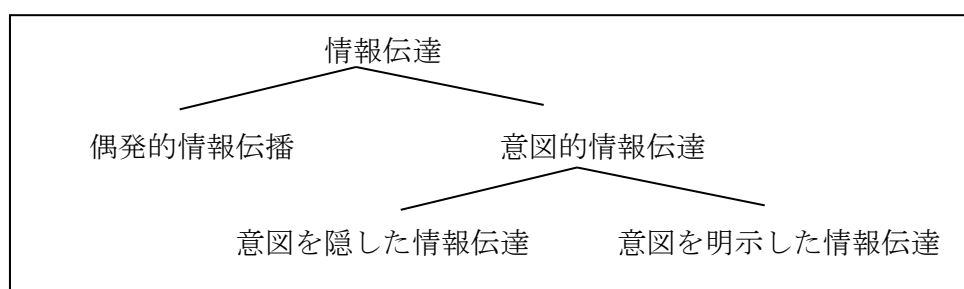


図1 情報伝達の種類（ウィルソン・ウォートン，2009：33）

「偶発的情報伝播」(accidental information transmission) というのは、伝えることを意図していないにもかかわらず聞き手に伝わってしまう情報のことである。例えば筆者は福井県出身・在住であるが、砕けた会話などでは「それで」を「ほんでえ」というような福井独特の語とイントネーションを伴った表現を使用する。それを聞いた聞き手は「ああ、市村は地方の人間だな(福井弁の特徴を知っている場合には福井県の出身だな)」ということがすぐわかるだろう。しかし、筆者は自分が福井県出身だと伝える意図は持っていない。そのほか、表情やジェスチャー、風邪をひいた時の声の調子などで聞き手に偶然伝わってしまう情報などもこの偶発的情報伝播である。

それに対し、「意図的情報伝達」(intentional information transmission) は、話し手が何らかの意図を持って伝える情報である。この方法は更に「意図を隠した情報伝達」と「意図を明示した情報伝達」に下位分類される。

まず、「意図を隠した情報伝達」(covert information transmission) について説明する。これは話し手が意図的に何らかの情報が伝わらないように操作して伝達するものである。例えば、苦手な相手に対し本心を隠して愛想笑いをする、交際を始めたばかりの彼に対してしとやかで楚々としたふるまいをする、というようなものである。話し手が持っている感情、自己を隠そうとする言動を伝えることがこの情報伝達と言える。

最後に、「意図を明示した情報伝達」(overt information transmission) であるが、これは話し手が純粋に情報を聞き手と共有しようという意図を持った情報伝達である。以下で詳述するが、約束に遅れてしまい、待ち合わせ場所にいた友人に「ごめん、道が混んでいて」と遅れたことに対する謝罪、その理由を表明するといった発話から、大学のゼ

ミでの発表時に予定時間をオーバーしている友人に、腕時計を指して見せ、「持ち時間を超えている」ことを伝えるといったような非言語行動まですべて含まれる。

関連性理論は「聞き手はどのように語用論的推論を行い、発話解釈をするのか」を明らかにすることを研究課題としている。従って、「意図明示的情報伝達」を対象とする。先述したように、「意図明示的情報伝達」は「発話（言語による情報伝達）」と「動作、表情（非言語的情報伝達）」に区別されるが、関連性理論が主たる研究対象とするのは、発話による「意図明示的伝達」(ostensive communication)である。これは、「情報意図」(informative intention)と「伝達意図」(communicative intention)からなる。この二つの意図について、Sperber & Wilson (1986/1955)では次のように定義されている。

- (8) 情報意図:聞き手に対し想定集合 I を顕在的もしくはより顕在的にすること。(p.58)
伝達意図:伝達者がこの情報意図を持っていることを、聞き手と伝達者にとって相互に顕在化すること。(p.61)

「想定集合 I」というのは、「聞き手にとって顕在的もしくはより顕在的にしようと意図する」(同 p.58) 想定のことである。たとえば先の例 (6) で言えば「今 3 時前であること (そして、間もなく取引先の客が来ること)」となる。平易な言い方をすれば、「情報意図」とは、「～と相手に伝えたい」という意図であり、「伝達意図」とは、「自分が相手に「～と伝えたい」と思っていることを相手と確認したい (つまり、当該情報を自身と相手の間で顕在化したい)」という意図である。例えば、次の例を見られたい。

- (9) (12 時を過ぎたのに、気づかずに隣のおばさんと話している母親に)
子ども:お母さん、もう 12 時過ぎてるよ! (作例)

この場合、「情報意図」は「12 時を過ぎて自分はお腹がすいているから、(話をやめて) 昼ご飯を作ってほしいと伝えたい」という意図である。一方、「伝達意図」は、次のような複数のレベルに関わるメタ表示として表すことができる。

- (10) 母親は子どもが「12 時を過ぎたから昼ご飯を作って」と言いたいんだと解釈する。
(11) 子どもは自分 (母親) に「12 時を過ぎたからご飯作って」と解釈させたい」と思っている。
(12) お母さんは自分 (子供) が「12 時を過ぎたからご飯作って」と伝えたい」と知るべきである。

(13) 子どもは私（母親）に、「お腹がすいたからご飯作って」と言いたい」ことを知らせることを意図している。

発話のやりとりが問題なく進むためにはこうした話し手と聞き手との間で話し手の「情報意図」と「伝達意図」が顕在化・共有化される必要がある。意図明示的伝達による話し手と聞き手との相互理解のプロセスは一見複雑なように見えるが、われわれは瞬時にこのプロセスを踏み、他者と問題なくやりとりを行っているのである。人がコミュニケーション能力を持つということは、このようなメタ表示を抱く能力を持っていることを意味する¹³。こうした発話による意図明示的伝達を受け取った聞き手が既存の想定と当該発話をどのように関連づけ、推論するかという発話解釈のメカニズムを明らかにしようとするのが関連性理論の目的である（今井，2001；東森・吉村，2003）。そして、「既存の想定」とは、聞き手が保有するあらゆる想定ではなく、「その時に限り」とあるように、発話状況によってその時に顕在化する「想定（知識の集合）」である。つまり、聞き手はその場に応じて瞬時に関連性のある情報のみを呼び出すのである。

発話は動的な活動により産出されるものである。西山（1999：7-8）は「文タイプ（sentence-type）」「文トークン（sentence-token）」を区別する。そして、前者は「文であり抽象的な対象」とし、「文法が問題にする」ものであり、後者は「文の具体的な（視覚的・聴覚的）現れ 時間・空間的对象であり、1回限りのかけがえのない出来事であり、特定の話し手に属する」とし、「語用論が問題にする」ものであるとする。西山（1999）のこの区分は田窪（1999）の「文」と「発話（文）」に相当すると考えられるが、つまり、関連性理論が解釈の一手段とする「顕在的知識」とはこうしたその場その場の発話状況に応じたものであり、常に変化するという考え方を取り入れることにより、聞き手がどのような発話解釈をするのかを記述するのに多くの知見を与えてくれると考える。

特に、本論文が対象とするノダ形式は聞き手目当て性を持つムード形式であり、その場その時の聞き手の顕在的知識に合わせた認知効果を与える意図で使用されるものである。また、状況に応じて多様な発話意図を伝達する。従って、関連性理論は当該形式の分析に有効な理論であると考えられる。

以上、関連性理論の定義する「発話による意図明示的伝達」について確認した。ここまでの先行研究を踏まえ、本論文では「文」と「発話（文）」を以下のように定義し、区別する。

(14) 文：文脈から切り離された抽象的で文法的正確さの判断のみ可能なもの。

発話（文）：当該状況において産出され、語用論的推論プロセスを経て話し手の意図が復元されるもの。

¹³ 「情報意図」「伝達意図」についての詳細はカーston（2008）を参照されたい。

2.2.3.2 発話の解釈的用法 (interpretive use) と記述的用法 (descriptive use)

発話による意図明示的伝達を確認したうえで、関連性理論が意味する発話の二つの用法について述べる。これは、ノダ文が非ノダ文と異なることを示すうえで重要な類型化であると考えられるからである。

Sperber & Wilson (1986/1955) は、発話とは、思考、出来事など、何らかを類似させた表示であるとし、基本的なレベルにおいては「あらゆる発話は話し手の思考を表示するのに用いられる」(p.230) が、その次のレベルにおいて、「解釈的用法」「記述的用法」に分けられるとする。例えば次の例を見られたい。(15) は、A に意中の女性がいておつきあいをしたいと思っているが、告白できず、友人の B に自分の代わりに気持ちを伝えてもらったという状況でのやりとりである。

(15) (B が A の気持ちを女性に伝えて戻ってきた場面)

A : 彼女, 何て言ってた?

B1 : いいお友達でいたいです。

B2 : お前とはいいお友達でいたいって。

B3 : あ, 雨だ!

(作例)

(15) の B1, B2 の発話はいずれも、B が真とする命題を表示しているのではなく、A の想い人である「彼女」の発話を忠実に、もしくは類似させて伝えているものである。敷衍すると、B1 は彼女の言葉を忠実に再現 (しよう) しており、B2 は彼女の言葉を間接的に伝えている。このように、「ある思考、例えば他に帰属する思考や関連性のある思考の解釈として心に抱かれるとき、発話は解釈的に使われている」(Sperber & Wilson, 1995 : 259)。そして、そのような発話を「解釈的用法」と呼ぶ。

一方、B3 の発話は、当該状況から、「彼女」の発話に類似させた表示とは考えにくく、発話時に B が急に雨が降ってきた事態を記述したと考えられる。B3 のように、「それ自体ある事態の真の描写として心に抱かれるとき、発話は描写的に使われている」(同)。そのような発話を「記述的用法」と呼ぶ。

関連性理論のこうした考え方により、ノダ文と非ノダ文の差異を説明することが可能となると考えられる。次の例を見られたい。

(16) (F052 と友人の会話。友人のパソコン (マック) に保存されている写真を見ている場面)

527 F052 : 私も、もうマック使わないから。

528→ あ、F ちゃんだ。{*F ちゃんなんだ。}

529 (へへっ) かわいいね。

(16) は F052 が友人のパソコンにある写真を見ながら発話している場面である。写真の中に共通の知人である F を見つけ、528 で「あ、F ちゃんだ」と発話している。これは、眼前の事態を真の描写として述べている「記述的」な用法である。仮に 528 を「F ちゃんなんだ」とノダ文で発話すると、記述的な発話とは認識されにくい。

次に、発話の解釈的用法をみる。(17) を参照されたい。話し手自身が命題を真と捉えているのではなく、相手の 621 の発話により話し手自身に認知効果が生じたことがノダ文によって表れている。

(17) (F93 と F101 の会話。二人は友人。F093 がガス台をきれいにする掃除用品について話している場面)

612 F101 : へーえ、知らなかった、そんなのがあるって。

613 F093 : ある、ある。

614 あなたが留学、留学じゃない、カナダに行ってる間に。

615 F101 : 行ってる間にね、(うん) 発売されたのね。

616 へーえ。

617 F093 : ドイツ生まれらしいよ。

618 F101 : あ、そうなんだ。

619 <笑い>

620 え、何、雑巾とかじゃなくって。

621 F093 : いや、スポンジ。

622→F101 : あ、スポンジなんだ。{*スポンジだ。}

623 F093 : うん。

624 F101 : へーえ。

(名大 data080 女性 20代)

(13) では、F101 が話題に上がっている掃除用品が何か分からず、620 で「雑巾とかじゃなくって」と聞き、F093 に 621 で「いや、(雑巾ではなく) スポンジ」と言われる。その F093 の発話を受けて 622 で「あ、スポンジなんだ」とノダ文で発話している。この発話は、F101 が F093 の説明を基にした「解釈的」な発話である。

ここで、もし 622 を「あ、スポンジだ」と発話すると、F101 が実際に話題の掃除用品を目にして、それがスポンジであると自分の目で確かめているような意味になる。それは関連性理論でいう「記述的用法」となる。このように、関連性理論の「解釈的用法」と「記述的用法」は、ノダ文と非ノダ文の違いを説明するのに有益な知見を与えてくれる。

以上、関連性理論が考究対象とする発話による「意図明示的伝達」とは何か、そして

発話の二つの用法である「解釈的用法」と「記述的用法」を確認した。

2.2.4 認知環境の修正（認知効果）

2.2.2 で述べたように、ある刺激が「関連性がある」とはつまり、ある刺激により、認知環境が修正された（もしくは、認知環境が修正されることを期待する）ことを意味する。本節では、「認知環境の修正（認知効果）」とは何か、そして認知効果にはどのようなタイプがあるかについて確認する。関連性理論によれば、人は他者と会話をする時、常に最適な関連性を達成しようとして発話を処理していく。つまり、自身の認知環境を修正する、もしくは聞き手の認知環境を修正するためにコミュニケーションを行う。「認知環境」とは、「その時点において真（true）であるとして受け入れることのできる思考の集合」、言い換えると「ある時点でのその個人にとって顕在的（manifest）な想定の場合」（Allot, 2014 : 45）を意味する。他者からの顕示的刺激（意図明示的伝達）を受け、その刺激と自身の持つ特定の想定とが相互作用した結果、認知環境が修正された場合、その顕示的刺激はその人にとって「関連性を持つ」ことになる（2.2.2 参照）。

Sperber & Wilson (1986/1995) は、「(その人にとって) 関連がある」情報とは、ある刺激（新情報）が特定の文脈と以下の三つの方法で相互作用する場合であるとする。

(18) 文脈含意：新情報と特定の文脈との相互作用により新たな想定を得る

既存の想定強化：新情報と特定の文脈との相互作用により既存の想定が（真であると）裏付けられ、強化される

既存の想定削除：新情報と特定の文脈の相互作用により偽であると考えられる既存の想定（の一部）を削除する

「ある刺激（新情報）が関連性を持つ」ことはつまり、その情報により「認知環境が修正されたこと（「認知効果」が生じたこと）」を意味する。そしてその認知効果には(18)に示したように、三つのタイプがある。次に、認知効果の三つのタイプの新情報（P）、特定の想定（C）、新たな想定（Q）を例とともに確認する。

<文脈含意>

新情報（P）と特定の文脈（C）との相互作用により新たな想定（Q）を得る。

(19)（「今度のボーナスが上がったら沖縄旅行に連れて行ってやる」と父に言われていた娘が、ボーナス支給日に父親から「ボーナス上がったよ！」と聞いて）

P : ボーナスが上がった（新情報）

- C : ボーナスが上がったら、沖縄旅行に連れて行ってもらえる (既存の想定)
Q : 沖縄旅行に連れて行ってもらえる (新たな想定)

娘は「父のボーナスが上がったら沖縄に連れて行ってもらえる」という想定がある。この状況で、「父のボーナスが上がるか下がるか」というのは娘にとって沖縄へ行けるかどうかが決まる非常に関連性が高い情報である。そして、父から「ボーナスが上がった」という新情報を得て、既存の想定と新情報とを相互作用させ、「沖縄旅行に連れて行ってもらえる」という新たな想定を得る。このタイプを「文脈含意」と呼ぶ。

<既存の想定の強化>

新情報 (P) により、既存の想定 (C) を裏付け、強化する。

- (20) (最近の父親の話から、「きっと今度はボーナスが上がるだろう」と予想していたら、ボーナス支給日に父親に「ボーナス上がったよ!」と言われて)

- P : ボーナスが上がった (新情報)
C : きっと今年はボーナスがアップするだろうという予測 (既存の想定)
Q : やっぱりボーナスが上がった (既存の想定の強化)

娘には最近の父親の話や様子から、きっと今度はボーナスが上がるだろう、と予想していたとする。そして、父から「ボーナスが上がった」という新情報を得て、自身の持つ既存の想定 (予測) が真であったと確信する。この場合も娘の既存の想定は予測から事実へと強化されたことになり、認知効果を持つ。

<既存の想定の削除>

既存の想定が発話によってもたらされる想定と矛盾するため、既存の想定を破棄する。

- (21) (最近の父親の話から、「きっと今年はボーナスがアップするだろう」と予想していたら、ボーナス支給日に父親に「ボーナスが下がった」と言われて)

- P : ボーナスが下がった (新情報)
C : きっと今年はボーナスがアップするだろうという予測 (既存の想定)
Q : (予想に反して) ボーナスが下がった (既存の想定の削除)

- (21) の場合は (20) とは対照的に娘が持っていた想定 (「父のボーナスは上がるだ

ろう」という予測) は父からの情報により偽であることが明らかになったわけである。そして父の情報により娘の既存の想定は破棄されることになる。より詳しくいうと既存の想定に代わる新しい想定「父のボーナスは予想に反して下がった」を得ることになる。このように、既存の想定が新情報により破棄されることを「既存の想定削除」という。ただし、関連性理論では認知環境の一部である「既存の想定」はその時に真であると受け入れることのできる想定であるため、既存の想定削除は予測に限らず生じ得ることである。

以上の3つの認知効果をみた。このように、聞き手がもつ既存の想定と新情報とが演繹的に関連づけられることにより、新たな想定が生じ、聞き手(あるいは話し手自身)の認知環境が修正された場合に、新情報は聞き手(あるいは話し手自身)にとって関連性があるとするのが関連性理論の主張である。こうした関連性理論の主張は、意図明示的伝達が聞き手の認知環境を修正するために行われるという点において、具体的かつ明快な指針を示している。2.2.1 で述べたように、本論文が考察対象とする形式は意図明示的伝達に使用されるものである。従って、関連性理論は本論文が考察対象とする「ノダ(+終助詞)」と音調との対応関係を分析するうえで有用であると考え。そこで、本論文では、当該形式の使用と認知効果の生起にはどのような関係があるのか、例えば聞き手に認知効果を与えるために使われるのか、話し手自身に認知効果が生じたことを明示するために使われるのか、という点を踏まえた分析、考察を行う。

2.2.5 明意 (explicature) と暗意 (implicature)

2.2.5.1 明意 (explicature)

2.2.5.1.1 (基礎) 明意 (basic-level explicature)

次に、関連性理論の主張する「明意¹⁴」と「暗意」を確認する。関連性理論では、「意図明示的伝達」を、「コードの復号化と推論の組み合わせによる伝達」と考える。(22)を参照されたい。

(22) a. Peter : Is Jenny coming to the lecture?

b. Mary : She is.

(ウィルソン・ウォートン, 2009 : 105 (7))

この場合、Peter は自身の問い (21a) に対する Mary の回答 (22b) を解釈するために、*Jenny is coming to the lecture.* (ジェニーは授業に来る) というように、必要な情報を推

¹⁴ 「明意」は「表意」、「暗意」は「推意」といったように、関連性理論の重要な用語は研究者によってさまざまな訳語が使用されているが、本論文では特に断りがない限り、基本的に今井 (2001) で使用されている訳語を使用する。

論すると考える。このように考えると、コード（符号）化¹⁵された発話の意味、ここでは *She is.* が命題として成立しえない場合であっても、話し手が明示的に伝達している意味を聞き手が考える時、聞き手が当該発話を完全な命題 (*Jenny is coming to the lecture.*) として捉えることができる理由を説明できる。聞き手は話し手の発話が命題として成立するように「符号化された文の意味に肉付けを行い、明意を復元」(ウィルソン・ウォートン, 2009: 110) する。つまり、与えられた発話を文脈から推論し完全な命題 (基礎明意) として理解するのである。

このように、基礎明意 (以下、明意) はコード化された発話と関連性理論の原理に基づいた推論によって復元される。この推論には、(a) 一義化 (disambiguation), (b) 飽和 (saturation), (c) 自由拡充 (free enrichment), (d) アドホック概念構築 (ad hoc concept construction) の4つの作業が関わっているとされる。この推論の手順を説明する。

(a) 一義化 (disambiguation)

(23) A: また来るきかいがあつたら、ぜひ連絡してください。

B: ええ、必ず連絡します。

(実例)

これは、筆者の同僚の日本語教師 A と間もなく帰国する留学生 B との実際の会話である。ここで B は自身が帰国するという状況における A の発話を受け、「きかい」を「機械」ではなく「機会」と理解し、「A は日本へ再び来る機会があれば連絡するように言っている」と推論する。一義化というのは、このように、発話された状況において様々な意味を持ちうる語を一つの意味に選択するプロセスのことである。

(b) 飽和 (saturation)

次に、「飽和」について確認する。(23) の A の発話を聞いた聞き手 B は当該の状況において A の発話内容を理解するためにコード化された以外の情報を充填している。

(24) の【 】部分は話し手が (23) ではコード化されていない情報を相手の発話から充填した情報である。

(24) A: また【Bさんが日本へ来る】機会があつたら、ぜひ【わたしに】連絡してください。

B: ええ、【わたしが日本へ来る機会があつたら】かならず【わたしはAさんに】

¹⁵ コード（符号）化とは、「話し手が相手に伝えたいことの内容（メッセージ）を、自分の頭の中にあるコード（日本語なら日本語、英語なら英語）に従って記号（≒単語）の結びつきに変える」（今井, 2001: 30）ことを言う。

連絡します。

このように、発話で使用された（コード化された）言語形式を、与えられた状況において適切に理解するために必要な情報を補うことを「飽和」という。(25) 及び (26) も同様に、聞き手は与えられた文脈を基に発話の言語理論形式に存在する空所に必要な情報を充填し解釈することになる。

(25) みんな宿題を忘れた。 【どの「みんな」なのか?】 (作例)

(26) 彼は遅い。 【何をするのが「おそい」のか?】 (作例)

(25) の「みんな」がどの「みんな」を指すのか、(26) では、彼は何をするのが「遅い」のか、といったことが明らかにならなければ、これらは真偽判定ができない。従って、ある特定の文脈において真となる情報を加える必要がある。例えば、「○○小学校 1 年 1 組のみんな」、「彼はご飯を食べるのが遅い」といった情報を文脈から充填することにより命題が復元される。

(c) 自由拡充 (free enrichment)

命題を復元する過程において、「発話の言語要素によって要求されるものを補うことを「飽和」と呼ぶのに対して、特定の言語要素の要求ではなく、もっと自由に語用論的になんらかの要素を補うことを「自由拡充」と言う」(東森・吉村, 2003 : 36)。

(27) (母親が息子の担任教師に) 太郎は熱があるので学校を休ませます。 (作例)

(28) a. テニスをして [それから] シャワーを浴びた。
b. テニスをして [その結果] けがをした。 (作例)

(27), (28) は聞き手の語用論的推論により、発話意図が復元される例である。例えば (27) は「熱がある」のは本来自明なことであり、情報価値のないものであるが、当該の文脈においては「(学校へ行けないほどの) 熱がある」と解釈される。また、(28) の場合、いずれも前件は「テニスをして」であるが、後件との関係から推論し、(28a) は「て」を「継起関係を意味するもの」、(28b) は「因果関係を意味するもの」と解釈するであろう。このような語用論的推論により命題を復元することを「自由拡充」という。

(d) アドホック概念構築 (ad hoc concept construction)

最後に「アドホック概念構築」について確認する。関連性理論では、その場限りの意味として形成される概念を「アドホック概念 (ad hoc concept)」と呼ぶ。聞き手は与えられた状況や文脈から、ある言葉を聞いた時、複数ある選択肢のうち、その状況に限って最も関連性が高いと思われる意味を選択し、明意を得る。(29) を参照されたい。

(29) Kato (O.J.Simpson の証人として) : He was upset but he wasn't upset (彼は動揺していたがそれほどではなかった)

(カーストン, 2008 : 481 (3))

これは、O. J. Simpson の裁判での証言者の発話である。一見矛盾した発話にみえるこの発話は、カーストン (2008) によれば、「妻が殺害された日の O. J. Simpson の精神状態について問われた証人という文脈では、彼はある種取り乱した精神状態ではあったが別の (もっと激しい、たとえば人を殺しかねないような) 精神状態ではなかったことを伝えたものと理解され」(p.481), 前者の *upset* と後者の *upset* を区別している。このように、関連性理論では関連性が高いと思われる「その場限りの意味」を推論することも、命題を完成させるための方法であると考えている。

以上、関連性理論が定義する「明意」は、コード化された情報に「一義化」「飽和」「自由拡充」「アドホック概念構築」という4つの語用論的手段を用いて肉付けし、真偽判断可能な形に充填されたものであるということを確認した。

2.2.5.1.2 高次明意 (higher-level explicature)

次に、高次明意について述べる。高次明意とは、発話によって明示的に伝達された想定のうち、発話によって表現された (基礎) 明意でないものを指し、(基礎) 明意を基に発展させた明意のことである。例えば *say that...* (と言う), *promise to...* (と約束する) といったような発話行為の記述や, *regret that...* (を後悔する), *believes that...* (を信じる) といった命題態度に基礎明意を埋め込むことにより得られる明意が高次明意である (Allot 2014 : 134)。 (30) を見られたい。

(30) A : 明日の飲み会, 来られる?

B : (残念そうに) 行けないんだ。 (作例)

(31) 明意 : B は明日飲み会に行けない。

高次明意：Bは明日飲み会に行けないと言っている。

Bは明日飲み会に行けないことを残念に思っている。

(31)は(30)のBの発話の明意と高次明意の例であるが、どのような高次明意を伝達していると解釈するかは聞き手がその文脈で最も関連性が高く最も処理労力のかからない想定を選択することになる。Wilson & Sperber (1993)では、イントネーションの上がり下がりが話し手の命題態度や発話行為を表現する高次明意を推論するプロセスに制約を課していると述べている。つまり、聞き手にとって選択可能な複数の解釈の中から、特定の解釈を選択するように仕向けているというのである。この記述を援用すると、音調はパラ言語的な手がかりとなり、その産出音調の違いにより発話意図を高次明意として説明することができる。例えば、母語話者の直観から、文末の「の。」を異なる音調で発話することにより、聞き手が推論する高次明意を次のように制約していると仮定することができる。

(32) (駅前にある「秋吉」という焼き鳥屋の話をしている時に)

- a. あの店、美味しいの (疑問文末尾のような上昇調)。
- b. あの店、美味しいの (アクセントの上がり目のような上昇調)。
- c. あの店、美味しいの (非上昇調)。

(作例)

(33) 基礎明意：駅前にある「秋吉」は美味しい。

高次明意：a. 話し手は駅前の秋吉がおいしいかと相手に聞いている。

b. 話し手は駅前の秋吉がおいしいと相手に主張している。

c. 話し手は駅前の秋吉がおいしいと相手に伝えている。

(33)の高次明意は例であり、そのほかの高次明意を伝達することも有り得るが、(32a)が(33b)や(33c)のような高次明意を伝達するということは考えにくい。従って、産出音調を伴ったノダが聞き手の発話解釈にかかる推論を制約すると考える。

本論文では、分析対象が文末であることから、当該形式とその産出音調が高次明意を制約すると考える。そこで、第6章及び第7章でノダ形式が産出音調により、聞き手の発話解釈をどのように制約するかを分析、考察する。

2.2.5.2 暗意 (implicature)

次に暗意について考える。関連性理論において、発話の意図された暗意は「明意と適切なコンテクスト的想定を合わせたものから演繹（推論）されなければならない」（ウィルソン・ウォートン，2009：110）とされる。(34)をみられたい。Aは昼休みに朝食

をとるために食堂へ来たが、食堂はとても混んでおりなかなか食べる場所が見つからないという状況である。

(34) (カバンが置いてある席を見つけ、その隣に座っている人に)

A : ここ、いいですか？

B : 連れがいるんです。

A : あ、そうですか。

(実例)

ここで、Bの「連れがいるんです」という発話を聞き、聞き手は必要な情報を充填して「(今自分が話しかけた) 彼には今から一緒に食事する連れ(仲間)がいる」という明意を得る。そして、得られた明意と、自身が持つ想定「席を探している人間に「連れがいる」ということは誰かのための席を確保しているということ」とが相互作用し、その結果「ここは空いていない(自分はこの席に座ることができない)」という暗意を得る。このように、関連性理論では暗意は明意と自身が持つ適切なコンテクスト的想定から論理的に導き出されるという立場をとる。

本論文はこうした関連性理論の明意、高次明意、暗意についての明確な区別が言語形式の手続き的意味を考察するうえで有用であると考え、(35)を参照されたい。

(35) A : ごめん、待った？

B : 1時間立ってるのは結構疲れるんだ {よね/？ね}。→¹⁶

(庵他, 2001 : 276 (6))

第1章でも述べたが、庵他(2001)では、自然下降調の「よね」が話し手の意見などを述べる際に使われることがあり、(35)(原文では(6))のように聞き手に対する非難を表す場合があることを指摘している。庵他(2001)にはそれ以上の記述がないが、当該状況の場合にノダは必須である。それを踏まえて言うと、庵他(2001)は「んだよね」の使用について先行研究にはない重要な指摘をしている。ただし、この「非難」という記述には説明が必要である。つまり、Bの発話の明意のみでは非難していることを説明できない。

本論文では、当該発話がなぜ非難を表すのか、という点について以下のように考える。BはAの「ごめん、待った？」という問いには答えず、「1時間立ってるのは結構疲れるんだよね」と述べている。これは、Aが「自分はBとの待ち合わせに遅れた」という状況とBの発話から語用論的に推論し、「Bが自分のせいで疲れたと伝えている」という暗意を得ることにより、Bの発話を非難と解釈するのである。従って、「んだよね」

¹⁶ 庵他(2001)では、「→」は顕著な上昇も下降もない自然下降調の音調を意味するとある。詳しくは庵他(2001)を参照されたい。

の文が直接相手に非難を明示しているのではない。(36)に示すように、聞き手は明意と聞き手自身が有するコンテクスト的想定との組み合わせにより話し手の発話意図を解釈することになる。

(36) 明意：1時間立っているのは疲れる。

コンテクスト的想定：聞き手は待ち合わせに遅れて話し手を1時間立たせた。

暗意：話し手は自分を疲れさせた聞き手を非難している。

(35)の例も関連性理論の知見を援用すると、なぜ当該文が非難を表すのか、ということが説得的に説明できる。ただし、なぜ当該状況で「んだよね」が使用されるのか、という点については現時点では立場を保留とし、第7章で考察する。

以上、関連性理論の明意と暗意を確認し、その知見の有益性を述べた。本論文は文末音調を伴った「ノダ（＋終助詞）」が基本的に明意、暗意のどちらに関わり、聞き手に何を明示的に伝える場面で使用されるのかを考察する。

2.2.6 概念的意味 (conceptual meaning) と手続き的意味 (procedural meaning)

本節では、本論文の重要なキーワードである「手続き的意味」と、それに対する「概念的意味」について確認する。関連性理論によると、言語表現は概念的意味と手続き的意味 (Blakemore, 1987; Wilson & Sperber, 1993) があり、概念的意味というのは語の意味として認識される意味のことである。従って、概念的意味は表出命題の真理条件に貢献する、(命題の復元に関与する) 意味である。一方、手続き的意味というのは、聞き手の発話解釈を制約する (特定の方向へと導く) 意味である。話し手はこのような手続き的意味を持つ表現を使用することにより、聞き手が発話解釈を行うための余分な処理コストを軽減させようとする。この処理コストを軽減するという点で手続き的意味は発話の関連性に貢献する。

手続き的情報のコード化に関する研究は Blakemore (1987) 以降盛んにおこなわれ、発展した。手続き的情報というのは、東森・吉村 (2003: 85) によると、「概念表示の構成要素になるものではなく、概念表示の操作に関する指示であり、発話解釈過程において、聞き手が行う推論処理の仕方に制約を課す情報」であり、手続き的情報が話し手によって与えられることにより、「聞き手が取るべき推論の方向が指示され、無駄な労力を使わず効率よく意図された効果を得る助けになる」という。例えば代名詞、テンスは発話の明意を制約し、談話連結詞 (例: so, however after all) は暗意の派生を制約する機能を果たすと言われる (Allot, 2014: 240)。So を例に挙げ、手続き的意味をみる。

(37) There was \$5 in his wallet. So he hadn't spent all the money.

(Blakemore, 1988 : 184 (4a))

Blakemore (1988)によると、so は「so 以下に言うことを結論として解釈せよ」という手続き的意味を持つ。従って (37) の場合、So を挿入することで、「彼の財布には5ドルあった。だから彼はお金を全部使ったわけではない」と解釈させることが可能になるという。また、(38) は荷物の山を抱えて部屋に入ってきた相手を見て、話し手が発話する例である。

(38) So you've spent all your money.

(Blakemore, 1988 : 189 (13))

(38) の例では、So が導入する発話は、話し手が先行状況から推論した結論であることを聞き手に示している。以上のような例を挙げ、Blakemore (1988) では、so は後続する命題が先行発話 (状況) の文脈含意であることを示す標識であるとした。そしてこうした表現は命題表示には貢献しないが、命題表示の処理に関する指令を記号化していると主張している。ただし、関連性理論では真理条件が概念的意味をコード化し、非真理条件が手続き的意味をコード化するといった単純な対応関係ではなく、両者は相互に介入しているとする立場をとる (Wilson & Sperber, 1993 : 2)。そして、発話が伝達しうる情報を図 2 で示している。

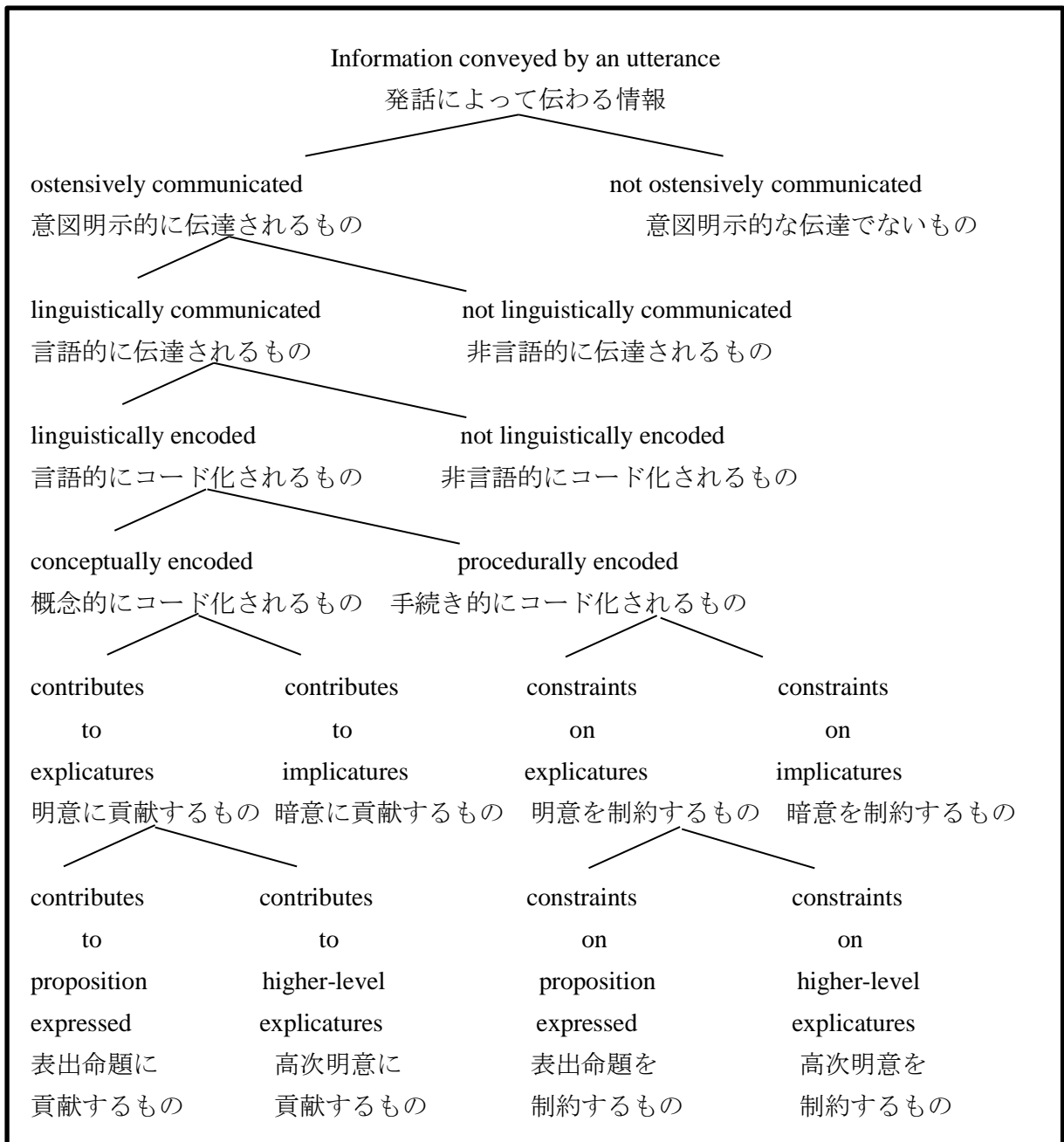


図 2 Types of communicated information (伝達される情報のタイプ)

(Wilson & Sperber, 1993 : 3 筆者訳)

関連性理論の枠組を用いてノダを記述している論考では、ノダは真理条件には貢献せず、聞き手の発話解釈を制約する手続き的意味を持つという点で意見の一致がみられる(武内, 1994 ; 内田, 1998 ; 名嶋, 2007 など)。終助詞も同様の意味を持つと考える。例えば終助詞を取り除いても、表出命題の意味に変化は生じない。従って、非真理条件的であり、もっぱら聞き手に当該命題をどのように解釈させたいかを示す形式であると

考えられる。

(39) あの人、すごく成績良いんだよ。

(名大 data066 女性, 10代)

(39') あの人、すごく成績良いんだね。

(39) (39') はいずれも命題は「あの人 (その場にいない特定の第3者) はすごく (大学での) 成績がいい」ということであるが、「んだよ」と「んだね」で聞き手にどのように当該命題を解釈させたいかが変わる。例えば (39) は相手があの方は成績があまりいいと思っていないことがわかったときで、相手の既存の想定を破棄させ、認知効果を与えようとしている意図を相手に伝達することになる。一方、(39') は、相手の「あの人」についての情報を受け取った話し手が、自身の既存の想定の変化 (この場合「文脈含意」) を相手に伝えようとしていると解釈されると説明できる。

手続き的意味とは聞き手のある特定の解釈へ導くものであった。手続き的意味をコード化するのは形式だけではなく、音調も同様に聞き手の発話解釈にかかる処理コストを減らす手続き的意味を持つとする研究もみられる (Imai, 1998 ; House, 2006 ; House, 2007¹⁷)。例えば次の例を見られたい。

(39'') あの人、すごく成績良いんだ。

筆者の内省では、(39'') が下降音調で発話された場合とアクセント上昇 (アクセントの低い拍から高い拍へと移行するときのような上昇音調) で発話された場合では聞き手は異なる発話解釈をすると考えられる。敷衍すると、前者は例えば他者から「あの方は大学を首席で卒業した」等の情報を得て、「あの方はすごく成績が良い」という文脈含意を得たことを示す。一方、後者の場合は、「勉強がわからないから誰か教えてほしい」と嘆いた友人に対して、教室の隅で勉強している「あの人」を指して、「あの人に教えてもらえばいいよ、あの人すごく成績良いんだ」と伝えることで聞き手に認知効果をもたらそうとしていると聞き手は判断する傾向があると考えられる。この点については第6章で検証するが、文末形式の場合、産出音調は、聞き手にどのように解釈させたいかによって異なる。つまり、話し手の意図を知るうえでの重要な手がかりとなる。

以上の点を踏まえ、本論文は音調を伴った「ノダ (+終助詞)」がどのような発話意図を持ち、聞き手の認知環境を修正する、もしくは話し手自身の認知環境が修正されたかを明示するかを明らかにする。そして、最終的に当該形式が持つ手続き的意味の記述を目指す。

¹⁷ 例えば House (2007) では、Map task を行っている会話において文末の上昇イントネーションが相手からの発話を引き出す手続き的意味として用いられていることを指摘している。

以上、関連性理論を概観し、聞き手目当て性を持つノダ形式を考察するうえで有用な理論であることを確認した。特に、文末形式を対象とするため、産出音調を踏まえた分析を行うことにより、当該形式が聞き手の解釈をどのように制約するかをより具体的に記述できると考えられる。本論文では関連性理論の知見を援用し、手続きの意味を「聞き手の発話解釈に関わる語用論的推論過程を制約する意味」と捉える。そして自然会話で使用される「ノダ (+終助詞)」を分析し、当該形式の手続きの意味を考察する。

2.3 関連性理論を援用した日本語研究

関連性理論は発話による意図明示的伝達行為を研究対象としており、単純かつ明瞭な「ひとは常に関連性を求める存在である」という理念に基づいている。この理論は「その場その時に聞き手は話し手の発話意図をどのようにして理解するのか」といった発話解釈のメカニズムを明らかにするための知見を与えてくれる。そしてこれまでも多くの日本語研究の理論的枠組みとなった(例えば Itani, 1996; 山本, 2003; 新井, 2006; 吉村, 2010; Yoshimura, 2013 など)。

ノダに関する研究においても例外ではなく、研究者により主張に差異はあるものの、大まかにノダ文が先行文脈、発話状況と聞き手の持つ顕在的知識とから演繹的に導き出される命題を提示する、という論考が多数みられる(武内, 1994; 青木, 1996; 内田, 1998; 近藤, 2002; 名嶋, 2007 など)。これらについては次章で概観するが、ノダが「聞き手の発話解釈を制約する手続きの意味」を持ち、話し手に認知効果を与える場合にも聞き手に認知効果が生じたことを示す場面でも使用される形式であるということは既に言及されている。

ただし、先行研究はノダという言語形式に注目しており、同じ手続きの意味をもつと考えられる音調をふまえた複眼的な観点からの研究は管見の限り名嶋(2007)のみである。名嶋(2007)には、「話し手の思考に生じたばかりの「事態認識」や「先行発話の解釈」の妥当性を「誰かに問いかけることで確認する」場合に上昇イントネーションが用いられ」、「誰かに問いかけることで確認しつつ登録する」際に下降イントネーションで発話されると考える」(p.136)といった記述がある。しかし、聞き手の認知環境を修正する際に使用されるノダの音調に関する記述はない。

関連性理論が 2.2.6 で述べたように音調も手続きの意味をもち、聞き手の発話解釈を制約すると主張している点を踏まえると、話し言葉に限定した文末形式のノダの記述に音調の考察を加えることで、さらに具体的かつ説得的なノダ形式の手続きの意味についての記述が可能になるであろう。

第3章 先行研究

本章では、発話（文）におけるノダの位置付けと構文的特徴、そしてノダの意味に関する先行研究をまとめ、最後に今後解決すべき課題と本論文の考察対象を述べる。本章の構成は以下のとおりである。

まず、3.1で「陳述」の概念を確認した後、発話文におけるノダの位置付けを述べる。そして3.2でノダの構文的特徴について述べた主要な研究を概観する。そして3.3でノダの意義素（基本的意味）を「説明・判断」説、「既定命題」説、「関連づけ」説に分類し、それぞれの主張を概観し、意義と問題点を述べる。そして、3.4で「関連性理論を援用した」説を概観し、ノダの使用的意味を語用論的観点から考察した研究の主張と今後解決すべき課題をまとめ、3.5で話し言葉におけるノダの手続きの意味を明らかにするために、本論文がノダの「具現化形式」「性差」「音調」に注目することを述べる。

3.1 発話文におけるノダの位置付け

本論文では、ノダをムード（陳述）の形式と考える。寺村（1982：51）は文を「話し手が客観的に世界の事象、心証を描こうとする部分と、それを「素材」として話し手が自分の態度を相手に示そうとする部分からなる」とし、前者を「コト」、後者を「ムード」と呼んでいる。ノダは後者のムードを表すとされ、「説明のムード」の形式とされる。益岡（1991）では「ムード」に対応する用語として「モダリティ」を用いている。益岡はモダリティを「判断し（知覚も含む）表現する主体に直接かかわる事柄を表わす形式」（p.30）と定義している。本論文では、モダリティを文法形式だけでなく「きっと」「やっ」とのような話し手の心的態度を表す副詞なども含むものと捉え、寺村（1982）に倣い「ムード」を用いる。

ムードを定義するうえで確認しておくべきは「陳述」の意味である。本論文ではムードと「陳述」は文末形式については命題内容に対する話し手の態度を相手に示すという点で同義と考え、両者を一括して「ムード」と呼ぶ（3.1.4で後述）。そのうえで、渡辺（1953, 1971）および芳賀（1954）を基に本論文が定義するムード（陳述）を確認する。

3.1.1 陳述とは

そもそも、何を持って発話とするのか。発話とはどのような単位で区切られるのか。本章では、その点から確認する。ここでは、発話（文）を成立させるための要件である「陳述」という用語に着目し、発話（文）の位置づけを確認する。その際、特に本稿が援用する渡辺（1953, 1971）及び芳賀（1954）を中心に「陳述」の定義を概観する。

3.1.2 渡辺（1953）以前の「陳述」

「陳述」とは、山田孝雄の用語である。山田（1936）は「陳述」を Copula と同義とし、以下のように記述する。

抑も陳述をなすといふことは之を思想の方面からいへば、主位の觀念と賓位の觀念との二者の關係を明かにすることで、その主賓の二者が合一すべき關係にあるか、合一すべからぬ關係にあるかを決定する思想の作用を以て内面の要素として、それを言語の上に發表したものである。（山田、1936:111）

そして、用言が述格に立った場合に陳述となるとした。

抑も用言の用言たる所以は實に陳述の能力があるからだといふことは既に屢述べた所であるが、その陳述の力を實地に發揮した運用上の位格が即ち述格たるものである。（同 p.115）

山田（1936）に対し、時枝（1950）¹⁸は、助動詞及び用言の場合には助動詞相当の零記号の形により、陳述が表現されるとする。

助動詞は、話し手の立場の中、何らかの陳述を表現するものであり、そのことのために、助動詞は、多くの場合に活用を持つことになるのである。用言は、単純な肯定判断の陳述の場合は、一般には零記号の形に於いて陳述が表現される。

（時枝、1950：154）

3.1.3 渡辺（1953, 1971）の「陳述」

次に、渡辺（1953）のいう陳述に着目する。山田、時枝が「陳述＝判断」と解釈したのに対し、渡辺は用言などが担っている機能と終助詞が担っている機能は異なるとし、終助詞の類に託されている機能こそ「陳述」と呼ぶべきものである、とする。渡辺は「去年の今ごろがなつかしいねえ」の「なつかしい」を述語と呼び、それに「ねえ」が付加され全体を「述語文節」とする。そして、この「述語文節」には「叙述」と「陳述」という異なる二つの機能が託されており、両者を以下のように定義づけしている。

叙述：思想や事柄の内容を描き上げようとする話手のいとなみ（渡辺、1953：20）

¹⁸ 本稿では、時枝（1950）を直接見る事が出来なかったため、ページ数は時枝（2005, 復刻版）に基づく。

陳述：言語者を目当ての主体的なはたらきかけ

(同 p27)

渡辺（1953）のいう「叙述」は寺村（1982）のいう「コト」に相当する。さらに、「言語者を目当てとして言語を發することが、同時に文を言い納めることとなる」（p.26）つまり、聞き手目当て性のある「陳述」を以て「文を完結する機能」がある」（同）という点で山田・時枝とは異なる立場に立つ。

渡辺（1971）は、渡辺（1953）を修正発展させ、「言語の内面的意義に託される各種の役割の総称」を「構文的職能」（p.16）としたうえで、文を「成分の一種であって、素材表示と陳述との職能的合体に他ならず」（p.64）と定義した。この「素材表示の職能」を託されるものが「叙述内容」であり、「陳述」を「統叙によってととのえられた叙述内容、または無統叙の素材的要素に対して、言語主体が、その素材、あるいは対象・聞き手と自分自身との間に、何らかの関係を構成する関係構成的職能である」（pp.106-107）と改めた。そして、陳述に「断定の陳述」「疑問の陳述」「感動の陳述」「訴えの陳述」「呼びかけの陳述」の五種を認めている。

<断定（いわゆる平叙文）>

- (1) 桜。
- (2) 桜の花が咲く。

<疑問（いわゆる疑問文）>

- (3) 桜？
- (4) 桜の花が咲く？

<感動（いわゆる感動文）>

- (5) 桜！
- (6) 桜の花が咲く！

<訴え（いわゆる命令文）>

- (7) 桜よ！

(8) 咲け！

<呼びかけ（いわゆる呼びかけ応答文）>

(9) オーイ！

(渡辺, 1971:106)

渡辺（1971）では、次の 3.1.4 で述べる芳賀（1954）での批判を基に「陳述」の定義を「言語者をめあての主體的なはたらきかけ」から、「対象・聞き手と自分自身との間に、何らかの関係を構成する関係構成的職能」と修正している。繰返しになるが、叙述は寺村（1982）のいう「コト」であり、陳述は「ムード」とほぼ同義である。渡辺は、「叙述」と対比させ記述したことにより、今まで研究者により曖昧であった「陳述」の機能を明確した。

3.1.4 芳賀（1954）の「陳述」

最後に、渡辺（1953）の陳述の定義を修正発展させた芳賀（1954）に注目する。芳賀（1954）は渡辺（1953）が「陳述」を「言語者をめあての主體的なはたらきかけ」（渡辺, 1953:27）としたのに対し、その不足を補い、「誰かに對する話手の態度の主體的表現」と並んで、「何かについての話手の主體的表現」も自身の力で文を統括・完結しうるいとなみと認められる」とし、「陳述」には次の二種があるとした。

- [1] 第一種の陳述は、それに先行して客體的に表現された（但し、感動詞一語文の場合に限り客體的表現を缺く）事柄の内容についての、話手の態度【断定・推量・疑い・決意・詠嘆...など】の言い定めである。（略）別に名を與えるならば、「述定的陳述」或は「述定」とでも呼びたいものである。
- [2] 第二種の陳述は、事柄の内容や、話手の態度を、聞き手（時には話手自身）に向かつてもちかけ、傳達する言語表示である。すなわち【告知・反應を求める・誘い・命令・呼びかけ・應答...など】で、いわば「傳達的陳述」或は單に「傳達」とでも別稱してよいかと思われる。—この方は、かねて渡辺氏によって「陳述」の名を獨占せしめられていたものである。

(pp.298-299)

芳賀の「陳述」の分類は、「對事的ムード」「對人的ムード」とほぼ同義であると考えられる。渡辺により明確になり¹⁹、芳賀で修正された「陳述」は、本論文の「ノダ（+

¹⁹ 寺村（1982）も、「渡辺構文論は、山田孝雄、時枝誠記に見られる「陳述」という概念の曖昧さを、「叙述」と「陳述」の分離、叙述の「展叙」と「統叙」の分別によって解消し、

終助詞)」の手續きの意味を考察するうえで重要な定義であると考えられる。ただし、陳述という用語は「意見や考えを述べる」といった広義の意味も持つ抽象度の高い用語である。従って議論を明確にするため寺村（1982）にならい、本論文では直接引用を除き、「ムード」と呼ぶ。そして、以降の議論では芳賀（1954）の定義を援用し、「ムード（陳述）」を聞き手目当て性のある「伝達的ムード」、事柄に対する話し手の態度を示す「述定的ムード」の二種に類型化する。

芳賀（1954）を援用する理由は、ノダが必ずしも聞き手を意識した場面で使用されるわけではなく、話し手自身の認識が修正された場面でも使用可能であるためである。「ノダが独話でも使用可能」ということはすでに多くの先行研究で指摘されていることであるが、本稿ではこれを発展させ、「独話」を以下の二つに類型化（語りかけ、想起・発見）し、「語りかけ」を「伝達的ムード」とする（以下の用例はすべて作例）。

語りかけ：自問する、自分自身に語りかける（客体的な自己を聞き手とする）

(10) （返却された答案用紙の間違いを見て）何が間違ってるんだ。

(11) 頑張れ、頑張るんだ、私！

想起・発見：聞き手を想定せず、もっぱら忘れていた事態の再認や未知の事態に気づいたことを述べる

(12) （今日明日バイトがあったことを思い出して）あ、忘れてた！今日バイトがあるんだ！

(13) （雨が降り始めたのに気付いて）あ、雨降ってるんだ。

「想起・発見」は関連性理論の用語でいえば、話し手自身に認知効果が生じたこと、そしてその内容を具現化するといった事柄目当ての独話である。さらに、「陳述＝発話(文)」とする考え方も、今後の議論に援用できる重要な指摘であると言える。以上、「ムード（陳述）」を2つに類型化できると考える点、ノダをムードの形式とする点、独話的発話を2つに類型化し、「(客体化された話し手自身への)語りかけ」を伝達的ムード、「想起・発見」を述定的ムードとする点を述べた。

文を構成するカタチとしての語や語列に明確な職能を与えることによって、日本語の文構造の精密な記述を完成したものである」(p.51)と、渡辺（1971）の「陳述」の定義を評価している。

3.2 ノダの構文的特徴

まず、ノダの語構成についてみる。主要な研究では、ノダの語構成について二つの立場がみられる。まず、ノダを準体助詞「の」²⁰（橋本，1934）に断定の助動詞「だ」が後接したものとする立場である。準体助詞とは橋本（1934：64）によると、「他の語に附いて或意味を加へて，全體として體言と同じ機能をもつたものを作る」語である。もう一つの立場として、三上（1953）のように、ノダを一つの形式とするものである²¹。三上（1953）はノダがガノ可変²²の性質を失っていることから、ノダを一つの形式として捉えている。

(14) 雨ガ降ル + 晩 → 雨ノ降ル晩 (三上, 1953: 27)

(15) 甲, 扁理ガ到着シタノヲ知ツテキルカ (同 p.28)

(16) 乙, 扁理ガ到着シタノデス (同 p.28)

(16') *扁理ノ到着シタノデス

ノを助動詞とする点で三上と立場は異なるが、吉田（1970）もノダを一語と見る立場をとる。吉田（1970）は文末の「の」は「準体助詞とみてもよいが、現代語意識としては「の」以下全部ひっくるめて、一つの助動詞連語として扱うほうが適当であると思われる」（p.30）と述べている。

次に、ノダの構文的特徴について記述している研究をみる。寺村（1984）はノダを一つの助動詞として捉えたうえで、その基本的役割を「全体を名詞化すること」（p.254）とし、「PハQノダ」という文型は典型的な提題文「XハYダ」と同じであり、違いはYが名詞で表される概念であるのに対し、Qは節、動詞、形容詞または名詞+ダといった述語用言で表されるような内容のものという点にあるとする。

(17) アノ音ハ何ダ？

— アレハ鳩ノ啼キ声デス

— アレハ鳩ガ啼イテイル声デス

— アレハ鳩ガ啼イテイルノデス

(寺村, 1984: 307 (128))

²⁰ 同じくノダのノを準体助詞とする立場に吉田（1988）、佐治（1991）がある。

²¹ 他にも同様の立場を取る論考に三枝（2001）、石黒（2003）がある。

²² 三上（1953）によると、「体言には、連体法の内部の主格を「ノ」に変えることのできる性質」（p.234）があり、これを「ガノ可変」と呼ぶ。

田野村（1990）にも同様の記述があり、ノが挿入されるのは「構文上の理由によって機械的に挿入されるに過ぎず、意味的には何らの積極的な機能も果たさないものと考えてるのがよい」（pp.1-2）とする。野田（1997）も一部のノダは名詞文同様の性質を持っているため、名詞に後続する場合に任意となるノダがあるとする立場をとる（3.3.3.1で詳述）。

以上、ノダの構文的特徴に関する先行研究を概観した（ノダの構文的扱いについての本論文の立場は3.4.2で後述）。

3.3 ノダの意味

次に、ノダの意味について記述している研究を概観する。ノダの研究にはこれまで膨大な研究があるが、大まかに分類し概観する。ノダの研究は構文的特徴からその意味を記述するものから、「(命題)ノダ」が当該状況時に欠けている情報を示すとするもの（説明（・判断）説）、ノダが既定の意味を表すとするもの（既定命題説）、非言語的なものも含めた先行文脈との関わりから記述するもの（関連づけ説）、そして、聞き手の発話解釈を取り入れた立場から記述するもの（関連性理論を援用した説）などがある。本論文では、それぞれの主要な論考を個別に概観し、現時点で明らかになっているノダの意味と今後さらに議論すべき課題をまとめる。

3.3.1 「説明（・判断）」説

3.3.1.1 先行研究

まず、ノダの構文的特徴からノダの意味を記述したものに林（1964）がある。林（1964）は「ノはいったん判断された内容を、もう一度何らかの判断の材料にするためのはたらき、いわば、客体化、概念化のはたらきをする」（p.285）とし、そのため、「ノ（ダ）は、かくて二重判断の第二次の判断にあずかる。しかしかという判断（の内容・事実）が成立する、という判断に関係する」（p.286）ことから、ノダを「説明用、説得用の言葉」（p.286）と位置付ける。同じように構文的特徴からノダが二重判断の意味をもつとする研究に国立国語研究所（1951）、吉田（1970）がある。

文脈レベルで考察する研究にも、ノダを「説明」とする研究に寺村（1984）、益岡（1991）らがある²³。寺村（1982：51）が文を「コト」と「ムード」に区別しているのは先述したとおりであるが、ノダを特に「説明のムード」の助動詞と位置付けている²⁴。

²³ その他、ノダを「説明」とする Alfonso（1966）、久野（1973）、「ノダを含む文を「説明項」その文によって前提される文あるいは状況を「被説明項」とし、「意見文」と「判断文」という観点も踏まえ、ノダの表す「説明」を検討し記述した田中（1979）がある。

²⁴ ノダを「説明のムード（モダリティ）」形式とする考えは寺村によるものであるが、それは現在広く受け入れられている（たとえば益岡（1991）、野田（1997）、日本語記述文法研究会（2003）など）。

ムードの助動詞としてのノダの意味は「かなり一般的な「説明」を表わすとしかいいよのないような、範囲の広いもの」であり、何をどう説明しているかは「大きく文脈、状況にかかってくる」（同 p.254）と、とらえどころのないノダの性質を述べている。

(18) 父はひとりで便所に行くとき転び、庭石に頭を打って死にましたが、あれは母が父を殺したのです。
(寺村, 1984: 308 (132))

寺村 (1984) によれば, (18) の場合, 「あれ」は「父が...死んだ」ということ (P) を指し, Q (「母が父を殺した」) がその真相 (あるいは原因) であることを, 「あれは...のです」という文の形によって話し手は自分の考えとして主張しているという。

さらに, 寺村 (1984) が「P ハ Q ノダ」を「X ハ Y ダ」と同じ文型であると捉えているのは 3.2 で述べたとおりであるが, 「P ハ」を表面上欠くことが多く, この場合, P はその発話の場面の, 発話者の関心の対象となる状況をさしていることになるとする。

(19) 私は三日後に帰京した。
先輩を訪ねると,
「ほう, 九州に行ったのですね」
と, 彼は私の土産物の「宇佐飴」を見て言った。
(寺村, 1984: 309 (134) 下線筆者)

(19) の場合, 私が土産に宇治飴を持参しているという状況をみた先輩が, その状況を (頭の中で) P として提題し, それに対して, (相手が) 「九州へ行った」ということと結びつけ, いわば説明を先回りしていると説明している。ただし, この結びつけは「から」「わけ」とは異なり, 言語化しているほどはっきりした因果関係という意識は少ないと述べている。

また, 寺村 (1984) は, そのような「ある状況を認識して, それを理解しよう, あるいは相手に理解させようという気持ちであるから, 日常, 次のように疑問詞で始まる疑問文によく現われる」といったように, 疑問詞とノダとが高頻度で共起する理由もその性質と関連づけて説明している。

(20) ドコへ行くノデスカ? (寺村, 1984: 310 (135))

(21) ドコへ行キマスカ? (同 (138))

寺村 (1984) によると, (20) (寺村 (1984) では (135)) は「どこかへ行こうとしている相手の様子を見て, どこへ行くかを訊いている点」で, (21) (寺村 (1984) では (138))

のような「単純な疑問文と異なっている」(p.310) という。

益岡 (1991) もノダの意味を「説明」とする研究である。益岡 (1991) は「説明」を「設定された課題に回答を与えること」(p.153) と規定したうえで、ノダは「ある命題に対してもう一つの命題が説明を与えることを示す点にある。この場合、説明を与える命題は、前提となる命題に基づいて設定される課題に対する回答を与える」(p.140 下線筆者) ことであると主張する。そして、ノダの示す「説明」を主に三つに類型化する。まず一つ目は「背景説明」で、これは「与えられた事態に対する理由や事情を述べるもの」(p.143) である。たとえば、(22) は、国立大学を二つ受験したのはどのような事情があったのかをノダ文で述べている。もう一つは「帰結説明」である。これは「与えられた文から何が帰結するかを述べるもの」(p.143) である。(23) では、国立大学を2度受験できたのは何を意味するのかという課題が設定され、その解答をノダ文によって与えることになる。

(22) 私は国立大学を2つ受験した。当時は、一期校と二期校に分かれていたのだ。
(益岡, 1991 : 143 (11))

(23) 当時は、国立大学を2度受験できた。とても幸運な時代だったのだ。
(同 (12))

そして、「背景説明」文は「真であることが確定した文である」(p.143) とし、次節で取り上げるノダの「既定性」との関連を述べている。

もう一つは「叙述様式判断型」である。これは「主として状況から非明示的に与えられるところの未定的事態に対して説明を加える文」(p.150) である。このノダについては石黒 (2003) がより詳細に記述している。石黒 (2003) はノダが文脈や状況から判断の二重性を持っているとする立場を取り、「既存の認識」を「話し手や聞き手が既に持っている認識」、「発話時の認識」を「話し手や聞き手の発話の時点での認識」とし、認識の二重性を持たない文にはノダの使用は不可とする。敷衍すると、(24) は発話時点で決めるため認識の二重性はない。しかし、(25) の場合、「そのかばんを買った」認識はすでに共有されており、発話時点では「どこで」買ったかだけが問題にされており、認識の二重性を備えている。従って、ノダの使用が自然というのである。

(24) A : (居酒屋で注文を決めるさいに) ? 何をお飲みになるんですか。
B : ? ビールをいただくんです。
(石黒, 2003 : 5 (1))

(25) A : 素敵なかばんですね。どこで買ったんですか。
B : これですか。近所の質屋で買ったんです。
(石黒, 2003 : 5 (2))

そして、「のだ」が使われると、既存の認識、発話時の認識から成る認識の二重性が存在するというに加えて、話し手または聞き手いずれかの既存の認識が不十分なものであり、それが発話時に十分なものになるということも、あわせて示される。この点が先行研究で示されなかった重要な点である」(p.5)と述べている。

3.3.1.2 意義と問題点

「説明(・判断)」説はノダの用法として広く知られているものであり、自然会話においてもノダは「説明」する場面で頻用される。しかし、国広(1984)、青木(1993)、名嶋(2007)などでも指摘されているように、これはあくまでノダの持つ語用論的意味の一つである。例えば益岡(1991)は、ノダは「前提となる命題に基づいて設定される課題に対する回答を与える」(p.140)場合に使用されると述べているが、(26)(吉田(1988)では⑫)や(27)(同⑬)のように、課題解決とは言えないノダ文もある。

(26) 危ないから、僕が合図をするまでじっとしているんだ。 (吉田, 1988:49 ⑫)

(27) しまった! 銀将は真横へは進めないんだ。 (同 p.50 ⑬)

石黒(2003)が「既存の認識」と「発話時の認識」の二つの「認識」に着目し、「話し手または聞き手いずれかの既存の認識が不十分なものであり、それが発話時に十分なものになる」ことを示す、という点はノダと認知効果の生起とのかかわりを示す重要な指摘であると考えられる。ただし、ノダを「説明・判断」とする説について、青木(1996)が「話題提示機能の説明が難しい」(p.20)と指摘するように、(28)の795のようなノダをどう位置付けるか説明する必要がある。

(28) (F11とF12の会話。韓国に居住経験があるF12が日本で食べる韓国料理は本場の韓国料理とは味が違うので、やはり韓国料理は韓国で食べたほうがおいしいと話した後の場面)

791 F12: 韓国料理いいね、ほんと。

792 F11: いいねー。

793 F12: うん。

794 F11: へー。

795→ そー, 「人名6あだ名」とき、タイ料理いったんだよ。

796 F12: うん。

797 F11: こないだ、結構前だけど。

798 F12: うん。

799 F11：うん。いつだっけ、忘れたな、結構前か、行ったの。

そしたらさ、そのタイ料理がほんっとおいしかったの。(以下略)

(BTSJ 15-1-F11-F12 10代後半から20代中盤)

韓国料理について話をした後、F11が795で「そー」と、自身の経験を想起し、「タイ料理いったんだよ」と話題呈示している。ここでなぜノダ文が使用されるかをどのように記述するかが問題である。石黒(2003)がいうところの「話し手または聞き手いずれかの既存の認識が不十分なものであり、それが発話時に十分なものになる」の「不十分」の定義が定かではないが、本論文は、この点は2章で述べた関連性理論の枠組を用いることで、「話題提示機能」のノダを説明できると考える(3.4.2で後述)。

3.3.2 「既定命題」説

3.3.2.1 先行研究

ノダの意味に「既定(既成)」(すでに定まったこと)性があるとする研究に三上(1953)、小矢野(1981)、佐治(1991, 1993, 1997, 1999)、田野村(1990)、国広(1984, 1992)などがある。ノダの意味として「ノにより命題を客体化する」といった「客体化」説もあるが、国広(1984)でも「既成命題のひとつの側面を捉えたもの」(p.7)と指摘されている通り、客体化するということはすでに定まったものとしていると考えられるため、「既定命題」説とみなすこととする。

三上(1953)は、「何々スル」を既成命題とし、それに話手の主観的責任の準詞部分「ノデアル」を添えて提出するというのが反省時の根本的意味だろう」の述べ、「何々シタ」と提出「ノデアル」との間に隙間というか余裕というか、或る反省的な距りが介在する。だから単なる報告でなく解説という調子が出てくる」(p.239)という。

小矢野(1981)は「主観的情意を表す形容詞が現在形終止法で用いられるとき」には人称制限がある²⁵が、「彼女は母が恋しいのだ」「あの人は奥さんがこわいののよ」のように「の」が使われるとその制限がなくなる」(p.221)ことなどから「「眼前の状況またはその文に先行詞または後続する文・文の連続を前提とする主題に対する解説部分の『判断を客体化し、話し手の主観と切り離されたところで成立するものとして固定』する」のが「ノ」の基本的な意味である」(p.228)とする。

客体化説にはその構文的特徴からさまざまな表現効果を持つとし、その効果を整理した吉田(1988)などがある。吉田はノダ形式を「叙述内容をいったん句的体言とし、然る後にあらためてその体言句を述語形式たらしめる」(p.46)とし、二句一文のノダを《換言》、一句一文のノダを《告白》《教示》《強調》《決意》《命令》《発見》《再認識》

²⁵ 例えば「私は母が恋しい。」は文法的であるが、1人称以外が主語(主題)の場合、「彼は母が恋しい。／あなたは母が恋しい。」というのは非文である。

《確認》《整調》《客体化》のような表現効果を持つと記述する。

国広 (1984, 1992) もノダの意義素を「現況を出発点として、それと何らかの関係のある命題を既定のものとして提示する。既定とは過去の事実とは限らず、未来についての計画でもある」(国広, 1992 : 5), 「ある現状を認知するという主体的行為を行ない、それを関連があると“主観的に判定される”既定命題を『のだ』の前に提示する」(p.19)と規定する。また、ノダの持つ既定性ゆえに、「『のだ』は両刃の剣」(国広, 1984 : 8)とし、命題を既定、つまり「過去に押しやられてしまい、それだけ間接的となるため」、「『です』に比べて『のです』が柔らかい、婉曲な表現」(p.8)になることもあれば、「対人関係を損なう危険な面を持っている」(同)と主張する。

佐治 (1991) は、ノダを「それの前にある述語によってあらわされる判断が、その判断の出てくる状況（その状況の中には、話し手が心の中でよく知っていると言ったことも含まれる）から、そのまま成り立つことの表現であり、前の述語の判断を確かなものとして認定する表現である。状況に基づいて、「のだ」の前に述べられた事態が成り立つことの認定をする表現であると言ってもよい。もっと簡単に、客観的な真実、として述べるものだ、とも言えよう。そこから、解説、説明、説得的な感じも出てくるのである」(p.225)と述べる。この記述は修正発展され、佐治 (1999) では、後述する国広 (1984, 1992) の「<『のだ』の意義素>にほぼ相当²⁶」(p.13)し、「『のだ』の前の述語が描く事態が既定事態であると判断できるような事態が、前置的に、状況の中にあり、それに依拠し、連関した表現」(p.23)であるとした。

(29) (あかちゃんがなきだした) あかちゃんはおなかがすいたのだらう。

(佐治, 1999 : 21 ⑭ア)

(30) (あかちゃんを寝かせて、買い物に出てから、もう 30 分もたった) あかちゃんは
おなかがすいただらう。

(佐治, 1999 : 21 ⑭イ)

佐治 (1999 : 21) は、「『～のだ』が出てくるためには、そのことが「既定の事態」であると判断できるような事態が前提としてなければならないということである」と述べ、(29) (原文では⑭ア) では、「『あかちゃんはおなかをすかせた』ことを、既定の事態として判断することを可能にするような事態 (あかちゃんが目をさまして泣き出した) が前提になっている」が、(30) (原文では⑭イ) ではそのような前提がないとする。

ノダ研究として代表的な研究の一つである田野村 (1990) も同様の立場と考えられる。田野村は「のだ」の基本的な意味・機能を「ある事柄の背後の事情を表す」(p.5) 及び「ある実情を表す」(p.6) とする。

²⁶ 同様に、自身の主張を「田野村 (1990) 説とも山口 (1975) 説とも本質的には同じ」(p.13)と述べている。

(31) 今日は休みます。体調が悪いんです。 (田野村, 1990: 5)

(32) ぼく, 大きくなったらパイロットになるんだ。 (田野村, 1990: 6)

(31) は, 「今日休む」の内実, 背後にある事情は「体調が悪い」ことであると表現しており, (32) の場合, 聞き手は知らなくても「自分はパイロットになりたいと思っている」ことがすでに定まったものであることを示すことになる。そして, 「のダ」が使用される条件として「承前性」「独立性」「披瀝性」「既定性」の4つを挙げている。

また, 指摘すべき点として, 3.2 で述べたように, 田野村 (1990) はノダ文を名詞文同様に「主題—提題型の文」と捉える立場をとっている²⁷。そこから, 名詞文とノダ文の類似性を挙げている。

3.3.2.2 意義と問題点

ノダの構文的特徴を踏まえ, ノダの中心的意味を記述した「既定命題」説は, 先行研究で最も広く支持されている。「説明 (・判断)」説に位置付けられる益岡 (1991) や, 「関連づけ」説を主張する野田 (1997) においても, ノダの既定性を定義づけのキーワードとして使用している。本論文においても, ノダが後接する表出命題は既定のものであるとする立場は同じである。たとえば後述する野田 (1997) が例に挙げる (33) の「対事的 (本論文でいう述定的に相当)」, (34) の「対人的 (同じく伝達的に相当)」ムードのノダをみても, 命題が話し手の中で既定であるということは自明である。(33) は話し手の中では「山田さんは用事がある」ということ, (34) は話し手が「用事がある」ということを既定のこととしてとらえていることが分かる。

(33) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。 (野田, 1997: p.67 (23))

(34) 僕, 明日は来ないよ。用事があるんだ。 (同 (25))

しかし, 既定性は非ノダ文でも示せる (名嶋, 2007; 青木, 1993) ものである。佐治の例を再掲する。

(29) (あかちゃんがなきだした) あかちゃんはおなかがすいたのだろう。 (再掲)

(30) (あかちゃんを寝かせて, 買い物に出てから, もう 30 分もたった) あかちゃんは

²⁷ 山口 (1975) もノダの基本形を「…のは…のだ」としており, 田野村 (1990) と同様にノダ文を「主題—提題文」と考えていると思われる。

おなかがすいただろう。

(再掲)

佐治には「「~のだ」が出てくるためには、そのことが「既定の事態」であると判断できるような事態が前提としてなければならないということである」とある。これは非ノダ文との違いを記述するうえで重要な指摘であるが、では(30)の「30分もたった」という事態は前提とはならないのであろうか。国広(1992)でも、「何らかの関係のある」「関連があると“主観的に判定される”「既成命題」」と述べるにとどまっているが、何がノダ文を使用する前提となるのか、といった点においてさらに詳しい説明が必要であろう。こうした既定命題説の問題点について、青木(1993)では、ノダの意味を明確に記述していないが、ノダの意味を「既定性」とすることの問題点を記述するうえで「何を現状認知として取り立てるかということは、当然のことながら、聞き手にどのような効果をもたらすことを目的として既定命題を提示するかという点と密接なかかわりを持つ」(p.20)とある。青木が指摘するように、聞き手に何を解釈させるために既定の事実をノダ文で示すのかを明らかにすることで、ノダの手続き的意味が明らかになると考えられる。

3.3.3 「関連づけ」説

3.3.3.1 先行研究

次に、ノダ文が他の文や状況と関連性を持っている(関連づけられている)ことを表わすとする「関連づけ」説をみる。

まず、ノダの代表的な研究の一つである野田(1997)を取り上げる。野田(1997)は「の(だ)」をスコープの機能とムードの機能という二つの点から記述している²⁸が、本節では、本論文とかかわりのあるムードの「の(だ)」についてのみみる。野田(1997)は、「ムードの「のだ」の本質は、文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心的態度を表す」(p.66)とあるとする。

ムードの「のだ」は、(35)に示すように「まったく自然に名詞に後接することができる」とし、これは、ムードの「のだ」が、その前の部分を名詞化するという機能以外の機能も担っているからだという。

(35) 進「お前、何やってるんだよ」

直子「バイト。いま休憩なんだ」

(野田, 1997: 63 (6))

そして、表2に示すように、「の(だ)」を対事的ムード及び対人的ムードの「のだ」が

²⁸ ただし、ノダをスコープのノダ、ムードのノダに区分する必要があるという主張が国広(1992)、石黒(2000)、名嶋(2007)などにみられる。

先行文脈と関係づけられているか否かによって以下の4つに類型化している。

表2 野田 (1997) のムードの「の(だ)」の類型化

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Pの事情・意味として Qを把握する	Pの事情・意味として Qを提示する
非関係づけ	Qを(既定の事実として) 把握する	Qを(既定の事実として) 提示する

(p.67 (ウ))

対事的ムードの「のだ」: 話し手が発話時において、それまで認識していなかった事態

Qを把握する場合に用いられ、必ずしも聞き手を必要としない。

対人的ムードの「のだ」: 話し手がすでに認識していた事態Qを聞き手に提示する場合

に用いられ、必ず聞き手を必要とする。

関係づけの「のだ」: 「のだ」がQをP(状況や先行文脈。言語化されるとは限らない)

と関係づけて把握、提示するために用いられている。

非関係づけの「のだ」: 「のだ」がQをPと関係づけるために用いられているとは考え

にくく、Qを既定の事実として把握、提示するために用いられている

ものである。

(pp.71-72)

(33) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。(対事的・関係づけ) (再掲)

(34) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。(対人的・関係づけ) (再掲)

(36) そうか、そのスイッチを押すんだ。(対事的・非関係づけ)

(野田, 1997 : 67 (24))

(37) このスイッチを押すんだ! (対人的・非関係づけ) (同 (26))

ここでいう「対事的ムード」及び「対人的ムード」の分類は、本論文の「述定的ムード」、
「陳述的ムード」にそれぞれ相応すると考えられる。

次に、名詞文「xはyだ」と「(P。)Qのだ。」の共通点と相違点について、関係づけ、
非関係づけに分けて以下のように説明する。

まず、関係づけの「(P。)Qのだ。」の共通点として、寺村(1984)が言うように、「P
(x)が何であるかを、聞き手にとって意味のあるわかりやすい形Q(y)で提示したり、
話し手にとって意味のあるわかりやすい形Q(y)で把握したりするときに用いられる」
とする。そして、名詞文では「のだ」が必要とされない場合もあるとする。一方、相違

点は「名詞文「xはyだ」のxが名詞であるのに対し、関係づけの「のだ」の文ではPは状況などであり言語化されるとは限らないこと、名詞文「xはyだ」のyには名前や種類などが示されることも多いのに対し、関係づけの「のだ」の文のQにはPの事情や意味が示されること」であると指摘する。

次に、非関係づけの「のだ」と名詞文には「ある事物を発見して、その存在に驚き、そのまま述べる文やある事態を思い出して、そのまま述べる文、命令文など意味的な類似性がみられる」という。しかし、対事的ムードの場合は、「聞き手から情報を得た場合などは、その事態を話し手が認識していなかったということを「のだ」によって示さなければならないようである」(p82)とし、次の例を挙げている。

(38) 「ここにはだれも住んでいませんよ」
「ふーん、空き部屋なんだ」 (野田, 1997:82 (17))

(39) 「#²⁹ふーん、空き部屋だ」 (同 (18))

菊地 (2000) は「《共有されている知識・状況に関連する、未共有の付加的な情報を補う》ときに「のだ(んです)」を使う」(p.36)と述べている。他にも教育文法という観点からノダを記述している庵他 (2001) がある。庵他 (2001) は野田 (1997) 同様、ノダ文が基本的に他の文や状況と関連を持っていることを示す形式であると位置付け、ノダを関係づけ、非関係づけに分け、関連づけのノダを「理由・解釈」「言い換え」「発見」「前置き」「再認識」、非関係づけのノダを「命令」「認識強要」などに下位分類している。

3.3.3.2. 意義と問題点

以上、ノダの意味を「関連づけ」に求める研究を概観した。その構文的特徴からノダの意味がとらえどころのないことは寺村 (1984) の「ノダの意味は「かなり一般的な「説明」を表わすとしかいいようなのないような、範囲の広いもの」であり、何をどう説明しているかは「大きく文脈、状況にかかってくる」(p.254)という記述に表れている。こうした文脈(状況)依存のノダを「関連づけ」という用語を用いることにより、吉田 (1988) や国広 (1992) が述べる様々な用法を説明することができるように思われる。

また、野田 (1997) の「聞き手から情報を得た場合などは、その事態を話し手が認識していなかったということを「のだ」によって示さなければならないようである」という指摘はノダの語用論的機能を含めた本質的意味を記述するうえで重要な指摘であると考えられる。

²⁹ 野田 (1997) では、「#」は当該文が非文であることを示すとある。

ノダがさまざまな発話意図を示しうるのは、繰返しになるが、ノダの構成要素であるノが類似した「ワケ」「モノ」に比べて「全く実質的な意味をもたない分文脈的な意味の広がりも大きい」（新屋，2003：179）からであろう。しかし、「関連づけ」が見出されれば、すべてにノダは使用可能なのであろうか。そもそも、会話の展開は先行文脈（発話）と何らかの関連づけがなければ成り立たない。

(40) (F034, F113 の会話。2 人は職場の同僚。F034 が「コーラが大好きだ」と言った後の場面)

43 F113：でも虫歯とかならない？

44 F034：だいたい前に治してそれっきりなんですけどー。

45 うーん。

46 でもねー。

47 コーヒーとかで目が覚めないんですよ、あたしー。

48 F113：コーラで覚める。

49 F034：うん。

50→ (ふーん) カフェイン入ってるでしょう。

51→ F113：コーラって結構多いですよね。

(名大 data015 女性 F034 は 30 代, F113 は 40 代)

これは F034 がコーラ好き，ということ F113 も知っていて話をしてしている場面である。たとえば F113 が 48 で「コーラで目が覚める」と推論したことの理由として F34 は 50 で「カフェイン入ってるでしょう」と発話している。そして「(コーラに) カフェインが入っている」と発話した 50 を受けて 51 で「コーラって結構多いですよ」と発話している。つまりいずれの発話も先行発話と関連づけられているように見えるが，非ノダ文で発話されている。一方で，47 の発話は先行発話と関連づけが薄いように見えるが，ノダ文が使用されている。そうすると，「関連づけ」とは何か，どのような場面でノダが使用され，非ノダ文が使用されるのかといった両者を区切る境界線が必要である。

また，野田（1997）が示すように，一見前後の文脈，先行状況と無関係の場面でも使用されるようにもみえる。しかし，話し手の中ではいかなる場面においても何らかの状況，文脈と関係づけられているように思われる。その根拠として，(36) の非関係づけの例を再掲する。

(36) そうか，そのスイッチを押すんだ。 (再掲，破線筆者)

「そうか」は，自身の認識が変化したときに使用される表現であるが，「そうか」が使用されたということは話し手が何らかの外的要因，もしくは自身で考えた結果発見し

たことを示すと考えられる。野田（1997）がこの状況を「非関係づけ」とするならば、主張を説得的なものにするために「関係づけ」との違いを明確に記述する必要がある。

では、話し手がノダをどのような意図で使用するのか。そして、それを明らかにするためにどのような手法が有効なのか。寺村（1984）が言うように、ノダは「とらえどころのない」形式なのか。こうした疑問を解決するための理論的枠組みとして、本論文では、関連性理論が有効であると考え。つまり、話し手がノダを使用することで、聞き手に当該命題をどのように解釈させたいのかといった点に注目すべきであると考え。

最後に、本論文の理論的枠組みである関連性理論を援用し、ノダを語用論的観点から考察した研究を概観する。

3.4 関連性理論を援用した研究

3.4.1 先行研究

関連性理論の知見を援用し、ノダの意味を記述した研究に武内（1994）、内田（1998）、名嶋（2007）がある。

武内（1994）は「のだ」は聞き手の「解釈に制約を課す有効な手段である」（p.8）、つまり、手続き的意味を持ち、「のだ」発話の関連性は、これが先行発話の文脈含意になっているところにある」（p.9）と主張する。それは先行発話がある場合にもない場合にもあてはまるという。

(41) いまの若者はむろん蚊帳を知らない。だから、「蚊帳の外」という言葉も死語になりかけているのだ。 (武内, 1994:9(19))

(42) (遅刻してきた学生が)寝坊したのです。 (同(20))

(41)の「だから」は、この後続発話が先行発話の関連性を特定するものとして解釈されるべきことを示しており、(42)は「聞き手である私は、学生が授業が既に始まっている時に教室へはいつてきた時の状況からの文脈含意として」（p.10）解釈することになると述べ、「のだ」が文脈含意を与えることで聞き手に関連性のある発話であることを示す形式であることを主張する。

内田（1998）の主張は2点ある。まず、関連性理論が発話を「描写的用法（記述的用法に相当）」「解釈的用法」に区分することに触れ、ノダは「その発話が「解釈的」に提示されていることを示唆するマーカーであること」（p.250）、そして、そのことから「何らかの「話し手の関与」を暗示するものであり、その方向に聞き手の注意を向ける働きがある」（p.249）とし、ノダは手続き的意味を持ち、聞き手が高次表意を復元するのに貢献すると述べている。(39)をみられたい。

(43) a. 太郎が窓ガラスを割った。

b. 太郎が窓ガラスを割ったのだ。

(内田, 1998:245 (10))

「(43a) (内田では (10)) は「太郎が窓ガラスを割った」事実を描写し、伝える発話であるが、他方、(43b) (内田では (10)) は「太郎が窓ガラスを割った」ことを話者の責任で判断し伝えている発話である」(p.245) と述べる。「のだ」が話者の判断を示すことについては小矢野 (1981) が指摘する点を挙げ、(44) の文は「いろいろな証拠から話し手が「太郎はさびしがっている」「太郎は花子と結婚したがっている」と判断したことを示すものである。つまり、(44) (内田では (19)) の文の表現の主体は、「表面上の主語ではなくこの文の話し手であるということである」(p.246) と主張する。

(44) a. 太郎はさびしいのだ。

b. 太郎は花子と結婚したいのだ。

(内田, 1998:245 (19))

名嶋 (2007) では、ノダの意味を語用論的視点から記述すべきだとし、「聞き手の発話解釈」を取り入れる必要があると主張する。そして、ノダの使用には「文脈の改変」が関わっているとする立場をとる。これは第2章で述べた「認知効果が起ったこと」を表すものである。名嶋 (2007) は、そもそも先行研究の関連づけ説について、前節で述べた野田 (1997) および庵他 (2001) が主張する「関連づけ」の定義があいまいであるとし、「ノダの機能は「関連づけ」を行うことなのか、それとも「関連づけられていること」を明示することなのか」(p.13) が明確でないと批判する。

名嶋は関連性理論の主張する「文脈の改変」という観点から関連づけを「ある状況を知覚することによって想定 P を形成し、その想定 P と話し手がもつ文脈 C の組み合わせから「文脈含意」「強化」「却下」のいずれかの「文脈効果 (本論文の認知効果に相当)」を持つ新しい想定 Q を導き出す推論過程である」(p.107) と定義する。そして、関連づけの公式化に必要な要素を次の三つであるとする。

(45) 関連づけに必要な要素³⁰

P: 新たに知覚した情報 (発話, 事態等) に対する認識

C: 文脈想定集合の一部

Q: 新しく導き出された想定

(名嶋, 2007:71 (37))

「C: 文脈想定集合の一部」というのは、「関連づけに際して既に予備がされている (活性化されている)」(同) とあるように、関連性理論のいう「顕在的知識」であると考えられる。

³⁰ 「関連づけに必要な要素」については、2.3.4 を参照されたい。

名嶋 (2007) はノダについて発話された表出命題そのものには関与せず、「表意」「推意」「高次表意」の三つのレベルにおいて、聞き手の発話解釈を制約する手続き的意味を持つとし、その機能を「ある命題を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」(p.83) と規定したうえで、「説明のノダ」及び「発見のノダ」の伝達的機能を記述している。

(46) B1 : (A が外を見て「あ、まいったなあ」と言った) えっ、何？

A : 雨が降っているんだ。

B2 : へえ、雨が降っているんだ。 (名嶋, 2007 : 145 (23))

この場合、A の「んだ」は「当該命題（「雨が降っている」）を聞き手に解釈として受け入れさせよう」という話し手の聞き手に対する発話意図を聞き手に伝達する「説明のノダ」である。一方、それを受けた B2 の「んだ」は、当該命題を自身の思考に登録したことを当該発話の受信者に伝達する「発見のノダ」であり、独話でも使用可能であるという（第 4 章で後述）。この場合は、「客体化された話し手」を「聞き手として」発せられる発話（p.110）であると述べ、「説明のノダ」と「発見のノダ」の連続性を主張する。

3.4.2 意義と問題点

武内 (1994) がノダを「手続き的意味を持つ形式」とした点は本論文も同意見である。ただし、ノダ文が「先行発話によって得られる文脈含意であることを明示する」(p.9) という点は再考の余地がある。第 2 章で示したように、認知効果には「文脈含意」以外に「想定強化」「想定削除」があり、これらの場合にもノダは使用されうる。

(47) (F073 と F092 の会話。二人は短大の同級生。録音機器の調子が悪く電池がないのではと話し、電池を変えて電源を入れ直した後の場面)

358 F073 : 赤い。

359 F092 : あっ、大丈夫だ。

360 → やっぱり電池なかったんだ。

361 F073 : ああ、よかったあ。 (名大 data077 女性 20 代)

(47) は、録音機の電池を入れ替えた後、機械のランプが付き、F092 が 360 で「やっぱり電池なかったんだ」と発話している。この「やっぱり」は、自身の想定が正しかった、つまり想定が強化されたことを示す標識であるため、「文脈含意」ではなく、「強化」と考えられる。つまり、武内 (1994) の主張はノダの認知効果の一部しか記述できない

ことになる³¹。

内田 (1998) は武内 (1994) 同様、ノダが手続き的意味をコード化するとしたうえで、「その発話が「解釈的」に提示されていることを示唆するマーカーであること」とする。「解釈的に」提示されているとする点は、非ノダ文との違いを示す点で有益であると考ええる。例えば、前掲の (47) を「やっぱり電池なかった」と発話すると、あたかも話し手自身が電池がない状況を確認して描写的に発話している文と解釈されうる。

次に考えるべき点は「誰にとって解釈的に判断されているのか」という点である。その点について、名嶋 (2007) はノダの基本的意味を「ある命題を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」と規定する。次の例を見られたい。

(48) A : 面白いデザインの服ですね。

B : エドヤストアで買ったんです。

(名嶋, 2007 : 80 (12))

一見聞き手の処理コストが上がると思われる B の回答は、A にとってそれだけ関連性が高いものであるというのが名嶋 (2007) の主張である。名嶋は次のように述べている。重要な指摘であるため原文のまま引用する。

B のノダが提示する命題は話し手 B による先行発話の解釈であると考えられる。聞き手 A の発話は「どうやって入手したのか」、「どこで買ったのか」等の思考（それは B の思考に対する A の解釈である）の表示であると考えられる。そう考えると話し手 B のノダ文は聞き手 A の発話（B の思考の解釈）に対する応答を提示していることになる。ある発話に対して応答することは、先行発話に対する話し手 B の解釈として「提示されていると言える一方、聞き手 A 側から言えば、その命題は「A の先行発話に対する応答である」という点において「聞き手 A にとって最適な関連性を有する」と「話し手 B によって見込まれている」という特徴を持つ。つまり、話し手が「ある命題」を「『聞き手側から見た話し手の思考に対する解釈』として」提示していることになる。(p.80)

つまり、説明のノダは当該状況において、話し手が「聞き手にとって最も関連性がある情報であると解釈した命題」であると判断したことを聞き手に伝達する形式であると言える。そのように考えると、(48) のように一見処理コストが余分にかかると思われる回答がなされることも説明可能となる。

ただし、いわゆる「発見のノダ」については、さらに慎重な議論が必要であると考ええる。名嶋 (2007) では、前掲の (46) の B2 のノダを「客体化された話し手側から見

³¹ 武内 (1994) に対する同様の批判が名嶋 (2007) でもなされている。

た解釈」とするが、やはり話し手自身の A の発話に対する疑問「えっ、何？」に対する解答を得た、つまり話し手自身から見た解釈として提示するというのが妥当と考える。

(46) B1 : (A が外を見て「あ、まいったなあ」と言った) えっ、何？

A : 雨が降っているんだ。

B2 : へえ、雨が降っているんだ。 (再掲)

また、(49) のように、「想起」文に使用されるノダも同様に当該状況においてなぜ客体化せねばならないのか、その必然性が分からないため、「客体化された話し手自身」とするより、「当該時点で話し手自身に新たに加えられた想定を「(命題) ノダ」で示す」と考えた方が妥当とも考えられる。

(49) (F162 と F026 の会話。二人は高校時代の同級生。明日出席する共通の友人の結婚式について話している場面)

737 F162 : 明日も 1 日だね。

734 F026 : うーん、長いねー。

735 F162 : でも、明日はさー、受付とかないからちょっと残念ね。

736 (<笑い>そうなんだ) この前あたしすごい張りきってたんだって。

737→F026 : そうだ、受付の写真があるんだ。

738 (ほんと) 焼き増しして今度送るわ。

739 F162 : うん。 (data120 女性 20 代)

従って、本論文ではすべてのノダが「聞き手から見た解釈として」提示されているという立場はとらないが (第 5 章で後述)、名嶋を一部援用し、認知環境が修正されるべき側の視点からの解釈として「(命題) ノダ」を提示していると考ええる。

本論文は現段階ではノダを準体助詞「ノ」+「ダ」とする立場をとる。そして、「ノダの使用は認知環境の修正 (文脈の改変) を明示する」ものとする名嶋 (2007) には従うが、ノダの基本的意味を文脈に応じて、聞き手、もしくは話し手いずれ側から見た解釈も有り得るとし、「認知環境が修正されるべき側からみた解釈を意図明示的に示す」手続き的意味をもつと考える。そしてそれが文脈に応じて「説明」や「教示」をしたり、「発見」したりするといった発話意図を含意することになると考える。このように考えることで、青木 (1996) が問題とする「先行文脈の欠如が特徴である」(p.6)「話題提示機能」も説明できると考える。(28) を再掲する。

(28) (F11 と F12 の会話。韓国に居住経験がある F12 が「日本で食べる韓国料理は本場の韓国料理とは味が違い、やはり韓国料理は韓国で食べたほうがおいしい」と話

した後の場面)

791 F12：韓国料理いいね，ほんと。

792 F11：いいねー。

793 F12：うん。

794 F11：へー。

795→ そー，「人名 6 あだ名」とき，タイ料理いったんだよ。

796 F12：うん。

797 F11：こないだ，結構前だけど。

798 F12：うん。

799 F11：うん。

いつだっけ，忘れたな，結構前か，行ったの。

そしたたらさ，そのタイ料理がほんとおいしかったの。(以下略)

この後会話は続いていくが，その後 F11 は辛くて本場（タイの料理）に近い味なので食べに行くことを勧めている（付録 1 参照）。従って，F11 には「（聞き手である）F12 は「料理は本場の味が一番だ」と考えている」という想定があり，同じように本場の味を提供するタイ料理レストランの情報は F12 にとって今最も関連性がある情報である，と解釈したと考えられる。無論，この解釈は話し手による主観的な判断にゆだねられるため，聞き手の発話解釈にかかる処理コストが高くなる場合もある。(50) を参照されたい。

(50) (M017, M029, F098 の 3 人の会話。3 人は科研費による研究の共同研究者。瀬戸内出身の M029 が「北海道で食べた魚は瀬戸内とは味が違う」と言った後の場面)

1755 M029：((出身が)) 瀬戸内なんですけれど (うん，うん) やっぱ北海道の味つ
1756 てのは，また違いますよね。

1757 F098：ま，違いますけどね。

1758 瀬戸内のお魚とは違うから。

1759 M029：瀬戸内最近ちょっと (ええ) あの，公害がなんか。<笑い>

1760 F098：でもよくなった方でしょ，あれ。

1761 昔は。

1762 M029：でも，よく，カキ，結構ね (うん) いろいろ魚 (うん) 取れるんですけ
1763 ど (うん) こんな汚い海で取れるのいいんだろうかと，飛行機に乗ると思
いますけどね。

1764 M017：はああああ。

1765 M029：かなりどす黒いんですよね。

1766 F098：は一ん。

- 1767 M029：飛行機から見ると。
1768 F098：はあー。
1769 M029：だからちょっと怖いなど。
1770→F098：いや、だいぶ前に友だちが潜ったんですよ，一度。
1771 M017：どこの海ですか。
1772 F098：え？
1773 瀬戸内海を。
1774 M017：瀬戸内海を。
1775 F098：わたし，瀬戸内ですから。
1776 M029：な，なんにも，なんにも見えないでしょ。
1777 F098：なんにも見えない。
1778 M029：見えないですもん。
1779 F098：ほんと，1センチ先も見えなかったそうです。
1780 でも，それずいぶん前ですよ。
1781 それから比べるとよくなったっていいですけど。
1782 M017：は一。 (名大 data024 女性 60代)

ここで，F098はM029が1765，1767，1769一連の発話で，瀬戸内の海は汚いという内容の話をしており，その主張を補強するため，F098が1770で「友だちが（瀬戸内海を）潜ったんですよ」と話題提示をしていると考えられる。しかし，M017は当該発話はその時自分たちにどのような関連性を持つかがわからず1771で「どこの海ですか」と質問している。それに対し，F098は関連性があると解釈した発話を通じなかったため，驚き「え？」と発している。このやりとりにより，「当該発話は認知環境が修正されるべき相手にとって関連性がある」という話し手の解釈が主観的であることがわかる。しかし，その後の展開を見てみると，話題提示しているように思われる発話が実はM029の1762の主張の補強をするための提示であり，その状況において関連性があるということがわかる。

このように，文脈との関わりから話し手が「その時その場で聞き手に最も関連性がある」と解釈した命題をノダによって提示していると考ええると，「話題提示機能」も説明が可能となる。

また，ノダのどのレベルを制約するか，という点も考察する必要がある。ノダが手続き的意味を持つことに異論はないが，次の段階として，ノダは「明意（名嶋のいう「表意」）」「暗意（推意）」「高次明意（高次表意）」のいずれを制約するかという点が問題になる。この点について，内田（1991）は高次明意を復元させる手続き的意味を持つとし，名嶋（2007）は明意，暗意，高次明意全てを制約するとする。筆者の立場は現時点では保留とし，次章で裸のノダを分析，考察した後に立場を明確にする。

最後に、自然会話におけるノダの発話効果について解決すべき点を挙げる。ノダが「認知環境が修正されるべき側からみた解釈として当該命題を明示する形式である」と考えた場合、「発見のノダ」はどのような使用効果をもたらすのであろうか。当該のノダは例えば菊地（2000）には「派生的・周辺的な用法」（p.35）とあるが、自然会話を調査した結果、当該のノダは散見され、周辺的な用法とは考えられない（第4章で後述）。では、頻用することでどのような発話効果をもたらすのだろうか。実際の話し言葉データを用いてこういった点まで踏み込んで考察することにより、現代のコミュニケーションの中でのノダの表現効果の新たな一面を記述できると考える。

3.5 明らかにすべき課題

その他、話し言葉におけるノダの発話効果を記述するために今後明らかにすべき点を挙げる。

まず1点目に、ノダの文体差についての記述が野田（1993）、三枝（2011）以外にほとんどみられないという点である。1章で述べたように、日本語記述文法研究会（2003）では、文体差はあるが機能はほぼ同じであり、「話し言葉では、「んだ」「んです」「の」の形をとる」と述べるにとどめ、それ以外の使用差については言及がない。三枝（2011）には「話し言葉におけるノの機能を「断定」を伴わない（つまり、「断定」というモダリティ性を持たない）体言化の働きによって事態をひとまとめのものとして把握することにあるので、話し手は発話時の気持ちのあり方をそこに盛り込むことができる」（p.233）という興味深い記述があるが、従来の研究はノダの本質及び伝達的機能について記述したものが多く、特に「んだ（ \emptyset ）」の使用制限についての記述は管見の限りほとんど見受けられない。自然会話で使用される具現化形式の機能分担を明らかにすることにより、新たなノダの記述ができると考える。

2点目に、ノダの使用に関する性差についても同様である。マグロイン（1993）は「文末表現「の」は、表現を和らげるので女性らしいと一般的に言われている」（p.120）とし、日本語記述文法研究会（2003）でも「平叙文の文末の「の」は女性が用いることが多い」（p.196）と言ったように、文末の「の。」が女性的であるという記述は見られるものの、これらは内省によるものであり、それが現代語においても本当に妥当な記述なのかを自然会話を用いて調査した研究は管見の限りほとんどない。

こうした性差に関して田野村（1990）に興味深い記述がある。田野村（1990：232）は、「「のだ」「のか」などとの関わりにおいて体系的に捉え、「だ」や「か」を加えない表現法が女性的であると言うべきであろう。「の」自体を女性的な方言と見ようとすることは、「これはあなたの本？」における「本」を女性的な表現と見ようとすることに等しい」と述べている。「だ」を使用するか否か、「だ」を使用しないことで生じる効果は何か、という点はノダの手続き的意味を考えるうえで重要な点であると考えられる。

次に、分析対象のノダがムード形式であるにもかかわらず、当該形式の音調についてはほぼ手つかずの状況にあることも問題であろう。「の」の音調に関する研究ある（例えば轟木（2008）³²が、「んだ」の音調についての研究は管見の限りみられない。具現化形式の機能分担が明らかになったうえで、さらに音調と機能との対応関係を記述することで、聞き手の発話解釈を明らかにすることが出来ると考える。

最後に、終助詞との共起形式にも注目する。1.4 で示したように、自然会話では「の。」は多用されているものの、「んだ」「んです」で言い切る形は少なく、「よ」「ね」「よね」といった終助詞が付加された形式が多く観察されている。しかし、使用頻度が高い形式であるにもかかわらず、こういった複合形式に関する研究は少なく、第1章で触れたように、あっても「ノダ」と終助詞の従来の意味の加算で記述する研究がほとんどである（例えば内田（1998）³³、野田（2002））。自然会話の中でノダがどのように使用されているか、その手続き的意味は何か、という点を明らかにするために、「ノダ+終助詞」も対象にし、自然会話で使用されるノダ文の発話効果を考察する必要があると考える。

以上、先行研究を概観し、その意義と残された課題を記述した。以下、本論文が援用する点と今後究明すべき点を述べ、本章のまとめとする。

[先行研究を整理し（直し）たノダの意味]

- I. ノダは準体助詞ノに判定詞ダが後接する複合形式である。
- II. ノダは先行発話（状況）とその場で有する自身の顕在的知識とから演繹的に推論された（推論されるべき）命題を提示する。ノダの命題が既定のものであるということは、推論過程をふまえた結果必然的に生じるものである。
- III. 「命題ノダ」は「先行文脈を基に認知環境を修正すべき側からみた解釈の結果、当該命題が当該者にとって最も関連性のある情報である」ことを伝達する手続き的意味を持つ。
- IV. 「(命題)ノダ」は文脈と外的刺激から語用論的に推論され、得られたものであるため、文脈（状況）に応じて表される発話効果は多様である。

³² 轟木（2008）はノを終助詞と位置付けており、ノダとの意味関係については触れていない。

³³ 内田（1998）はノダと「よ」「ね」との複合形式について、「よ」は「聞き手に新情報を伝える働きを持って」（p.248）おり、「(の)だよ」は「(の)だ」に先行する解釈文に「よ」を付加して新情報として伝達することができること」（p.249）、「ね」は「同意、確認を求める」（p.248）形式であり、「(の)だね」は「解釈文に「ね」を付加して相手に確認したり、同意を求めることが可能であることを示している」（p.249）と述べている。しかし、「ノダね」は新情報を述べる場合にも使用される。また、内田のこの主張では「ノダよね」を説明することができない。

[今後明らかにすべき課題]

- I. ノダの使用は高次明意だけでなく明意，暗意をも制約するのか。
- II. 話し手自身に認知効果が生じたことを示すノダはなぜ会話の中で頻用されるのか。それは会話遂行上どのような意味を持つのか。
- III. 話し手自身に認知効果が生じたことを明示するノダと聞き手に認知効果を生じさせることを明示するノダに形式的，音韻的差異はあるのか。また，その使用に性差はあるのか。
- IV. 会話で頻用される「ノダ+終助詞（よ，ね，よね）」は単純な意味の加算と考えていいのか。もしそうでなければ，それぞれの形式は「課題III」のいずれのノダとして使用されるのか。

第4章 「の (Ø)」 「んだ (Ø)」 「んです (Ø)」 の手続き的意味

4.1 はじめに

本章では、まず常体の具現化形式「の (Ø)」 「んだ (Ø)」 に注目し、実際の自然会話を用いた使用実態の分析を通して、「だ」の有無により発話意図に差異がみられることを示す。次に、敬体の裸の形式「んです (Ø)」は自然会話においては使用範囲がある程度限定される可能性があること、そしてそこから、ノに後接する「だ」と「です」は異形態とは言えないことを主張する。

第1章で述べたように、自然会話では様々なノダ形式が使用されている。しかし、実際にどのような形式がどのような意図で使用されているか、といった個別の形式の性質について記述した研究は管見の限りない。さらに、当該形式の性差については、平叙文の「の」は話し手が女性に限られる(野田 1993)といった指摘がされている。しかし、筆者の内省では男性にも使用がみられる。その一方で、「んだ」に関する性差の記述は管見の限りほとんどない。本章では、ノダの使用的意味を明らかにすることを目的に、先行研究ではあまり注目されてこなかった文体差と性差に関する分析を行う。形式の違いに着目した考察を行うことで、先行研究とは異なるノダの本質的意味を明らかにできると思われるからである。

自然会話で使用されるノダの使用実態を知るためには、まずは常体形式「の (Ø)」 「んだ (Ø)」 の分析が必要であると考え。その理由は次の2点である。まず、敬体の「んです (Ø)」はいわゆる情報提供文に使用が限定されるため「の (Ø)」 「んだ (Ø)」とは異なり、使用場面が特定しやすいという点が挙げられる。

(1) (JBM04 と JOM02 の会話。二人は初対面同士。JBM04 が「高校生の時、選抜され
西安へ研修旅行に行った」と言った後、JOM02 に「なぜ行けたのか」と聞かれ)

24→ JBM04 : 一応なんかあの、試験みたいなものがあるんです。

25→ =英語の試験とか、(ああ) それで一応なんか募って、(ええ) で募集して、(ええ) 応募して、(ええ) で、まあ、試験受けたらなんか通っちゃったん(ああー) です。

(BTSJ data206-JBO04- JOM02 男性 20代前半)

さらに、自然会話で使用される裸の形式は「んです (Ø)」 「の (Ø)」 「んだ (Ø)」 であるが、使用環境が異なるため、3つの形式を単純に比較検討することが出来ないことから、まずは常体の裸の形式の使用実態を分析する。

分析は、名嶋(2007)の記述するノダの機能を修正援用し、若者の自然会話の観察を

通じて、「の (∅)」「んだ (∅)」の手續きの意味及び男女間における「の (∅)」の使用差について仮説を呈示する。

本章の構成は以下のとおりである。まず、4.2 で裸のノダ形式に関する先行研究を概観した後問題点を挙げる。4.3 でノダを平叙文の「説明」のノダ、「発見」のノダ、及び疑問文のノダに類型化し、常体の「の (∅)」「んだ (∅)」の伝達的機能を自然会話コーパスを基に考察する。次に4.4 で敬体の「んです (∅)」を調査し、「んです (∅)」が常体のノダと単純な対応関係にあるとは言えない点を指摘する。そして、これまでの考察を踏まえ、4.5 で三つの具現化形式の手續きの意味を仮説として提示し、4.6 では第3章で保留としていた「ノダが「明意」「暗意」「高次明意」のいずれのレベルを制約するか」についての本論文の立場を述べる。

4.2 問題の所在

4.2.1 先行研究

4.2.1.1 ノダの具現化形式

日本語記述文法研究会 (2003) は、「「のだ」は名詞化の働きを持つ「の」に「だ」が接続したものだが、1つの助動詞と考えてよい」(p.195)とし、さらに「(説明のモードの)「のだ」は平叙文の文末には「のだ」「んだ」「のです」「んです」「のである」「の」の形で現れる。これらは基本的に文体差であり、機能はほぼ同じである」(p.196 ()内及び下線筆者)と記述している。文体差については、「話し言葉では、「んだ」「んです」「の」の形をとる」(p.196)、「平叙文の文末の「の」は女性が用いることが多い」(p.196)と述べるにとどめ、それ以外の使用差については言及がない。

三枝 (2011) は話し言葉コーパスを用いて、裸の形式「の」「のだ (んだ)」「のです (んです)」の使用頻度を調査している。その結果、「全体としては「の。」の使用頻度が高いこと、言い切りの「んだ」「んです」の使用頻度は高くないが、終助詞が接続した場合には「んです」の使用頻度が高くなり、対者的に使われることが分かる」(p.232)と形式に使用上の差異があることを明らかにしている。また、使用上の性差については、「の」は「女性の使用頻度が際立って高い」、「んだ」と「んです」についてはそれほど大きな使用頻度の違いはないが、「んだ」では、女性の方が男性よりむしろ使用頻度が高く、「んです」では、男性の方が女性より使用頻度が高かった」(同)と報告している。

4.2.1.2 ノダの伝達的機能

本節ではノダの伝達的機能に注目した研究として名嶋 (2007) を中心に取り上げる。なお、本論文では「伝達的機能」を、「言語形式そのものの機能ではなく、その「使用

が何らかの意味を派生的に伝達すること」(名嶋, 2007: 118)とする。名嶋(2007)では、ノダは発話された表出命題そのものには関与せず、「表意(明意)」「推意(暗意)」「高次表意(高次明意)」の三つのレベルにおいて、聞き手の発話解釈を制約する手続き的意味を持つとし、その機能を「ある命題を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」(p.83)と規定したうえで、「説明のノダ」及び「発見のノダ」の伝達的機能を次のように記述している。

説明のノダ：「当該命題を解釈として受け入れさせよう」という話し手の聞き手に対する発話意図を聞き手に伝達する。(名嶋, 2007: 146 (25))

発見のノダ：話し手が当該命題を話し手の思考に登録したことを当該発話の受信者に伝達する。(同 p.118 (40))

(2) B1: (Aが外を見て「あ、まいったなあ」と言った) えっ、何?

A: 雨が降っているんだ。

B2: へえ、雨が降っているんだ。(同 p.145 (23))

(2)の場合、Aの「んだ」は「当該命題(「雨が降っている」)を聞き手に解釈として受け入れさせよう」という話し手の聞き手に対する発話意図を聞き手に伝達する「説明のノダ」である。一方、それを受けたB2の「んだ」は、当該命題を自身の思考に登録したことを当該発話の受信者に伝達する「発見のノダ」であり、独話でも使用可能であるという。こうした区分は話し手の発話意図を探るうえで示唆的である。ただし、名嶋(2007)も含め、従来の研究はノダの本質及び伝達的機能については多くの知見が得られるものの、「のだ」の変異体とされる「の(∅)」と「んだ(∅)」にどのような使用上の違いがあるのかについての記述は管見の限りほとんど見受けられない。自然会話で使用される両形式の機能分担が仮にあるとするならば、それを記述することは母語話者の伝達方略についての新たな知見を提供できるものと考えられる。

4.2.1.3 ノダの性差

次に、「の(∅)」の性差について考える。マグロイン(1993)は「文末表現「の」は、表現を和らげるので女性らしいと一般的に言われている」(p.120)と、使用に性差があることを記述している。野田(1993)は、(3)(4)は「文体差以外の違いはない」(p.43)とし、両者の違いは(3)は話し手が女性に限られ、(4)は主に男性が用いるということだけであろう(p.44)と述べている。

(3) 明日、休むわよ。用事があるの。(野田, 1993:44 (1))

(4) 明日、休むよ。用事があるんだ。

(同 p.44 (2))

当該の「の」「んだ」は先述した「説明のノダ」に該当するので、「説明のノダ」を使用する場合には両形式に性差がある、ということになる。一方、疑問文における「の」については使用に性差はないとし、「「の？」は男性も自然に用いることができる」(野田, 1993: 47)としている。田野村(1990)は「「のだ」「のか」等とのかかわりにおいて体系的に捉え、「だ」や「か」を加えない表現法が女性的であると言うべき」(p.232)と述べている。名嶋(2002)では、「の」の女性語という問題については考察の対象外としている。三枝(2011)は4.2.1.1で述べたような調査報告をしているが、それぞれの発話意図、つまり個別の形式にどのような使用上の差異があるか、といった点については言及していない。

確かに筆者の内省でも、「明日は休みなの」といった言い方は女性的な印象を受けるが、現代語においても平叙文の「の(∅)」が女性特有の言い回しなのか、なぜ「んだ(∅)」は女性の使用が多いのか、という点についてはいずれの先行研究にも明確な記述がない。

4.2.2 問題の所在

以上、諸書の問題点を記述したが、それを踏まえ、本章の研究課題を述べる。

研究課題 1. 「のだ」の変異体である「の(∅)」と「んだ(∅)」は自然会話においてどのような手続き的意味を持つのか。両形式の手続き的意味は同一なのか、異なるのか。

研究課題 2. 「の(∅)」の使用は現代日本語においても先行研究で記述されるような性差があるのか。つまり、平叙文の「の(∅)」の使用は女性に限られるのか。

研究課題 3. 「の(∅)」と「んだ(∅)」は、「んです(∅)」とどのような対応関係にあるのか。

以上3つの課題を解明するうえで、前後の文脈、聞き手の反応等は「の(∅)」及び「んだ(∅)」両形式の使用意図を分析するのに重要な手がかりとなる。そこで、名嶋(2007)のいう平叙文の「説明のノダ」「発見のノダ」に加え、研究課題2に関わる疑問文のノダの3種類に類型化し、文単位ではなく、文脈を伴った談話単位での分析を行う。まず、研究課題1, 2を解決するため、調査資料は「の(∅)」「んだ(∅)」が観察されやすく、かつ参加者間で類似した使用が予測される、立場が同等の若者同士が行った自然会話を用いた。そして、形式の出現状況に差が出ないようにするため、友人間は常体、初対面は敬体のノダ形式を分析対象とする。そして、その分析を基に両形式の伝達的機能及び各伝達的機能における男女間の使用差について考察する。最後に初対面会話を用いて、

研究課題 3 を解決する。なお、以降の議論では「のだ文」を発話した側を「話し手」、発話された側を「聞き手」と呼ぶ。

4.3 「の (∅)」「んだ (∅)」の分析

4.3.1 調査概要

調査概要を以下に示す。

調査目的：(i) 自然会話における「の (∅)」、「んだ (∅)」の使用分布を明らかにする。

(ii) 男女間における「の (∅)」使用の差異を記述する。

調査資料：「BTSJ による日本語話し言葉コーパス 2011 年版」³⁴の友人（主に大学（院）生）の雑談，（男性 4 時間 50 分，女性 4 時間 52 分）合計 9 時間 42 分

調査方法：手順 1. 調査資料からノダ文を抽出し，3 種類のノダに分類する。

手順 2. 各ノダにおける「の (∅)」、「んだ (∅)」の使用分布を調査する。

手順 3. 男女間における「の (∅)」の使用実態を調査する。

4.3.2 調査結果

4.3.2.1 使用数と分析対象数

使用された「のだ文」のうち，(5) のようにスピーチレベルシフトが起きた発話，(6) のように前後の文字化ができていない発話，(7) のように引用表現が付加されている発話は対象外とした。

(5) 167 BF02：<行きたくないんだもん>{>}。

168→F02：いいんですか?=。

(6) 236 F01：あと，何で『遊撃手』っていうのかも分かった。

237→F02：あー，#####んだ。

238 F01：あのねー，忘れた<2 人で大笑い>。

(7) 273→M02：しかもね，バントんときさー（うん），"できるのー?"と思ったら，し
っかりやっとして，<お>{<},

³⁴ 「BTSJ (Basic Transcription System) による多言語話し言葉コーパス」は，東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の 2011 年度の研究成果として登録制で公開されており，日本語母語話者（友人，初対面）の雑談，討論，ロールプレイや日本語母語話者と日本語学習者の会話の文字化資料（一部音声あり）約 66 時間分が提供されている。本章の調査では，その中の友人，初対面同士の雑談の一部を調査資料として使用した。

274 M01 : <あー>{>, ちゃ, あいつうめーもん。

表 1 にコーパスで使用された数と分析対象数を示す。結果は表 1 の通り, 1771 発話 (88.2%) 分析対象となった。

表 1 使用されたノダの総数と分析対象数

	女性	男性	合計
総数	1036	971	2007
対象数	922 (89.0%)	849 (87.4%)	1771 (88.2%)

次に, 対象となったノダの上位 5 形式及び使用数を表 2 に示す³⁵。表 2 から, ノダ形式使用は男女間で近似していることがわかる。また, 裸の形式の使用数に注目すると, 「の (∅)」は本調査で使用されたノダ中, 男女とも最も多く使用されており, 女性は全体の 40.6%, 男性は 33.6%を占めることがわかった。一方, 「んだ (∅)」の使用数は男女とも「の (∅)」の 3 分の 1 程度であった。

表 2 使用されたノダ (男女別, 頻度順)

	女性	使用率	男性	使用率
1	の (∅) (374)	40.6%	の (∅) (285)	33.6%
2	んだ (∅) (119)	12.9%	んだよ/のよ (100)	11.8%
3	んだよね/のよね (106)	11.5%	んだ (∅) (96)	11.3%
4	んだよ/のよ (61)	6.6%	んだよね (76)	9.0%
5	のかな (51)	5.5%	のかな (56)	6.6%

4.3.2.2 使用されたノダ形式

次に, 本資料で使用されたノダを平叙文のノダと疑問文のノダの 2 種類に類型化した後, 名嶋 (2007) を援用, 修正し, 平叙文のノダを「情報提示 (説明) のノダ」「情報受容 (発見) のノダ」に下位分類し, 「の (∅)」と「んだ (∅)」の使用分布を調査した。以下, 用例とともに示す。

- (a) 情報提示のノダ: 当該命題の提示により, 聞き手の認知環境を修正しようと話し手が試みていることを聞き手に伝達する

³⁵ 接続助詞「けど」との複合形である「んだけど」も文末での使用がそれぞれ男性 63 発話, 女性 51 発話観察されたが, 倒置などの問題もあり, 文中で使用されている同形式との客観的な区別が困難であるため, 本論文では分析対象外とした。

話し手は、「(命題) ノダ」で、当該状況において聞き手にとって最も関連性のある情報を推論し、伝えることにより、話し手が聞き手の認知環境を修正しようと試みていることを聞き手に伝達する。

- (8) (F19 と F20 の会話。二人は友人同士。「こんな機会だから、相手に抱いている印象」というトピックを与えられて話している中で、F19 が F20 に「自分のことをどう思っているか聞きたい」と言った後の場面)

384 →F19：なんかー、あたしもー、こう、就職活動しててさ (うーん)、自分が思ってる自分とー、他人から見る自分はかなりギャップがある、ってことに気づいたの。＝

385 → =なんか、私、って、まずなんか、黙ってる時、怒ってるように見えるらしいの。

(data19-1-F019-F020 女性 10 代後半～20 代前半)

- (9) (M09 と M10 の会話。二人は友人同士。M10 が「先日受けたテストが 30 点だった」と言ったのに対し、M09 が「7 割取れたんじゃないのか」と言い、以前 M10 が言った言葉を話している場面)

226 M09：“おれは、人より勉強しないで、人の 9 割をとるおこと‘男’だから”とか言ってた。

228 :あれ？

229→M10：ちがう、あのね一人の 1 割勉強してー、5 割の点数取るつつったの。

230 M09：＜軽く笑う＞

231→M10：で、“5 割じゃだめじゃーん”とか言ってたの。

(data5-1-M09-M10 男性 10 代後半～20 代前半)

- (b) 情報受容のノダ：当該命題を話し手の思考に新たに登録したことを明示する
話し手は、「(命題) ノダ」で、聞き手とのやりとり、もしくは外的要因により、当該命題を話し手の思考に新たに登録したことを明示する。

- (10) (F12 が F11 に韓国で食べた韓国料理について話した後の場面)

733 F12：((韓国料理を)) こっちで食べたことないんだけどね。

735 F11：うん。

736 F12：高いからさー。

737 :韓国の、2 倍なんだよね、値段が。

738 →F11：そうなの。

739 F12：＜ちょうど 2 ばん‘倍’>{<}。

740→F11： <あ，安いんだ>{<}向こう。

(data 15-1-F11-F12 女性 10 代後半～20 代)

(11) (M15 が所有する車について話した後の会話)

86 M15:なんか，「人名 3」がさ，車もってんだけど (うん)，<それ>{<} 【。

87 M16:】 <なん>{>}だっけ，プレ，プレセアだっけ？。

88 M15:あれはねー (うん)，つぶしちゃったんだよ，<事故で>{<}。

89→M16:<あ，そう>{>}なんだ。

90 M15:うん。

91 :廃車んなっちゃってー。

92→M16:=事故ったんだ，あいつ。

(data81-1-M15-M16 男性 10 代後半～20 代前半)

富樫 (2001) は情報の獲得に関わる談話標識について記述しているが，この「情報の獲得」という用語について，「何らかの情報が心内領域に書き込まれたことを表わす。情報は外部から得られる場合と，知識データベース (長期記憶) から呼び起される場合がある。」(p.21) とする。本論文の「情報受容」もこれと同義と考える。

(c) 疑問文のノダ：自身の認知環境を修正するために相手に必要な情報を求める

相手とのやりとりから，その後の会話遂行のために自身に欠けている情報を聞き手に求める。もしくは，話し手自身の認知環境の修正の妥当性を聞き手に確認する。

(12) (M06 が自分の気になる女子学生について話した後の会話)

675 M05：だ，「学科名 4」ねー，ぶっちゃけ，((好みの女の子が)) 誰も今は
いないんだよなー。

676→M06：誰がいいの？。

677 M05：「学科名 4」？。

678 M06：うん。

679 M05：いない。

680→M06：全然いないの？。

681 M05：正直，今んところ，いないけど。

(data3-1-M05-M06 男性 10 代後半～20 代前半)

「の (∅)」については，情報受容のノダか疑問文のノダかの判断が困難な場合もあった。その場合には文末の「？」，及び上昇イントネーションを示す「↑」の有無を判断基準とした。つまり，(11) 738 は情報受容のノダ，(12) は疑問文のノダとした。

各ノダの出現数を表3に示す。興味深い点として、(I) 男女とも「の (∅)」は情報提示のノダ及び疑問文のノダとして、「んだ (∅)」は情報受容のノダとして使用される傾向があったこと、(II) 疑問文のノダは「の (∅)」の使用数に男女差がみられなかったが、情報提示のノダは女性の使用が男性の約3倍観察されたことが挙げられる³⁶。

表3 各ノダにおける「の (∅)」及び「んだ (∅)」の出現数 ()内は使用率を示す

	女性			男性		
	の (∅)	んだ (∅)	計	の (∅)	んだ (∅)	計
平叙文 (提示)	171 (94.0)	11 (6.0)	182 (100.0)	66 (79.5)	17 (20.5)	83 (100.0)
平叙文 (受容)	11 (9.3)	107 (90.7)	118 (100.0)	14 (15.9)	74 (84.1)	88 (100.0)
疑問文	192 (99.5)	1 (0.5)	193 (100.0)	205 (97.6)	5 (2.4)	210 (100.0)

次に、各ノダで使用された形式を調査した。表4, 5, 6に各ノダにおいて使用された上位5形式と観察された数を示す。表4, 5, 6から、男性は情報提示のノダに「んだよ/のよ」を最も多く使用していたが、それ以外は他の形式(「のだ」+文末詞)と比較しても、情報提示および疑問文には「の (∅)」が、情報受容には「んだ (∅)」の使用が最多であった、といった点が指摘できる。

表4 平叙文 (情報提示のノダ) に使用されたノダ形式

	女性		男性
1	の (∅) (171)	1	んだよ/のよ (94)
2	んだよ/のよ (55)	2	の (∅) (66)
3	んだよね/のよね, んだって (46)	3	んだよね (55)
5	のね (33)	4	んだ (∅), のね (17)

表5 平叙文 (情報受容のノダ) に使用されたノダ形式

	女性		男性
1	んだ (∅) (107)	1	んだ (∅) (74)
2	のか (12)	2	の (∅) (14)
3	の (∅) (11)	3	のか (8)
4	んだね/のね (9)	4	んだね (4)
5	んだな (1)		

³⁶ 疑問文のノダは男女ともほぼ「の？」が使用されていたが、「んだ」もわずかながら観察された。例えば「なんで昨日来なかったんだ。」のような発話例である。

表 6 疑問文に使用されたノダ形式

	女性		男性
1	の (∅) (192)	1	の (∅) (205)
2	んだっけ (3)	2	のか (15)
3	んだよ/のよ (2)	3	んだっけ (10)
4	のか, んだ (1)	4	んだ (5)
		5	んだよ (2)

4.3.2.3 「の (∅)」の使用に関する性差

4.3.2.3.1 情報提示のノダにおける「の (∅)」使用の性差

次に、情報提示のノダにおける「の (∅)」使用に関する性差について分析を行った。先行研究で記述されている通り、疑問文のノダにおいては男女差がなく、同じような頻度で使用されていた。しかし、情報提示のノダにおいては先行研究の記述とは異なり、確かに数は女性と比較して少ないが、男性の使用が 66 例確認された。そのため、まず「の (∅)」がどのような品詞に後接するかを調査した (表 7)。調査の結果、先述したように使用数に差はあるものの、品詞による使用傾向には大きな差がみられず、男女とも主に「動詞+の」、次いで「名詞+の」が使用されていることがわかった。

表 7 「の」に前接する品詞

() 内は使用率を示す

	名詞	な形容詞	い形容詞	動詞	副詞	その他 ³⁷	合計
女性	20 (11.7)	10 (5.9)	12 (7.0)	107 (62.6)	11 (6.4)	11 (6.4)	171 (100.0)
男性	9 (13.6)	4 (6.1)	2 (3.0)	44 (66.7)	5 (7.6)	2 (3.0)	66 (100.0)
合計	29	14	14	151	16	13	237

次に、前接の活用に注目した。筆者の内省では、「の」が女性らしく聞こえる理由の一つとして、「なの」という接続形式が関係していると考えられるためである。そこで、前接する品詞の活用形式 (「___の」か「___なの」か) に注目して調査した (表 8)。

³⁷ 疑問詞や助動詞などを「その他」とした。

表8 「の」の接続形式 ()内は使用率を示す

	の	なの	合計
女性	136 (79.5)	35 (20.5)	171 (100.0)
男性	49 (74.2)	17 (25.8)	66 (100.0)
合計	185	52	237

接続形式に性差があるか χ^2 検定を使用して調べたところ、両者に有意差は確認されなかった ($\chi^2(1)=0.50, p=.48, n.s.$)。つまり、使用傾向に差はみられなかった。

4.3.2.3.2 疑問文のノダにおける「の (∅)」使用の性差

次に、疑問文のノダにおける「の (∅)」の男女差の有無について「説明のノダ」同様調査した。「の (∅)」が後接する品詞 (表9) 及び接続形式 (表10) を以下に示す。

表9 「の」に前接する品詞 ()内は使用率を示す

	名詞	な形容詞	い形容詞	動詞	副詞	その他	合計
女性	19 (9.9)	6 (3.1)	11 (5.7)	122 (63.6)	13 (6.8)	21 (10.9)	192 (100.0)
男性	22 (10.7)	4 (2.0)	13 (6.3)	121 (59.0)	8 (3.9)	37 (18.1)	205 (100.0)
合計	41	10	24	243	21	58	397

表10 「の」の接続形式 ()内は使用率を示す

	の	なの	合計
女性	143 (74.5)	49 (25.5)	192 (100.0)
男性	138 (67.3)	67 (32.7)	205 (100.0)
合計	281	116	397

前接する品詞は近似しており、接続形式にも有意差はなかった ($\chi^2(1) = 2.12, p=.14, n.s.$)。しかも、筆者の内省に反し、「 なの」の使用は男性の方が多結果となった。

(13) (M05 と M06 の会話。M06 が「カメラやビデオで撮られた自分をみるのが嫌だ」といった後の場面)

8 M05 : 普通見る<でしょ>{<}。

9 M06 : <いやいや>{>}いや<笑いながら>。

10 なんか、自分を美化してるとっていうんじゃないけど (うん)、見ると、"あー、おれこんな姿なのかよ"とか、<ショック受ける>{<}。

11 M05 : <写真とか>{>}見るでしょ。

12→M06：や、お、お前好きなの？。

13 M05：<え?><>。

14 M06：<撮><>ってもらうの好き？。

15 M05：大好き。 (data 3-1-M05-M06 男性 10 代後半から 20 代中盤)

(14) (M19 と M20 の会話。M20 が大学 (院) 生の先輩の研究会に定期的に参加しており、その研究会の内容を M19 に説明した後の場面)

229 M19：うえ、もう、そこに行くの？、研究室。

230 M20：どうしよう。

231 M19：どこ、とか、どこどこ迷ってるの？。

232 M20：行動情緒かー、(うん)そこかだね、「人名 3」先生。

232 M19：「人名 3」先生んところは、大体何なの？。

234 そういう、。

234 M20：<児童、虐待?><>。

235→M19：<事例検証><>みたいな感じなの？。

236 虐待[↑]、あー。

237 M20：子ども虐待とか。

(data 10-1-M19-M20 男性 10 代後半から 20 代中盤)

4.3.3 考察

4.3.3.1 ノダ形式の使用実態

本調査は、主に常体をスピーチレベルとする大学 (院) 生による友人同士の自然会話に注目し、ノダ形式の使用実態を調査した。調査の結果から、若い世代においては使用頻度の高い形式は近似しており、性差なく使用されることが考えられる。

裸の形式に注目すると、「の (∅)」は男女とも最も使用頻度の高い形式であり、特に疑問文のノダには性差なく頻用されていた。「んだ (∅)」はその使用が全体の 1 割程度であった。三枝 (2011) の結果と同様、「んだ (∅)」は女性のほうが使用が多いという結果になったが、その使用場面を調査したところ、平叙文の「情報受容」のノダとしての使用が多いということがわかった。本調査ではノダを類型化しそれぞれの使用数を調査した。こうした調査を行うことにより、それぞれのノダでどのような具現化形式が選好されるのかを把握できると考える。なお、今回の調査は若者の雑談を対象としたが、30 代以降の母語話者の「だ」の使用に同様の傾向があるかについても調査する必要がある。

4.3.3.2 「の (∅)」の使用に関する性差

先述の通り、「の (∅)」は疑問文に関しては性差なく頻用されており、先行研究を支持する結果となった。しかし、平叙文における「の (∅)」の使用については、先行研究の記述とは異なり、女性と比較すると数は少ないものの、「男性も平叙文で「の (∅)」を使用する」という結果が得られた。さらに、前接する品詞及び接続形式（「の」か「なの」か）に着目しても、使用傾向に男女の差は観察されなかった³⁸。ただし、これは先行研究の記述を否定するものではなく、「従来の考え方では不自然と思われるスタイルがごく自然に使われ、話し手の性別に直結するいわゆる女性語と男性語の差はそれほど顕著ではなくなっている」（メイナード、2005：4）ためであろう。

また、疑問文と平叙文（「情報提示」のノダ）で「の (∅)」の使用に差がみられたことについては、以下のように考える。まず、表 6 で示したとおり、スピーチレベルが「常体」の場合、疑問文のノダには「の (∅)」が多用されていた（女性 96.5%，男性 86.5%）。この結果は当該形式が「文末名詞化構文」（堀江・パルデシ、2009）であり、名詞述語文同様のスタイルが選好されることを示している。つまり、名詞述語疑問文については性別にかかわらず「明日休み（か）？」のように「普通体では「か」を付加せず、上昇イントネーションで質問の意味を表すことが多い」（日本語記述文法研究会、2003：23）ことと同様に、疑問文のノダも、例えば「昨日用事があったのか」より「昨日用事があったの (↑)」といった発話スタイルが性別に関わらず選好されるのであろう。

一方、平叙文の「情報提示」のノダは使用数に男女差が認められた。このタイプのノダの異形態に注目すると、「の (∅)」以外には「んだよ」「んだよね」のような、「んだ+文末詞」という形式であった。次に、使用数に注目すると、女性は「の (∅)」、男性は「ノダ+よ」を最も多く使用していた。つまり、「情報提示のノダ」として、男性は「の (∅)」に比べて「ノダ+よ」を選好する傾向にあるため、使用数に差が生じたと推察される。

また、「ノダ+よ」の具現化形式については男女とも「んだよ」「のよ」が使用されていたが、両形式の使用数については差がみられ、男性が 94 発話中 88 発話（93.6%）、女性が 55 発話中 41 発話（74.6%）に「んだよ」を使用していた。この結果は、「説明のノダ」として「んだ」を使用する場合には、裸の形式を回避し、聞き手目当て性を持つ何らかの形式を共起させる傾向にあることを示唆している（4.3.3.3.1 で後述）。さらに、表 4 にあるように、「んだよね」「んだって」など他形式との共起表現も一定数観察され

³⁸ ただし、p.67 の (8) (9) を比較すると、前接する語によって男性の使用に対する許容度が異なると思われる。具体的には、(9) の「つつた（と言った）」「言ってた（言っていた）」のようなくだけた表現と共起した場合に使用（許容）されると推察されるが、現時点では指摘にとどめ、男性の当該形式の使用については今後の課題とする。

ることから、「んだ (∅)」が伝達的モードとしての使用上の制約があるとも考えられる。詳しくは 4.3.3.3.1 で述べるが、聞き手配慮の面から使用が制限されるか、もしくは聞き手の発話解釈の処理コストを軽減するという点から、対照的な二つの機能のうち、「(命題) んだ (∅)」は情報受容のノダとして使用することにより、「(命題) の (∅)」と語用論的に機能を分担しているとも考えられる。

第 3 章で述べたように、本論文は現段階でノダを準体助詞「の」に判定詞「だ」が附加された形式とみる。そのため、こうした機能分担があるという点を考察するために、文末の「だ」の語用論的機能を明らかにする必要があると考えられる。この点については、次章でノダ文だけでなく、非ノダ文で使用される当該の「だ」を分析し、議論を深めていく。

4.3.3.3 自然会話における「の (∅)」及び「んだ (∅)」の使用分布

4.3.3.3.1 「んだ (∅)」の伝達的機能 — 「だ (∅)」が示す意味—

本論文ではノダを平叙文の「情報提示」のノダ、「情報受容」のノダ及び疑問文のノダに類型化し、使用実態を調査した。その結果、両形式ともすべてのノダで使用が観察されたものの、その使用分布には違いがみられた。つまり、本調査においては「情報提示」のノダ及び疑問文のノダには「の (∅)」が、「情報受容」のノダには「んだ (∅)」が選好され、以下のように伝達的機能の使用に関する傾向差がみられた。

(15) 「の (∅)」: 情報提示のノダ, 疑問文のノダ 「んだ (∅)」: 情報受容のノダ

メイナード (2005 : 344) によると、「だ」は「肯定的な断定を通して強く言い切る機能を持ち」、「その言語行為が意図的に断定されるものであることを伝える」形式とされる。従って、「情報提示」のノダに「んだ (∅)」を使用すると、聞き手に対し当該命題を解釈として (いわば強制的に) 受け入れさせようとする態度を明示することになると思われるが、聞き手に対する配慮により、こうした態度は回避されると推測される。

一方、「情報受容」のノダには「んだ (∅)」が多く観察され、「の (∅)」との差も顕著であった。「だ」は「断定」ではなく、「話の現場で主体が経験している心理状況や内面的な経験をそのまま表現するとき、その指標として使われ」(メイナード, 2000 : 197) するという記述もある。確かに自然会話をみると、メイナードが指摘するように、「だ」はその場で経験したことに対する話し手自身の認識を言語化する場面で使用されている。これは関連性理論の枠組で考えると、(16) のように、自身の認知環境に変化が起こり、「(命題) +だ」は「新たに認識した内容の言語化」と言うことができる。

(16) (M05 と M06 の会話。二人は友人。M06 が、気になる女の子が同じ学科にいる

と話している場面)

585 M05 : 「学科名 2」, いる?。

586 M06 : だから, 2年生になって (うん) , 2年留年してたって子がいるんだよ。

587 M05 : うん。

588 M06 : その子は現役で入ってから, 2年留年して (うん) , そうすとためじゃ
ん。

589→M05 : じゃ, いま, あ, お前, 年同じだ。

590 M06 : そう, 年は (うん) 22。

591 で, しかも, 可愛いんだよ<少し笑いながら>。

(data3-1-M05-M06 男性 10 代後半~20 代前半)

ここで, M06 が気になる女子学生のことを話しているが, 586, 588 でその女子学生が2年留年しているため, 「ため」(同じ年齢)だと発話した後, M05 が, 589 で「じゃ」「あ」などを用いて自身の認識が修正されたこと, ここでは文脈含意が起り, その新たな認識を「だ。」で述べている。こうした「だ。」の働きが「情報受容」のノダとして使用される「んだ (∅)」としても使用されているのではないかと考えられる。つまり, 話し手の認知状態が変化したこと, そして新たに加えられた認識を聞き手に明示することができるため, 当該のノダに使用されやすいものと思われる。

以上, 「んだ (∅)」は聞き手配慮の点から, 断定の「だ (∅)」が回避されるため, 「情報提示」のノダとしての使用が少ないこと, それに加えて, 認知環境の変化が起こったことを示す「だ」と共起されやすいことを指摘したが, このようにもともと二つの機能を持っていた「だ (∅)」の機能を「自身の想定集合に新たに登録された認識の明示」へと単純化することで, 聞き手の発話解釈にかかる処理コストを軽減しているのではないかと考えられる。もしこの仮説が正しければ, 自然会話では, 非ノダ文で使用される場合も, 「だ (∅)」は話し手自身の認知環境の修正を明示する場合に使用される傾向が強いと考えられる。次章では仮説を検証するため, 自然会話で使用される文末の「ダ」の発話意図を分析, 考察する。

4.3.3.3.2 「の (∅)」の伝達的機能 — 「聞き手配慮」と「聞き手目当て性」—

4.2.2 で示した通り, 本調査において「の (∅)」は「んだ (∅)」とは対照的に, 性別に関わらず平叙文の「情報提示」のノダ及び疑問文のノダとして使用され, さらに「んだ (∅)」だけでなく, 他のノダ形式と比較しても選好されることがわかった。特に「情報提示」のノダについては, 当該形式が先述した「聞き手の発話解釈を制約する」手続き的意味を有するものの, 断定を意図する「だ (∅)」を伴わないという点で聞き手配慮が含意されるため, 使用しやすいものと考えられる。つまり, 構文的には「文体差」と

された「の (∅)」と「んだ (∅)」であるが、「だ (∅)」の性質により、聞き手に認知効果を与える場合には「の (∅)」が使用され、自身に認知効果が起ったことを述べる場合には、それを明示するため「んだ (∅)」を使用する、といったように、形式の使い分けをする傾向があるのではないかと思われる。

また、堀江・パルデシ (2009) は、「文末名詞化構文」は、「だ」「です」のようなコピーラを伴う場合と伴わない場合があり、「機能的にはまったく等価ではなく、微妙な相違がある」(p.94) とし、「コピーラを伴わない文末名詞化構文は、コピーラを伴った用法と意味的な連続性を持ちつつも、話し手の聞き手に対する何らかの働きかけ(「聞き手目当て」)の意味がより明確になり、使用文脈による語用論的解釈の幅がより広くなるという「語用論的富化」の傾向が推察される」(p.95 下線筆者) と、「の (∅)」が「説明」以外のモダリティ要素を有することを指摘している。この知見を援用すると、「の (∅)」が聞き手の存在を前提とした場面で使用されやすいのは、「だ」を伴わないことにより生じる語用論的富化によるものと思われる。

同じような指摘が三枝 (2011) にもある。三枝は「の」が断定を伴わない体言化の働きにより、「話し手は発話時の気持ちのあり方をそこに盛り込むことができる」(p.233) とし、「の (∅)」が語用論的にさまざまな発話意図を持つことを指摘している。ただし、三枝 (2011) では、あくまで「の」は叙述を体言化することを主とし、「聞き手目当てのモダリティは持ち得ず」(p.233) とされる。さらに「聞き手配慮」という点は言及していない。その点で本論文とは立場が異なる。

以上の考察を踏まえ、本論文は若者が使用する「の (∅)」は「だ」を伴わないことにより「聞き手配慮」及び「聞き手目当て」という意図が含意されるため、「情報提示」のノダ及び疑問文のノダとして使用されやすい形式であると結論づけた。

4.3.4 結論

本節では、若者の自然会話コーパスを用いて常体の裸の形式「の (∅)」「んだ (∅)」の伝達的機能、男女の使用差を記述した。従来「のだ」の変異体と位置付けられていた両形式について、その伝達的機能の使用分布に違いがあることとその理由、さらに若い男性は平叙文でも「の (∅)」を使用することを指摘した。

4.4 敬体「んです (∅)」の使用実態

4.4.1. 調査概要

調査資料及び調査手順は以下の通り。

調査資料：「BTSJ による日本語話し言葉コーパス 2011 年版」初対面の雑談、男女各

約 4 時間 合計約 8 時間分

- 調査手順：1. 文末の「のだ文」を抽出³⁹し、「んです (Ø)」の使用を調査する。
2. 初対面の雑談を男女に分けて分析する。
3. 「んです (Ø)」の使用場面と発話意図を分析、考察する。

4.4.2 調査結果

4.4.2.1 ノダ形式の使用数と分析対象数

まず、表 11 に本資料で使用された敬体のノダの総数及び分析対象数を示す。常体形式の分析の場合と同様に、使用された「のだ文」のうち、前後の文字化ができていない発話、引用表現が付加されている発話、情報提示か情報受容か判断が難しい発話は対象外とした。また、本調査は敬体のノダに着目するため、スピーチレベルシフトが起きた発話も分析対象から除いた。その結果、1001 発話が分析対象となった。

表 11 本資料で使用された敬体のノダ形式の総数及び分析対象数

	初・女性	初・男性	合計
総数	789	631	1420
対象数	514 (65.1%)	487 (77.2%)	1001 (70.5%)

4.4.2.2 使用されたノダ形式

分析対象となったノダ形式及び使用数（率）を表 12 に示す。初対面男性、女性とも 11 形式観察されたが、男女とも上位 4 形式で使用されたノダ形式の 9 割を占めていることが分かった。また、各形式の使用数は異なるが、上位 5 形式は全く同じ形式が使用されていた。裸の形式「んです (Ø)」に注目すると、当該形式の使用数は 5 番目に多かったものの、男女とも使用が 16 発話のみであり、全体の約 3%にとどまっていた。

表 12 使用されたノダ形式と使用数及び使用率

	女性	使用数（率）	男性	使用数（率）
1	んですか	243(47.3)	んですか	194(39.8)

³⁹友人間の分析と同様に、「んですけど」は分析対象から除外している。しかし、初対面では当該形式の使用数は突出しており男性 314 発話、女性 296 発話観察された。このことから、「ノダ+けど」は初対面の相手に対する意図明示的の伝達行為において、重要な役割を遂行しており、日本語母語話者の伝達方略を明らかにするうえで重要な形式であると考えられる。当該形式の分析、考察は今後の課題としたい。

2	んですよ	146(28.4)	んですよ	117(24.0)
3	ですよね	59(11.5)	ですよね	105(21.6)
4	ですね	25(4.9)	ですね	30(6.2)
5	んです (∅)	16(3.1)	んです (∅)	16(3.3)
6	んじゃないですか (ね)	10(2.0)	んでしょう (ね)	12(2.5)
7	んでしょう (ね)	7(1.4)	んじゃないですか (ね)	5(1.0)
8	でしたっけ	4(0.8)	じゃないんですか	3(0.6)
9	じゃないんですか	2(0.4)	んでしょうか, でしたっけ	2(0.4)
10	ですって, ですけど	1(0.2)	のかもしれないですよ	1(0.2)
計		514 (100.0)		487 (100.0)

次に、「んです (∅)」が使用される平叙文の「情報提示のノダ」に、どのようなノダ形式が使用されているかを調査した。上位 5 形式及び使用数を表 13 に示す。

表 13 平叙文（「情報提示のノダ」）に使用されたノダ形式

	女性		男性
1	んですよ (146)	1	んですよ (117)
2	ですよね (37)	2	ですよね (87)
3	んです (∅) (16)	3	ですね (23)
4	ですね (11)	4	んです (∅) (16)
5	んじゃないですかね (3)	5	んじゃないですかね, んでしょうね (1)

表 13 から、「情報提示」のノダとして使用される形式は男女間で違いがないこと、使用頻度の高い形式は「んですよ (ね)」であることがわかる。「んです (∅)」は使用された形式全体の 6~7%であった。

4.4.2.3 「んです (∅)」の使用場面

「んです (∅)」が使用されるのは、主に相手からの問いに回答する場面であった。

(17) (UF15 と UF16 の会話。二人は大学 4 年生。UF16 が「在学中に絶対車の運転免許を取りたい」と言った後の場面)

361 UF15: え, でも, 忙しくないですか?。

362 あ, 就職…。

363 UF16: 就職活動が (もう), 一応終わった<ので>{<}。

- 364 UF15 : <あ>{>}, おめでとうございます。
- 365 UF16 : 就活, 大学院とか。
- 366→UF15 : あ, 大学院なん<ですー>{<}。
- 367 UF16 : <あ>{>}, さすがー。
- 368 UF15 : それもちょっと, あの, 不安で, 最近不安な (あ) 要素がたくさんあってほんと困って<笑いながら>。
- 369 UF16 : 考えてらっしゃるから<笑いながら>。
- 370 UF15 : いやいや<笑いながら>。
- 371 　　だから, ええ, 就職活動はしてないです。
- 372 UF16 : あー。 (data 27-2-UF15-UF16 女性 20代)

(18) (JSM02 と JBM03 の会話。二人は別の大学に所属しているが, JSM021 が「JBM03 の大学の教員に英語の授業を習っている」と言ったところ, JBM03 が「自分も授業を受けていた」と言った後の場面)

- 24 JSM02 : いい, いい先生ですよ。
- 25 JBM03 : いい先生<なんですけどね>{<}。
- 26 JSM02 : <はい, はいはい>{>}。
- 27 JBM03 : 難しいんですよ<2人で笑い>。
- 28 JSM02 : あ, そうですね, 英語は...=。
- 29 　　=あの, 理系の大学には難しいかもしれないですね, けっこう。
- 30 JBM03 : あ, 文系...?。
- 31→JSM02 : はい, 英文科<なんです>{<}。
- 32 JBM03 : <英文科>{>}。
- 33 JSM02 : はい。
- 34 JBM03 : あー, そっかそっか。

(203-14-JBM02-JSM03 男性 20代前半)

4.4.3 考察

4.4.3.1 ノダ形式の使用数と使用形式

本節では, 初対面会話に注目し, 文末のノダ形式の使用実態を調査した。友人場面は約9割が分析対象になったのに比べ, 初対面場面では総使用数に占める分析対象数の割合が低く, 特に女性は65%であった。これは, 親しくない「疎」の関係でも, 女性は会話が進むにつれ, スピーチレベルが「常体」へとシフトする傾向があったためであると考えられる。

使用形式については, まず, 初対面と友人とを比較すると, 初対面はノダ形式の種類

が少なく、上位5形式で全体の約95%を占めていたことがわかった。このことにより、自然会話において敬体を使用する場合、ノダ形式はある程度限定されていると言える。さらに、男女とも同じような形式が使用されていることが分かった。従って、初対面で使用されるノダ形式は概ね性差なく使用されると考えられる。

次に、裸の形式「んです(Ø)」に着目すると、その使用は男女とも16発話のみであり、使用されたノダ形式の3%（「情報提示」のノダにおいては6~7%）にとどまった。これは、常体の裸の形式「の(Ø)」「んだ(Ø)」がそれぞれ「の(Ø)」が平叙文の「情報提示」のノダ、疑問文のノダ、「んだ(Ø)」が平叙文の「情報受容」のノダで頻用されていることを鑑みると、話し言葉においては単に文体差というだけでは説明できない機能上の違いがあると言える。

4.4.3.2 「んです(Ø)」の使用場面

「んです(Ø)」は本論文で類型化した平叙文の「情報提示」のノダとして使用されているが、当該のノダにおいても、使用数はわずか6~7%であった。ただし、この結果は単純に「んです(Ø)」が自然会話で使用されにくいという結論を導くものではない。本調査で使用したデータは「初対面相手と一定時間会話をする」というタスクが課せられているため、協力者には会話を継続させようという思いがあると推察される。そのため、初対面の相手と会話を円滑に進めるうえで「んです(Ø)」で言い切ることを回避した可能性もある。

「んです(Ø)」が使用された場面をしてみると、ほとんどが相手の質問に答える場面での使用であった。(14)では、卒業後の進路について「大学院か就職か」と聞かれ、「大学院なんですー」と答えており、(15)では相手に「(専攻は)文系?」と聞かれ、「文系なんです」と回答している。従って、この回答で相手に必要な情報が満たされるため、裸の形式を使用しても問題ないという場合に使用されると考えられる。

4.4.3.3 常体の裸の形式との関係

最後に、常体の「の(Ø)」及び「んだ(Ø)」と「んです(Ø)」との関係を考える。4.4.3.2で述べたように、常体の形式はそれぞれのノダにおいて、他形式と比較しても使用頻度が男女とも高かった。具体的には、「の(Ø)」は平叙文の「情報提示」のノダ、疑問文のノダに、「んだ(Ø)」は平叙文の「情報受容」のノダでの使用が有意に多い結果となった。それに対し、「んです(Ø)」は使用自体が少ない。本節では、常体の裸の形式「の(Ø)」「んだ(Ø)」と対照し、その類似点と相違点を考え、「んです(Ø)」の手続き的意味を探る。

4.4.3.3.1 情報提示のノダの「の (∅)」と「んです (∅)」

「んだ (∅)」とは異なり、「んです (∅)」は、平叙文の「情報提示」のノダとして使用されるという点では「の (∅)」と共通している。しかし、使用数から考えると両形式は大きく異なっている。これは、同じ裸の形式であっても、「んです (∅)」はいずれの常体形式とも文体差として扱うレベルではないことを示唆している。特に、ノダ形式に限って言えば、「です」は「だ」の変異形（敬体）とは単純に言えない（詳しくは次節で後述）。逆に言えば、常体の「の (∅)」「んだ (∅)」は「んです (∅)」にはない機能を担っていると考えられる。「んだ (∅)」は先述したように自身に認知効果が起ったことを示す述定的モード（対事的モードに相当）であり、「の (∅)」は聞き手に対し述べ立てる伝達的モード（対人的モードに相当）であると言える。この伝達的モードという点からいえば、「んです (∅)」についても敬体の標識「です」を含んでいるため、「の (∅)」と同様のモードを担っていると言えるが、「んです (∅)」がわずか 16 例であったことから、話し言葉においては、単純に「です (∅)」を使うと丁寧で聞き手配慮が明示される」というわけではないとと考えられる。本論文は 4.3.3.3.2 で述べたように、「の (∅)」には「聞き手配慮」と「聞き手目当て性」があるとする立場を取る。しかし、「んです (∅)」の場合、聞き手目当て性はあるが、応答場面での言い切りで使用された場合は、断定を意図する「です (∅)」の使用により、聞き手配慮を示す意図はないと考える。

4.4.3.3.2 「だ (∅)」と「です (∅)」

次に、「だ (∅)」と「です (∅)」の関係について考える。先述したように、「んだ (∅)」は主に情報受容のノダ、つまり「(命題) んだ (∅)」で当該命題が話し手自身に新たに登録されたことを聞き手に明示するといった使用が見られた。この点においては、同じような状況で「んです」を使用する場合、「か」や「ね」などほかの形式との共起が必須であり、「んだ (∅)」と「んです (∅)」は文体差とは言えない。ただし、4.3.3.3.1 で述べたように、この語用論的機能は非ノダ文で使用される「だ」にもみられる機能であるため、「だ」の性質を分析する必要がある。

一方、情報提示のノダとして使用される場合には、使用数が少ないという点で両形式は共通していた。「んです (∅)」は男女とも 16 発話、「んだ (∅)」は男性 17 発話、女性 8 発話のみであった。しかし、使用場面をみてみると、両者には差異が見られた。具体的には、「んです (∅)」は相手に質問され、回答する場面での使用が主であったのに対し、「んだ (∅)」は同じような場面での使用が見られたのに加え、(19) のように自身が話題提供する場面でも使用されていた。

(19) (F11 と F12 の会話。F11 が中学生の時にしていた寮生活のことを話しており、F12

に「食事は出たのか」と聞かれ、「出た」と回答した後の場面)

- 542 F11：でもねー，なんか，寮のしょくーじ'食事'って，やっぱりこう，なんだ
ろう，とりあえず大量生産じゃん。
- 543 F12：うーん，うん。
- 544 F11：だから，手間をかけらんないしー（うん），でもー，カロリーとかー（う
ん），栄養価とかをがんばって考えないといけないし（うん）みたいな（う
んうん）感じで。
- 545 F12：うんうんうん，そうか。
- 546→F11：で，だからねー，なんかねー，揚げもんがすごいで多かったんだ。
- 547 F12：ほー。
- 548 F11：とにかく揚げもんが。
- 549 なんか，夜は揚げ物みたいな。
- 550 F12：えー。[驚いたように]

(data15-1-F11-F12 女性 10代後半～20代中盤)

(20) (M11 と M12 の会話。お互いの印象を話すというトピックを与えられており，
M12 が M11 に「太ったね」といった後，「軍艦に乗ればすぐ痩せるよ」とフォロー
した後の場面)

- 575 M12： /少し間/だって，うちの兄貴だつてー，大学時代はプヨプヨしてたけど
ー，社会人になってー（うん），なんか，肉体労働系なのよ。[あわてて
取り繕っている感じではない]
- 576 M11：ふーーん。
- 577→M12：できー，はしり，働き始めたら，一気になんか，が，ゴツゴツになって
きてー，すげーんだ。
- 578 おれが，普通になんか，こう，なに，う，つ，スマートにこうスポーツ
なんかやってる（うん），とさー，全然体かなわなないわけね。
- 579 M11：ほー。
- 580 M12：おーん。
- 581 だから，働いてる人にはかなわなないなとか思って。
- 582 M11：そうそうそう。
- 583 M12：うん。

(data6-1-M11-M12 男性 10代後半～20代中盤)

4.4.2.3 で使用された「んです (∅)」とは異なり，自身が話題を提供する中で使用され
ており，その後も発話権を維持して話し続ける様子がみられた。その使用場面から，「ん
だ (∅)」と「んです (∅)」は，同じ判定詞で確言及び断定の意図を示す⁴⁰「だ (∅)」 「で

⁴⁰ ただし，「です (∅)」は上昇調を伴うと疑問の意味としても使われうることから，確言，

す (∅)」を使用してはいるものの、発話意図は異なるのではないかと推察される。

4.5 自然会話におけるノダの手続き的意味についての仮説

4.5.1 ノダの語用論的機能の類型化

本論文では関連性理論の考察対象とする意図明示的伝達を対象とし、ノダは話し手自身もしくは聞き手の認知環境を修正する形式であると考え、ノダの伝達の機能（語用論的機能）を (a) 平叙文の情報提示のノダ、(b) 平叙文の情報受容のノダ、(c) 疑問文のノダの三つに類型化した。改めて実例とともにノダの類型化を確認し、それを踏まえ次節で裸の形式の手続き的意味（仮説）を提示する。

- (a) 情報提示のノダ：聞き手の認知環境を修正しようと話し手が試みていることを聞き手に伝達する

話し手は、「(命題) ノダ」で、当該状況において聞き手にとって最も関連性のある情報を推論し、伝えることにより、聞き手の認知環境を修正しようと話し手が試みていることを聞き手に伝達する。

- (21) (F127 と F021 の会話。二人は大学院の先輩後輩。F127 が自分の働いている教会でのアルバイトの後任を探しており、F021 に業務内容を説明している場面)

225 F127：あの、バイトは4人ぐらいなんだけど、大体曜日制で決まってる、私はい

226 よ、金曜日で、で日、月が休みなのね。

227 F021：あっ2日休みって。

228 F127：うん、2日休み。(へえーっ)

229 F021：日((曜日))が休みって？

230→F127：うん、あのね、クリスチャンの人だから日曜日はお休みな。 (へえーっ)
(名大 data006 女性 20代)

F021 は日曜が休みだという発話を受け、229 で「日 (曜日) が休みって？」と発話しており、F127 はその発話を休みの理由を聞いていると解釈し、230 で「クリスチャンの人だから日曜日は業務をしない」と F127 に伝えている。ここで、「へえーっ」と反応していることから、F127 に認知効果が起ったことは明らかである。従って、ノダは発話状況からその状況で相手にとって必要と考える認知効果を与える場面で使用されることが考えられる。

認知環境を修正するのであれば、非ノダ文であっても可能である。例えば、今まで話

断定を当該形式の本質的意味としない立場もある (Narahara, 2002)。

をしていた友人が立ち去る際に、テーブルの上にスマートフォンを忘れて行ったのに気づき、次のような発話をしたとする。

(22) A：ねえ、スマホ忘れてるよ。（*忘れてるんだよ）

B：あ、ありがとう！ (作例)

この場合「スマホ忘れてるんだよ」とノダ文で言うことはできない。この「友人がテーブルの上にスマートフォンを忘れてる」という発話は関連性理論では「記述的用法」であるが、事態を描写するだけで、つまり、非ノダ文で聞き手である友人に十分関連性があるため、ノダ文を使用するのは不適切となる。

しかし、例えば次のような場合はノダ文が自然となる。

(23) A：(B がスマホを置いたままその場を去ろうとしているのを見て) ねえねえ、

B：ごめん、ちょっと急いでるからまたね！

A：違うって、スマホ忘れてるの！ (作例)

ここでは、急いでいて呼びかけに応じようとしないう B を見て、特段呼び止める事情がないと思っているのだろうと解釈した A が「私が呼び止めたのは、B がスマホを忘れてるからだ」と伝え、B の認識を修正させるためにノダを使用している。

このように、ノダは聞き手とのやりとりや発話状況から、聞き手にとって必要と考える情報を推論し、伝達することで聞き手の認知環境を修正しようとする意図を伝達する場合がある。

(b) 情報受容のノダ：当該命題を話し手の思考に新たに登録したことを明示する

話し手は、「(命題) ノダ」で、聞き手とのやりとり、もしくは外的要因により、当該命題を話し手の思考に新たに登録したことを明示する。

情報受容のノダには、相手とのやりとりから当該命題を話し手の思考に登録したことを聞き手に伝達するものがある。

(24) (M034 と F004 の会話。二人は恋人同士。F004 がトム・ハンクス主演のアポロ・サーティーンを見たと言い、映画の内容を説明した後の場面)

1161 M034：おもしろかったの？

1162 F004：結構よかったよ。

1163 M034：あ...本当？

1164 F004：うん。

1165→M034：トム・ハンクスの映画でおもしろいって言うこともあるんだ。

1166 F004：うん，そう。 (名大 data092 男性 20代)

「トム・ハンクスが主演する映画は全部つまらない」という既定の想定を持っていた M034 が，F004 に「面白かったの？」と聞き，「結構よかったよ」と言われたことで，1165 の「面白いて言うこともある」と自身の「トム・ハンクスが出演する映画は全部つまらない」という既存の想定が修正されたことを「んだ」で表している。1163 で「あ，本当？」と発話していることから聞き手に認知効果が生じたことは明らかである。もしここで「んだ」を取り除いてしまうと，これは言い切りになってしまい，M034 が「おもしろいて言うこともある」と断言することになる。従ってノダは必須である。

次は，先行研究で「再認識」(野田，1997：89)とされるノダである。このノダは基本的に聞き手目当て性を持たず，独話で使用されるが，本論文は(25)のように相手とのやりとりから忘れていた知識(当該命題)を再認し，再度自身の想定に加えたことを示す例もあり，両者の区別が難しいことや，今回観察されたものは，他者とのやりとりの中のものであるため，いずれの例も同じように分析対象とする。

(25) (F121 と F057 の会話。二人は会社の元同僚。F057 の韓国の知人の話をした後の会話)

944 F121：向こうの旧正月って2月のいつ。

945 F057：うんとね，来年は12日って言った。

946→F121：あつ，そっか，毎年違うんだ。

(名大 data079 女性 30代)

(c) 疑問文のノダ：自身の認知環境を修正するために相手に必要な情報を求める

相手とのやりとりから，その後の会話遂行のために自身に欠けている情報を求める。もしくは，話し手自身の認知環境が修正されたことを明示し，その修正の妥当性を確認するノダである。(26)を参照されたい。

(26) (F032, F098, F138 の会話。3人は大学の先輩後輩。F098 が日本語母語話者の話し言葉を集めるために2人に協力を求めており，F138 が方言を話す母語話者でもいいか，と聞いている場面)

717 F138：で，何でもって方言ありかって。

718 F098：方言あり，方言あり。

719 F138：あり？

720 F098：あり。

721 おもしろいのは，あの一，う，ま一，方言の強さによるんだらうけれど。

722 F138 : 方言なんて地方標準語。 <笑>

723 F032 : 方言でなくたって。

724 F138 : 地方標準語でしょう？

725→F032 : 方言っていっちゃいけないの？

726 今。

727 F138 : うん, 違う。 (名大 data008 女性 60代)

F098 が「方言」という言葉を使うのに対し、F138 が 722, 724 で「地方標準語」という言葉を繰り返し使っているのを聞いた F032 が F138 は「方言」という言葉を使うべきでないと考えていると推論し、725 でその推論の妥当性を確認している。

4.5.2 裸の形式「の (∅)」「んだ (∅)」「んです (∅)」の手続き的意味 (仮説)

以上、3つの裸の形式について自然会話コーパスを基に分析を行った。発話者が限定されたコーパスであるが、ここまでの分析、考察で得た結論から、3つの形式の手続き的意味を仮説として呈示する。

「の (∅)」の手続き的意味 (仮説) :

先行文脈 (状況) と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手に認知効果を与えるものであることを聞き手に伝達する。もしくは、当該命題が自身の認知環境に修正を与えるものであること、そしてその修正が相手の確認により完了することを明示する。

「んだ (∅)」の手続き的意味 (仮説) :

その状況において話し手自身にとって最も関連性のある情報 (当該命題) が新たに登録されたことを明示する。

「んです (∅)」の手続き的意味 (仮説) :

当該命題がその状況において聞き手にとって最も関連性がある情報であること、その情報を提示することにより、十分な認知効果を与えることができるという意図を聞き手に伝達する。

以上、コーパスを基にそれぞれの形式の手続き的意味を仮説として提示した。今後、「だ (∅)」の自然会話における使用実態の分析、考察を通して、仮説の妥当性を検証、修正していく。

4.6 ノダは明意，暗意を制約するのか

次に，第3章で保留にしていた「ノダは明意，暗意を制約するか」という点を考える。

内田（1998）がノダは高次明意を復元する手続き的意味を持つ，とするのに対し，名嶋（2007）は，ノダは同様に手続き的意味を持つが，それは明意，高次明意，暗意いずれも制約する，という立場をとる。こうした両者の論考と本論文の立場をここで明確にする。まず，明意（表出命題）を制約する場合をみる。

(27) 学生：寝坊したんです。

教師：（心の中で）この学生は寝坊したので遅刻したんだ。

（名嶋，2007：48（10））

名嶋（2007）はこの場合，教師は遅れて教室に来た学生の発話を聞き，「寝坊した」コトと，「遅刻した」コトの二事態の関係を因果関係として捉える。これは暗意ではなく，表出命題を導き出すために論理形式を肉付けしたものにより導き出される発話解釈であるため，ノダは表出命題を制約する手続き的意味をもつ，とする。もしここで，「んです」を取り除くと，この場合の明意は「学生が寝坊した」コトのみになる。

本論文が分析対象とする自然会話においても，同様にノダの使用が明意を制約すると考えられる例が観察される。(28)を参照されたい。

(28) (F023, F107, F128 の3人の会話。3人は友人。F023 と F107 が2011年9月11日の同時多発テロが起きた時に，旅行で一緒にアメリカにいた，という話をしている場面)

45 F023：私たちはさあなんかまだアタックが始まる前に行っちゃったからー。

46 F107：ほいでさー，私たちさあ。

47 F023：のんきに結構さあ。

48 F128：知らなかったんだよね。

49 F107：あのね，知らなかったっていうか，あれね，日曜日に起こったじゃん。

50 そんでさあ。

51 私たちさあ。

52→F023：テレビがなかったの。

53→F107：日曜日の夜からテレビがない部屋だったの。

54 F023：それまでテレビあったのにさあ。

（名大 data2 F023 40代女性，F107 30代女性）

2人は当時テロが起ったことを知らず、後で知った、という話をしている。48でF128に「テロが起きたことを知らなかったんだよね」と言われ、なぜ知らなかったかを52, 53で伝えている。ここで二人はF128の48の発話から、なぜ知らなかったかをF128に伝える必要があると解釈し、発話していると考ええる。

名嶋(2007)が指摘するように、ノダが聞き手からみた解釈として提示する形式であり、さらに当該形式は表出命題を制約する手続き的意味をもつと考えると、この場合は「の」の使用により、聞き手であるF128の「テロを知らなかったんだよね」という発話と「テレビがなかった」「テレビがない部屋だった」という発話が関係づけられ(この場合は因果関係)、F128は52, 53の発話により認知効果を得ることができる。もしここで「の」を取り除くと、当該発話が言い切り文であるため、52, 53の発話がどう位置付けられるのか、つまり、独話的なものなのか、自身に向けられているのか、もしくは全く関係のない発話なのかというように、当該発話を解釈するのに余分なコストがかかることになるであろう。

以上から、本論文においても、ノダは明意(表出命題)を制約する手続き的意味をもつと考える。

次に、ノダが高次明意を制約する、とする点について、名嶋(2007)の主張をみてみよう。高次明意とは命題態度や発話行為の記述に明意(表出命題)を埋め込んだ明意であった。名嶋(2007)はノダが高次明意を制約する形式であるとする根拠として、次の例を挙げ、以下のように主張している。

(29) (文句を言う相手に) あなたは黙ってるんだ。 (名嶋, 2007: 54 (24))

(30) (文句を言う相手に) あなたは黙ってる。 (同 (25))

(29)の発話は、ノダを使用しているため、次のように、P(話し手の現行発話)とC(現在の状況)から演繹的に推論した結果、Qという解釈が導かれることになるという。

(31) P : 話し手は「(私が) 黙っている」と述べている。

C : 私は人の話に余計な口をはさんでいる。

Q : 話し手は「(私が) 黙っていること」が話し手にとって望ましいとみなしている。

そして、その結果、聞き手は当該発話を命令文であると理解する。(30)の発話も先行文脈から命令文と解釈される場合もあるものの、一方で事態の描写と解釈される可能性もある。しかし、(29)は事態描写と取られることはないという。そして、ノダは発

話状況と現行発話とが関連付けられて「聞き手を高次表意(本論文の高次明意に相当)復元へと導く」ものであって、「命令」といったある特定の発語行為をノダ自体が符号化しているわけではない」(p.55)と主張する。

ノダが高次明意を制約する、とする立場は本論文も同様である。これは、ノダを付加することにより、発話意図が異なることから明らかである。

(32) (M018 と F128 の会話。二人は友人。大学に在籍している留学生について話しており、その留学生の在日期间について話している場面)

70 M018: うん、や、ちゃ、だって去年1年研究生だったもんで、1年と6か月かな。

71 F128: あー、はんはん。

72→ 今は何、Mなの？

73 M1。

74 M018: M1, うん。 (名大 data4 女性 20代)

(32) の場合は、M018 の 70 の「去年1年研究生だったもんで、(現在の在日機関は)1年と6か月かな」という発話を聞き、F128 は、残り6か月は研究生ではなく、正規の院生として大学に在籍している、と解釈し、M018 に確認している場面である。この場合は「今はM018の知人の留学生が正規の大学院生であることを確認している」という高次明意が復元される。しかし、例えば前掲の(28)の「テレビがなかったの」の場合は、「テロが起きた当時、テレビがなかったから、その出来事を知らなかったと主張する」のような高次明意が復元されることになる。

「ノダが高次明意を制約する」とする立場は内田(1998)でもなされている。ただし、ノダが高次明意を制約する、というだけでは十分ではない。ノダは周知の通り文末表現であるため、独自に拍内音調を持つ。(33)を参照されたい。

(33) (F114 と F147 の会話。二人は大学の同級生。お互いのアルバイトの話をしている場面)

271 F114: 時給いい？

272 F147: うーん、1230円。

273 F114: あたしも1200円だ。

274→ (うん) 上がったの？

275 F147: うん。 (名大 data065 女性 10代)

F114 はアルバイトの時給を話題にし、F147 に質問している。274 で、上昇調の「の？」を用いているために、F147 は 274 の発話を自身に対する質問と解釈し、275 で肯定している。もしこの「の」を下降調で発話した場合、聞き手である F147 は「自分のアルバ

イトの時給が上がったことを主張する／説明する」のような高次明意を復元する可能性がある。しかし、名嶋（2007）、内田（1998）では、こうしたノダの音調と高次明意復元との関係についての記述はほとんどみられない。

こうした点をさらに精査するため、本論文は「の↑（疑問文のような上昇調）」「の↓（顕著な下降調）」のように、音調を伴ったノダが高次明意を制約する、と考え、分析を行う。具現化形式と音調に着目することにより、ノダがどのような高次明意の復元に機能するかをより具体的に記述することが可能になると考える。音調が手続き的意味を持つことはすでに多くの研究で指摘されている（Imai, 1998 ; Blakemore, 2002 など）が、もしここで上昇調の「の」を取り除いてしまうと、先行発話と自身の顕在的知識から推論した解釈の提示とはみなされない。つまり、音調を伴った「の」によって初めて高次明意が復元されると考える。従って、本論文では音調を伴ったノダ形式の分析の重要性を主張する。

最後に、ノダが暗意（推意）を制約するとする主張をみる。名嶋は、次のように質問に答える場合に疑問の焦点に合致した回答をする場合と合致しない回答をする場合があり、後者の場合はノダが必須であるとする。

(34) A : どこへ行くんですか。

B : 東京へ行くんです。／東京です。 (名嶋, 2007 : 46 (1))

(35) A : どこへ行くんですか。

B : 東京で研究会があります。／東京で研究会があるんです。 (同 p.49 (12))

このように、質問の焦点に合致しない場合にも、ノダ文は自然で、聞き手は話し手の回答に満足していると名嶋（2007）は述べる。それは、ノダを使用することにより、「聞き手が何らかの新たな関連づけを行い、それによって最適な関連性を有する文脈効果を得ていることを意味する」（p.51）ためであるとする。たとえば（35）の場合は、A は自身の質問（「どこへ行くんですか。」）に対し、B が「東京で研究会があるんです」と回答するということは、疑問に関連づけていることを明示するため、B は「東京へ行く」と回答しており、さらにその目的も述べているため、その後新たな質問が誘発されることはない、満足の行く回答である、というのである。そして、この場合のノダの手続き的意味は「提示された命題を基に関連づけて推論を行い、最適な関連性を持つ文脈効果（推意）を導き出す」という解釈方法を示すこと」（p.51）とする。

名嶋は、質問に対する「間接的応答」についてノダが暗意（推意）を制約する、としているようである。たしかに、（35）の場合 A は B の発話を基に、「B が東京へ行く」という文脈効果を導き出すことが可能であろう。しかし、次の例はどうであろうか。

(36) A : いつ行くんですか。

B : 土曜の午後から始まります / 土曜の午後から始まるんです。

(同 p.49 (13))

名嶋 (2007) は (35) の例と共に, (36) の例も挙げているが, この B の回答で A は自身にとって満足のいく暗意を導き出すことが可能であろうか。このような回答がたとえ自然だとしても, この発話から導き出されるのは, 「土曜の午前中かもしくはその前日に (東京へ) 行く」ということであり, ノダを使用したからといって, 満足のいく回答とは言えない。関連性理論では, 関連性の程度は処理コストと認知効果の大きさとの相関関係によるとされ, たとえ処理コストが大きくても, それに見合う認知効果があれば関連性は高くなるとされるが, (36) の B の発話だけでは処理コストに見合う認知効果 (名嶋のいう文脈効果) が期待できるか疑問である。

さらに, ノダ文が暗意を復元する場合は間接的応答でない場合もありうる。(37) の例を見られたい。

(37) (F095 と F058 の会話。二人は大学の同級生。F058 がお弁当に入っている昆布を食べているのを見て, F095 が発話する場面)

129 F095 : <笑い>。

130 うん。

131→ コンブ, 食べれるんだ { *食べれる }。

132 F058 : えっ, 食べれないの?

133 F095 : あんまり好きじゃない。 (名大 data069 女性 20代)

131 で F095 は「コンブ, 食べれるんだ。」と言っている。この表出命題は「F058 が (お弁当に入っている) 昆布を食べられる」ことであり, 表出命題どおりに解釈すれば F058 の回答は肯定または否定となるはずであるが, その発話を聞き, F095 は F058 の発話を自身にとって関連性がある発話と捉え, (38) のように推論し, 132 で「食べれないの?」と聞いている。これは F095 の発話に対する自身の解釈の妥当性を確認していると考えられる。

(38) P : F095 が自分 (F058) が昆布を食べるのを見て「お弁当の昆布が食べられるんだ」と発話した。

C : 一般的な食べ物を食べたときには聞かれない質問である。

Q : F095 は昆布が食べられない

これをもし非ノダ文でいうと, 発話意図が変わってしまう。友人が昆布を食べている

のを見て「コンブ、食べれる。」と発話した場合、「私 (F058) もコンブを食べれる。」という意味で発話したと解釈されるだろう。無論「F095 がコンブが食べられることに驚く」といったニュアンスはなくなる。そういった意味では、ノダは「暗意を復元する」手続き的意味を持つとも考えられる。しかし、それはノダ文が必ずしも暗意復元に貢献するというわけではなく、語用論的立場から言えば、文脈により聞き手の解釈は異なるため、暗意を復元するのはノダ文に限ったことではない。従って、本論文ではノダは高次明意及び明意を復元させる言語形式であり、文脈から暗意を復元する場合もあるという立場を取る。

以上、関連性理論が示す3レベルのいずれを復元させるのか、という立場について本論文の立場を述べた。本論文では、ノダは明意及び高次明意を制約する形式と考え、その手続き的意味を考察する。暗意を制約するかという点については、そういう場合があったとしても、それは文脈上たまたま導き出した結果であり、ノダが暗意を制約する手続き的意味をもつという立場はとらない。

4.7 第4章のまとめ

以上、本章では、従来文体差とされてきた「の (Ø)」「んだ (Ø)」「んです (Ø)」の語用論的機能分担を自然会話コーパスの分析により記述的に示した。以下、4.2.2 で挙げた研究課題の解答を記述し、本章のまとめとする。

研究課題 1. 「のだ」の変異体である「の (Ø)」と「んだ (Ø)」は自然会話においてどのような手続き的意味を持つのか。両形式の手続き的意味は同一なのか、異なるのか。

両形式は平叙文の「情報提示」のノダ、「情報受容」のノダ及び疑問文のノダの3種類に類型化される。そのうち「の (Ø)」は平叙文の「情報提示」のノダ、疑問文のノダに、「んだ (Ø)」は「情報受容」のノダに使用されるといった語用論的機能分担が認められる。

研究課題 2. 「の (Ø)」の使用について、現代においても先行研究で記述されるような性差があるのか。つまり、平叙文の「の (Ø)」の使用は女性に限られるのか。

本調査の結果、現代語において、若者間では平叙文、疑問文とも「の (Ø)」が性差なく使用される可能性が示された。しかし、男性は疑問文のノダには当該形式を女性と同程度使用するが、平叙文の「情報提示」のノダにおいては女性に比べて使用が少ない。この理由は、次のように考えられる。まず、「の (Ø)」は文末名詞化

構文であり、疑問文のノダにおいても、名詞述語疑問文同様のスタイルが選好されるため、常体使用場面において、「のか」より「か」を伴わない裸の形式（「の (∅)」）が選好される。一方、平叙文は当該文を談話展開上どのように位置付けるかによって様々な選択肢があり、特に男性は「んだよ」を、女性は「の (∅)」を優先的に使用する傾向があるため、使用に差が生じると考えられる。

研究課題 3. 「の (∅)」と「んだ (∅)」は、「んです (∅)」とどのような対応関係にあるのか。

常体の「の (∅)」と「んだ (∅)」はそれぞれ「んです (∅)」と類似する部分もあるが、単純な対応関係にはない。つまり、常体の形式は「の (∅)」は「情報提示」のノダ、疑問文のノダ、「んだ (∅)」は「情報受容」のノダとしての使用に偏りがあり、他形式と比較しても頻用されている。しかし、「んです (∅)」は「情報提示」のノダとしてのみ使用され、かつ、当該発話で聞き手に十分な認知効果が与えられると判断された場面で使用されることが示唆された。

本調査により、先行研究では示されなかった「の (∅)」と「んだ (∅)」の語用論的機能分担が明らかになった。両者の違いは「だ」の有無である。次章では、自然会話における「だ」の語用論的機能を考察することで、本調査で述べた両者の機能分担の妥当性を検証する。

第5章 自然会話における文末の「ダ」の使用実態

5.1 はじめに

前章で、ノダの裸の具現化形式「の (∅)」と「んだ (∅)」に語用論的機能分担があることが分かった。具体的には「の (∅)」は平叙文の「情報提示」のノダ及び疑問文のノダとして、「んだ (∅)」は平叙文の「情報受容」のノダとして使用される傾向があったが、両者の違いは「だ」の有無である。つまり、「だ」の有無が両形式の語用論的機能に関わっていると考える。そこで、本章では自然会話における文末の「ダ(以下、「だ」)」の使用実態を調査し、「んだ (∅)」の手續きの意味の仮説検証と、情報受容場面で「んだ (∅)」が使用される理由を考察し、当該場面で「んだ (∅)」が円滑な会話遂行のための重要な役割を担っていることを述べる。

まず、5.2 でダに関する先行研究を概観した後、ダが「伝達的モード」と「述定的モード」に類型化できることを確認し、本論文の立場と解決すべき問題を述べる。次に、5.3 で自然会話における「だ」の使用実態を分析し、「だ」がいずれのモードにおいても特定の語との結びつきが強く、特に述定的モードの「だ」は「んだ」としての使用が顕著であることを示す。そして、使用の多かった述定的モードについて、「だ」が必須か否かという観点から分析を行い、「だ」が聞き手の発話解釈にかかる処理コストが大きいほど必須となること、任意の場合には「だ」の使用により、相手に配慮を示し、会話を円滑に行おうとする意図を伝達することができることを述べる。最後に5.4 で5.3 に呈示した研究課題の回答を述べ、本章のまとめとする。

なお、本章で以下「だ」というのは後接する形式のない場合であり、終助詞などその他の形式が後接する場合には適宜「だよ」「だね」のような表記をする。

5.2 ダに関する先行研究

5.2.1 ダの構文上の機能

まず、主にダの構文上の機能について言及している先行研究を概観する。古田(1969)によると、「「だ」は「にてあり」の変化した「である」から出た。」その意味は「主概念(主語に相当)が賓概念(述語に相当)と別物ではないという判断の内容を描き出す表現法—措定」(p.296 () 内筆者補足)であり、「賓概念を表わす体言に付いて、それを述語とするものである」(同)とされる。そして、使用上の傾向として、「一般に、江戸末期から明治初年にかけて、「だ」には、文中に用いられている場合は別として、疑問詞や終助詞などと用いられていることが多く、強調・詰問の意の加わっていることが感じ取られる」(p.293)といった指摘もある。古田(1969)では、「文中に用いられ

る場合」というのを「終止形「だ」は、「それは、だ（ね・な）」のように間投助詞的に用いられ」（p.297）る場合としていることから、文末で断定表現として使用される場合には現代語以前から終助詞などとの共起が多かったことがわかる。

その他、詳しい記述は割愛するが、松下（1930）は「だ」「です」を「断定の助動詞（助動詞に相当）」、時枝（1950）は「だ」を助動詞としている。学校文法の基本になっている橋本（1934）も、ダを助動詞と捉えている。これらの先行研究において、ダは「断定の助動詞」という考え方は概ね一致している。そして、この「ダ＝断定の助動詞」という考え方は以降の文法研究において、一般的な考え方と思われる。また、ダの陳述の力の有無については、基本的に「ある」と考えられているようであるが、「陳述」の定義に見解の一致が見られないため、比較することはできないし、この点を議論することは本論文の主眼ではないため、これ以上は立ち入らない。

渡辺（1971）は、それまでの「推量の助動詞」「確認の助動詞」といった内面的意味に基準を置いた分類や、語形変化が動詞型か形容詞型かといった外面的形態に基準を置いた分類を批判し、氏が一貫して主張する構文的職能に基準を置くべきとして、いわゆる助動詞とされてきたものを以下のように甲種・乙種の二つに類型化している⁴¹

甲種：統叙成分における素材表示を分担せず、統叙を分担する。

乙種：統叙成分における素材表示または統叙を補助する。

ここでは、本論に関わる「だ」についての渡辺（1971）の見解を引用する。甲種とは（1）のように直接体言に下接する助動詞であり⁴²、乙種とは（2）のように直接用言に下接する助動詞である。

（1）彼は幼稚な政治感覚の持ち主 だ。 (p.115)

（2）人の忠告に耳をかさ ない。 (p.116)

渡辺は、「用言とは異なり、体言は成分構成のうえで素材概念を表示するという機能をしか託せられていない」（p.116）ため、（1）の例で見ると、「統叙陳述成分の構成に必須不可欠のほかの要素は、すべて甲種の助動詞「だ」が分担していると考えられる」（p.116）と述べている。そして、甲種の助動詞は「統叙成分における素材表示を分担せず、統叙を分担する」（p.119）としている。品詞分類の点でいえば、乙類助動詞が派生用言を作る語尾部に過ぎないのに対し、甲種助動詞は「それ自体まず単語と認定され

⁴¹ さらにそれぞれ3つに下位分類しているが、詳しくは渡辺（1971）を参照されたい。

⁴² ただし、甲種の助動詞に関しては、「用言にも下接できるものがあるが、「だ」は甲種助動詞の中で用言に下接しないのを原則とする例外的存在である」（p.121）と述べている。

ねばならない」(p.406)とし、陳述または再展叙の職能をも合わせ託されるという点で用言類の一種とする立場をとる。そして、統叙素材を備えた用言を「一般用言(動詞・形容詞)」とするのに対し、「だ」を「らしい」「だろう」などととも統叙素材を欠く用言として、「判定詞」(p.408)と定義している。次の例を参照されたい。

(3) 猫だ 猫らしい 猫だろう

(3)の例はすべて述語と認定されるが、先述したように、述語とは①素材表示、②統叙、③叙述内容表示、④陳述または再展叙を担う。これらの例において、「猫」は①だけを担い、残りの②から④の職能は「だ」「らしい」「だろう」が担うことになる。従って単独で構文的職能を担うことから、渡辺(1971)は「だ」を用言の一種の「判定詞」と定義している。

渡辺(1971)と基本的立場を同じくする寺村(1982)もダをデス、デアル、デゴザイマスと同じく「判定詞」とする。「判定詞」は名詞を述語化するために「もっぱら述語を形成するための機能」を託されているとする。そして、述語には以下の4種類があるとする⁴³。

(4) 動詞
形容詞
名容詞⁴⁴
名詞 } +判定詞 (寺村, 1982: 54)

益岡・田窪(1992)も「名詞と結合して述語を作る点を重視し」(p.25)、同様に「だ」を「助動詞」ではなく「判定詞」とする。

以上、「だ」を「助動詞」「判定詞」とする立場を見たが、これらの先行研究では、ダの品詞についての立場は異なるものの、「ダが名詞及び名容詞(寺村, 1982)を用言化(述語化)する」機能を持つという点では一致していると考えられる。

5.2.2 ダの意味

次に、ダの意味について記述している田野村(1990)を取り上げる。田野村(1990)

⁴³ 渡辺(1971)とは異なり、寺村(1982: 58)は「らしい」「だろう」は「られる」「させる」と同様にそれ自体独立して述語になることが決してないものとし、「助動詞」に分類しているが、本論文ではダに注目しているため、両者の分類の違いについては立ち入らない。

⁴⁴ 寺村(1982)の用語で「名詞的形容詞」(p.54)の略語。「静か」「元気」のように「意味のうえでは形容詞といってもよいが、述語として使うときには名詞のように判定詞の助けが要る一群の語」(p.53)を指す。本論文の「形状詞」に相当する(注47参照)。

はダを文末に置く名詞平叙文を以下3つに分類している (p.22 を基に筆者要約)。

知識表明文 : 話し手が自分の知っている事柄を単に表明する文

(5) 今度のお寺はどこですか? — 京都だ。

推量判断実践文 : 話し手が確実な知識を持ち合わせておらず、発言の時点において推量しつつ述べる文

(6) お寺が一番多いのはどこだろう。 — うーん、きっと京都だ。

想起文 : 想起した事柄を表現する文

(7) 滋賀の西はどこだったかなあ。そうだ、京都だ。 (p.22)

この中で、田野村 (1990 : 50) は「京都だ」という述語の形 (あるいは、そこに含まれるいわゆる断定の助動詞の「だ」) それ自体は、断定を表わすものではないということである。」という指摘をしている。ここで注目すべきは、「想起文」とノダ使用の関係についてである。田野村 (1990) は次の文を挙げている。

(8) そうそう、今日は花子の誕生日なんだ。 (p.23)

(9) しまった、明日までに報告書を書くように言われてたんだ。 (同)

そして、「のだ」を伴う文が想起の内容を表わすことがあると言っても、それは「のだ」自体の働きによるものではなく、平叙文 (あるいは、名詞を述語とする平叙文というように限定すべきかもしれない) 用法の一面に過ぎないということは明らかである。「のだ」には想起を表す用法があると言われることがあるが、(中略) そうした用法の類別は、「のだ」を伴う文だけに該当するものではない以上、「のだ」の問題として記述すべきではない」(p.23) としている。ここで田野村 (1990) は平叙文を「名詞を述語とする平叙文」に限定すべきとしているため、これは名詞文のダの意味に関わる用法と考えて差し支えないと思われる。

三枝 (2001) は、話し言葉の文末で使用されるダの用法を類型化している。三枝 (2001) は文末のダには「多かれ少なかれモダリティ性を持ち、ムードに関わるということになる」(p.9) とし、自分に向けた発話で使用されるダは男女ともに使用され、「モダリティ性は発動しない」(p.16) が、他者目当ての発話で使用されるダはムード形式であり、

このダは男性のみが使用するという⁴⁵。そして、それぞれを下位分類し、9 つに類型化している。以下用例と共に示す。

<自身に向けた発話で使用される「だ」>

① 感情の吐露

(10) M「もう、だめだ…」 (三枝 2001:10 (22))

(11) F「あっ、男子が騎馬戦の練習してる」 F「ほんとだ」 (同 (24))

② 不満・非難

(12) M「ざまあみろ、だ」 (同 (26))

(13) F「へん、だ」 (同 (27))

③ 発見

(14) F「あ、お茶屋さんだ！」 (同 (28))

(15) M「あった！これだ！」 (同 (31))

④ 思い当り (この用法のみ「だ」を省略しにくい)

(16) 「そうか、『絵』だ…」 そうつぶやいて、ハジメは、椅子から跳ね上がった。
(同 (32))

(17) F「あ、そうだ、ねえ、研究室行った？」 (同 (33))

<他者目当ての発話で使用されるダ>

⑤ 主張，強調

(18) F「私，中年の人って好みな。ねえ，栗山さん」 M「栗原だ」
(同 p.11 (34))

⁴⁵ ただし，女性がまったく使用しないわけではなく，「きつい物言いをすることで，ある効果を意図しているわけで，女性が普通に使う表現とは区別されるものと考えられる」(p.9)と述べている。

⑥ 宣言

(19) M「俺は明日からアメリカだ。二週間戻らん」 (同 (39))

⑦ 命令

(20) M「礼だ、礼をしろ」 (同 (40))

⑧ 疑問 (疑問詞が必要)

(21) M「どういうことだ」あずさ、答えず... (同 (42))

⑨ 問い返し

(22) M「都合のいいこと言うんじゃねえよ！陸の王者だから陸王だあ？絶対慶応は入
れだあ？」 (同 (44))

そして、「のだ」と「だ」との共通点及び相違点を以下のように述べている (pp.13-14
を筆者要約)。

<相違点>

- I. 事情説明を意味する「のだ」は「だ」を使うことができない。
- II. 「のだ」は「の」で事態を客観化しているため、「感情の吐露」「不平・不満」には
使うことができない。
- III. 「だ」には確認の用法があるが、「のだ」は「再認」である。
IIIについて補足すると、三枝 (2001) に従えば次のような違いがあるという。

「へーじゃあキミはひとりっこなんだ」という「確認」の「のだ」は「だ」では表
現できない。ここに「だ」と「のだ」の違いが端的に現われていると言えよう。(中
略)たとえば、朝飛び起きて時間に遅れたのに気付いた時の発話は、まず「寝坊だ」
であろう。その後で我に返って「寝坊したんだ」という発話が出てくると考えられる。
(pp.13-14)

- IV. 独話の「だ」と「のだ」は「です」に置き換えることができないという共通点があ
るが、対者的な用法の場合、女性は「だ」を用いないが、「のだ」は女性も言い切り
形を用いる。

- (23) a (宣言) M/*F 明日から出張だ。
 b (決意) M/F 明日から出張するんだ。 (p.14 (51))

Narahara (2002) は、「だ」を疑問文や情報受容文、終助詞との共起に関する容認性を分析し、「だ」をムード形式と位置付け、「(インフォーマル場面で使用される) 現在の肯定極性」表現とした。この性質は、5.2.1 で述べた古田 (1969) 同様、「だ」が「である」を語源とし、以下のような形態的特徴を持つ、と主張する ((24) 内の COP はコピュラ、AF は「肯定的表現」を示す)。

- (24) Morphological feature analysis of *da*
 d-a
 COP-AF (Narahara, 2002 : 179 (65))

そして、「です」は「か」と共起し質問文にも使用可能であることなどから、両形式は単純な異形体ではないと指摘している。

- (25) dono heya ga sizuka desu ká⁴⁶? (同 p.164 (33a))

- (26) *Doko ga sizuka da ká? (同 p.166 (37b))

5.2.3 本論文におけるダの位置付けと解決すべき課題

5.2.3.1 ダの品詞

以上、ダに関する先行研究を概観した。本節では、ダについての本論文の立場を述べる。まず、ダの品詞についてである。ダを「断定の助動詞」とする先行研究が多いが、「助動詞⁴⁷」を「活用する付属語であり、それ自体独立して述語になることが決してない」(寺村, 1982) と考える場合、ダを説明するには不十分であると考え。その理由はまず、「だ」が名詞や形状詞⁴⁸が述語になるための機能を担うという点で付属語とは言えないこと、さらに、先行研究の指摘にあるように、現代語においては「嫌だよーだ」「明日きっと雨だね。ーだよね。」のように、独立して使用されるという点で、いわゆる助動詞と位置付けられる「せる」「られる」「たい」とは異なると考えられるからである。

⁴⁶ 当該記号は上昇調を示す。

⁴⁷ 渡辺 (1971) は、「助動詞」という立場を認めておらず、甲種助動詞を「判定詞」、乙種助動詞を「派生用言」とする。

⁴⁸ 形態素解析システム用の日本語辞書 UniDic の用語。形容動詞の語幹に相当する。本論文ではコーパスの形態素分析に UniDic を使用しているため、「形状詞」という用語を用いる。

従って、本論文では、ダを単語と認める渡辺（1971）、寺村（1982）などに倣い、ダを「判定詞」と考える。さらに、渡辺（1971）、Narahara（2002）に従い、ダを「確言、断定」を意図するムード形式とする立場に立つ。そして、第3章で述べたように、ムードを伝達的ムードと述定的ムードの二種に類型化する。

5.2.3.2 解決すべき問題

次に、現代日本語の自然会話でみた場合、ダに関するいくつかの問題点が挙げられる。まず一点目に、「素材表示しかあらわさない」とされる名詞や形状詞が、ダを伴わずに単独で陳述を表わす例が散見されるという点である。

(27) (M012, M025, F021 の会話。M025 は F021 の交際相手。M012 は F021 の妹の交際相手。M012 が新幹線を乗り間違えて下車予定の駅で降りられなかった時の経験話を話した後の場面)

657 M012 : ((乗り間違えたのは)) 故意じゃない。

658 (うん?) (うん?)

659 M025 : ((下車予定の駅で)) 俺を降ろせって。

660 <笑い>

661 F021 : い、意味がわからなかったんだけど。

662→M012 : 故意。

663 F015 : 何、故意って?

664→M025 : 故意, 事故の故に意識の意。

665 (そう)

666 F021 : あー, 味が濃いのかと思ったじゃない。 (名大 data025 男性 20代)

(28) (F023 と F107 の会話。二人は友人。イギリスで一緒に飲んだ紅茶の話をしている場面)

393 F023 : 1日目の宿の紅茶はうまかったよねー。

394 F107 : あとはあんまおいしくなかった。

395→F023 : あとはまあ普通。

396 M023 : コーヒー, おいしくないよね。

397 ニュージーコーヒーはもう最悪だったなあ。

(名大 data 001 女性 30代)

(29) (F056 と F033 の会話。二人は大学生。大学の駐車場が混んでいてなかなか止められないという話をしている場面)

503 F056 : また混むよ。

504 F033 : ねえー。

505→F056 : あー私それより，明日の1限が**心配**。

506 起きれるのかなあ。

507 1限つらいよ。

508 F033 : 私，1限全部外したよ。 (名大 data003 女性 20代)

このように考えると，話し言葉においては，名詞及び形状詞の終止形が陳述の機能までを担っていると言える。さらに，本論文の考察対象のノダの具現化形式「の(Ø)」も，第4章で指摘した通り，自然会話では裸の形式で伝達のムードを担う。

(30) (F119 と F160 の会話。二人は大学院の同級生。食事しながら，お互いの恋人の話をしている場面)

133 F119 : おいしい。

134 でも，なんだろ。

135 ちょっと，太めかも。

136 F160 : ふーん。

137→ でも私あんまりね，やせすぎの人って好きじゃない**の**。

138 (ふーん) 好き？

139 (うん) あ，そうなんだ。

140 (うふ) そうだそうだ，言ってたよね。

(名大 data068 女性 20代)

つまり，伝達のムードで使用される場合にも，渡辺（1971），寺村（1982，1984）が定義する判定詞は必須の形式ではないとも思われる。その点について，三枝（2001）はダは任意の場合もあるが，「思い当り」（本論文の「想起」に相当）のダのみ省略が難しいと述べている。確かに，(31) のような場合はダを省くと想起したことが明示されず，別の発話意図が伝わる可能性がある。

(31) (M005 と F057 の会話。M005 は F057 の元上司。知り合いの面白いおじさんの話をしていたが，一時中断した後の場面)

732 M005 : そうかあ。

733 まだあるかあ。

734 ん？

735 何を話したか忘れちゃったなあ。

736 あ，そうそう。

737 F057 : 7 0。

738→M005 : 7 0 ((歳)) のおじさんだ。{? おじさん。}

(data078 男性 40 代)

また、発話意図が異なるが (32) についても同様に、もし「だ」を取り除くと、発話意図が曖昧になり、聞き手が発話を解釈するのに余分な処理コストがかかる可能性がある。

(32) (F004 と M034 の会話。二人は恋人同士。獣医について話している場面)

180 F004 : でもさー、なんかさ、ペットもさー、(うん) あれじゃん、多様化の時代じ

181 やん。

182 (うん) なーんか変なペット飼う人いるじゃん。

183 M034 : 獣医って全部、どんな動物も治せなきゃいけないの？

184 F004 : うん。

185 い、それが私の言いたかった質問。

186 M034 : ふーん。

187→F004 : <笑い>だめだ。{? だめ。}

188 あんたに聞いてもらちがあかない。

189 M034 : んなことわかんないじゃん、俺知ってるかもしれないし。

(名大 data092 女性 20 代)

このようにみえてくると、ダは統叙に必須の要素とは言えず、使用は話し手の発話意図と関係があると言える。つまり、陳述の機能を担うムード形式と言える。

「想起」の「だ」は省略が難しいという点においては本論文も三枝 (2001) と同じ立場に立つ。しかし、三枝 (2001) にはなぜ「想起」の「だ」のみ省略が難しいのかという点については言及がない。加えて三枝の例はすべて小説などからの引用及び作例であり、実際にどのような場面で文末の「だ」が省略しにくいのかについては更なる検証が必要である。ただし、実際の会話を調査すると、少なくとも現代語においては伝達的ムードの場合、(27) ~ (30) で示したように体言類 (名詞や形状詞) およびノダは判定詞「だ」がなくとも伝達のムードを示しうるため、述語になり得るようである。一方、述定的ムードの場合は、(31), (32) のように「だ」がないと発話意図が曖昧になるため使用は必須と考えられる。つまり、両者の「だ」は使用上の差異があることが推察される。このような違いを踏まえると、ダを「伝達的ムード」と「述定的ムード」に類型化して考察することは、当該形式を分析するうえで有効であると思われる。

次に、「だ」の用法について考える。田野村 (1990) が従来「断定の助動詞」とされてきたダをより具体的に「知識表明文」「想起文」「推量判断実践文」の3つに類型化したことは、「断定」とひとくくりにされていたダの使用的意味を具体的に示した興味深

い知見である。しかし、「京都だ」という述語の形自体は、断定を表わすものではない」という指摘については、本論文は異なる立場を取る。つまり、「断定」は「だ」の基本的意味であり、それが文脈に応じて「知識表明」や「想起」といった使用的意味を持つという立場に立つ。「推量判断実践文」についても、不確かであることは間違いないが、それは「きっと」が担う発話意図であり、「だ」の使用により発話時点で話し手は命題が真であることを信じているという態度を表明することになると考える。

また、田野村（1990）は作例とともに用法を記述しているため、自然会話においてこれらの用法が実際に観察されるのか、また、頻度の違いといった使用の多寡については述べられていない。類型化についても疑問が残る。例えば「知識表明文」というのは「想起文」「推量判断実践文」に比べると範疇が広く抽象的である。田野村（1990）はあくまでノダの意味についての論考であり、名詞平叙文の記述は詳しくなされていないため、推察の域を超えないが、例えば「それは嫌だ」のような意見文も「京都だ」のような情報提供文もすべてここに集約されるとすれば、それは果たして妥当な分類と言えるのであろうか。ダの用法を明らかにするためには、類型化を見直す必要があるように思われる。

さらに、上記の3つの中で「想起」は「だ」を取り除くことができないという点で他の用法とは性質が異なると考える。(33)を参照されたい。

(33) (F023, F107, F128 の会話。3人は英会話教室の友人。一緒に休日（11月4日）の計画を立てている場面）

519 F107：うん。

520 じゃ昼ぐらいから、昼ご飯食べたぐらいから出て行って。

521 F023：うん、うん、うん。

522 いいよ。

523 F128：昼ぐらい？

524 F107：2時とかそのぐらいから出て行って、で、見て。

525 F023：お茶してー。

526 F107：お茶してー。

527 帰って。

528 F023：帰ってきて、なんか作る。

529 F107：なんか作る？

530 F128：あっそうか。

531→ 3日は文化の日で休みなんだ。（*休みなの。）

532 F107：そう、そう、そう。

533 F023：そう、そう、そう。

(名大 data002 女性 20代)

しかし、なぜ「想起」の「だ」は必須なのかという点について説明している先行研究は管見の限りみられない。「だ」が必須か否か、という点を考察することで、自然会話における「だ」の使用効果をも記述できるのではないかと考える。

三枝(2001)は田野村(1990)よりさらに細かく「だ」の類型化を試みている。ただし、三枝はそれぞれの類型化に定義づけがなされていないため、それらの差異が分かりにくいといった問題がある。たとえば<対者的な「だ」>の①主張、強調、②宣言、③命令は氏も述べているように「連続的」と考えられるが、逆に言うるとどのような違いがあるのか客観的な判断が難しい。また、<独話的な「だ」>の①感情の吐露は相手に向かって言った場合は⑤主張、強調⁴⁹とも考えられる。②は「非難」という用語を用いているにも拘らず独話的な「だ」としている⁵⁰。類型化に整理が必要である。

さらに、ノダとの差異については興味深い指摘もあるが、ノダの「再認」とは何を意味するのかが曖昧である。『集英社 国語辞典 [第3版]』(2012)には「再認」の意味が以下のように記述されている。

- ① 再び認めること。
 - ② 再び認可すること。
 - ③ 過去に経験したことが再び現れたとき、それが経験済みであることを認めること。
- (p.667)

しかし、三枝が挙げている例「へー、じゃあキミはひとりっこなんだ」(p.13)は再認には出現しにくいと思われる「へー」、「じゃあ」が共起している。「へえ」は「ふーん」「ほう」などと同様に「新規の情報の獲得を標示している」(富樫、2001:29)形式であり、また、「じゃあ」は「では」の変異形とされ、「前に述べたことがらを根拠として、後の事柄を続ける語」(『明鏡国語辞典 第二版』,2010:1186)とされる。従って、ここでいう「再認」というより、前提のない「新情報の獲得」、関連性理論でいう「文脈含意」と考えるのが妥当である。

以上、先行研究の知見を援用しつつ、現代日本語の自然会話という範疇で考えた場合、ダの意味に関して解決すべき問題があることを述べた。ダが確言、断定の意味を持つ判定詞であり、体言を述語化する、という点は本論文も同じ立場である。しかし、自然会話を対象とした場合、その使用的意味は再考する必要がある。次節では、以上の問題点を解決すべく、自然会話における「だ」の使用実態を調査し、「だ」の発話意図を整理する。そして、最終的に「んだ(∅)」が情報受容場面で頻用される理由を考察する。

⁴⁹ 三枝(2001)による類型化であり、筆者は「強調」を用法とする立場はとらない。

⁵⁰ 『明鏡国語辞典 第二版』(2010)では、「非難」を「相手の欠点や過失などを取り上げて責めること。」(p.1481)とある。このことから、「非難」を「自身に向けた発話で使用される「だ」の下位分類とすることには問題があると思われる。

もう一点、重要な問題点を指摘する。先述したように、古田（1969）には「江戸末期から明治初年にかけて、「だ」には、疑問詞や終助詞などと用いられていることが多く」といった記述がある。これはダの手續きの意味を考察するうえで重要な指摘であると考ええる。つまり、ダが文末で使用される場合と終助詞類を伴う場合とでは、その役割が異なるという可能性である。ここで、第4章の結果及び本章の先行研究を踏まえ、仮説を提出する。

仮説： 自然会話において、裸の文末形式「ダ」は終助詞類を伴う場合とは使用的意味が異なり、述定的ムードを表わすことを主たる（語用論的）機能とする。

ダを終助詞類が付加される場合と分けて分析することで、当該形式の使用場面が明らかになると考える。そこで、コーパス調査により、文末の「ダ」がどのような場面で使用され、聞き手の発話解釈をどのように制約するかを調査した。

5.3 文末の「ダ」の分析

5.3.1 研究課題

第4章において、「んだ (Ø)」は「の (Ø)」とは異なり、情報受容場面での使用が主であったことが分かった。ただし、第4章ではノに付加されたダに着目していたため、ダの一部分しか見ていなかったことになる。そこで、研究課題を以下のように設定した。

研究課題1：自然会話において、文末の「ダ」はどのような使用の特徴があるのか。

研究課題2：性別により使用傾向に差があるのか。

研究課題3：「んだ (Ø)」が平叙文の「情報受容」のノダとして頻用されるのは「ダ」のどのような性質によるのか。

本章ではノに付加されないダも含め、分析、考察を行う。芳賀（1954）及び渡辺（1971）を参考に、文末のダに注目するため、今回は（発話）文の区切りである「。」が後接する「だ。」（以下、「だ」）を分析対象とした。

5.3.2 調査概要

調査概要は以下の通り。

調査目的：自然会話の文字化データから、ダの手續きの意味を明らかにする。

調査資料：名大会話コーパス⁵¹129 会話（約 100 時間分の雑談データ）

会話参加者：女性 10 代から 90 代 161 名，男性 10 代から 60 代 37 名

調査手順：

1. 秀丸エディタ Ver.8.51 を用いて，使用された「だ」を抽出し，その後該当する「だ」を目視で確認する。
2. 調査対象となった「だ」が後接する品詞を分析する。
3. 抽出された「だ」を「伝達的モード」「述定的モード」に類型化する。
4. 両モードの「だ」をさらに下位分類し，「だ」の使用傾向を探る。

本調査で使用した「名大会話コーパス」の会話参加者の内訳を表 1 に示す。

表 1 会話参加者の年代及び性別

	10	20	30	40	50	60	70	80	90	? ⁵²	合計
女性	12	71	26	16	18	11	2	1	3	1	161
男性	2	18	1	8	4	4	0	0	0	0	37
合計	14	90	26	24	22	15	2	1	3	1	198

5.3.3 調査結果

5.3.3.1 「だ」の使用数と対象数

まず，調査資料で使用された「だ」の使用数と，分析対象数を表 2 に示す。

表 2 名大会話コーパスの「だ」の使用数及び分析対象数

総数	分析対象数
1772	1687 (95.2%)

使用された「だ」のうち，(34) のような引用発話，(35) のような前後が不明瞭な発話，(36) のような方言などは本調査の分析対象外⁵³とした。結果，表 2 に示す通り，1687

⁵¹ 名大会話コーパスとは科学研究費基盤研究（B）（2）「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（平成 13 年度～15 年度、研究代表者：大曾美恵子）の一環として作成されたもので、2 名から 4 名の話者による約 100 時間の雑談を収録、文字化したデータである。会話参加者の内訳は表 1 を参照されたい。

⁵² 名大会話コーパス参加者リストで「年齢不明」（会話者番号 F100）とされている話者を示す。

⁵³ _____ は対象外と判断した個所を示す。その他，話者が不明（コーパス上では「X」と表記されている発話者）の発話，電話会話，前後から発話意図が判断できないもの，会話の流れと関係ないと思われる発話は議論が曖昧になることを避けるため対象外とした。

発話（95.2%）が分析対象となった。

(34) (F130 と F109 の会話。二人は大学時代の同級生。F109 が舅とけんかした時のことについて話している場面)

1546→怒鳴られたっていうか、一度言ったことを何でできないんだ。

1547 二度よ、二度目、これ二度目だぞってこういう感じで言われたの。

(data112 女性 30代)

(35) (F076 と F106 の会話。二人は中学の同級生。)

2027 F106 : <笑い>F076***。

2028→F076 : ***せるんだ。

2029 F106: まじでー？

(data103 女性 10代)

(36) (M011 と M013 の会話。二人は大学の同級生。M013 が中国出張の話をしており、その時のことについて M011 が質問している場面)

466 M011 : ふーん、で、何観光とかしなかった？

467→M013 : 観光できんだ。

468 M011: ずーっと待機状態？

(data116 男性 20代)

表 3 に男女および年齢別に、観察された「だ」の使用数を示す。調査に使用した名大会話コーパスは、会話参加者の 8 割が女性であり、かつ、年代も 20 代が半数を占める。そのため、「だ」使用に関する位相差について考察することはできないが、参考として示す。

表 3 「だ」の性別及び年代別使用数

	10	20	30	40	50	60	70	80	90	不明	計
女性	191	870	242	54	21	74	15	6	9	1	1483
男性	21	143	0	19	11	10	-	-	-	0	204

5.3.3.2 「だ」に前接する品詞

次に、分析対象となった 1687 発話の「だ」に前接する品詞を調査した。品詞の分類は形態素解析システム用の日本語辞書 unidic-mecab ver.2.1.1 対応ソフト 茶まめ ver.2.0 に基づき行った。表 4 に「だ」に前接する品詞と使用数を示す。調査の結果、男女とも助詞が全体の 66.4%と最も多く、次いで名詞 (15.2%)、形状詞 (9.9%) の順で観察された。次に、「だ」に前接する語の偏りをみることにした。表 5 に使用数が多かった上位 5 語を男女別に示す。

表4 「だ」に前接する品詞

品詞	名詞	代名詞	形状詞	副詞	感動詞	助詞	接尾辞	なし	その他 ⁵⁴
使用数	257	45	167	80	3	1121	11	1	2
女性	209	27	152	66	3	1014	10	1	1
男性	48	18	15	14	0	107	1	0	1

表5 「だ」に前接する語（上位5語）

	女性（使用数 1483）		男性（使用数 204）	
	語（使用数）	累積使用数（率）	語（使用数）	累積使用数（率）
1	の（1002）	1002（67.6%）	の（104）	104（51.0%）
2	嫌（100）	1102（74.3%）	そう（14）	118（57.8%）
3	そう（64）	1166（78.6%）	何（9）	127（62.3%）
4	本当（51）	1217（82.1%）	嫌（4）	131（64.2%）
5	何（13）	1230（82.9%）	こと、だめ（3）	137（67.2%）

語別に見ると、男女とも「の」との共起が顕著に多いことが分かる。さらに、上位語の累積使用数をみると、女性は特定の語との共起が多いことが特徴的であり、上位5語で全体の8割を超えていた。男性も上位語で全体の7割近くを占めていた。これらのことから、「だ」の出現場面はある程度限られており、自然会話において「んだ（ノダ）」が「だ」使用の特徴の一つとみることができる。

5.3.3.3 「だ」の類型化

次に、「だ」の用法について検討する。分析は基本的に芳賀（1954）を援用した「伝達的モード」と「述定的モード」に分類する。ここで確認すべきは、芳賀（1954）の類型化と本論文との定義の整合性である。芳賀（1954）は「伝達的モード」の職能を担うものを渡辺（1953）が述べた「聞き手目当て」の機能を持つ終助詞類としている。関連性理論の枠組で考えると、意図明示的発話は聞き手もしくは話し手の認知効果を与えるため、本論文は聞き手の認知環境を修正する（認知効果を与える）ための発話で使用される「だ」を「伝達的モード」とする。一方、話し手自身の認知環境が修正されたことを示す、ある事態に対する話し手の態度の言い定めを「述定的モード」とする。

これは先の議論で筆者がノダを類型化した際に「情報提示」「情報受容」としていたものである。そこで、改めて議論を曖昧にしないために本論文で定める「伝達的モード」

⁵⁴ その他の2はUniDicで未知語とされた「ラブラブ」、「横暴」を「ほうぼう」といい間違えた語。

「述定的モード」を定義する。

(37) 伝達的モード：聞き手に認知効果を与える意図を伝達するもの。事柄の内容や、話し手の態度を聞き手（客体化された話し手自身含む）に向かって持ちかけ、伝達する言語表示。「事実」「意見」「質問（自問含む）」など。

(38) 述定的モード：当該命題の獲得により、話し手自身に認知効果が起ったことを明示するもの。当該発話に先行して客体的に表現された事柄の内容についての、話し手の態度の言い定め。「想起」「発見」など。

本論文は、発話は聞き手（もしくは話し手自身）にとって関連性を有するものであり、関連性があるということは認知効果が起きることを意味する。その点でいうと（34）、（35）に示すように、「伝達的モード」の「だ」は、聞き手の認知環境が修正されることを意図した発話であり、「述定的モード」の「だ」は話し手自身の認知環境が修正されたことを明示するものという立場に立つ。

次に、それぞれのモードで使用される「だ」についてみる。本論文では、文末の「だ」が使用される文を以下のように類型化する。

(39) 伝達的モードの「だ」：(a)「事実」文、(b)「意見」文、(c)「質問」文
述定的モードの「だ」：(d)「想起」文、(e)「(発話に基づく)発見」文、
(f)「(発話外情報に基づく)発見」文

本論文が定義する「伝達的モード」及び「述定的モード」の下位分類を以下に示す。

<伝達的モードの「だ」>

(a)「事実」文

まず、すでに定まった事態を断定的に示すことにより、聞き手に情報提示する発話である。このような「だ」を「事実」文とする。

(40) (M019 と M007 の会話。二人は友人。M007 が自分は「授業料免除を受けている」と言った後の場面)

485 M019：授業料免除？

486 M007：うん。

487 授業料免除、申請して通ってっから。

488→ 大学院の授業料、払ったことないんだ。

489 (あ、そう) 前期も後期も。 (data124 男性 20代)

(40) では、M007 が M019 に「授業料が免除されているため、払ったことがない」と説明している場面である。

非ノダ文でも同様に「事実」文に「だ」が使用されていた。(38) は、相手に聞かれたことに対し情報提示(応答)する発話である。

(41) (F001 と F079 の会話。F079 は F001 の祖母。F001 が実家に帰省しており、二人で地元の F001 の友人の話をしている場面。会話中に出てくる U と V は F001 の地元の友人。)

1434 F001 : あれ, U君, そういえば結婚するんだよねえ?

1435→F079 : Vだ。

1436 F001 : いや, V君もするけど, U君も結婚するんでしょう?

1437→F079 : まだだ。

1438 F001 : あっ, そうなの?

1439 F079 : お金がなくてできんだって。 (data076 女性 70代)

(41) では、二人が地元の知人の話をしており、その中で話題に上がった U について、F001 が「結婚するんだよねえ」と聞いたところ、F079 が 1435 で「(結婚するのは U ではなくて) V だ。」と応答している。さらに F001 が「U 君も結婚するんでしょう?」と再度質問すると、1437 で「まだだ。」と回答している。以上、2 つの用例とともに情報提示の例を挙げたが、これらは不足していると思われる情報を加えたりいずれも聞き手側から説明や確認を求められ発話したりしているという点で「伝達的ムード」の「だ」と考えられる。

(b) 「意見」文

次に、話し手が相手に意見を述べるものである。これを「意見」文とする。

(42) (F069 と F149 の会話。二人は大学の同級生。F149 が「部屋のリフォームの番組を見ると、自分もリフォームしたくてたまらなくなる」と言った後の場面)

198 F069 : じゃ, 今度私の部屋やってよ。

199 F149 : 私ほら, たんす張り替えたじゃん。

200 あの一, (うん) 木, 木目調のシールの。

201 F069 : やってたね。

202 うんうん。

203 F149 : あれ楽しくてしょうがない。

204→F069：私，絶対そういうのやだ。
205 F149：楽しいよ，やると。
206→F069：嫌だ。
207 やって。
208 F149：いいよ，材料があれば。 (data011 女性 20代)

(42) では，F149 が，家具のシーンを張替えることが楽しくてしょうがない，といったことに対し，F069 が 203 で「私，絶対そういうのやだ」と反論している。さらに，F149 に「やると楽しいよ」と言われ，再度 205 で「嫌だ」と再反論している場面である。このように，聞き手に対して自身の意見を述べるものも「伝達的モード」とみなす。

(c) 「質問」文

次に，「質問」する例を挙げる。「質問」は相手に問いかける場合だけでなく，客体化された話し手自身に対して問いかける場合も含むものとする。(43) は相手に問いかける例，(44) は客体化した話し手自身に問いかける（自問する）例である。このように，相手に問いかけたり自問したりする発話を「質問」文とする。

(43) (M023 と F128 の会話。二人は高校からの友人。M023 が F128 を車で送っており，M023 が進行方向を聞いている場面)
165→M023：これ，どっちだ。
166 23？
167 F128：まっすぐまっすぐ。
168 M023：了解。 (data087 男性 20代)

(44) (M005 と F057 の会話。M005 は F057 の元上司。二人が務めていた会社で，F057 が入社した時の話をしている場面)
1496 M005：うん？
1497 ああ，ああ，ああー。
1498 でも ((F057 が会社に)) 入ってきたとき，どこにいたんだろ，俺って。
1499 F057：え，ネットバンクで先生やってみえましたよ。
1500 <笑い>
1501 M005：そうだったっけ？
1502 F057：うん。
1503 M005：ああー。
1504→ あのとき何やってんだ。

1505 いやあ、わからんなあ。

(data078 男性 40代)

(44) は二人が務めていた会社の話の中で、F057 が入社したころについて回想している場面である。M005 が 1498 で、当時自分がどの部署にいたかを思い出している時に F057 が 1499 で「ネットバンクで先生やってみえましたよ」と言ったが、M005 は当該時を思い出せないようで、1504 で「あのとき何やってんだ」と自問している。このような例も客体化された自身に問いかける擬似的な「伝達的ムード」の「だ。」とする。

<述定的ムード>

(d) 「想起」文

「想起」とは、当該命題を顕在的知識として再認したことを示す文である。

(45) (F149 と F069 の会話。二人は大学の同級生。F149 の姉がパソコンを買うらしいと話している場面)

1027 F149 : 私も、だから、お姉ちゃん買うらしいんだわー。

1028 (そうなんだ) うん、あのほら、インターネットホームページ作りたいたか言って。

1029 (うんうん) でー、そのー、あのー、何だっけ、えー、ディスプレイ (うん) がついてる、

1030 何だ、何ていうんだっけ、そういうの。

1031 忘れちゃった。

1032 ノートパソコンじゃない、(あーあっちの) 何ていうんだっけ。

1033 F069 : ちゃんとしたやつ、何だっけね。

1034→F149 : デスクトップだ。

1035 F069 : それだ^マ

(data011 女性 20代)

(45) で二人はインターネットの接続工事の代金について話しており、そこから F149 が自分の姉がインターネットでホームページを作りたいたから、新しいパソコンを買うらしいと話しているが、1032 で「デスクトップ」という言葉が出てこず、「何ていうんだっけ」と発話し思い出そうとしていることがわかる。そして、1034 で「デスクトップだ」と言葉を想起している。田野村 (1990)、三枝 (2001) で指摘されているように、本調査資料においてもノダ文だけではなく、非ノダ文が確認された。

(e) 「(発話に基づく) 発見」文

次に、相手（他者）の意図明示的発話により、話し手自身の認知環境が修正され、新たに登録された認識を示す「（発話に基づく）発見」文をみる。

(46) (F013, F098, M031 の会話。M031 と F013 は小学校の同級生。F013 と F098 は中学、高校時代の友人。3人は同じ中学の同級生だが、F013 と F098 はそれを知らない。F098 の兄が話題になっている場面)

806 M031 : でも、あのお兄さんはすらっとして格好よかったよ。

807 F098 : あ、そう？。

808 M031 : わたし。

809 F013 : なんでBちゃん【M031 のこと】知ってるの？

810 M031 : だって2年上だもん。

811 わかりますよ。

812→F098 : あ、じゃあ中学校一緒だったんだ。

813 M031 : そう。 (data037 女性 60代)

(46) の前に F013 と F098 が F098 の兄の話をしていたところ、806 で M031 が F098 の兄について話に加わり始める。そこで F013 が 809 で「なんで M031 は（自分の兄を）知っているの？」と聞き、M031 は 810, 811 で 2 年上だったから分かると答え、F098 が 812 で「何かが（心内で）変化したこと」（富樫，2005：204）を示す「あ」を共起させて「あ、じゃあ中学校一緒だったんだ。」とここで初めて M031 と自分が中学の同級生だったと認識したことを表明する。この用法には、相手の話を聞き、認識が変わったことのみを明示する「そうなんだ」や、相手の発話を言い換えたり、内容を自身の言葉で表したり、相手の言いたいことを先取りするような例が含まれる。ただし、相手の発話内容に対して感想や意見を述べるものはその後の発話行為とし、後述する「その他」とする。

(f) 「（発話外情報に基づく）発見」文

次に、非言語情報及びチラシなど、発話外の情報により話し手自身の認知環境の修正が起ったことを示す「発見」文をみる。(e) との違いは、認知環境の修正に相手（他者）の発話が関与していないことである。(47) を参照されたい。

(47) (F145 と F071 の会話。二人は同じマンションの住人。F145 が布製のズックを染めるといい、染料を見ながら染め方を F071 に教えている場面)

711 F145 : うん、水でもOKって、なんだけど、(うんうんうん) やっぱお湯で染めた方が。

713→F071 : あ、お塩を入れるんだ。

714 F145：うん，そうそう。

(data059 女性 30代)

(47) では，F071 が染料の箱に書いてある染め方の手順に「塩を入れる」と書いてあったのを見て発話した場面である。このように，相手の発話以外の刺激により新たな認識が加わったものを「(発話外情報に基づく) 発見」文とする。当該文はそのほかにも名案が浮かんだり，計算して出た答えを発話したりした場合も含めることとする。

以上，「想起」文，「発見」文のように，聞き手の認知環境を修正する意図で伝達するのではなく，当該状況で話し手自身の顕在的知識に新たに加わった認識(命題)に付加される「だ」を「述定的モード」とする。

その他，相手の発話を受けて，感想を述べたり(例(48))，相手に同意する(例(49))例がみられた。これらは現時点では「その他」に分類することとする。

(48) (F130 と F154 の会話。二人は友人。F154 が自分の夫の帰宅時間について話した後，F130 に「ご主人の帰宅時間は遅いのか」と聞いている場面)

380 F154：もっともっと遅い？

381 F130：7時半だったら，おお，今日は早いねーって。

382→F154：そうか，大変だ。

383→ 大変だ。

384 F130：でも，その間にいろいろできるから。

(data113 女性 30代)

(49) (F128 と M023 の会話。二人は高校時代の同級生。キティちゃんのキャラクターを見て話している場面)

800 F128：しかもあれだよ，なんか毛が生えとる，男の子。

801 茶色い長い。

802 M023：どこ？

803 F128：なんかさー，顔の後ろに黄色いのがぶらさがっとるでしょう。

804→M023：ああ，ほんとだ。

(data087 男性 20代)

以上，本論文の類型化を大きく「伝達的モード」「述定的モード」「その他」の3つとし，さらに「伝達的モード」「述定的モード」の下位分類について確認した。

5.3.3.4 品詞，共起語にみる各「だ」の使用数

次に，観察された伝達的モードと述定的モードで使用された「だ」の数を比較する。そして，それらがどのような品詞とどの程度共起しているかを男女別に示す(表6，表7)。「その他」は147例観察されたが，別途考察する。

表 6 「だ」に前接する品詞別使用数及び使用率（女性）

	伝達的モード		述定的モード	
	使用数(異語)	%	使用数(異語)	%
名詞 ⁵⁵	46 (40)	15.5	108 (82)	10.2
形状詞	116 (13)	40.1	11 (6)	1.0
副詞	7 (3)	2.4	43 (3)	4.1
助詞	125 (5)	42.1	887 (7)	83.7
その他 ⁵⁶	0	0	11 (5)	1.0
合計	294 (61)	100.0	1060 (103)	100.0

表 7 「だ」に前接する品詞別使用数及び使用率（男性）

	伝達的モード		述定的モード	
	使用数(異語)	%	使用数(異語)	%
名詞	41 (28)	39.4	16 (15)	19.0
形状詞	11 (7)	10.6	0	0
副詞	5 (2)	4.8	6 (1)	7.1
助詞	46 (4)	44.2	61 (1)	72.6
その他	1 (1)	1.0	1 (1)	1.2
合計	104 (42)	100.0	84 (18)	100.0

表 6, 表 7 から、「だ」の使用について興味深いことがわかる。まず、モード別使用という点からいうと、女性は述定的モードを伝達的モードの 3.6 倍使用しているのに対し、男性はいずれのモードの「だ」も同程度使用していた。このことから、「だ」の使用に性差があることが窺える。

また、品詞別に使用数を見てみると、全体的に助詞との共起が多く、特に述定的モードでは女性は約 8 割、男性は 7 割が助詞と共起していた。伝達的モードでは、女性は形状詞、助詞と、男性は助詞、名詞との共起が多いことがわかる。ただし、各品詞の使用数と異なり語数（表では「異語」と表記）から、名詞は特定の語との結びつきが弱いと推察される。一方、助詞及び副詞（男女）、形状詞（女性）は使用数に比べて異なり語数が少ないことから、「だ」は当該品詞の特定の語との結びつきが強いことが窺える。そこで、当該品詞の使用語を調査することにした。表 8 に伝達的モードの「だ」が共起する形状詞、副詞、助詞の使用語と使用数、表 9 に述定的モードの「だ」が共起する副詞、助詞の語と使用数を示す。

⁵⁵ 代名詞含む。

⁵⁶ 接尾辞、未知語、 \emptyset などを「その他」とした。

表 8 各品詞別使用数 (伝達的モード)

	形状詞		副詞		助詞	
	女	男	女	男	女	男
1	嫌 (93)	嫌 (4)	そう (5)	そう (3)	の (121)	の (43)
2	だめ, 大変 (4)	だめ (2)	まだ (1)	よろしく (1)	ぐらい, よだけ, まで (1)	ぐらいばかりまで (1)
3	きれい, 無理 (3)	退屈, 暇, 大変, 便利 そう (1)				
4	好き (2)					
5	みたい, 変 ばか, 微妙, 簡単, 不安, 便利 (1)					

表 9 各品詞別使用数 (述定的モード)

	副詞		助詞	
	女	男	女	男
1	そう (41)	そう (6)	の (880)	の (61)
2	また, ちょっと (1)		だけ (2)	
3			から, とか, ぐらい, まで (1)	

共起語を調査すると、まず、いずれのモードも「の」の使用数が目立つ。述定的モードにおいて「そう」の使用数が多いのは、何かを思い出した際の「あ、そうだ」という発話が多かったためである。さらに女性は、伝達的モードの「嫌」との共起が顕著であった。当該語以外の語の使用数を踏まえると、「だ」はモード別にみても特定の語との結びつきが強いと言える。

5.3.3.5 「だ」の使用場面

次に、各モードの「だ」の使用場面と使用数及び使用率を表 10 に示す。前節での類型化を踏まえ、「伝達的モード」を「(主観的感情を含まない) 事実」「意見⁵⁷」「質問」

⁵⁷ より詳細に類型化すると、例えば「これ、やっといてね。ー 嫌だ。」のような拒否は明

に、「述定的ムード」を「想起」「(発話に基づく) 発見 (表 10 では「(発話) 発見」)」「(発話外情報に基づく) 発見 (表 10 では「(発話外) 発見」)」に下位分類する。そのほか、先述した「その他」の使用数をみる。

表 10 「だ」の使用場面と使用数

用法	伝達的ムード				述定的ムード				その他
	事実	意見	質問	計	想起	(発話) 発見	(発話外) 発見	計	計
使用数	127	221	50	398	176	883	83	1142	147
女性	89 (30.3)	176 (59.8)	29 (9.9)	294 (100.0)	157 (14.8)	823 (77.8)	78 (7.4)	1058 (100.0)	131
男性	38 (36.5)	45 (43.3)	21 (20.2)	104 (100.0)	19 (22.6)	60 (71.4)	5 (6.0)	84 (100.0)	16

表 10 の結果から、女性は主に述定的ムードに「だ」を使用する傾向がみられた。その中でも特に「(発話に基づく) 発見」文での使用が顕著であった。当該文は 5.3.3.3 で定義したように、「他者 (聞き手) からの言語的刺激を受けて話し手自身の認知環境が修正されたことを示す」文である。男性にも述定的ムードの中では当該文での使用が目立ったが、全体的には「事実」文、「意見」文との顕著な使用差はみられなかった。

「伝達的ムード」として使用された「だ」をみると、女性は意見文が「事実」文の約 2 倍観察されたものの、男性にそうした差はみられず、「意見」文と「事実」文の使用が同程度観察された。

使用数の差については、協力者の人数が大幅に異なるため使用の多寡を比較することはできないが、男女間でムードの「だ」の使用に差異がみられること、そして特に「伝達的ムード」の「だ」の使用においては、使用傾向に性差があることが示された。次節では、各ムードにおける「だ」の使用的意味を考察する。

5.3.4 ムード別にみる「だ」の使用的意味

5.3.4.1 伝達的ムードの「だ」

まず、「伝達的ムード」の「だ」について考える。「伝達的ムード」は 398 例観察された。表 8 から、女性は「の」「嫌」、男性は「の」との共起がそれぞれ多く、女性は次い

らかに聞き手目当て性があるが、「明日のテスト嫌だ。」のような感情表明は独話でも使用可能である。そのように考えると、後者は事柄目当てとする方が妥当とも言えるが、調査資料が雑談という形式をとっている点、分類が主観的になる恐れがあるという点を踏まえ、本調査においては意見文を「伝達的ムード」文とする。

で「嫌」との共起が多いことがわかったが、その他の使用傾向を探るため、語との結びつきを調査した。表 11 に当該ムードの「だ」に前接する語及び使用数を示す。

表 11 伝達的ムードの「だ」に前接する語及び使用数

	女性		男性	
	語	使用数	語	使用数
1	の	121	の	43
2	嫌	93	何	8
3	そう	5	そう	5
4	だめ, 大変	4	嫌	4
5	きれい, 無理, どこ	3	こと	3
6	好き, 何, こと, 感じ	2	どこ, だめ, あほ, 集団, わけ, 日	2
7	便利他 49 語	1	便利他 28 語	1
計	61 語	294	39 語	104

表 11 から、男女とも伝達的ムードの「だ」に前接する語で最も多いのが「の」であり、表 10 を踏まえると、全体の 41.2% (女性 41.2%, 男性 41.3%) を占めることが分かった。顕著な違いとしては、「嫌」が男性は 4 例 (3.8%) であったのに対し、女性は「の」に次いで 93 例 (31.6%) を占めていた点が挙げられる。まず、「嫌」について考える。考察の前提として「嫌」は (50) に示すように、意見文に使用されると考えられる。

(50) (F119 と F160 の会話。二人は大学院の同級生。結婚式のお色直しについて話している場面)

673 F119: だから着替えるのは 1 回でいいと思うな。

674 F160: うん, 私も。

675 F119: 友達で 2 回着替えた子がいて。

676→F160: 2 回はやだ。

677 F119: なんかね, あれはなーと思ったから。

678 F160: うん。

(名大 data068 女性 20 代)

表 10 で示した通り、女性は「意見」文の「だ」を 176 例使用していたが、それと表 11 の結果を踏まえると、「嫌だ」が 52.8% を占めていた。女性に関しては「嫌だ」が「意見」文で「だ」を使用する特徴の一つと考えられる。また、(50) のように「嫌だ」の変異形である「やだ」が 47 例使用されていることからも、「(い) やだ」を一つの表現として使用している可能性がある。

次に、男女とも使用が多かった「の」について考察する。当該語と「だ」の共起表現

は全て「んだ」で使用されていたため、以下、「んだ」とする。「事実」文、「意見」文、「質問」文における「んだ」の使用数を表 12 に示す。

表 12 伝達的ムードの「んだ」の使用数及び使用率

	「事実」文	「意見」文	「質問」文	合計
合計	95	49	20	164
女性	72	33	16	121
男性	23	16	4	43

「嫌」と同じように、それぞれの使用場面における「んだ」の出現傾向をしてみると、「事実」文（「だ」の全使用数 127 例）では 74.8%（女性 80.9%，男性 60.5%）、「意見」文（221 例）では 22.2%（女性 18.8%，男性 35.6%）、「質問」文（50 例）では 40.0%（女性 34.5%，男性 19.0%）であった。このことから、特に「事実」文の「だ」はノダ文の一部としての使用が多いことが分かる。「事実」文で使用されたノダ文をしてみると、経験談や回想場面での使用（例（51））、また、第 4 章の調査でもみられたように、発話を継続する場面での使用（例（52））が観察された。

(51) (F050 と F039 の会話。二人は大学の同級生。F039 が酔っ払っておかしな行動をとったときの経験を話した後の場面)

- 166 F050 : <笑い>なんか、失礼きわまりない、いろいろな行動をとったね。
 167 F039 : <笑い>返ってきてな、だからしょうがって言ってたやんかって、メール
 168 が返ってきた。
 169→ <笑い>そうなの、だから、私記憶がなかったんだ。
 170 そういえば、そこから記憶ないわって。

(data050 女性 30 代)

(52) (M007 が友人に地域の研究会の論文集について説明している場面)

- 198 M007 : だから、投稿だけは OK なプロシーディング、にすることにしたらしいんだよね。
 199→ ふーん) でー、15 本採用する予定ですって言ってたんだ。
 200 (へー) で、それがー、10 月 1 日までなんだ、締め切りが。
 201→ で、あの一、今月中にその、意思表示をしなきゃいけないらしいんだ。
 202 (あ、ほんとに) そう。
 203 こう一応、要するに投稿するかしないかという (は一) 意思表示をして、
 204 (うん) まあ、8 月 9 月で書けってことだね。

(data124 男性 20 代)

また、非ノダ文についてみると、(41)のように相手の確認に対する否定や(53)のように独話的な場面で使用されていた。このことから、「事実」文で使用される「だ」は言い切ることに抵抗のない、言い換えれば話し手が相手への配慮を不要と判断した場面で使用される傾向があると推察される。

(53) (F024 と F140 の会話。二人は大学院の同級生。F024 が課題をやりながら会話をしている場面。X はもデータ上の会話参加者ではなく、居合わせた話者)

970 F024：よし、私は終わったぞ。

971 まともと訳も終わったぞ。

972 X：***。

973 F140：すてきー、早いわねー。

974→F024：あとは、ウェブ、じゃないわ、ワードで打つだけだ。

975 まともながら。

976 難しい。 (名大 data100 女性 20代)

最後に「質問」文の「だ」をみる。当該文には、相手への反応要求(表13では「相手」と客体化された自分自身に問いかける「自問」の二つに下位分類できる。母語話者の使用傾向を探るため、「質問」文を「相手への反応要求」及び「自問」に分け、使用数を男女別に調査した(表13)。

表13 「質問」文における「だ」の使用数

	相手	自問	合計
女性	5	24	29
男性	8	13	21
合計	13	37	50

表13が示すように、「質問」文は話し手自身に問いかける「自問」の使用が特に女性に多いことが分かった。相手に問いかける「質問」は20代でのみ観察され、さらに分析した結果、男女とも同一の話者がそれぞれ女性4例、男性7例使用していた。

「自問」の場合は、相手に聞かれてすぐに応答できない場合、話の中で言葉が出てこない場合などに使用され、女性はさまざまな話者に使用されていた。男性は13例中6例が同一話者によるものであった。本調査の場合、使用数が少ないため、使用傾向の指摘にとどめるが、「だ」は相手に向ける反応要求文には使用されにくく、自然会話における「相手に対する質問」の「だ」は周辺的な用法であることが示唆された。従って、「質問」文に使用される「だ」についても、自問する場面で使用される傾向にあり、従

って聞き手目当て性は薄いと考えられる。

以上、自然会話コーパスを用いて伝達的ムードの「だ」の使用実態を調査した。調査の結果、以下のことが明らかになった。

- I. 女性は「述定的ムード」に「だ」を使用する傾向があるが、男性は「伝達的ムード」「述定的ムード」に使用の差はみられなかった。
- II. 女性は「意見」文では「嫌だ」の使用が多く、「意見」文の5割を占めていた。「やだ」という表現も多く、女性は「(い) やだ」を一つの表現として使用していることが示唆された。
- III. 「んだ」は「事実」文、「意見」文いずれにおいても使用がみられたが、特に「事実」文に使用される傾向が強く、女性は「事実」文の8割、男性は6割が「んだ」であった。
- IV. 「質問」文の「だ」は主に客体化される話し手自身に対して「自問」する場面で使用され、聞き手目当て性は希薄である。

伝達的ムードに使用される「だ」は「嫌」等の非選好的発話や、回想場面、独話的な場面など相手への配慮を考慮する必要のない場面での使用もみられた。発話権を維持しながら談話を展開する例が観察された点については、本論文の第4章での結論「自然会話において「んだ(Ø)」は自分自身の認知環境が修正された場合に使用される」に一見矛盾する結果と考えられる。しかし、全体的にみると伝達的ムードとして使用される「んだ」の使用数は164例あったものの、「んだ」全体の使用数1105例の14.8%である。従って、「んだ(Ø)」は本章でいう伝達的ムードに該当する平叙文の「情報提示」のノダ、疑問文のノダの使用割合が低いことが今回の調査においても示された。

使用数が少ないのは、言い切りの「だ」が確言、断定の意図を伝達するため、聞き手配慮が示せないという点に加え、5.2.3.2で述べたように、「だ」を用いなくとも名詞文で情報提示の意図が伝わるということも要因であろう。

ただし、逆に言うと、164例使用されていたことも事実である。では、相手の認知環境を修正する「んだ(Ø)」と、話し手自身の認知環境が修正されたことを明示する「んだ(Ø)」はどのような差異があるのであろうか。全く同じ形式を相反する場面で使用する場合、聞き手の発話解釈にかかる処理コストは高くなると予想される。無論、聞き手はいずれの発話意図で「んだ(Ø)」を使用しているかは文脈から推論しているであろうが、文脈以外にも発話解釈にかかる処理コストを下げるために話し手はどのような手段を用いるのか。本論文はそれを産出音調の違いにあると考える。そこで、第6章では、二つの発話意図と産出音調との対応を分析する。

5.3.4.2 述定的ムードの「だ」

5.3.4.2.1 「だ」に前接する語及び各用法別使用数

次に、述定的ムードの「だ」をみる。まず、使用傾向を探るため、語との結びつきを調査した。表 14 に当該ムードの「だ」に前接する語及び使用数を示す。

表 14 述定的ムードの「だ」に前接する語及び使用数

	女性		男性	
	語	使用数	語	使用数
1	の	880	の	61
2	そう	43	そう	6
3	わけ	8	G	2
4	あれ	5	はず他 14 語	1
5	ちゃん, さん	4		
6	こと, 方, 大丈夫, 時	3		
7	本当, 先生, オッケー, だけ, これ, 人, 県, だめ, 年, 話, やつ	2		
8	あれ他 78 語	1		
計	100 語	1058	18 語	84

述定的ムードの「だ」は「の」との結びつきが顕著であり、当該ムード全使用数 1142 例中 82.4%（女性 83.2%，男性 72.6%）を占めていた。次いで使用が多かった「そう」が女性 43 例，男性 6 例それぞれ観察されたものの、使用全体の 10%以下であった。また、異なり語数と「そう」以下の使用数から鑑みても、述定的ムードの「だ」と「の」との結びつきの強さが窺える。さらに、「述定的ムード」として使用される「んだ」は名大コーパスで対象となった「んだ」（1105 例）全体の 85.2%であった。つまり、第 4 章で使用した BTSJ だけでなく、名大コーパスにおいても、「んだ (∅)」が話し手自身の認知環境が修正された場面で使用されやすいという結果になった。

次に、「述定的ムード」の「だ」の使用傾向を探るため、表 10 から当該ムードの各用法別使用数を取り出し再掲する（表 15）。

表 15 述定的ムードに使用される用法別「だ」使用数及び使用率

	想起	(発話) 発見	(非発話) 発見	合計
女性	157 (14.6)	823 (77.8)	78 (7.4)	1058 (100.0)
男性	19 (22.6)	60 (71.4)	5 (6.0)	84 (100.0)
合計	176 (15.4)	883 (77.3)	83 (7.3)	1142 (100.0)

表 15 を見ると、述定的ムードとして使用される「だ」は「(発話に基づく) 発見」文が 77.3% (女性 77.8%, 男性 71.4%) と男女とも最も多いこと、次いで「想起」文、「(発話外情報に基づく) 発見」文となっていることから、使用傾向に大きな違いはみられなかった。

5.3.4.2.2 述定的ムードの「だ」にみる必須の「だ」と任意の「だ」

本論文の目的の一つは、話し言葉における「んだ (∅)」と「の (∅)」の手続き的意味を明らかにすることであり、第 4 章でそれぞれの仮説が提示された。両形式の違いは「だ」の有無である。従って、仮説を検証するために「だ」の使用実態を調査したわけであるが、先述したように、述定的ムードの「だ」は「の」に後接する割合が最も高く、述定的ムードとして使用される「だ」全体の 82.4% を占めていた。つまり自然会話において「だ」が述定的ムードとして使用される場合は、「(命題) んだ (∅)」という形で使用される傾向があることがわかった。

次に、「(命題) んだ (∅)」が話し手の認知環境が修正された場面で頻用される理由について考える。その前提として、本節では述定的ムードと位置付けた 3 つの発話意図が「だ」を必須とするか、任意とするか、という点に着目する。まず、「想起」文は三枝 (2001) が指摘するように、「だ」を取り除くことができない。(54) を参照されたい。

(54) (F080 と F002 の会話。F080 がヨーロッパ旅行で印象に残った場所を話している場面)

239 F080 : モネのね、モネの生家があるところなんです。

240 それで。

241 F002 : ああ、あの橋があるところ？

242 F080 : そこじゃない、そこじゃない。

243 ごめんなさい、そこじゃなくてね、それはね、えっと、パリじゃなくて、

244→ それはニースだ。{*それはニース。}

245 ニースのちよっ、ちよっと上がってったところにね、うーんと、シャガール

246 だ、(ふーん) シャガールの美術館があるわ。

(data031 女性 60 代)

F080 が印象に残った美術館の地名がなかなか思い出せないでいることが 243 の発話でわかる。そして、244、246 で思い出しているが、その際には「だ」が必須である。「想起」文の「だ」は (54) や「あ、明日テストだ！」のように忘れていた記憶を思い出す場面で使用される。もしここで「だ」を取り除いてしまうと、「想起」という意図は聞き手に伝達されず、情報提示と解釈されるだろう。

「想起」はコト的な内容を思い出す場合にはノダ文になるが、「だ」を取り除いてしまうと、やはり「想起」文とは解釈されず、相手に写真があることを伝える情報提示のノダと解釈される。従って、この場合にも「だ」を取り除くことはできない。

(55) (F162 と F026 の会話。二人は高校時代の同級生。明日出席する共通の友人の結婚式について話している場面)

737 F162 : 明日も 1 日だね。

734 F026 : うーん、長いねー。

735 F162 : でも、明日はさー、受付とかないからちょっと残念ね。

736 (＜笑い＞そうなんだ) この前あたしすごい張りきってたんだって。

737→F026 : そうだ、受付の写真があるんだ。(？あるの。)

738 (ほんと) 焼き増しして今度送るわ。

739 F162 : うん。 (data120 女性 20 代)

次に、「(発話外情報に基づく) 発見」文についてみる。当該文は主に非言語情報により認知効果が生じたことを示す発話であった。(56)に示すように、名詞文の場合は「だ」を取り除くことは可能である。それは、発話状況から相手(この場合 F050)は 1495 の発話意図を「発見」と解釈することができるためである。

(56) (F050 と F146 の会話。二人は大学院の先輩後輩。アルバイトの話をしていた時に偶然知人(O君)を見かけた場面)

1493 F050 : 終わらせなきゃ。

1494 F146 : だから、3日のうち必ず1日はー。

1495→ あ、O君だ。{O君。} (data084 女性 30 代)

一方、(57)のように、動詞文の場合には「だ」を取り除くと発話意図が曖昧になる。

(57) (F109 と F130 の会話。二人は大学時代の同級生。レストランで注文したシーザーサラダが出てきた場面)

1316 F109 : はい、どうもありがとう。

1317 F130 : どうぞ。

1318 F109 : そーお？

1319 F130 : さっき、うん、あたしから。

1320 F109 : あ、じゃあ。

1321→F130 : チーズ、自分で割って食べるんだ。{??食べるの。}

1322 F109 : へえ、何かうれしい。

1323 F130: すてきだね。

(名大 data112 女性 30代)

(57) は二人が注文したシーザーサラダがチーズと一緒に運ばれてきた際の会話であるが、チーズを見て、チーズと一緒に運ばれてきた理由に気づいた F130 が 1321 で「チーズ、自分で割って食べるんだ」と発話する。つまり、「シーザーサラダにチーズを自分で割ってかける」コトを発見したわけである。1323 で「すてきだね」と言っていることから、その場で初めて食べ方を理解したと解釈できる。ここでもし、「だ」を取り除いてしまうと、聞き手目当て性が生じ、聞き手は「発見」とは解釈せず、情報提示されているか、妥当性を確認されていると解釈することになる。従って、発話の関連性という点からいうと聞き手の発話解釈に余分な処理コストがかかるため、「だ」は省略されにくいと思われる。

次に、「(発話に基づく) 発見」文の「だ」について考える。これは相手からの意図明示的伝達により、自身の認知環境が修正された場面で使用されるものであったが、先述したように、述定的ムードの「だ」の中で 77.8% を占めていた。表 16 に当該文の「だ」と共起する語を調査した結果を示す。表 16 から、883 例中「の」の使用が 851 例 (96.4%) と際立っていることがわかる。従って、当該文は主にノダ文が使用されていると考えられる。

表 16 「(発話に基づく) 発見」文の「だ」に前接する語

	女性		男性	
	語	使用数	語	使用数
1	の	796	の	55
2	わけ	8	十分他 4 語	1
3	こと	3		
4	から他 15 語	1		
	19 語	823	5 語	60

「想起」文、「(発話外情報に基づく) 発見」文と違い、「(発話に基づく) 発見」文の場合には名詞文も「ノダ」が使用される傾向が強いが、この場合は、「だ」を取り除いても他者 (相手) の言語的刺激により当該命題を自身の想定に加えたということが伝達される。従って、「だ」は省略可能である。

(58) (F093 と F101 の会話。二人は友人。F093 が掃除をするのにとっても便利なものがあると話し、それがドイツで発明されたと話した後の場面)

618 F101: あ、そうなんだ。

619 <笑い>

- 620 え、何、雑巾とかじゃなくって。
- 621 F093：いや、スポンジ。
- 622→F101：あ、スポンジなんだ。{スポンジなの。}
- 623 F093：うん。
- 624 F101：へーえ。 (data 080 女性 20代)
- (59) (M30 と M34 の会話。M034 がひげを生やしており、それが指導教員に不評なので剃った方がいいと間接的に言われたと話した後の場面)
- 578 M034：(うんうん) どうなんですかね、社会的にひげっていうのは認知されてないんですかね。
- 580 M030：だめでしょう。
- 581 M034：だめなんですか。
- 582 M030：だって無精ひげだもん。
- 583→M034：無精ひげはだめなんだ。{だめなの}。
- 584 そいじゃ伸ばしっ放しは？
- 585 全部こう。
- 586 無精ひげがこのままずーっと伸びたものっていうのはだめなんですか？
- 587 M030：それもだめでしょう。
- 588 やっぱ手入れしなきゃ。 (data095 男性 20代)

以上、述定的ムードの「だ」が使用される3つの場面を見たが、これらの「だ」省略容認度をまとめると表17の通りとなる。

表17 各使用場面と「だ」省略容認度

	名詞文	動詞・形容詞文
想起	×	×
(非発話) 発見	○	×
(発話) 発見	○	○

このようにみると、「だ」は聞き手の発話解釈にかかる処理コストの程度と関係があることがわかる。敷衍すると、対者的な場面において、「想起」文は話し手内部での修正であるため、聞き手には伝達されにくい。従って、断定の「だ」を用いて「認知環境の修正」を意図明示的に伝達する必要がある。一方、「(発話に基づく) 発見」文は認知環境の修正に聞き手の介入があり、発話意図が伝達されやすいため、「だ」を省略することは可能である。

では、なぜ省略可能な「だ」を「(発話に基づく) 発見」文で多用するのか、という点について考える。これは、確言、断定を意図する「だ」を使用して当該文を言い切り、

相手の発話により話し手の認知環境が（いわば）完全に修正されたことを明示することで、相手への配慮を相手に意図明示的に伝達していると考えられる。もしこの状況で「だ」を取り除いてしまうと、聞き手目当て性のある「の」で終わることになり、話し手自身の認知環境の修正の妥当性を確認する意図を伝達する可能性がある。

(59')

578 M034 : (うんうん) どうなんですかね、社会的にひげっていうのは認知されてないんですかね。

580 M030 : だめでしょう。

581 M034 : だめなんですか。

582 M030 : だって無精ひげだもん。

583→M034 : 無精ひげはだめなの。

こうした確認を求める発話は、状況によっては相手に不快な思いを生じさせる可能性がある。しかし、「だ」を共起させるとそのような誤解を持たれず、「あなたの発話を私は受け入れました」「あなたの発話は私の認知環境を修正するのに十分な関連性があります」という態度を表明するため、結果的に相手への配慮も示すことができると考える。そしてこうした配慮は、相手にとって話しやすい環境を整備することにもなる。特に女性は「(発話に基づく) 発見」文に「だ」を多用していたが、女性は相手と円滑に会話を継続するストラテジーの一つとしてこうしたノダ文を効果的に使用しているのではないかと考えられる。

第4章で、「の (Ø)」と「んだ (Ø)」の手續きの意味を仮説として提示したが、両者の違いは「だ」の有無である。本章での調査においても、話し言葉において、特に女性は「だ」を述定的ムードとして使用する傾向があったが、当該の「だ」に共起する語の中で「の」が8割を示していたことがわかった。そしてそれは相手からの言語的刺激により話し手自身に認知効果が生じた「(発話に基づく) 発見」文での使用が顕著であった。本節で示した通り、当該文の場合「だ」は任意であるにもかかわらず頻用される。これは話し手の語用論的な動機付け（この場合相手に対する配慮と考えられる）によるものと結論付けた。一方、「想起」文は「だ」を省略しにくく、使用は必須と考えられる。このように、同じ「んだ」であっても、必須の場合と任意の場合があることをみたが、次節ではこの「だ」の省略容認度からノダの構文的特徴と意味を考える。

5.3.4.2.3 「だ」の省略容認度からみるノダの二面性

述定的ムードの「だ」の省略容認度をみたが、そこからノダを複合的に記述する可能性について述べる。関連性理論では発話を「記述的用法」と「解釈的用法」に類型化し

ているが (2.2.3.2 参照), その知見を援用すると, ノダは「記述的用法」と「解釈的用法」に下位分類され, それぞれ「(ノ) +ダ」と「ノ (ダ)」に類型化できるのではないかと思われる。その根拠を以下に示す。

表 17 で示したように, 述定的ムードの「だ」は省略が容認される場合と容認されない場合がある。具体的には名詞に後接する場合, (54) に示すように「想起」文はダが省略できないが, 「(発話に基づく) 発見」文は (58) のように省略可能である。一方, (58) は「ノ」を省略することはできない。

(54) (F80 と F002 の会話。F080 がヨーロッパ旅行で印象に残った場所を話している場面)

239 F080: モネのね, モネの生家があるところなんです。

240 それで。

241 F002: ああ, あの橋があるところ?

242 F080: そこじゃない, そこじゃない。

243 ごめんなさい, そこじゃなくてね, それはね, えっと, パリじゃなくて,

244→ それはニースだ。{*それはニース。}

245 ニースのちよつ, ちよつと上がってったところにね, うーんと, シャガール

246→ だ, (ふーん) シャガールの美術館があるわ。 (再掲)

(58) (F093 と F101 の会話。二人は友人。F093 が掃除をするのにとても便利なものがあると話し, それがドイツで発明されたと話した後の場面)

618 F101: あ, そうなんだ。

619 <笑い>

620 え, 何, 雑巾とかじゃなくって。

621 F093: いや, スポンジ。

622→F101: あ, スポンジなんだ。{スポンジなの。/*スポンジだ}

623 F093: うん。

624 F101: へーえ。 (再掲)

(54) の場合, 「だ」は「話し手自身が想起したこと」を聞き手に解釈させる手続きの意味をコード化する。従って, 名詞文の場合はそのまま「だ」が後接可能であるため「ノ」は不要であるが, 動詞, 形容詞文は名詞化する必要があるので必然的に「ノダ」が使用されることになる⁵⁸。つまり, 「想起」文の場合は「(名詞) +ダ」であることを意味することになり, 5.2.2 で取り上げた田野村 (1990) の指摘通り, 「想起」を伝達す

⁵⁸ 同様の指摘が野田 (1997: 69-71) でもなされている。ただし, 野田 (1997) では「だ」の省略可能性についての記述はない。

るのは「だ」の働きによるものといえる。

一方、「(発話に基づく) 発見」文は「だ」が任意であるにもかかわらずノダが使用されている。これはそこにノを介入させる必要があるためと考えることができる。(58)に示すように、「スポンジなんだ」を「スポンジだ」とすると、その発話は解釈的用法ではなく、ある事態を描写(言語的に表示)した記述的用法と解釈される。つまり、当該発話の場合、「ノ(ダ)」であり、「ノ」が当該命題を話し手の解釈として提示する手続きの意味を持つと考えられる。このように考えると、名詞文の「名詞ダ」と「名詞ノ(ダ)」とをうまく説明できると思われる。つまり、ノダは以下のように類型化できると考える。

(60) ノダの二面性

想起のノダ : 名詞+ダ, (動詞, 形容詞) ノ+ダ

(発話に基づく) 発見のノダ : (名詞, 動詞, 形容詞) +ノダ

「(非発話外情報に基づく) 発見」文は両者のノダの中間に位置すると考えられるが、名詞文の場合は事態を真の描写として発話している「記述的用法」であるため、「想起」文に近い性質を持っていると考えられる。

関連性理論を援用した内田(1998)、名嶋(2007)では、ノダの解釈的用法については記述されているが、記述的用法については言及がない。しかし、本論文は異なる立場を取る。もしノダに解釈的用法しかなければ、想起がなぜ名詞文は非ノダ文になるのに、動詞文がノダ文になるかを説明することができない。本論文では可能性の指摘にとどめるが、すべてのノダを統一的にみるのではなく、(60)に示したように、発話意図と構文上の違いに目を向けて分析することにより、ノダの記述に新たな知見が提供できるのではないかと考える。

5.3.4.3 「その他」の「だ」

最後に、「その他」に分類した「だ」をみる。「その他」は、相手発話に対する感想や共通点の発見、同意などであった。表18に「だ」に前接する各品詞の使用数を示す。

表18 「その他」の品詞別使用数

	名詞	代名詞	形状詞	副詞	感動詞	助詞	接尾辞	計
女性	71	12	25	17	3	2	1	131
男性	5	4	4	3	0	0	0	16

表18をみると、使用数に差はあるものの、男性の使用が少なく、共起する品詞に差

があるとは言えないため、男女合わせた共起語を調査した。表 19 に共起語と使用数を示す。共起語を見ると、「本当」「そう」「なん（何）」が上位 3 形式であった。これらに共通するのは、相手の発話を受けて話し手自身の認知環境が修正された場面で使用されているということである。

表 19 「その他」の共起語

	共起語	使用数
1	本当	51
2	そう	19
3	なん（何）	13
4	大変	8
5	嫌，だめ	7
6	一緒，へー	4
7	へー	3
7	あほ，あれ，いっぱい	2
8	その他 28 語	1
計	40 語	147

(61) (F004 と F028 の会話。二人は大学院の同級生。話をしている時に F004 がカマキリを見つけたことを話す場面)

595 F004：うわっ，(すごーい) すっごい飛んでるよ。

596 あ，蜂じゃないか。

597 F028：蜂じゃない。

598 あっ，えっ，あっ，カマキリ。

599 F004：どこ？

600 F028：えっ，見えない？

601 あっ，踏まないで，踏まないで。

602 あっ，よかった踏まれなかった。

603→F004：あー，ほんとだ。 (名大 data016 女性 20 代)

(62) (M034 と M30 の会話。二人は大学院の同級生。M030 が昼夜逆転の生活をしていて，改善したいと言ったのに対して，M034 がアドバイスしている場面)

374 M034：うーん。

375 だから 1 2 時とか，それぐらいに眠くなるでしょう，どうしたって。

376 その，ちゃんと朝 9 時に起きてたら。

377 (うん) そうして直せばいいじゃないですか。

378 M030 : <笑い> そうだよなあ。

379→ (うん) そうだ。

380→ そのとおりだ。 (名大 data095 男性 20代)

(63) (M017 と F098 の会話。二人は共同研究者。あられとせんべいは別物と思っていた M017 に F098 が「あられはせんべいだ」と教えた後の場面)

95 M017 : あられっていうと、僕は金平糖みたいな甘いやつかと思った。

96 F098 : あーあ、違います、違います、先生。

97→M017 : なーんだ。 (名大 data024 男性 60代)

(61) ~ (63) をみると、「その他」で使用される「本当だ」「そうだ」の「だ」は述定的ムードの下位分類に入れるのが妥当と思われる。かつ、相手の発話により命題内容が真であることを自身で認める発話であり、「(発話に基づく) 発見」文や「(発話外情報に基づく) 発見」文同様、「だ」を省略することは可能である。しかし、「だ」を用いて断定することで聞き手に話し手自身の認知環境の修正を意図的に伝達していると考えられる。(63) のような「なんだ」は 13 例見られたが、これもやはり相手の発話により話し手自身の認識が修正された場面で使用されていた。データ数が少ないため指摘にとどめるが、これは関連性理論でいうところの「既存の想定 of 削除」(2.2.4 参照) 場面で使用されており、そのことで期待はずれ、心外のニュアンスを帯びているように思われる。そのように考えると、述定的ムードのノダ「 \emptyset なんだ」の異形態とも考えられる。

例外的な用法として、文末と思われる場面で付加される例が見られた。

(64) (F008 と F115 の会話。F115 がインターネット上のゲームを F008 に教え、架空の相手 (パンダ) とゲームをさせようとしている場面)

300 F008 : 何これ。

301 単に、パ、対パンダ戦?

302 F115 : 対パンダ戦。

303 <笑> これあとで聞けるのかなー。

304 F008 : なんかむかつくよ、このパンダ。

305 どういうこと?

306 F115 : でしょう。

307 <笑> むかつくでしょう、むかつくこと請け合い。

308→ へっへーだ。 (data020 女性 20代)

この用法は「どーせ、ノロマですよお...だ。」(メイナード, 2005 : 343) と同様に「話し手が断定の意思を伝えるために付け加えられたマーカー」(同) であり、この「だ」

は伝達的ムードを担っていると考えられるが、本調査においては使用例が3例のみであり、全て同一話者によるものであった。従って、「だ」の周辺の用法と考える。

5.4 第5章のまとめ

本章では、自然会話における「だ」の使用実態に基づき、第4章で仮説として挙げた「んだ(∅)」の妥当性を検証した。まず、5.3.1で挙げた研究課題に対する本論文の解答を述べる。

研究課題1：自然会話において、文末の「だ」はどのような使用の特徴があるのか。

「だ」は大きく伝達的ムードと述定的ムードに類型化され、それぞれのムードにおいて特定の語とコロケーションを作る傾向がある。伝達的ムードは特に女性は「嫌」と共起した「(い)やだ」の使用が多いため、一つの表現として使用している可能性が指摘できる。一方、述定的ムードは「の」との共起が顕著であり、「んだ」として使用される傾向があることがわかった。

研究課題2：性別により「だ」の使用傾向に差があるのか。

女性は「だ」を伝達的ムードの「(い)やだ」、述定的ムードの「んだ」として使用する傾向が強い。男性は述定的ムードと伝達的ムードで同程度使用が観察されており、「だ」の使用には性差がみられた。その他、伝達的ムードにおいては、女性は「(い)やだ」など意見を述べる場面で使用されていたが、男性は「事実」文、「意見」文のいずれの場面にも同程度「だ」を使用していた。「事実」文には男女とも「んだ」の使用が多く、差はみられなかった。

述定的ムードの「だ」は「んだ」としての使用が男女とも約7,8割を占めており、男女差はないと考えられる。また、下位分類した「想起」文、「(発話に基づく)発見」文、「(発話外情報に基づく)発見」文においても使用傾向に差はみられなかった。

研究課題3：「んだ(∅)」が平叙文の「情報受容」のノダとして頻用されるのは「だ」のどのような性質によるのか。

「だ」は確言及び断定を示す判定詞であるが、聞き手に情報提示と解釈される場面では使用は任意である。

一方、情報受容のノダに「んだ」が使用されやすいのは、まず、「想起」文、「(発話外情報に基づく)発見文」の場合は、自身の認識が修正されたことを明示する「だ」

が必須であるが、その場合動詞文、形容詞文は必然的に「ノダ」という形で発話される。「(発話に基づく) 発見」文の場合、「だ」の使用は任意であるが、「んだ」を使用して「あなたの発話によってわたしの認知環境が完全に修正された」という態度を伝達することにより、相手に配慮しながら会話を円滑に進めようとする態度を伝達していると考えられる。つまり「だ」が必須なために必然的に「んだ (∅)」を使用する場合と、「だ」の使用は任意であっても、「んだ (∅)」を使用し、相手の発話をいわば完全に受け入れるという意図を伝達することで、相手と良好な関係を構築しようとする話し手の語用論的動機付けが要因となり、その結果当該形式の使用が増えると考えられる。

本章により、別のコーパスにおいても「んだ (∅)」が「情報受容」のノダとして選好されていることが示された。話し手は、聞き手の発話解釈にかかる処理コストを軽減させるため、話し手自身の認知環境が修正されたことを明示する場面や、相手の発話の邪魔せずに、聞き手として相手が発話しやすい環境をつくる目的で「だ」を効果的に使用していると考えられる。しかし、当該形式が「情報提示」のノダとしても使用されていたことから、話し手は聞き手の発話解釈にかかる処理コストを軽減するために何らかの手がかりを与えていると考える。次章では、その手がかりを探るため、両形式の文末音調に着目し、「の (∅)」と「んだ (∅)」の手続き的意味を再考する。

第6章 裸の形式の手続き的意味

6.1 はじめに

これまで、自然会話において終助詞が付加されない裸の常体ノダ形式「の (∅)」「んだ (∅)」には語用論的機能分担があること (第4章)、「だ (∅)」は相手の認知環境を修正する伝達的モードと話し手自身に新たに登録された情報を示す述定的モードの両方に使用されるが、特に述定的モードに使用される場合には「んだ (∅)」としての使用が顕著であったこと (第5章) が示された。

これまでの分析、考察を踏まえ、本章では文末音調に注目し「の (∅)」「んだ (∅)」の手続き的意味を考察する。本論文は「の (∅)」「んだ (∅)」は高次表意及び表意を制約する手続き的意味を持つと考える。そして、自然会話の場合、話し手は形式のみならず音調の違いにより聞き手の解釈を制約するという立場に立つ。本章では音調についての考察を通して、第4章で呈示した「の (∅)」「んだ (∅)」の手続き的意味の仮説を検証する。

本章の構成は以下のとおりである。6.2 で終助詞が付加されない文末音調について記述する先行研究を概観し、援用すべき点とノダを記述するうえで明らかにすべき点を述べる。6.3 で文脈のない状況での裸の形式について、母語話者に対する聴取実験を基に、音調の違いにより聞き手の解釈がどのように異なるかを分析、考察する。6.4 で本章の調査を通して第4章で挙げた「の (∅)」「んだ (∅)」の手続き的意味 (仮説) を発展的に修正する。

6.2 音調に関する先行研究

6.2.1 用語の定義

声の高さの分析には、「アクセント」「イントネーション」「プロミネンス」という用語が用いられる。本論文の考察においても重要な関わりがあるため、3つの概念についてまとめた後、本論文の考察に関わる音調の定義を確認する。

6.2.1.1 アクセント

アクセントは「一つひとつの語について、社会習慣として恣意的に決まっている、相対的な高さや強さなどの配置」をいう (松崎・河野 1998)。英語が音節の強弱で単語の意味を区別するのに対して、日本語は音の高さ (ピッチ) によって単語の意味を区別する。例えば、「雨」は「あ」が高く、「め」で低くなる頭高型アクセント (有核アクセ

ト)であり、「飴」は「あ」から「め」で高くなり、その後助詞を共起させても下がらない平板型アクセント(無核アクセント)である。このように、アクセントは単語を区別する弁別機能を持つとされる(松崎・河野, 1998:39)。そのため、郡(1997)、郡(2003)が指摘するように、ある語の意味が直前の語によって限定される場合にアクセントが弱化(アクセントの高さが通常より低い現象)したり、情緒的な意味を変えるために強弱を付けたりすることもあるが、基本的に話し手の意図によりアクセントの高さが変化することはない。アクセントは東京式、京阪式を中心として、地域により異なるが、本論文でアクセントという用語を用いる場合には東京式アクセントのことを指す。

6.2.1.2 プロミネンス

プロミネンスとは、文や句の中の「ある部分を音調上きわだてる発音」(和田, 1975)のことである。例えば、「昨日彼に名古屋駅であった」という文があると仮定する。(1)のように「いつ会ったのか」と聞かれた場合には「昨日」を、(2)のように「どこで会ったのか」と聞かれた場合には「名古屋駅で」を何らかの方法できわだてて発音するということである。

(1) A: いつ、彼に会ったの?

B: **昨日** (彼に名古屋駅で) 会ったよ。 (作例)

(2) A: 昨日どこで彼に会ったの?

B: (昨日彼に) **名古屋駅で** 会ったよ。 (作例)

きわだたせる方法はさまざまである。一部のアクセント節に上昇を加える、高低の幅を大きくする、強く発音する、などの方法が取られる(和田, 1975; 松崎・河野, 1998)。このプロミネンスにより、聞き手に何を伝えようとしているのか、どの部分が重要なのか、という伝達意図を明示することができる。

6.2.1.3 イントネーション

次に、本論文に最もかかわりの深いイントネーションについて確認する。イントネーションは研究者によって定義が異なるが、広義には「言語学的な機能を持つ声の高さの変動」(郡, 2003:109)であり、狭義には「平叙文や疑問文などの文の表現意図あるいはモダリティに応じて、文末や文節末に現れる上昇調や下降調」(郡, 2003:109)を指す。例えば、同じ文でも、終助詞が付加されない文は上昇すると「質問」(用例(3))、上昇しないと「断言」(用例(4B))や「納得」(用例(4A2))といった意味を持つとき

れる。

(3) A : 明日バイト？ (上昇調)

B : うん。

(作例)

(4) A1 : 明日、空いてる？

B : あ、ごめん。明日バイト。(非上昇調)

A2 : あ、そっか。明日バイト...(非上昇調)

(作例)

しかし、話し手の心情を表すため、話し手の考えにより異なった変動がみられることや、聞き手によって上昇、下降といった変動に対する判断が異なるという点から、イントネーションと発話意図との対応については定説が未だ確立されていない。イントネーションの分類については「共通理解と言えるのは、疑問文末尾が上昇することだけであろうか」(郡, 2003 : 112) というのが現状である。

また、終助詞が付加された場合には、付加されない文とは異なる発話意図を担うことになる(郡, 2003 ; 轟木, 2008)。例えば、終助詞「よ」は上昇、非上昇に関係なく、話し手が聞き手に対しある情報を言明することになる。さらに、終助詞は前接の語の最終拍に対する接続の仕方(順接・低接)も考慮する必要があるため、さらに記述が複雑になる(第7章で後述)。

(5) A : (桃の花を見つけて) ほら、桃だよ。(順接・疑問上昇調)

B : あ、本当だ。

(6) A : ほら、梅！

B : これ、梅じゃなくて桃だよ。(低接・平坦調)

(轟木, 2008 : 11 を筆者一部修正)

6.2.1.4 「音調」の定義

以上、日本語の音の高さに関わる3つの概念を確認したが、発話をそれぞれの概念のみで記述することは難しく、「現実の音声を観察すると、ある音の高さの変化が単語のアクセントによるものか、そうでないものかを区別するのが容易でないことがある」(郡, 2003 : 110)。このことから、郡(2003)では「音調」という用語を用いている。「音調」とは「アクセントによるものかどうかにかかわらず、そして言語学的な意味があるものもないものも含めて、声の高さの変動を一言で言い表すもの」(郡, 2003 : 110)である。そして、文末音調とは「述語の末尾音節にあらわれ、語彙的な現象(アクセント)では

なくイントネーションの型として認定できる音の高さの動き」(郡, 2015:33)をいう。イントネーションは広義の意味と狭義の意味を持つ。つまり、文末に限って使用される場合と、文全体の音の変化について使用される場合があり、議論が曖昧になる可能性がある。従って、本論文は郡(2003), 郡(2015)に倣いノダ形式の音の高さを記述する場合には、「(文末)音調」という用語を用いる。

6.2.2 音調の分類

6.2.2.1 終助詞が付加されない音調

本論文は終助詞の有無により文末音調と発話意図の対応が異なるという立場をとるため、終助詞が付加されない場合と付加される場合に区分し、先行研究を概観する。

郡(2012)では、各先行研究が規定する文末音調の(音声的)分類表を作成している。松崎・河野(1998)の分類を加え、郡(2012), 郡(2014)の一部を修正したものを表1に示す。

表1 東京方言の文末音調の類型

宮沢 (1960)	宮地 (1963)	上村 (1989)	川上 (1963)	松崎・河野 (1998)	郡 (2003, 2014)
平調	(意図表現イントネーションの) 下降調	基本音調		平調	無音調(平調 ⁵⁹)
昇調1	(意図表現イントネーションの) 上昇調	のぼり音調	普通の上昇調	上昇調	疑問型上昇調
			反問の上昇調		
			つりあげ調		
昇調2	([文末以外も含む卓立イントネーションの] 高調	つよめ音調	強めの上昇調	卓立上昇調	強調型上昇調
			浮き上がり調		
降調		くだり音調		下降調	急下降調 (顕著な下降調)
			昇降調 (川上 1956)		上昇下降調

⁵⁹ () 内の用語は郡(2003)で使用されていた旧称である。

これらの枠組みを見ると、現代の日本語を考える場合、終助詞が付加されない文末音調は5つに類型化できる。川上（1956）を除く20世紀の先行研究には郡（2003）のいう「上昇下降調」の記述がないが、「現在しばしば耳にする音調」（郡，2003：116）と指摘されるように、以前には使用が少なかった可能性がある。さらに、当該音調を下降調とする立場もあるが、下降調とは別の発話意図を担っているという指摘もあるため（郡，2003など）、本論文においても上昇下降調と下降調とを区別する。

以下、郡（2003）を基に、各音調の定義と用法を確認する。その他必要に応じて他の先行研究も引用する。なお、音調記号は郡（1995，2003）に準ずる。

I. 疑問上昇調（疑問型上昇調⁶⁰）（↑⁶¹）

疑問文の文末に典型的に現われるような直線的な上昇であり、音を長く伸ばせば、おむねその分だけ高くなる（郡，2003：113）音調である。「飲んだ（ノ'ンダ）？」「並んでる（ナランデル）？」のように文末詞なしの文末に用いられる場合は、聞き手に回答や反応を求める機能を持つ。また主張や要求のやわらげ、完全な同意の留保などの意味もあるとされる（郡，2014：89）。

II. アクセント上昇調⁶²（強調型上昇調）（↑）

郡（2003）の「強調型上昇調」に準じる。強めを伴うことも多く、上昇のしかたはアクセントに伴う上昇と同じであり、音を伸ばしてもそのまま同じ高さを保つという特徴がある。上昇自体はさほど大きくないことが多い。疑問上昇に比べると音声的に上昇の開始点が早く、全体の長さも短い（郡，2003；轟木，2008；轟木・山下，2013）。

発話意図は「テレ↑ビ」のように子供がだだをこねて要求（承認要求）するとき、何度言ってもわからない相手に強調して「いやで↑す」のように言う場合などに典型的に現われる。その他、「そうだと思ったん↑だ」のような告白の用法があり、いずれの場合も「伝達内容やそれを言う自分の気持ちを聞き手が知らないと思われる状況、あるいは聞き手が理解しようとしめない状況下で、それを聞き手に確実に認識させたいという一方的な気持ち「認識要求」であると思われる」（郡，2014：91）とある⁶³。郡（2014）では、音声的分類に「平坦調」を加えているが、これは音韻論的な分類ではアクセント上昇（強調型上昇）の一種とされる。

⁶⁰ 郡（2003）では、疑問文だけに使用されるわけではないことから、「疑問型上昇調」と呼んでいるが、本稿では轟木（2008）らに倣い、「疑問上昇調」という呼び方をする。

⁶¹ 音調記号の矢印は上昇開始点に付す。「'」はアクセントの下がり目を示す。

⁶² 郡（1995，1997）では「強調上昇調」、郡（2003，2012）では、「強調型上昇調」と呼んでいるが、本論文は「強調」という用語を使用すると、語彙的意味を連想する可能性があるため、「強調」という用語は使用せず、轟木（1995，2008）らに従い、「アクセント上昇調」という用語を用いる。

⁶³ その他「その子に桃太郎という名を付けまし↑た」のような終了明示の用法が指摘されている（同）。

Ⅲ. 平調（無音調）（無記号または∅）

平叙文の文末拍に典型的に現われ、顕著な高低変化がない（郡，2003）。顕著な下降はしないが，文末にかけて緩やかに下降することから「自然下降調⁶⁴」と記述されることもある。郡（2003）では，「機能としても特別なものを持たない」（p.116）とされる。

Ⅳ. 上昇下降調（↑↓）

アクセント上昇の直後に顕著な下降が続くもので，「早くしてくれ」の意味で親しいものに「ハ'ヤ↑ク↓ー」などの訴えかけ，「ヒロ↑シ↓ー」のような呼びかけなどに使われる。この音調の機能は，「反応要求をとまなう認識要求」とされる（郡，2014：93）。

Ⅴ. 急下降調（顕著な下降調）（↓）

末尾音節内で急な下降をするもので，音韻論的な分類では上昇下降調の一種とされ，出現環境も主に無核アクセント，または有核アクセントの尾高型の末尾が一般的であるが，「ソ'ウナダ↓」のように頭高型でも実現可能である（郡，2014）。発話意図には「ナルホド↓ー」のように納得など「新事態の認識表明」（同 p.93）とされる。

6.2.2.2 「の」が付加された音調

以上，郡の一連の研究を中心に，終助詞が付加されない音調の類型化と各音調の発話意図について概観した。次に，「の」の音調を記述した轟木（2008）をみる。轟木（2008）は文末の「の」を終助詞とし，産出音調と発話意図の対応を記述している。第4章で述べたように，ノダの「の（∅）」が終助詞化しているかどうかについてはいまだ定説がないが，本論文は現時点では態度を保留し，ノダの具現化形式として捉え，終助詞が付加されない音調と同一のものとして考える。

轟木（2008）は「の」の形態的意味を「発話内容を一まとまりのものとして捉える」（p.18）とし，音調と発話意図との対応を以下のように類型化している（（ ）内筆者補足）。

(i) [音調] 低接（前接のアクセント核に関わらず低く接続する）・平坦調⁶⁵

[意味・用法] 相手の発話内容を認知したことを表明する。

(7) (説明されて)「ふーん，これ桃なの（モモナ'ノ）。知らなかったわ」

(轟木，2008：18①)

⁶⁴ 郡（2003）では，「自然下降」と記述される理由を意図的な下降と区別し「呼気圧の漸減に拠る生理的な現象」と考えられているため，としている。

⁶⁵ 郡（2014）の「平調（無音調）」に相当する。

- (8) 「あ、もう帰るの (カ'エルノ)。残念ね。」 (同④)
- (ii) [音調] 低接・疑問上昇調
[意味・用法] 発話内容を問いかけとして聞き手へ投げかける。
- (9) 「これ、本当に桃なの (モモナノ) ?」 (同①)
- (10) 「え、もう帰るの (カ'エルノ) ? まだいいじゃない。」 (同④)
- (iii) [音調] 低接・アクセント上昇調
[意味・用法] 発話内容を強い主張として表明する。
- (11) 「これ、本当に桃なの (モモナ'↑⁶⁶ノ) ! 信じてよ。」 (同①)
- (12) 「もう帰るって言ったら帰るの (カ'エル↑ノ) !」 (同④)

轟木 (2008) では、疑問上昇調とアクセント上昇調が機能上対立する最も典型的な終助詞であると指摘している。また、「の」はもともと女性語と言われているが、現在では男性にもみられるとし、特に (ii) は「男女差はなくなる傾向にあり」(p.18)、(i) の「のだ・んだ」は「中年以下の世代ではほぼ男女とも使用しているようである」(同)と記述している。

轟木 (2008) では立場を明確にしていないが、以上の記述から推察すると、「の」を終助詞、としながらも、「のだ・んだ」と同一の形式、つまりノダとして捉えているようである。

なお、村中 (1995) も轟木 (2008) と同様に、「の」の上昇調には「アシタイクノ」は「問いかけ」、「イクッタライク↑ノ」は「(特定の) 反応要求、念押し」がある、とする立場を取っている。ただし、上昇音調の例として挙げているものであり、「の」特有の対応とはしていない。

6.2.3 本論文が援用する知見と解決すべき問題

以上、郡 (2012, 2014) を基に、終助詞が付加されない文末音調についての先行研究の類型化を概観し、当該音調は大きく「疑問上昇調」「アクセント上昇調」「平坦調」「上昇下降調」「急激な下降調 (以下、下降調)」に類型化できることを確認した。次に、本論文が分析対象とする「ノダ」を考察するうえで、援用する知見と解決すべき問題につ

⁶⁶ この場合、ノはナより低く始まりその後上昇する (轟木, 2008 : 18)。

いて述べる。

6.2.3.1 援用する知見

本章では終助詞が付加されない裸のノダの具現化形式「の (∅)」「んだ (∅)」を中心に考察を行い、終助詞が付加されたノダ形式については第7章で考察する。

文末音調の類型化の前提として、当該形式の接続形式を確認する。先行研究を踏まえると、「の (∅)」と「んだ (∅)」は接続形式が異なると考える。敷衍すると、「の」は轟木 (2008) の指摘にあるように前接のアクセント型に関わらず低く接続する低接である。それに対し、「だ」は「桜だ (サクラダ)」「きれいだ (キレイダ)」のように、前接の語のアクセント型に準じる順接である。ただし、本論文が考察対象とする「んだ」は「ん (の)」が低接であり、例えば「桜だ (サクラダ)」は無核であるが「桜なんだ (サクラナ^ンダ)」とノダを伴うと必ず有核となるため、順接、低接の対立は中和されることになる (郡, 2003)。従って、両形式は異なる音韻体系を持つと考える。

「の」の音調については轟木 (2008) が「低接・疑問上昇調」「低接・アクセント上昇調」「低接・平坦調」を挙げていた。それ以外の音調は「上昇下降調」及び「下降調」であるが、まず「低接・上昇下降調」の「の」は筆者の内省では地域方言で使用されることはあっても、東京方言には表れない音調と考える。次に、「低接・下降調」については、「低接・下降」は「低接・平」のバリエーションと考える方が自然 (轟木・山下, 2013 : 255) である⁶⁷ことから、「の」の音調は轟木 (2008) のいう3つと考えるとよいと思われる。

一方、「んだ」を終助詞のない文末音調と考えると、下降調は「新事態の認識表明」 (郡, 2014 : 93) とあり、情報受容の「んだ」の発話意図と合致する。従って、下降調は「んだ」の主要な音調と推察される。一方、当該形式の平調 (無音調) は特別な機能を持たないとある。さらに、当該形式は前接の語のアクセント型に関わらず「ん」で低く接続することになるため、順接と低接の対立は中和される (轟木, 1998 ; 郡, 2003)。また、郡 (2003) が指摘するように、下降調は聴覚的に平調と区別が難しいため、平調は下降調のバリエーションと考えるとよいと思われる⁶⁸。従って、「んだ」のとりうる音調は下降調、疑問上昇調、アクセント上昇調、上昇下降調の4つと考える。

6.2.3.2 解決すべき問題

⁶⁷ 郡 (2003) でも「順接及び低接の下降調は、直前の形式を高くすることはあっても、文末詞内部では単なる母音延伸として実現されるようであり、平調と区別が難しい」(p.123) とある。

⁶⁸ 注 67 参照。実際に、予備調査として「彼に会ったんだ」「それは嫌なんだ」の下降調、平坦調を南関東出身話者5名に聞かせたところ、全員が「発話意図に違いがあるとは思わない」と回答した。

郡（2003, 2012, 2014）など一連の研究では、自身の内省及び会話データ、母語話者に対する聴取実験を用いて終助詞が付加されない場合の音調の機能を類型化している。それにより、文末音調の説得的な記述がなされている。また、文末音調の類型と発話意図の対応については先行研究とある程度の一致がみられることから、氏の分類は終助詞が付加されない場合に援用できると考える。したがって、本論文では郡の分類を参考に、「んだ」の音調の分類を試みる。

一方で、ノダ形式の音調を考えた場合、郡やその他の先行研究が示す音調の分類が、本論文が対象とする「だ」が付加された場合についても同様の機能が該当するかというと、必ずしもそうではないようである。郡（2003）には、音調と機能の対応関係は終助詞がある場合とない場合とで区別すべきとし、その理由を以下のように述べている。

たとえば、「本当だよ」は、相手にどうしても認めてほしい場合には、順接の顕著な下降調でホントダヨ↓とすることがある。また轟木（1998）によれば、同意や確認を求める時にオモイネ↓（重いね）、あの人が君のセンパイダナ↓（先輩だな）のように順接の顕著な下降調で言うことができるようである（表記は郡）。しかしこれらに音調としての機能上の共通点を認めるのは困難に思われる。しかも、それを文末詞なしで意外な情報に接した時に言うホント↓（本当）、ホントダ↓（本当だ）の下降調の機能に結びつけるのはいっそう困難である。
(郡, 2003 : 123)

郡（2003）のこの記述から、郡は「だ」を伴う文末は文末詞なしの場合と同様に扱っていると推察されるが、たとえば「ホントー」（本当？）は質問文になり得るのに対し、「ホントダ」（本当だ？）は疑問上昇調にしても質問文とは認識されにくい。そうすると、「だ」の音調は文末詞なしとは異なる音韻体系を持っている可能性がある。つまり、「だ」は筆者の内省ではとりうる音調が制限され、特に上昇調は出現しにくいと推察される。

さらに、ノダ文となると音調は一層複雑である。具体的な例を挙げると、郡（2014）が指摘するように、ノダ文の「だ」は上昇調が出現可能であり、さらに、下降調とは機能が異なるように思われる。具体的な例を挙げると、筆者の内省では下降調の「きれいなんだ↓」というのは自身の意見表出をする時にも、相手から何らかの情報を得て、自身の認知環境が変化した時にも使用されるのに対し、アクセント上昇の「きれいなん↑だ」は自身の意見表出にのみ使用されると考えられる。さらに、現代日本語では同様の意見表出に上昇下降調も使用されるようである（郡, 2003）。この点を踏まえると、少なくともノダの「だ」については終助詞と同じように独自の対応関係を記述する必要が生じてくる。

本論文は、ノダ形式の音調に注目するため、「んだ」を考察対象とするが、「本当（ホ

ントー)。」のように終助詞が付加されない文末音調と「んだ」の文末音調が異なった音調の体系を持つことというのは、異なった機能を持ちうるとも考えられる。「んだ」の音調に関する研究は管見の限りみられないため、母語話者に対する印象度調査及び自然会話での使用実態を把握する必要がある。

6.2.3.3 本論文の立場

これまで、音調に関する先行研究を概観し、援用すべき点と今後明らかにすべき点を述べた。本章では、「の (∅)」「んだ (∅)」の音調に着目した実験を行うが、実験を行ううえで本論文が重視する点について確認する。

I. 「んだ」および「の」の音調と機能の対応関係の考察

先述したように、文末の「だ」は終助詞とは性質の異なる面もあるが、一方でモード形式であり、話し手の心的態度を表明するという点では共通している。そして、「だ」は伝達的モード及び述定的モードという二つの異なるモードを担うことから、それぞれのモードに使用される音調も異なると予測される。そこで、本論文は特にノダの「だ」に注目し、当該の「だ」が独自の音韻体系を持つと考え、音調と機能の対応関係を考察する。そして、6.2.3.2 で述べた筆者の内省の妥当性について、母語話者に対する聴取実験を行い検証する。また、「の (∅)」については、轟木 (2008) の音調の類型化を援用するが、轟木の記述する音調と発話意図との対応関係の妥当性については再考の余地があると考え、同様に聴取実験により検証する。

II. 東京方言話者を対象とした文末音調の検証

本論文は第4章で呈示した「んだ (∅)」と「の (∅)」の手續きの意味の仮説を母語話者に対する聴取実験により考察する。実験は分析対象者を限定することで、汎用性のある記述を目指す。具体的には、本論文では自然会話及び母語話者に対する聴取実験により分析を行うが、対象者を南関東出身の母語話者に限定する。全国で共通に理解される音韻体系を記述することは意義のあることであるが、日本語教育に提言することを念頭に、まずはより基本的な当該形式の音調と発話意図の対応を記述することを目的とし、本論文では東京方言を用いた文末音調に注目する。

III. 男女の発話文の比較

第4章では情報提示のノダとしての「の」の使用に性差があるとする先行研究があったが、本調査では男性の使用も観察された。ただし、本調査は大学(院)生の発話を対象とした結果であるため、幅広い世代で当該の「の」が使用されるか否かは明らかになっていない。もし、先行研究の記述が正しければ、疑問文の「の」は許容されるが、平

叙文の「の」は容認度が下がる可能性がある。そこで、聴取実験を用いて、男性の「の」の容認度について音調の点から検証を行う。

第5章のコーパス調査により、男女間で「んだ」の使用に差異が認められた。具体的には、女性は「んだ」を情報受容場面で多用するのに対し、男性は情報受容場面、情報提示場面で同程度使用していた。従って、音調の解釈についても差異があると予測される。具体的には、6.2.3.2で述べたように、アクセント上昇調は男女にかかわらず情報提示と解釈され、下降調は男女間で解釈が異なるのではないかと思われる。この予測の妥当性を聴取実験により検証する。

以上3つの点を踏まえ、「んだ (∅)」「の (∅)」の音調について以下二つの仮説を呈示する。

仮説 a. 「んだ (∅)」「の (∅)」の音調は以下のとおりである。

<「んだ (∅)」の音調>

疑問上昇調 アクセント上昇調 上昇下降調 下降調

ただし、「んだ (∅)」の疑問上昇調は容認されにくい。

<「の (∅)」の音調>

(すべて低接) 疑問上昇調 アクセント上昇調 平坦調

仮説 b. 当該形式の音調には男女差があり、「んだ (∅)」の下降調は、女性は情報受容のノダと解釈されるが、男性は情報受容のノダだけでなく、情報提示のノダとも解釈される。一方、「の (∅)」の低接・疑問上昇調は、性差なく使用が容認されるが、低接・アクセント上昇調、低接・平坦調は女性と男性では使用の許容度に差がある。

以上の点を考慮し、第4章で呈示した「んだ (∅)」「の (∅)」の手続き的意味の仮説の妥当性を検証する。そして両形式の最終的な手続き的意味を記述し、さらに音調と発話意図との対応を体系的に示す。

6.3 調査

6.3.1 調査概要

調査の概要は以下の通りである。

調査目的：6.2.3.3の「の (∅)」「んだ (∅)」の音調と発話意図との対応についての仮説を検証する。

被調査者：10代から50代の南関東出身（東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県）の日本語母語話者30名（男性15名，女性15名）×2グループ

調査時期：2015年4月～2015年9月

調査材料：以下の刺激文4文を「んだ（∅）」音調4種，「の（∅）」音調3種を使用した発話28文の男女発話（筆者が名古屋大学の音声実験室においてSONY IC RECORDER ICD-SX77を用いてLPEC形式で録音した音声）

刺激文1. 彼に会った（の／んだ）

刺激文2. あの店美味しい（の／んだ）

刺激文3. それは嫌な（の／んだ）

刺激文4. そうな（の／んだ）

刺激音作成者属性：東京都・30代・男性，福井県・40代・女性

ただし，女性発話者は東京式アクセント型地域出身者ではないため，東京式と同等であるかを東京出身話者に確認の上使用した。

調査方法：

手順1. 被調査者にメールで刺激音及び回答シート（付録1）を送付する。

手順2. 被調査者は刺激音を聞き，連想する発話意図をメールで回答する。

刺激文は語彙的な意味の影響が音調の自然さに関わる可能性を考慮し，文として中立的なもの（刺激文1，4），肯定的形容詞を含んだもの（刺激文2），否定的形容詞を含んだもの（刺激文3）を選定した。

使用した刺激文のピッチ曲線をPraat⁶⁹ ver.5.3.52を用いて作成した（付録2）。縦軸が高さ，横軸が時間を示し，高さの単位はHzである。

被調査者は女性発話を聞くグループ（1群）と男性発話を聞くグループ（2群）に分けた。被調査者の概要を表2に示す。

表2 被調査者の内訳

		10代	20代	30代	40代	50代
1群	女	2	3	3	4	3
	男	3	3	2	5	2
2群	女	1	4	4	4	2
	男	3	4	2	4	2

被調査者には，音声を聞くのは原則1回であること，連想する発話意図は全て回答すること，同じ発話意図を連想した場合は，可能であればニュアンスの違いを回答するこ

⁶⁹ Praatはアムステルダム大学のPaul BoersmaとDavid Weeninl両名によって開発された音声分析用のフリーソフトウェアである。

と、音調が自然会話の中で不自然と考える場合は「不自然」、不自然ではないが発話意図が想起できない場合は「わからない」と回答することなどを指示した。

6.3.2 調査結果

6.3.2.1 「の (∅)」の音調と連想する発話意図

次に、それぞれの刺激音について連想した発話意図を表 3, 4 に示す（被調査者の回答結果の詳細は付録 3 を参照されたい）。発話意図はこれまでの類型化に基づき、「情報提示」「情報受容」「疑問」「わからない」「不自然」に類型化した。「(相手に聞かれて)肯定」は情報提示に、「納得」「あいづち」は情報受容に、「確認」は疑問にそれぞれ分類した。5 割以上の被調査者から得られた発話意図をゴシックで示す。

表 3 「の」の音調と連想する発話意図（女性発話）

	低接・疑問上昇	低接・アクセント上昇	低接・平坦
会ったの	疑問 (30)	疑問 (13) 提示 (16) 不自然 (1)	疑問 (3) 提示 (23) 受容 (3) 不自然 (2)
美味しいの	疑問 (30)	疑問 (13) 提示 (15) 受容 (1) 不自然 (2)	疑問 (1) 提示 (19) 受容 (3) 不自然 (5) わからない (2)
嫌なの	疑問 (30)	疑問 (2) 提示 (28)	疑問 (2) 提示 (19) 受容 (7) 不自然 (2) わからない (1)
そうなの	疑問 (29) 受容 (1)	疑問 (5) 提示 (23) 受容 (1) 不 自然 (1)	疑問 (1) 提示 (12) 受容 (16) わからない (1)

表 4 「の」の音調と連想する発話意図（男性発話）

	低接・疑問上昇	低接・アクセント上昇	低接・平坦
会ったの	疑問 (30)	提示 (24) 不自然 (6)	疑問 (1) 提示 (23) 不自然 (6)
美味しいの	疑問 (30)	提示 (18) 不自然 (10) わからない (2)	疑問 (3) 提示 (12) 受容 (6) わからない (4) 不自然 (5)
嫌なの	疑問 (30)	提示 (27) 不自然 (3)	疑問 (1) 提示 (18) 受容 (3) 不自然 (7) わからない (1)
そうなの	疑問 (30)	提示 (23) 受容 (1) 不自然 (6)	提示 (13) 受容 (12) 不自然 (5) わからない (1)

調査の結果、疑問上昇調の「の」は女性の発話の「そうなの」で情報受容とした1名を除くと男女発話とも疑問という意見で一致していた。

アクセント上昇調は、男性発話は「情報提示」と判断される一方で、女性発話は「彼に会ったの」「あの店美味しいの」については「疑問」という回答も同程度あった。平坦調は女性刺激文の「そうなの」を除くと轟木（2008）とは異なる結果となり、情報提示との解釈が情報受容を上回っていた。

その他、疑問上昇調の「質問」のニュアンスを「相手が言ったことを疑って質問」（10, 30代女性, 20, 40代男性）のような回答が得られた。特にアクセント上昇調、疑問上昇調両音調を「質問」とした被調査者からはそのような意見があった。アクセント上昇調は「強く主張」「言い張る」「気持ちを強調する」のような相手に自身の立場を明確に示す、とした回答が男女とも7割を超えており、特に平坦を情報提示とした被調査者からは「(平坦調より) 強く主張, 断言している⁷⁰」という回答が得られた。

女性の刺激文を「不自然」と判断した被調査者は「あの店美味しいの」の低接・平坦調で5名いたものの、その他の文については発話意図の回答が9割を超えていた。それに対し、男性の刺激文はアクセント上昇調、平坦調で「不自然」という回答が複数あり、特に「あの店美味しいの」は3割を超えていた。意図はわかるが不自然とする意見も多数あり、その理由として「女性的」「幼稚に聞こえる」「男性が使うべきでない」と回答されていた。

6.3.2.2 「んだ (∅)」の音調と連想する発話意図

次に、「んだ (∅)」の音調と想起する発話意図を表5、表6に示す。表5は女性発話に対する回答、表6は男性発話に対する回答である。

表5 「んだ」の音調と連想する発話意図（女性発話）

	疑問上昇	アクセント上昇	上昇下降	下降
会ったんだ	提示 (17) 受容 (2) わからない (5) 不自然 (7)	提示 (29) 受容 (1)	疑問 (3) 提示 (12) わからない (3) 不自然 (12)	疑問 (3) 提示 (5) 受容 (22) 不自然 (2)
美味しいんだ	疑問 (3) 提示 (12) 分からない (6) 不自然 (6)	提示 (28) 受容 (1) わからない (1)	提示 (8) 受容 (4) わからない (6) 不自然 (12)	提示 (1) 受容 (29) わからない (1)

⁷⁰ 被調査者にはカウンターバランスを用いて、刺激文に番号を付記して提示しているため、実際には「2番より強く主張」のような番号での回答であった。

嫌なんだ	提示 (16) わからない (5) 不自然 (9)	提示 (28) 受容 (1) 不自然 (1)	提示 (11) 受容 (4) わからない (6) 不自然 (10)	疑問 (5) 提示 (3) 受容 (23)
そうなんだ	疑問 (5) 提示 (10) 受容 (2) わからない (5) 不自然 (8)	提示 (27) 受容 (3) 不自然 (2)	受容 (11) わからない (9) 不自然 (11)	疑問 (1) 受容 (29)

表6 「んだ」の音調と連想する発話意図（男性発話）

	疑問上昇	アクセント上昇	上昇下降	下降
会ったんだ	疑問 (8) 提示 (6) わからない (4) 不自然 (12)	提示 (25) わからない (1) 不自然 (4)	疑問 (1) 提示 (10) わからない (3) 不自然 (16)	疑問 (4) 提示 (7) 受容 (19) 不自然 (1)
美味しいんだ	疑問 (4) 提示 (3) 受容 (2) わからない (6) 不自然 (14)	提示 (26) 不自然 (4)	疑問 (1) 提示 (7) 受容 (4) わからない (7) 不自然 (11)	疑問 (1) 提示 (4) 受容 (23) わからない (1) 不自然 (1)
嫌なんだ	疑問 (8) 提示 (3) わからない (7) 不自然 (12)	提示 (24) 受容 (1) 不自然 (5)	疑問 (1) 提示 (8) 受容 (2) わからない (6) 不自然 (13)	疑問 (1) 提示 (10) 受容 (19)
そうなんだ	疑問 (4) 受容 (4) わからない (8) 不自然 (14)	提示 (26) 受容 (1) わからない (1) 不自然 (2)	疑問 (2) 提示 (5) 受容 (3) わからない (6) 不自然 (14)	提示 (1) 受容 (28) 不自然 (1)

筆者の内省の通り、疑問上昇調の場合、男性刺激文は疑問文のノダという解釈もあったものの、回答数は少なく、不自然が3割を超えていた。一方、女性刺激文は全体的に「不自然」という回答が最も多かったものの、「彼に会ったんだ」「それは嫌なんだ」は情報提示のノダと回答した被調査者が半数以上いた。その場合、「優しく伝えている」

(20, 40, 50代女性), 「親しい関係で話している」(40代男性) などのような含みがあるという意見や, 「そのあと誘いがありそう」(10代男性) 「話が続きそう」(20, 50代男性) といった意見もあった。上昇下降調も不自然という判断がほぼ5割を占めた一方で, 「昔のことを思い出しながら話す」(10代男性) 「その後話が続きそう」(20, 40代女性, 20, 50代男性) といった意見が少数ではあるものの世代に関わらず得られた。

「んだ(∅)」の音調で発話意図の回答が安定して得られたのはアクセント上昇調及び下降調であったが, 連想する発話意図については, アクセント上昇調は「情報提示」という回答が8割, 下降調は男性刺激文の「それは嫌なんだ」を除くと「情報受容」という回答が7割を超える結果となった。これは郡(2014)がアクセント上昇調を「認識要求」, 下降調を「新事態の認識表明」としたのと一致する。

ただし, 具体的な回答例を見てみると, 例えばアクセント上昇調で発話された「嫌なんだ」について, 「嫌だと言っているが, あまり嫌そうでない」(40代女性), 「嫌だけど感情をストレートに出さないで, 相手に配慮して伝えている」(20代女性) 「自分はやりたくないということを相手が気分を害さないように, でもはっきりと伝えている」(40代男性) のように, 「認識要求」というより, 相手を気遣うような意見があった。一方, 下降調で発話された「嫌なんだ」を情報提示と回答した中には「相手の提案に自分の意志で拒絶している感じ」(20代男性), 「今実際に起きていることに対し嫌なんだと伝え, すぐにやめてほしいという意味が含まれている」(30代女性) のように, 相手に対する否定的な発話意図を明示するという意見があった。

一方, 下降調の「んだ」で情報受容とした回答には, 「相手の意見を聞き入れるようなニュアンス」(30代男性), 「自分は知らなかったという意味で使う」(40代女性), 「相手の話を受け止めた」(40代男性) のような意見が得られた。

以下, 「の(∅)」と「んだ(∅)」の音調と想起する発話意図の調査結果をまとめる。

- i. 「の」は先行研究の記述通り低接・疑問上昇調の刺激文はほぼ「質問」と解釈され, 先行研究を支持する結果となった。
- ii. 「の」のアクセント上昇調は男性刺激文については先行研究の指摘通り「情報提示」と解釈されたが, 女性刺激文の低接・アクセント上昇調は「彼に会ったの」「あの店美味しいの」については「質問」と「情報提示」という回答が同程度であり, 低接・平坦調は「そうなの」を除き「情報提示」という回答が「情報受容」を上回る結果となり, 先行研究と異なる結果となった。
- iii. 「の」は女性刺激文を「不自然」としたのは「あの店美味しいの」の低接・平坦で約2割あったものの, その他の文については発話意図の回答が得られたのが9割以上であった。それに対し, 男性刺激文の低接・アクセント上昇調, 低接・平坦調で「不自然」と判断されたものが女性に比べ多く, 「あの店美味しいの」のアクセント上昇調は「不自然」という回答が3割を超えていた。

- iii. 「んだ」の下降調は男性刺激文の「それは嫌なんだ」を除くと「情報受容」という解釈が7割を超えており、先行研究を支持する結果となった。
- iv. 「んだ」のアクセント上昇調は男女刺激文とも「情報提示」との回答が8割を超えていた。ただし、先行研究の「認識要求」という記述とは異なり、相手に配慮し、気持ちを抑えて伝達する、というような意見が得られた。
- vi. 「んだ」の上昇下降調及び女性刺激文の疑問上昇調は「不自然」「わからない」の回答が3割を超えていたが、発話意図が解釈された場合は、「情報提示」と解釈される傾向にあった。特に上昇下降調は「その後も話が続きそう」といった含みがある、という回答が得られた。

6.4 考察

以上、聴取実験により、「の」「んだ」の各刺激文について想起する発話意図を示した。本調査の目的は、音調が聞き手の発話意図を制約する手続き的意味を持つ、という先行研究（Imai, 1998 ; Wilson & Wharton, 2005）を援用し、文脈を切り離れた状態で調査を行った。結果、文脈がなくとも聞き手の発話解釈の推論過程を制約する、つまり高次表意が復元される音調があることが分かった。ただし、本調査はメールによるものであり、回答の意図が被調査者によって異なる可能性がある。また、各被調査者が使用する「確認」のような用語の定義が異なる可能性もあるため、条件の統制も十分とは言えない。そのような問題点を踏まえたうえで、本節では、各刺激文が解釈可能か否か、そして解釈可能な場合、どのような発話意図を想起するか、という点から考察を行う。

6.4.1 許容される音調

まず、各刺激文が安定して解釈可能か否か、という点を考える。表7に「の」の解釈結果を示す。

表7 刺激文の音調と解釈の可否（「の」）

	低接・疑問上昇調	低接・アクセント上昇調	低接・平坦調
女・会ったの	○	○	○
男・会ったの	○	○	○
女・美味しいの	○	○	△
男・美味しいの	○	△	△
女・嫌なの	○	○	○
男・嫌なの	○	○	△
女・そうなの	○	○	○
男・そうなの	○	△	○

ここでは便宜上、8割以上の回答が得られたものを「解釈が容易」として○、6割以上を「解釈可能」として△、5割以下を「解釈が困難」として×で示す。表7を見ると、「の」は男女発話文のすべての音調について解釈可能と判断されたことがわかる。つまり、轟木(2008)が記述する「の」の音調が本論文においても支持される結果となった。また、男性発話のアクセント上昇調、平坦調は「不自然」「わからない」とする回答は複数あったものの、すべての刺激文が解釈可能以上であったことから、男女の発話について、音調と自然さはある程度共通していることが示唆された。

具体的に刺激文を見てみると、「あの店美味しいの」の低接・アクセント上昇調、低接・平坦調は若干自然度が下がる結果となった。これは、語彙的な意味が影響している可能性がある。まず、アクセント上昇調は男性刺激文の許容度が下がったが、これは、男性が当該音調を用いた場合、「あの店がおいしいことを否定された後の自己主張」(30代男性)、「なんで理解してくれないの、と思いながら事実を伝えている」(20代男性)のような印象を与える。これらを踏まえると、男性が美味しいことを理解してもらえない状況で相手に承認要求する、ということが想定しにくいためではないかと推察される。

低接・平坦調は男女とも許容度が下がったが、これも「美味しい」という語彙の意味と当該音調が符合しにくいためであろうと考えられる。このことは、低接・平坦調で「美味しいの」のみ「解釈が容易」ではなく、「解釈可」という結果になったのは、「低接・平坦調の「の」は情報提示を意図する」という前提があることが示唆される。従って、低接・平坦の「の」が「情報提示」と解釈される傾向にあると指摘できる(6.3.4.2で後述)。

次に、「んだ」の音調と解釈結果を表8に示す。「の」の結果とは異なり、男女間で判定に差はみられず、アクセント上昇調、下降調が解釈可能という結果となった。

表8 刺激文の音調と解釈の可否(「んだ」)

	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
女・会ったんだ	△	○	×	○
男・会ったんだ	×	○	×	○
女・美味しいんだ	×	○	×	○
男・美味しいんだ	×	○	×	○
女・嫌なんだ	△	○	×	○
男・嫌なんだ	×	○	×	○
女・そうなんだ	×	○	×	○
男・そうなんだ	×	○	×	○

つまり、当該形式の自然な音調、不自然な音調が二分される結果となり、「んだ」の解釈可能な音調はアクセント上昇調と下降調であることが明らかとなった。疑問上昇調

と上昇下降調が解釈不可、もしくは不自然と判断された理由については、以下のように考える。まず疑問上昇調は、主な発話意図が「回答要求」(郡, 2014: 93)であることから「んだ」という形式と発話意図が非整合であると判断されたためであろう。同様に、上昇下降調の容認度が低かった点についても「反応要求をともなう認識要求」(同)の発話意図が断定の「だ」を含む「んだ」と非整合であると判断されたためと推察される。以上のことから、当該形式の音調に関しては、郡(2003, 2014)らの文末音調の類型化より限定されることが分かった。

女性発話については疑問上昇調で許容度が上がったが、これは1990年代から「注目要求」などの音調として使用されるようになった半疑問イントネーション⁷¹(郡, 2003)が「んだ」に関しても容認されるためではないかと思われる。

6.4.2 音調と発話意図の対応

6.4.2.1 「の」の音調と発話意図の対応

次に、各形式の音調と発話意図の対応について考える。

まず、「の」の音調と発話意図についてであるが、低接・疑問上昇調は女性刺激文「そうなの」を「情報受容」とした1名を除く全員に疑問文のノダとして解釈され、轟木(2008)を支持する結果となった。「の」が低接・疑問上昇調の場合には「話し手の判断の妥当性を聞き手に求める、もしくは当該状況において話し手にとって最も関連性のある情報を聞き手に求める」という意図を聞き手に伝達する、と考えてよいと思われる。

低接・アクセント上昇調は轟木(2008)によると「発話内容を強い主張として表明する」であった。郡(2014)でも、終助詞が付加されないアクセント上昇調(郡(2014)では「強調型上昇調」)は「確実な認識の要求」としており、当該音調の発話意図は共通している。本調査においても、「情報提示」のノダと認識される傾向が強く、その場合「強い主張」というニュアンスを想定した回答が多かった。ただし、女性刺激文の「彼に会ったの」「あの店美味しいの」については、疑問文のノダと解釈する被調査者も同程度いたことから、低接・アクセント上昇調は低接・疑問上昇調ほど聞き手の解釈を強く制約するとは言えず、文脈に依存する傾向が示唆された。また一方で、アクセント上昇調は「単なる強めにしか聞かれないか、あるいは気づかれても疑問上昇調との聞き分けが難しいようである」(郡, 2003: 115)といった指摘もあることから、疑問上昇調の変種とみなされたため、疑問文のノダと解釈された可能性もある。

一方、低接・平坦の「の」は「相手の発話内容を認知したことを表明する」(轟木, 2008)、「新事態の認識表明」(郡, 2014)という記述とは異なる結果となり、「そうなの」を除くと「情報提示」のノダと解釈される傾向にあった。また、同じ「情報提示」を意

⁷¹ 「半疑問イントネーション」は「疑似疑問イントネーション」(井上, 1997)とも言われる。

図する低接・アクセント上昇調とはニュアンスの違いがあると解釈する被調査者も複数おり、例えば「彼に会ったの」について、低接・アクセント上昇調は「なんで理解してくれないの、と思いながら伝えている」のに対し、低接・平坦調は「事実を淡々と伝えている」(40代男性)といった回答が複数の被調査者から得られており、同じ「情報提示」のノダであっても、使用分布が異なり、低接・アクセント上昇調の「の」は聞き手の想定を破棄しようとする話し手の意図を伝達するが、低接・平坦調の「の」はそうした意図は明示せず、聞き手に認知効果を与える意図のみ伝達すると考えられる。

以上の考察から、話し言葉コーパスだけでなく、音調を踏まえた分析でも、「の」は聞き手目当て性を持ち、疑問文のノダ、平叙文の「情報提示」のノダとして使用される傾向が強いことが指摘できる。

6.4.2.2 「んだ」の音調と発話意図の対応

調査を行うに当たり、郡(2003)らを援用し「んだ」の音調を4つに設定した。調査の結果、「んだ」の自然な音調はアクセント上昇調と下降調であった。第5章では「んだ」が平叙文の「情報提示」のノダ、「情報受容」のノダのいずれにも使用されていたが、この二つの対照的な発話意図を異なる音調が伝達していると考えられる。

本調査の結果、下降調の「んだ」は概ね「情報受容」のノダと解釈されていた。これは郡(2014)のいう「急激な下降調は新事態の認識表明に使用される」という記述を支持する結果となった。

アクセント上昇調については、すべての刺激文において「情報提示」と解釈される傾向が強かった。このことから、聞き手の発話解釈にかかる処理コストを軽減するため、異なる音調である上昇調が使用されていると指摘できる。ただし、発話意図については、郡(2014)の「確実な認識の要求」とは異なる意図を伝達することが示唆された。敷衍すると、被調査者の回答には「嫌だと軽く言っている」(20代男性)、「相手が気分を害さないように、しかしはっきりと伝えている」(40代男性)、「相手に配慮しながら言っている」(20代女性)といったように同じ音調の「の」が「認識を強要する」と解釈されたのとは異なり、「情報伝達」であっても、相手に認識を要求する度合いが低い(もしくは低いようにふるまっている)ことがわかった。では、なぜ「んだ」がアクセント上昇調で発話されると情報提示と解釈されるのであろうか。

この点について、本論文では以下のように考える。まず、前提として本形式は確言、断定の判定詞「だ」を含むため、文末の場合、排他的に断定の意図を伝達するためには、平調(無音調)で発話されると考えられる(松崎・河野, 1998: 116)。本論文は当該形式の場合、下降調も同様の発話意図を伝達することが可能と考える。そこで上昇調で発話する、ということは、別の発話意図を伝達する意図があると考えられる。川上(1963)、和田(1975)は上昇調の意味を「相手とのつながりを求める気持ちを表わす」とする。

例えば川上（1963）には「相手とのつながりを求める気持ちを表わすというところに、文中文末を通じた上昇調の真の意味があるのではないかと私は思う」（p.29）と記述している。この知見を援用すると、アクセント上昇調が「情報提示」と解釈されるのは次のように考えることができる。

まず、「んだ」を上昇調で発話しても、「だ」の性質から「質問」とは解釈されにくい。そのため、「情報提示」ではあるが、聞き手とつながりを求めようとする態度を示すことにより、「断定」の意味が和らぎ、聞き手配慮が含意されるのではないかと考える。そしてそれは本調査の結果から、聞き手の解釈として汎用性のあるものであると考える。疑問上昇調も同様に当該形式の場合「質問」の意図を伝達しにくい、6.3.4.2.1で述べたように、「注目要求」という意図を示すことで「発話権保持としての情報提示」へと使用が拡張されたと考えられる。上昇下降調も「尻上がりイントネーション（文節末に現れる上昇下降調の多用）⁷²」が「話がまだ続くことを必要以上に強調する」（郡，2003：125）という発話意図を伝達することを考えると、情報提示のノダの「だ」の場合は、現時点では容認度は低いものの、今後「発話権保持としての情報提示」の音調として使用が拡張される可能性がある。

以上、「んだ」の音調をみたが、まとめると次のようになる。下降調の「んだ」は話し手自身の認識が変わった、もしくは新たに登録された内容を伝える場面で使用されると解釈され、情報提示し聞き手に認知効果を与える意図を伝達する場合にはアクセント上昇調で発話される。本調査ではこのように、ノダの一部である「だ」は、発話意図と音調との対応を独自に持つことが示された。当該形式は「ん（の）」が低接であるため、アクセント下降がある文末ということになる。従って、下降調は無標の音調であり、明示的な上昇は有標の音調とも考えられる。そうすると、アクセント上昇調で伝達される発話意図も有標であると言え、「んだ」は第4章、第5章で指摘したように、「平叙文の情報受容のノダとして使用される傾向がある」ということが音調の分析においても支持されたことになる。

6.5 「の（ \emptyset ）」「んだ（ \emptyset ）」の手続き的意味

以上、本章では第4章、第5章で明らかになった「の（ \emptyset ）」「んだ（ \emptyset ）」の使用分布を両形式の文末音調に着目し分析、考察した。そして、音調を踏まえた分析においても「の（ \emptyset ）」は疑問文のノダ、平叙文の「情報提示」のノダとして使用され、「んだ（ \emptyset ）」は平叙文の「情報受容」のノダとして使用される傾向があり、「情報提示」のノダとして使用するためには「だ」を明示的に上昇させる必要があることがわかった。本章のま

⁷² 「それでえ、わたしがあ、いったらあ、…」のような使い方で、郡（2003）は「おそらく上昇調を付けた場合に「幼い」「甘え」の印象が最も強く生じそうである」（p125）と記述している。

とめとして、両形式の主要な手続き的意味を呈示する。

「の (∅)」の手続き的意味 :

その状況において、当該情報が会話の相手もしくは話し手にとって最も関連性のある情報であると話し手が認識していることを聞き手に伝達する。そして、以下3つに下位分類される。

- ① 「の」(低接・疑問上昇調) : 当該命題(もしくは疑問の解答)が話し手の認知環境に修正を与えるものであること、そしてその修正が相手の確認により完了すると考えていることを聞き手に伝達する。
- ② 「の」(低接・アクセント上昇調) : 先行文脈(状況)と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手の想定を破棄させる意図があることを聞き手に伝達する。
- ③ 「の」(低接・平坦調) : 先行文脈(状況)と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手に認知効果を与えるものであると話し手が考えていることを聞き手に伝達する。

「んだ (∅)」の手続き的意味 :

その状況において、当該情報が話し手もしくは会話の相手もしくは双方にとって最も関連性のある情報であることを明示する。そして、以下2つに下位分類される。

- ① 「んだ」(下降調) : その状況において話し手にとって最も関連性のある情報(当該命題)が新たに登録されたことを明示する。
- ② 「んだ」(アクセント上昇調) : 先行文脈(状況)と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手に認知効果を与えるものであると話し手が考えていることを聞き手に伝達する。

以上、「の」「んだ」の手続き的意味と音調による発話意図の傾向について、話し言葉コーパス、聴取実験を基に記述した。無論、本章の結論はそれぞれの手続き的意味を傾向として示したものであり、すべての場面で適用されるものではないが、傾向として示したことで、形式の違いについて記述することができたと考える。そしてそれは、第8章で示す日本語学習者に対するノダ形式の体系化に有用であると考えられる。敷衍すると、学習者がノダを使用するのは困難であるが、自然会話では頻用される形式であり、日本で生活している場合は嫌でも耳にすることになる。そうした環境において、例えば「の」が高く引き伸ばされた場合は何か情報を求められている、確認されている」「んだ」の「だ」が高い場合は相手が当該時の自分に必要な情報を伝えようとしている」といった手がかりを示すことができると考える。

なお、本論文は「んです (∅)」の音調についての考察は行っていない。ただし、筆者

の内省では東京方言においては当該形式の一般的に容認される音調は平調のみと考えており、「～んで↑す↓」「～んです↑」のような上昇下降調，疑問上昇調を耳にすることはあっても，郡（2014）の音調と発話意図との対応で説明可能と考える。話し言葉コーパスにおいて使用数も少なかったことから，本論文は「んです（∅）」の音調についての考察は行わず，第4章で提示した仮説の検証については今後の課題としたい。

第7章 「ノダね」「ノダよね」の手續きの意味の考察

7.1 はじめに

7.1.1 「ノダ+終助詞」を分析する意義

本節では、本論文の主要なテーマである「ノダ+終助詞」の手續きの意味を研究する意義についてのべる。本章で考察対象とするのは「ノダ」と終助詞「ね⁷³」「よね」の複合形式である。こうした複合形式は使用頻度が高い一方で、管見の限り先行研究がほとんどみられない。この背景には、各形式の意味について、単純な意味の加算で記述可能という考えがある（内田，1998；野田，2002など）。しかし、本論文が自然会話コーパスを基に客観的に使用実態を記述することで、それぞれの形式の手續きの意味を明らかにする有効な手がかりが得られるのではないかと考える。以下複合形式を考察することの意義を「「んだ (∅)」の手續きの意味」「具現化形式」「使用上の性差」という点から述べる。

まず、「んだ (∅)」の手續きの意味から複合形式を考察する有用性を考える。第4章及び第5章で明らかになったように、自然会話において「んだ (∅)」は主に平叙文の「情報受容」のノダとして使用される傾向があった。また、第6章において、明示的上昇を伴わなければ「情報提示」のノダとして解釈されにくいという可能性が指摘された。しかし一方で、「んだ」は終助詞「よ」「よね」を伴うと「情報提示」のノダとして頻用されていた。そのため、「んだよ」「んだね」といった終助詞と共起した形式がどのような環境で使用されるのかを客観的に分析していくことで、「ノダ+終助詞」の手續きの意味を探る手がかりが得られると考える。

次に、具現化形式の使用分布に注目する。例えば「ノダ+ね（以下、ノダね）」の具現化形式「のね」「んだね」には興味深い使用分布がある。

(1) (F131 と F051 の会話。二人は大学院の同級生。F131 が授業に出席しない学生について話している場面)

1278 F131：で、全然（うん）まだ1回しか来てないとかね、（あー）いるから、もう、

1279 （なんでかねー）もう成績あげないよとか思うんだけど。

1280 F051：ふーん。来年、またかな。

1281→F131：でも B さんの方には出てるのね {?んだね}。

1282 （えっ、本当）でも私の方には全然来ないの。

1283 F051：えーっ、何かほかの授業入れてるんじゃないのとか、思っちゃうよね。

（名大 data117 女性 20代）

⁷³ 例えば「ね」「ねえ」「ねー」といった各形式の異形態も考察対象とする。

(2) (F120 と F049 の会話。二人は大学のサークル仲間。F49 が以前通っていた英語教室について話している場面)

450 F120：どんぐらい行ってたの？

451 F049：半年ぐらい行ったかなー。

452 F120：どんな感じだったー？

453 F049：あ、でもね、(うん) あれは楽しかったよー。

454 だってさー、(うんうん) その地域に住んでる人たちが来るから (うんうん

455 うんうんうん) ほんとなんかおじさんとか (うんうん) おばさんとか、(う

456 ん) 普通だったらしゃべないだろうな (うんうん) っていう人が一生懸

457 命英語話すからー、(うーんうん) なんていうの、会話もさー、(うん) 今、

458 なんか、何してるんですかーとかさ、(うんうん) そういうつたない会話を

459 繰り返すから、(うんうん) 逆にそのあとみんな日本語でしゃべって仲よ

460 くなったとかさ。<笑い> (<笑い>)

461 F120：何人ぐらいだった？

462 F049：15人ぐらいかなー。

463→F120：あ、結構いたんだねー {のね}。

464 F049：うん、結構いた。

465 F120：で、先生は？

466 F049：は1人。

(名大 data53 女性 30代)

例えば (1) のように、相手に自身が有する情報を提示する場合には「んだね」が使用されにくいのに対し、(2) のように相手に質問し、聞きたい情報を受容した場面では「んだね」「のね」いずれも使用が可能である。先行研究では「の」は「聞き手が存在するときに使用され、独話では使用されにくい」(日本語記述文法研究会, 2003) のように、「の (∅)」の使用制限については言及があるものの、こうした「んだ」の使用制限について記述している研究は管見の限りみられない。しかし、語形式のみに注目しただけでは、以上のような使用分布を説明することができない。

また、当該形式の使用差に注目した、複合形式の分析も必要であると考え。詳細は 7.1.2 で述べるが、コーパスを分析した結果、「の+終助詞」と「んだ+終助詞」を比較したところ、男性、女性とも年齢によって差はあるものの、全体的に「の」は「ね」と、「んだ」は「よ(ね)」との共起が多いという結果になった。これはやはり、「の」と「んだ」がそれぞれ別の機能を担っており、また、共起する終助詞の性質とも関わっている可能性があると考えられる。この点も踏まえ、本調査ではノダと終助詞との共起関係及び文末の「ね」の音調の分析を通して、特に対照的な発話意図を伝達する「ノダね」「ノダよね」の両形式に注目し、それらの手続き的意味を考察する。

7.1.2 各終助詞との共起と具現化形式

次に、分析材料として、各共起形式の具現化形式を調査した。自然会話コーパスは、「BTSJによる日本語話し言葉コーパス（以下、BTSJ）」約9時間分と「名大会話コーパス（以下、名大会話）」約100時間分⁷⁴を使用した。いずれのコーパスも年齢に偏りがある。本論文で対象としたBTSJの会話参加者は全員大学（院）生であるのに対し、名大会話は参加者の8割が女性、さらに参加者全体の5割が20代である。そのため、形式の選択も汎用性があるデータとは言えない。その点を踏まえたうえで、使用傾向をみることにする。表1にBTSJで使用された「ノダ+終助詞」、表2に命題会話で使用された「ノダ+終助詞」の具現化形式及び使用数を示す。

表1 BTSJで使用されたノダ+終助詞

終助詞	ノダ	男性	女性	合計
+ね	の	17	40	57
	んだ	4	7	11
+よ	の	8	18	26
	んだ	92	41	133
+よね	の	2	5	7
	んだ	74	101	185

表2 名大会話で使用されたノダ+終助詞

終助詞	ノダ	男性	女性	合計
+ね	の	48	1002	1050
	んだ	21	119	140
+よ	の	32	526	558
	んだ	193	450	643
+よね	の	4	163	167
	んだ	97	707	804

ここで注目したいのは、男女それぞれの選択形式である。女性の「ノダよ」がBTSJでは「んだよ」が、名大では「のよ」の使用数が多かったという点を除くと、その他の形式は類似した使用傾向がみられた。「ノダよ」の使用傾向が異なったのは、名大の場合、90代までの女性の会話を収録している（5.3.2参照）ことから、年配の女性が「の

⁷⁴ ただし、本調査では常体のみ注目しているため、名大会話コーパスは実際の調査時間は100時間より少ない。

よ」を嗜好するため使用数が増えたのではないかと考えられる。

そのほかの形式をみると、使用傾向は近似しており、「ノダね」は「のね」、「ノダよね」は「んだよね」の使用数が多い結果となった。この結果からは、裸の形式のみならず「の+終助詞」についても、男性が「の」を使用しにくいとは一概に言えないことがわかる。さらに、具現化形式の使用傾向から、「ノダよね」は「ノダね」より「ノダよ」に近い性質を持っているのではないかと推察される。

ここで興味深いのは、「ノダね」と「ノダよね」のふるまいである。詳細は7.3及び7.4で述べるが、両形式は文脈により対照的な発話意図を伝達する。例えば「ノダね」は7.1.1で示したように「情報提示」のノダとも「情報受容」のノダとも共起し、相手に認知効果を与える意図がある場面でも、話し手自身に認知効果が生じたことを伝達する場面でも使用される。一方、「ノダよね」は情報伝達場面（用例（3））および確認・同意要求場面（用例（4））で使用される。

(3) (F046 と F086 の会話。二人は大学の同級生で、F086 の恋人について話している場面)

625 F046：相手はどこの出身の人、どこの、（あつ、あれだよ）独り暮らし？

626→F086：ううん、違う。元から東京の人で、なんか、八王子なんだよねー。

627 F046：あ、結構遠いんだね。

(名大 data072 女性 10代)

(4) (F119 と F160 の会話。二人は大学院の同級生。F160 が結婚を控えており、「新居に家具を買うのか」とF119に聞かれたのに対し、「最低限のものは買わないといけない」と言った後の場面)

488 F160：でもさ、部屋の広さによって違うじゃない？

489 (うんうん) それも

490 F119：マンション借りると次変わるもんね。

491 F160：そう。

492 だからあんまりいいもの買ってもしようがないし。

493 F119：大きいのも買えないよね。

494 F160：うん。

495 電化製品だけはいいの買う（うんうん）つもりだけど。

496 うん、あとはねー。

497→F119：いろいろ買わなきゃいけないんだよね。

498 F160：うん。

499 結構物入りだよ、ほんとに。

(名大 data068 女性 20代)

一方で、「ノダよ」は「よ」の性質上、発話意図は聞き手に認知効果を与える場面でのみ使用される。つまり、「よ」は「その文が聞き手に向けられていることをことさら表明する」(白川, 1992: 42), 「話題になっている命題内容について、発話者が排他的な知識管理を行う準備があることを示すという, 談話構成機能を持った談話標識である」(加藤, 2001: 43) と記述されることから明らかなように、「よ」が付加された「ノダ」は聞き手に当該命題を解釈として受け入れさせる意図を伝達する「情報提示」のノダとして解釈されることになる。

(5) (M015 と F004 の会話。二人は大学院の同級生。F004 が「ダイエーホークスの応援歌を知っている」と言った後の場面)

693 M015: もうね, オリックスもさ, あの, 応援歌とイメージソングっていうのが2つある

694 　　んだけど, (うん) うん, 両方とも知ってるもんね, うちの, うちの嫁はんも。

695 F004: 嫁も。

696 M015: 嫁も, うちの嫁も。

697→ 　　ちゅうかなんかも, あのー, CD持ってんだよ。

698 F004: (<笑い>) なんで?

699 　　配布されるの?

700 M015: まさか。

701→ 　　買うんだよ。

702 　　<笑い>

703 F004: すごいねえ。 (名大 data081 男性 20代)

(6) (M015, M034, F004 の会話。三人は大学院の同級生。M034 が「聞いたことをすぐ忘れる」と話しており, それに関する M035 と M015 の共通体験を F004 に説明している場面)

876 M015: (<笑い>) じいちゃんだよ。

877 　　もう, うちに来てからさ, もう。

878→M034: ビデオをさ, 借りたのよ。

879 　　んで, それを返しに行こうと思って。

880 　　(うん) 俺, 持った記憶はあるんだけど, 全然そこで, あれ?

881 　　帰ってきて, あのー, 一緒に返しに行こうと言ったんだけど, ビデオがな

882 　　くて, あー, M015 君ちに置き忘れたんだって言って, M015 君ちを探してもないのね。

883 　　あー, じゃあ, 学校かな。

884 M015 : いいや, 明日でって言って, 話してて, 2時ぐらいだったね, あれね。

885→M034 : 2時ぐらいになって, ハッと気付いたんだよ, ポトンと落ちてるのよ。

886 F004 : (<笑い>) ふーん。 (名大 data081 男性 20代)

また, 音調の差異により異なるニュアンスを伝達することがあっても, 基本的に「情報提示」のノダとして使用されることに違いはない。敷衍すると, 轟木 (2008) に従えば「よ」は二つの音調を有するが, 「述べ立てや意見の主張」(p.11)を表すとされ, いずれも「情報提示」のノダとして使用される。「あんな服, 誰が買うんだよ」のような反語的な疑問文として使用されることはあっても, 話し手自身の認知環境が変化したことを伝達する意図で使用されることはない。さらに, 同意・確認要求する場面で使用されることもない。そこで, 本章では特に対照的な発話意図を伝達しうる「ノダね」「ノダよね」に着目し, その手続き的意味を分析, 考察する。

以降の節では, 年齢による使用傾向の違いも考慮しながら, 各複合形式と裸の形式「の(Ø)」「んだ(Ø)」との関係を踏まえ, それぞれの手続き的意味を記述していく。そして, 使用場面によりどのような用法を持ち, それがどのような音調を伴うのかという点についても分析する。

本章の構成は以下のとおりである。7.2で, 終助詞の音調に関する先行研究を概観し, 本論文が援用する知見とノダ形式を分析するうえで今後明らかにすべき点を述べる。7.3では複合形式の「ノダね」の手続き的意味をコーパス調査, 母語話者に対する読み上げ実験の分析を基に考察する。次に, 7.4では同じく複合形式の「ノダよね」の手続き的意味をコーパス調査, 母語話者に対する読み上げ実験, 聴取実験の分析を基に明らかにする。

7.2 終助詞の音調に関する先行研究

本節では, 終助詞の音調に関する先行研究を概観する。第6章で述べたように, 終助詞自体が独自の意味を持つため, 終助詞が付加されない場合の音調とは伝達する発話意図が異なる。つまり, 終助詞の音調は基本的には個々の終助詞に恣意的に結びついた固有の音調がある(郡, 2003)。従って, 終助詞の音調は終助詞なしの場合とは区別して記述する必要がある。

郡(2003)によると, 終助詞が取りうる音調は, 東京語では1拍の終助詞(長呼⁷⁵される場合も含む)は, 直前の形式のアクセントが起伏型の場合は5種類, 平板型の場合は10種類の区別が理論上可能となる。敷衍すると, 第6章で述べた「疑問上昇」「アクセント上昇」「顕著な下降調」「上昇下降調」「平調」という5種類の変化方向と, そのような変化が直前の形式のアクセントを生かす形で始まるか(順接), 直前の形式のア

⁷⁵ 例えば「ねえ」「ねー」のように, 長く引き伸ばされる音調のことをいう。

クセントが平板型で高い場合にはそれより低いところから始まるか(低接)という2種類の接続形式の2つの要素に分けることができ、この2つの要素の組み合わせとして記述すべきとされる(轟木, 1998; 郡, 2003 など)。順接, 低接というのは和田(1969)のいう「辞のアクセント」が基になっている。順接とは, 名詞のアクセント型を変えず, 起伏型の語には低く, 平板型の語には高く平らになる, 名詞の高さにおとなしく順応する, というものである。「が」「を」「へ」などと同じふるまいをする。一方, 低接とは, 平板型の語には低く下がって付き, 起伏型の語にはそのまま付くものである。和田(1969)では, 「お前たち」の「たち」, 「お前ら」の「ら」を低接の辞として挙げている。

ただし, 終助詞によってとる音調は限られている。さらに, 起伏型の語に後接する場合には順接と低接の対立が中和されることや, 低接の下降調は, 第6章で述べたように, 終助詞内部では単なる母音伸長として実現されるため, 平調との区別が難しいことから, 実際には一つの終助詞に10種類の音調が具現化されることはまずない。

次に, 2種類の接続形式と5種類の変化方向との組み合わせから終助詞の音調を記述している轟木(1995, 1998, 2008), 轟木・山下(2004, 2006, 2013)の一連の研究を中心に, 本論文に関わる文末の「ね」の音調を整理する。

7.2.1 「ね」の音調

7.2.1.1 先行研究

杉藤(2001)は, 「ね」の意味を「自己確認」とし, 聞き手の反応を求める場合には上昇調が選好され, 上昇の程度を低めることにより自己確認の「ね」へと意味が移行することを明らかにしている。また, 興味深い指摘として, 詰問調とソフトな言い方をした「あなたはスミスさんですね」について, 「ね」の部分を入れ替えるだけで, 印象が逆になることから, 「終助詞のイントネーションが, 他と独立して働き, その発話全体の意味を支配することが分かった」(p.15)と述べている。犬飼(2001)では, 低く短くつく「ね」があることを母語話者の内省から明らかにしている。犬飼(2001)によると, 「行くんだね」という問いは, 「行くことの強制にもなり得るが, 「ね」が低くつくと, 肯定の答えが返ってくるのを当然とする度合いが高まり, 対話の継続が阻止される」(p.19)とされる⁷⁶。

片桐(1997)では, 「終助詞ヨ・ネは基本機能として話し手の情報の受容状態を表示し, イントネーションは基本機能として構造の継続・区切りを表示する」(p.235)とし, 「ヨは当該の情報を話し手が自分のものとして受容していることを示す。それに対してネは話し手が何らかの情報源から当該の情報を得たが必ずしも受容できていないこと

⁷⁶ 森山(2001)でも, 「下降(平坦含む)の「ね」は文脈的に確認要求として解釈することも可能であるが, そうした場合は「聞き手の反応を伺おうとしないといったニュアンスが付与される」(p.46)とある。

を示す」(p.244)と規定している。そして、「ね」の音調を上昇下降の二項対立であるとし(実際には下降ではないと認めている)、上昇は「確認要求」、下降は「情報提供」を示すとする。

小山(1997)では、「ね」を伴う発話は必ず聞き手に向けられると解釈される」(p.102)という立場を取り、その音調を以下3つに類型化している。

降昇調(疑問上昇調に相当):一致・共有の是非を問う「確認」

昇調(アクセント上昇調に相当):一致・共有を積極的に聞き手に持ちかける、もしくは求める「同意・念押し」(共有が聞き手にとって受け入れがたい場合でも使用可能であるが、その場合は嫌味な感じになる)

昇降調⁷⁷(上昇下降調に相当):共有的態度の聞き手への持ちかけと、同時に話し手の自己吟味・マッチング・感嘆などの心的態度と主張の両方が示される「自己確認・感嘆」
(小山, 1997:103)

さらに、「ね」の付加する発話には、対話の場(前提)の共有、あるいは共同作業を促すようなものもあり、示される一致・共有の範囲はかなり広範である」(p.103)とする。

(7) 私昨日学校に行かなかったのね。そしたらさあ、先生から心配して電話があったのよ。
(同(13a))

森山(2001)では、京都在住の大学院生に対する聴取実験を基に、明示的上昇(急上昇, 上昇)の「ね」は「強い確認要求をあらわす」(p.47)と述べているが、文連続の内部でも、聞き手への伝達についての確認をするような場合があり、そういう場合には明示的な上昇の「ね」が出現する、としている。

(8) うちの家族はみなみかんが好きなんですネ, だから、冬はいくつも箱で買うんです。
(森山, 2001:44(28))

この場合は、内容的な確認要求ではなく、「伝達現場で聞き手の反応を確かめつつ会話を続行するという機能で使われている」(p.44)と述べている。

また、森山(2008)では、相手の発話内容をエコー的に繰り返すエコー表現に付加される「ね」について音声的な分析を行っているが、それによると、当該の「ね」は「短く高い「ね」と「長く後ろを下げる「ねえ」があるという。短く高い「ね」による表現は「相手に直接的な確認を表」(p.32)し、特に確認内容が述語の場合は「相手からの状況説明について確認するという関係を構成するために、「のだ」は必須」(p.33)と

⁷⁷ 昇降調の記述について、小山は「さらなる考察が必要であるが」と断りを入れている。

する。

(9) (教室でプリントを配布したところ不足分があった)

生徒「プリント、あと二枚下さい。」

先生「二枚ね。(cf. ? 二枚ですか・*二人^{ママ}ですnee)」 (p.32 (9))

(10) ((9) (森山では (9) と同じ状況)

生徒「プリントが二枚足りません」

先生「プリントが二枚足りないのですね。」 cf. 「*プリントが二枚足りませんね。」

(p.33 (10))

一方、「長く引き伸ばされる「ね」は、「相手の発話を受け取りつつ、その情報に関する自分なりのコメントを準備していることを示す」(p.36)のものであり、「nee」と引き伸ばされることにより、「一種の中断が生じ、関連情報の検索、計算などの処理をしていることを表わすことになっているのである」(同)とある。

(11) (この辺りにコンビニはありませんか、という問いに答えて)

初老の通行人「コンビニnee...この辺りには無いnee。」 (p.27 (2))

エコー表現に付加された場合、この音調をともなった「nee」を「コメント準備型エコー表現」とするが、引き伸ばしの音調がコメント準備という意味に関わるのは、「思考中というプロセスの表示がアイコニックに引き伸ばされる音調に対応しているからである」(p.36)とする。

轟木は一連の研究において「よ」「ね」の意味を以下のように定めている。

「よ」：話し手と聞き手の理解の不一致をあらわし、聞き手にとっての新情報を提示する。

「ね」：話し手と聞き手の理解の一致^{ママ}しをあらわし、話し手と聞き手が共有している情報についての確認・同意を求める

(轟木, 1993 : 8)

そのうえで、轟木 (1998)、轟木・山下 (2008) などで行った東京、大阪、岡山、香川での聞き取り調査及び内省に基づき、轟木 (2008) で以下の通り「ね」の整理を行っている。

形態的意味：前接の語句があらわす内容は聞き手が知っていることの表示、あるいはその確認要求

音調と意味・用法：

- (i) [音調] 順接・アクセント上昇調 (順接・平坦になることもある) ただし、情報提示であっても、聞き手への同意を求める要素が強ければ上昇下降あるいは下降になる。聞き手への同意を前提としていることにより、話し手の判断の押し付けになることもある。
[意味・用法] (聞き手が同意しているという前提で) 話し手の判断を提示あるいは行動を宣言する。

(12) 「あ、ほら、桃だね (モモダ↑ネ)」 「うん、そうだね (ソーダ↑ネ)」
(轟木, 2008 : 15 ①)

(13) 「今から行くね (イク↑ネ)」 「うん、わかった」
(同 ②)

- (ii) [音調] 順接・疑問上昇調
[意味・用法] 確認要求をあらわす。

(14) 「これ、本当に桃だね (モモダ↑ネ)」 「ええ、間違いないわ」 (同 ①)

(15) 「約束どおり本当に行くね (イク↑ネ)」 「ええ、行きます」 (同 ③)

- (iii) [音調] 順接・上昇下降 (前接の語句が無核の場合は順接・下降となることも多い。前接の語句が有核の場合は上昇下降のみ)
[意味・用法] 詠嘆・驚きを表明し、さらに聞き手の同意を求めることもある。

(16) 「これ、立派な桃だね (モモダ↑ネ↓ー)」 「うん」 (同 ①)

(17) 「本当にきれいだね (キレイダ↑ネ↓ー)」 「そうだね」 (同 ②)

以上3つの主要な音調と発話意図を類型化しているが、「ね」は「の」と同様、同じ上昇調であっても、疑問上昇調とアクセント上昇調は対応する機能が異なる⁷⁸ことを指摘している。

轟木 (2008) では、「ね」を話し手と聞き手の判断が一致している (と話し手が考えている) 時に使われるとされる。そのため、当該形式が「同意要求」「確認要求」を示すとする立場を取るが、アクセント上昇調、平坦調が使用される情報提示の場合でも、「聞き手への同意を求める要素が強ければ上昇下降調あるいは下降を取る」とあること

⁷⁸ 同様の違いを持つ文末詞として、「な」「って」を挙げている。一方、「よ」はアクセント上昇調と疑問上昇調で対応する機能が同じであるとされる。詳しくは轟木 (2008) を参照されたい。

から、反応要求の度合いについては、アクセント上昇調、平坦調に比べ、確認要求の疑問上昇調、および同意要求の上昇下降調（無核の語につく下降調含む）が強いと捉えていることがわかる。

7.2.1.1 援用する点と今後明らかにすべき点

以上、「ね」に関する主要な研究を概観した。本節で述べた通り、終助詞は無核の語に後接した場合、その語に高くつくか（順接）低くつくか（低接）という点を考慮しなければならないが、本論文では「の」「んだ」に後接する「ね」を分析対象としているため、前接の語は有核となり、順接と低接の対立が中和される。従って、「ね」の拍内音調に注目する。

まず、「ね」の音調の類型化であるが、轟木（2008）が指摘するように、低接の「の」に後接するという点でノダ文は有核となるため、「ね」は下降調を取らないと考えられる。また、片桐（1997）、杉藤（2001）、森山（2001）では「ね」の高さについてのみ注目しているが、当該形式の場合、筆者の内省では疑問上昇調とアクセント上昇調では同じ上昇であっても対応する機能が異なると考えられる。従って、轟木（2008）、小山（1997）らを援用し、上昇調を二つに分類し、加えて上昇下降調、平坦調を考える。以下、本論文の「ね」の音調と対応する意味・用法を表3のように仮定する。

表3 「ね」の音調と意味・用法の対応

拍内音調	本論文の定義	意味用法
疑問上昇	直線的な上昇であり、音を長く伸ばせば概ねその分だけ高くなる	確認要求
アクセント上昇	アクセントの低い拍から高い拍へと移行するときのような上昇であり、疑問上昇に比べ、上昇の開始点が早く、全体の長さも短い	（聞き手が同意しているという前提で）話し手の判断提示・行動宣言
平坦	聴覚的に上昇も下降もしない	アクセント上昇と同義
上昇下降	アクセント上昇のような上昇＋下降	詠嘆・驚きの表明，同意要求

郡（2003）、轟木（2008）を参考に筆者作成

さらに、「ね」の母音伸長に関わる発話意図の差異についても考慮する必要がある。森山（2008：36）では、「ねえ」と引き延ばされることにより、「一種の中断が生じ、関連情報の検索、計算などの処理をしていることを表わすことになっている」とある。ノダに後接する「ね」を考えた場合、単純にエコー表現と対応するかどうかは今後調査しなければならないが、「ね」が「当該情報を自身で処理中、確認中の態度を示す」（田窪・

金水, 1998) とするならば, 森山 (2008) が指摘する「ね」の長呼 (長く引き伸ばされる音), 非長呼の差異も聞き手の発話解釈を制約する意味を持つと考えられる⁷⁹ため, 「ね」の分析に取入れる必要がある。

以下, 今後明らかにすべき点を述べる。まず, 轟木 (1993, 1998, 2008) などの一連の研究は, 終助詞の音調の類型化を接続形式と拍内音調の組み合わせから記述する研究として説得的であるものの, 「ね」の意味・機能を「よ」と対照的に捉え, 情報の一致・不一致, 共有・非共有という点から記述するのみで, 音調と意味の対応が十分とは言えない。Hasegawa (2011) では, 独り言 (独白) 場面で「ね」が約 19% 使用されていたと報告しているが, 独り言で使用されたということは, Hasegawa も指摘しているように, 「ね」の意味機能を記述する際に相手の情報の有無を考慮する必要はないと考えられる (後述するが, Hasegawa (2006) は「ね」がコード化する意味について金水・田窪 (1998) を援用している)。また, 「よ」は相手と意見が対立する場面だけでなく, 「そうなんだよ, 私もそう思うんだよ」のように, 相手に同調する場面でも使用可能である。轟木らが規定する「ね」「よ」の意味を再考し分析することにより, さらに終助詞の使用実態に則した音調と意味の対応が記述できると考える。

さらに, 轟木 (2008) の終助詞の整理は轟木 (1993, 2008) の聞き取り調査および内省によるものであるが, 調査は東京, 大阪, 岡山, 香川といった複数の地域の方言話者を対象としている。文末音調を記述する場合, 特に関西以西の母語話者は東京方言とは異なった音韻体系をなすことから, これらの調査結果がそのまま一般化されるかどうかは判断が難しい。轟木・山下 (2008) では, 地域を超えた「全国で通じる言葉=共通語」という観点で聞き取り調査を行い, 平均割合を基に考察しているが, 氏らが指摘しているように, 地域差がみられた音調については考察されていない。氏らは, 日本語教育に提言することを目的として全国レベルで理解される音調を調査しているため, 結果は意義のあるものであるが, 母語話者が発話で使用される文末音調と発話意図の体系的整理を試みる時, まずは地域をより限定して分析を行うことも必要であろう。

7.2.2 「よね」の音調

7.2.2.1 先行研究

「よね」の音調に関する先行研究は管見の限り片桐 (1997), 田中・松崎 (2007) のみであった。片桐 (1997) は, 終助詞が話し言葉でのみ使用されるのは, 終助詞に対話調整機能があるためとする。敷衍すると, 「終助詞, イントネーションはともに, 共同行為の円滑な遂行の実現に貢献するための機能を担っている」(p.235) ものであり, 「ヨは当該の情報を話し手が自分のものとして受容していることを示す。それに対してネは

⁷⁹ 独り言を分析した Hasegawa (2006) でも, 「ね」が独り言に多用され, 使用された場合母音伸長がみられることを指摘している。

話し手が何らかの情報源から当該の情報を得たが必ずしも受容できていないことを示す」(p.244)という。一方、イントネーションは二つに類型化できるとし、「文末の上昇イントネーションは構造の継続性を、下降イントネーションは構造の区切りをそれぞれ示している」(p.248)と捉え、それらを踏まえたうえで「よね」の音調と発話意図の対応を以下のように記述している。

<上昇>：文を表す情報の正しさの判断を直接聞き手に対して要求する。

<下降>：文を表す情報の受容の正しさを支持する何らかの情報源の存在を示唆する。(p.254)

そして、公開されている音声コーパスの実例を挙げ、「(18) (片桐 (1997) では (a) の発話が純粋な合意形成の確認の要求であるのに対して、(19) (片桐 (1997) では (b) の発話では話し手が何らかの情報源、この場合には自分の記憶を情報受容の根拠としているという含みが生じる」(p.254)と述べている。

(18) 門があるんですよね？ (p.253 (a))

(19) 上まで行ったんですよね。 (同 (b))

田中・松崎 (2007) はテレビの討論番組で使用される「よね」のイントネーションを分析している。その結果、議論で使用される「よね」は主に上昇下降調とアクセント上昇調が使用され、「積極的に聞き手から同意を引き出す場合には上昇下降が用いられ、聞き手が同意することは明白であり、積極的に同意を引き出す必要がないと考える場合にはアクセント上昇が用いられる」(p.86)としている。そして、アクセント上昇が片桐(1997)のいう「文を表す情報の受容の正しさの判断を直接聞き手に対して要求する」という定義では説明できず、従って「ね」の音調は上昇と下降の二分法では記述できない、とする立場を取る。

また、「思うんですよね」のように「のだ」(本論文の「情報提示」のノダに相当)と共起して相手に確認や同意を求めずに談話を展開していく場合にはアクセント上昇、平坦が使用されており、上昇下降はほとんど使用されていない」(p.85)としている。

(20) 僕はやはり A さんと同じように今の天皇陛下に靖国神社にお参りしてもらいたいと思います、でもやっぱり、昭和天皇の教えを受けてますからねえ、どっかにこういう (A 級戦犯の) 問題があると思うんですよね (↑)、だからその意味でやはり、きちんと行っていただけるような環境を作るべきです

(p.84 (10))

7.2.2.2 援用する点と今後明らかにすべき点

「よね」に関する論考は管見の限り二つのみで、明らかになっていない点が多い。まず、片桐（1997）では、「よね」の「ね」を上昇、下降の二分法で記述しているが、田中・松崎（2007）のアクセント上昇が「情報提示」のノダに使用されるという報告や、「ね」は上昇でも音調によって対応する機能が異なることを踏まえると、単なる二分法では説明が難しいと思われる。従って、上昇の仕方をより詳細に記述することにより、より正確に「よね」の音調と発話意図の対応を示すことができると考える。また、下降調は「情報の受容の正しさを支持する何らかの情報源の存在を示唆する」とあるが、その場合、片桐（1997）で挙げているように、ノダに後接しなければ当該の発話意図を示すことはできない。もし（19）からノダを取り除いてしまうと、下降調であっても同意求めと解釈されることが考えられる。

（19'）*上まで行きましたよね。

従って、ノダ文に付加される「よね」を非ノダ文に付加される「よね」は区別して記述する必要があると考える。

田中・松崎（2007）では、実際の発話を基に「よね」を分類し、アクセント上昇調と上昇下降調に音韻的差異があることを指摘した点で興味深い。「情報提示」のノダにアクセント上昇調及び平坦調の「ね」が使用されるという点は参考になるが、ただし、「思いうんですよね」のような情報伝達的な発話意図で使用される「ノダよね」にのみ注目しており、片桐（1997）が示した（18）（片桐（1997）では（a））のような同意・確認要求で使用される「ノダよね」には言及がない。「ノダよね」の他の発話意図にも目を向けることで、さらに具体的な当該形式の音調と発話意図の対応を明らかにできると考える。

7.2.3 解決すべき問題と本論文の立場

以上の問題点を踏まえ、本論文では「ノダ+終助詞」を分析するうえで、以下の点を考慮する。

I. 「の」「んだ」「よ」「ね」の意味再考

先述したように、轟木（1995, 1998, 2008）一連の研究では、先行研究の「意見の一致・不一致」といった観点から「よ」「ね」の意味を対立的に捉え、その意味を前提として音調と意味（用法）の対応関係を記述している。こうした考え方は「よ」「ね」の重要な一側面を捉えていると思われるが、多くの先行研究で記述されるように（たとえ

ば金水・田窪 (1998)), 当該形式の本質的意味とは言えない。本論文ではノダ文で使われる「ね」「よ」に着目し, そこから両形式の意味を記述し整理する。

II. 母語話者の地域を限定した文末音調の検証

最後に, 終助詞や先述した「だ」の音調を記述するための手法についてであるが, 分析対象を限定することで, 汎用性のある記述を目指す。具体的には, 本論文では自然会話及び母語話者に対する聴取実験により分析を行うが, 対象を広義の東京アクセント型地域出身の母語話者⁸⁰に限定し, 結果を分析, 考察する。先述したように, 全国で共通に理解される音韻体系を記述することは, 無論意義のあることであるが, まずはより基本的な音韻体系を記述することを目的とし, 本論文では主に東京方言もしくはそれに近い方言話者が使用する文末音調に注目する。

そして, 轟木・山下 (2008), 轟木 (2008) など記述されている無核の語に接続する終助詞の体系と, 今回分析対象となる有核の音韻体系の共通点, 相違点を明らかにし, 「ノダね」「ノダよね」の文末音調と発話意図の対応を記述する。

7.3 「ノダね」

7.3.1 問題のありか

本節では, 「ノダね」について分析する。7.1 で述べたように, 当該形式は, 自然会話において「情報提示」のノダ, 「情報受容」のノダのいずれの場面でも使用される。しかし, 使用される具現化形式に着目すると, 「情報受容」のノダは「のね」「んだね」両形式とも使用可能であるのに対し, 「情報提示」のノダは「んだね」が使いにくいといった使用上の制約がある。

しかし, このような使用上の制約に関する記述は, 先行研究では管見の限りみられない。そこで本論文は自然会話コーパスを用いて, 「ノダね」の常体の具現化形式「のね」「んだね」の手續きの意味について考察する。

7.3.2 先行研究及び研究課題

7.3.2.1 「ノダね」の用法

当該形式について記述している先行研究として, 日本語記述文法研究会 (2003) 及び名嶋 (2007) を挙げる。日本語記述文法研究会 (2003) によると, 「ノダね」には二つ

⁸⁰ 『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』(1998) の「全日本アクセント分布図」において東京式「旧東京市街地区及びそれによく似ているもの」の地域出身の日本語母語話者を指す。

の用法があり、一つ目は「話し手が発話を続ける際に、聞き手を意識しているということを示す」(p.259)用法で、この場合「ね」の音調は「上昇イントネーションとなり、「ねえ」というかたちにはならない」(p.259)という。

(21) 昨日、デパートに買い物に行ったんですね。そうしたら、中学校時代の先生とばったり会って、少し立ち話をしたんですよ。

(日本語記述文法研究会, 2003 : 260)

二つ目の用法は(22)の例のように「内容についての確認を表す」もので、「ノダ」によって、相手の考えている内容を先取りしたり、相手の発言から推論した内容を表わす文に「ね」が付加されると、その内容についての確認を求めることになる」(p.259)とある。

(22) A : 鈴木は病院へ行くって言って帰りましたよ。

B : じゃあ、そんなにひどいけがじゃないんですね。

A : ええ、いっしょに行こうかと言ったら、大丈夫だと言っていましたから。

(p.259)

次に、関連性理論の枠組を用いて「ノダ」の意味について記述している名嶋(2007)を取り上げる。名嶋(2007)によると、「ノダ」は「提示する命題が聞き手(客体化された話し手含む)にとっての文脈効果の一部である」という発話解釈の方向を明示する手続き的意味を持つ。第2章で示したように、認知効果が生じるというのは、話し手の顕示的刺激により、聞き手の認知環境が修正されたことを意味する。従って、相手からの顕示的刺激によりノダ文が発話された場合、自身に認知効果が生じたことを示すことになる。そして、名嶋(2007)は「待遇的考慮をすべき聞き手を想定した場合、提示情報に対する同意要求、確認の機能を持つ終助詞「ね」が必須となる」(p.134)ことを指摘している。

(23) a. (独話。知人が発表するのを聞いて) 秋の学会で発表するんだ。

b. (発表の準備に忙しい同級生を見て) 秋の学会で発表するんだ。

c. (発表の準備で忙しい知人を見て) #⁸¹秋の学会で発表するんです。

d. (知人が発表するのを知って本人に) 秋の学会で発表するんですね。

(名嶋, 2007 : 112 (24))

(23) の (c) (d) に注目すると、発表することが分かっている知人に対しても言い

⁸¹ 当該発話が不適切であることを示す。

切りの「んです」は使えず、「ね」が必須となる。この名嶋（2007）の記述は、従来の先行研究で記述される確信度ではなく、待遇的考慮といった観点から「ノダね」の使用を捉えた重要な指摘である。しかし、(b)のように、学会で発表することが自明であるような場面でも、聞き手を意識して発話する場合、「んだね」を使用した方が適切な場合もあるように思われる。その場合、話し手は聞き手に何を解釈させようとしているのであろうか。

7.3.2.2 「ノダね」の使用場面及び研究課題

以上の点を踏まえ、本論文では「ノダね」を以下の2つに類型化し、さらに、情報受容については、確認要求と確認要求を積極的に行っていないと思われるもの（以下「非確認」）とに下位分類した。以下、用例と共に示す。

情報提示：当該命題を伝えることで、聞き手の認知環境を修正し、発話を継続する。

(24) (F114 と F147 の会話。二人は大学の同級生。F147 の親戚がベルギーに住んでいることについて話している場面)

488 F114：えっ、((ベルギーへは)) 冬と夏とどっち行くべき？

489 F147：夏かな？

490 (ふーん) うん。

491→ 何かね、あんまり晴れてる日がないのね。

492 (うん) 曇りばかりだから。

493 (そうなんだ) 何となく夏かな。

494 F114：あ、そっか。

495 冬寒い？もしかして。

496 F147：うん。

497 寒い。 (名大 data065 女性 10代)

情報受容：聞き手の発話・非言語行動により新たに認識した命題内容についての妥当性を確認する、または確認するようにふるまう。

(a) 確認：相手からの言語的・非言語的刺激により話し手自身に新たに加えられた情報を呈示し、相手に肯定的返答を要求する。

(25) (F057 と F121 の会話。二人は元同僚。F121 が現在勤務している会社から土曜日にも出勤するように言われたと話している場面)

593 F057：うん、時給出る？

594 ちゃんと、それは。
595 <笑い>
596 F121：出なかったらやってられない。
597 いやもうほんとにさ、なんか人の何？
598 仕事を手伝っててー、はっと気がつくとき5時できー、それから自分の仕事
599 するの5時以降って。
600 おい、おい。
601 ここからは無給だよっていう。
602 F057：えっ、5時以降は出ないの？
603 F121：出ない。
604→F057：残業もないのね。
605 F121：1円も出ない。
606 もうほんとにすごいよ。
607 ほんとお金なくて。
608 F057：そっかー。 (名大 data079 女性 30代)

(b) 非確認：相手の刺激により、話し手自身に新たに加えられた情報を呈示するが、それに対して相手から肯定的返答を要求していない（と思われる）もの。

(26) (F063, F94, M010 の会話。3人は大学院の同級生。M010が何日か便秘が続いたため便秘薬を服用したと言ったのに対し、「その薬は癖になる」とF063, F094が言った後の場面)

99 M010：あ、それ怖いからー、よっぽどのときでないと飲まないんだけど。
101 F063：よっぽどのときがあるんだ。
102→F094：男の人もさー、便秘になんだね。
103 女の病気かと思ってた。
104 M010：その女の人の便秘っていうのはわかんないけど、(うん)俺の場合その、
105 ストレスから来る、(ふーん)あの一、過敏性大腸っていう症状があつて。
106 F094：へー初めて聞いた。 (名大 data128 女性 30代)

次に、「ノダね」の手続き的意味を明らかにするために、二つの研究課題を設定した。

課題1. 「情報提示」場面と「情報受容」場面で使用される「ノダね」には、どのような形式及び音調上の差異があるのか。

課題2. 「ノダね」はどのような手続き的意味を担うのか。

7.3.3 調査

研究課題を解決するため、本論文は以下に示す二つの調査を行った。

調査Ⅰ. 「ノダね」の具現化形式に関する調査

(「情報提示」「情報受容」場面で使用される「ノダね」の具現化形式の調査)

調査Ⅱ. 「のね」「んだね」の音調に関する調査

(「情報提示」「情報受容」で使用される「ね」の音調の調査)

7.3.4 調査Ⅰ（具現化形式に関する調査）及び結果

7.3.4.1 調査概要

調査概要は以下の通り。

調査目的：各場面で使用する「ノダね」の具現化形式を調査する。

調査資料：名大会話コーパス（主に親しい関係にある2名から4名の雑談約100時間分。会話参加者の内訳については5.3.2を参照のこと。）

調査手順：1. 資料から「ノダね」の具現化形式を抽出する。

2. 先行研究を基に、具現化形式を「情報提示」「情報受容」に分類する。

繰り返し述べている通り、本調査で使用した資料は現在公開されている自然会話コーパスの中では比較的大きいものであるが、会話参加者が女性に偏っており、さらに20代が5割を占めている。その点を踏まえたうえで分析及び考察を行う。

7.3.4.2 調査結果

まず、「ノダね」の具現化形式を抽出したところ、常体の形式は1257例観察された。この中で、文字化が不完全な発話、引用表現が付加された発話及び「情報提示」「情報受容」の分類が困難なものは対象外とした。調査の結果、1188例が調査対象となった(表4⁸²)。

⁸² 今回分析対象としていないが、参考までに「んですね」の分析結果も加えた。名大会話コーパスは親しい者同士の雑談が主であるため、使用の多寡について常体の形式と比較することはできないが、今回の調査において「んですね」は「情報提示」の使用例が「情報受容」の約2倍観察された。従って、「んですね」は「んだね」より「のね」に使用傾向が類似しており、第5章までの分析と同様、「ノダね」においても「「んです」は「んだ」の敬体である」とは単純に言えないことが明らかとなった。「んです」と同様、「んですね」の手続き的意味の考察は今後の課題としたい。

表4 具現化形式の使用数及び対象数

	のね	んだね	計	んですね
使用数	1096	161	1257	201
対象数	1050 (95.8%)	138 (85.7%)	1188 (94.5%)	180

次に、使用場面と具現化形式の関係を調査した。結果を表5に示す。

表5 使用場面と具現化形式の関係

	のね	んだね	計	んですね
情報提示	958	35	993	122
情報受容	92	103	195	58
計	1050	138	1188	180

調査の結果、分析対象となった「のね」は「んだね」の8.4倍使用が観察された。使用場面と具現化形式の関係について χ^2 検定を使用して調べたところ、「のね」は「情報提示」に、「んだね」は「情報受容」に使用される傾向にあるといったように、両形式の使用傾向が有意に異なるという結果になった ($\chi^2(1)=385.791, p<.01$)。

次に、「のね」「んだね」の年代別による内訳を男女別に示す(表6, 7)。

表6 「のね」の年代別使用(女性) ()内は参加者人数を示す

	10 (12)	20 (71)	30 (26)	40 (16)	50 (18)	60 (11)	70 (2)	80 (1)	90 (3)	計 (160 ⁸³)
のね提示	23	407	163	46	41	178	21	4	29	912
のね受容	2	26	23	7	4	28	0	0	0	90
んだね提示	1	6	4	3	1	4	0	1	1	21
んだね受容	11	48	21	9	1	5	3	0	0	98

表7 「んだね」の年代別使用(男性) ()内は参加者人数を示す

	10 (2)	20 (18)	30 (1)	40 (8)	50 (4)	60 (4)	計 (37)
のね提示	0	32	1	1	8	4	46
のね受容	0	1	0	0	0	1	2
んだね提示	0	7	0	0	0	0	7
んだね受容	0	6	0	1	0	1	8

⁸³ 年齢不詳が1名いるが、今回は分析の対象外とした。

参加者人数を鑑みると、女性の場合、「のね」は「情報提示」場面でそれほど差がなく使用されていたのに対し、「んだね」は主に40代以下の話者が「情報受容」場面で使用していることが分かった。一方、男性は会話参加者が少ないため、情報提示の「のね」の使用が46観察されたものの、それ以外の使用は10例以下であった。従って、男性母語話者の使用は本調査の分析では仮説を立てるのが困難であるため、以降は女性発話に注目し分析、考察を行うこととする。

以上の結果から、具現化形式について2つの仮説を立てた。

仮説1. 40代以下の女性には「のね」は「情報提示」、「んだね」は「情報受容」として使用される傾向にある。

仮説2. 50代以上の女性にはいずれの場合にも「のね」が使用される傾向にある。

調査Iで具現化形式と使用場面の対応が傾向として示された。次に、各使用場面における具現化形式と音調との対応関係、また、「情報受容」の確認、非確認場面における具現化形式及び産出音調の差異を調査するため、読み上げ実験を用いた調査を行うことにした。

7.3.5 調査II（「ね」の音調に関する調査）及び結果

7.3.5.1 調査概要

調査IIの調査概要は以下の通り。

調査目的：各使用場面における「ノダね」と音調との関係を探る。

調査資料：名大会話コーパスを基に作成した3種類の会話文

情報提示は「のね」、情報受容は40代以下は「んだね」、50代以上は「のね」を使用

被調査者⁸⁴：東京（10名）・神奈川（1名）・静岡（1名）・愛知（4名）出身の女性（20代～70代）15名（表8）

調査時期：2014年4月～10月

表8 被調査者の年代

	20代～40代	50代以上	計
計	10	5	15

⁸⁴ 『日本語発音アクセント辞典 新版』（1998）を参考に、広義の東京式アクセント型地域の母語話者を対象とした。

- 調査手順：1. 名大会話コーパスの用例を基に作成した会話文を一つずつ提示し、状況を確認する。(読み上げ順はカウンターバランスを採用)
2. 違和感のある表現は適宜変更するように指示し、筆者と読み上げる。被調査者は分析対象の形式が含まれる発話者を担当してもらう。
3. 読み上げ後、各使用場面で「のね」「んだね」のどちらを使用するか調査する。

読み上げ会話は全て被調査者の同意を得たうえで録音した (SONY IC RECORDER ICD-SX77 を用いて LPEC 形式で録音)。調査手順の3において、被調査者が「会話文と異なる形式を使用する」と回答した場合は形式を変え再度読み上げを実施した。

次に、調査資料として使用した会話文を提示する。

<情報提示> ※被調査者：A 筆者：B

(A が大学のある先生について話しており、「その先生はお菓子に目がない」という話をした後、それを裏付ける体験談を話している場面)

A：なんかね、この間先生のおうちで鍋講習会があって(うんうん)⁸⁵、行ったのね。お土産をね、持って行かなきゃいけないねって言って、先生の家族4人家族だから(うん)、それに自分たちの分も買って行ったの。(うん、うん、うん、うん)でー、鍋のあとにー、ケーキを私たちもいただいたんだけど。そしたらー、なんか、普通ってさ、もう自分の分食べたらあと3つ残ってたらさ、家族のものだっと思うと思わない。

B：先生1人で？

A：先生2つ目、じゃあどれにしようかなーっとか言って食べちゃうの。

B：山田先生よっぽど好きなんだね。

<情報受容(確認)> ※筆者：A 被調査者：B

(A が B にお菓子についていたクイズ(初めて月に降りた宇宙船の名前)を出題した後の会話)

A：ヒントはね、お菓子。

B：グリコ<笑い>。うー、もうちょっとヒントちょうだい。

A：うん、3文字だね。

B：ポッ、キ<笑い>。

A：おー、びっくりした。

B：ポが付くんだね/付くのね。

A：ポは付くね。

⁸⁵ ()内の発話は相手のあいづちを示す。

<情報受容（非確認）> ※筆者：A 被調査者：B

（二人が今食事をしているお店の閉店時間について話している場面）

A：この店、何時までだろう。

B：まだ早いよね。

A：8時までかな。

B：8時まで？

A：多分8時だったと思う。

B：あっ、結構早く閉まるんだね／閉まるのね。

A：9時かな。聞いてみる？

7.3.5.2 調査結果

表9に三つの会話読み上げ実験で産出された「ね」の音調と産出数を示す。分類は音声学専門家と確認した後、筆者が7.2.1.1で類型化した表3の音調の定義に基づき行った。「使用なし」は、「のね」「んだね」を使用しなかった数を示す。調査の結果、「情報提示」及び「情報受容（確認）」には疑問上昇調が、「情報受容（非確認）」にはアクセント上昇調及び平坦調が選好される傾向にあった。

表9 各使用場面で産出された音調

	疑問上昇	アクセント上昇	平坦	上昇下降	使用なし
情報提示	11	3	0	0	1
情報受容（確認）	12	2	1	0	0
情報受容（非確認）	1	6	5	2	1

以下の図1から図4に示すように、「情報提示」と「情報受容（確認）」の産出音調はいずれも疑問上昇調が使用される傾向にあり、「情報受容（非確認）」は「ね」の上昇度が低いことが分かった。

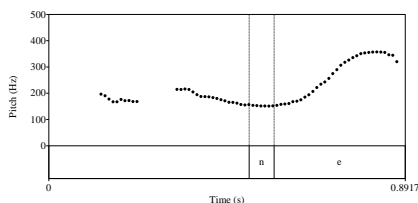


図1 「情報提示（行ったのね）」（疑問40代）

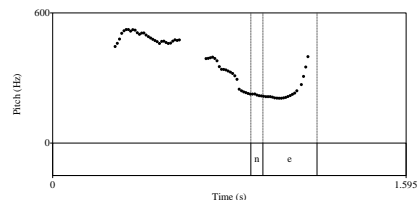


図2 「確認（ボが付くんだね）」（疑問⁸⁶60代）

⁸⁶ 図2のピッチ曲線はPraatのデフォルトのピッチ抽出機能ではピッチが検出できなかったため、Praat上でピッチオブジェクトに対するView & Edit機能を利用し、音を確認しながら手作業で修正することで、全体のピッチが表示されるようにした。

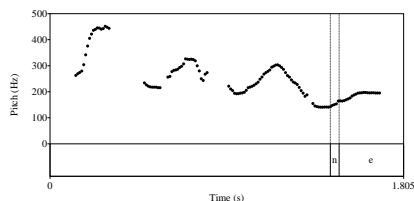


図3 「非確認（早く閉まるんだね）」（アクセント 50代）

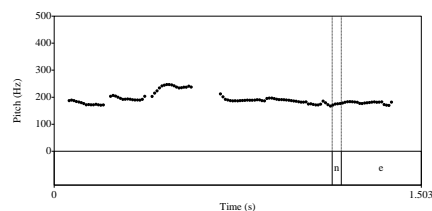


図4 「非確認」（平坦 20代）

調査終了後、被調査者全員に対し、各使用場面で「自分だったら「のね」「んだね」のどちらを使用するか」を聞いたところ、「情報提示」場面では会話文のとおり読み上げた14名⁸⁷全員が会話文同様「のね」を使用すると回答した。一方、「情報受容」については、各場面で回答が分かれた。結果を表10、表11に示す。

表10 「確認」に使用する形式

	40代以下	50代以上	計
のね	3	3	6
んだね	7	2	9
計	10	5	15

表11 「非確認」に使用する形式

	40代以下	50代以上	計
のね	0	0	0
んだね	9	5	14
計	9	5	14

表10に示すように、「情報受容（確認）」は40代以下は「んだね」を選択する傾向がみられたのに対し、50代以降はほぼ同数であった。一方、「情報受容（非確認）」は読み上げ実験で使用した全員が「んだね」を使用すると回答した（表11）。

7.3.6 考察

7.3.6.1 具現化形式と使用場面

調査Iの結果から、「ノダね」は主に「のね」「んだね」が使用されていたが、場面による使用分布が示された。具体的には、「のね」は「情報提示」、及び50代以上の母語話者に「情報受容」場面で、「んだね」は40代以下の母語話者に「情報受容」場面で使用されていた。第4章で指摘したように、自然会話において、裸の形式「の(∅)」は平叙文の「情報提示」のノダ及び疑問文のノダとして使用され、「んだ(∅)」は平叙文の「情報受容」のノダとして使用されるといった機能分担の傾向があることが明らかになったが、この点と本調査の結果を踏まえると、40代以下の女性が使用する「ノダね」は裸の形式「の(∅)」「んだ(∅)」の手續きの意味を引き継いだ形式であることが示唆された。

⁸⁷ 「情報提示」及び「情報受容（非確認）」の合計が14であるのは、会話文で当該形式を使用しなかった被調査者には質問しなかったためである。

本調査資料（名大コーパス）では男性の会話参加者人数が少ないため、男性の「ノダね」の使用数も限られていたが、「のね」の全使用数 48 例中 46 例が「情報提示」場面で使用されたという点を考慮すると、「のね」を使用する男性話者は当該形式を女性同様平叙文の「情報提示」のノダとして使用していることが示唆された。参考までに、「BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）」で男性が使用した「のね」を検索した⁸⁸ところ、1045 例観察された。このことから、現代語においては「の (Ø)」同様、「のね」が性差なく使用される形式であると考えられる。男性が使用する「のね」については指摘にとどめ、詳しい発話意図については今後の課題とする。

7.3.6.2 具現化形式と「ね」の音調との対応

本調査Ⅱの結果、「のね」は疑問上昇調を伴い、「情報提示」「情報受容（確認）」する場面で使用され、「んだね」は同じく疑問上昇調を伴って「情報受容（確認）」する場面、及び緩やかなアクセント上昇調、平坦調を伴い、「情報受容（非確認）」する場面で使用される傾向にあった。つまり、読み上げ実験において、「情報提示」「情報受容（確認）」と「情報受容（非確認）」の間に聴覚的差異が認められた。杉藤（2001）では話し手が聞き手の反応を求めている場合にも上昇調が観察されるとしながらも、「ね」の上昇の程度を低めることによって聞き手の反応を求める場合の「ね」から自己確認の「ね」へと意味が移行する」（p.15）と指摘している。この点を踏まえると、話し手は当該形式を使用する際、「の」「んだ」の発話意図を聞き手にどう差し出すかを「ね」の音調により明示していると考えられる。

「ね」の本質的意味については、すでに多くの先行研究、また、本論文でも 7.2.1.1 で指摘した通りであるが、本調査においても「情報提示」場面で最も使用されているという点からも聞き手との情報の一致・不一致、共有・非共有という点からは考察できないことは明らかである。本稿では、「ノダね」の意味を記述する前提として、「ね」がなぜ話し手、聞き手双方に認知効果が生じた場面でも使用できるかを考えてみたい。ここで金水・田窪（1998）、田窪・金水（2000）一連の研究、及び加藤（2001）の記述を提示する。

田窪・金水（2000）

終助詞「ね」は、当該の命題の妥当性を計算中であるという標識である。（p.277）

加藤（2001）

「ね」は、話題になっている命題内容について、発話者が排他的な知識管理を行

⁸⁸ 検索の方法は「検索対象」を「全て」にし、「書字形出現形」を「の」、「品詞」を「助詞－準体助詞」、後方共起「語彙素」を「ね」、「品詞」を「終助詞－準体助詞」として検索（3018 例観察）した後、「性別」が「男性」のみの発話を抽出した。

う意思がないことを示すという、談話構成機能を持った談話標識である。(p.43)

田窪・金水 (2000), 加藤 (2001) らの「ね」の記述は本稿の先の疑問を考えるうえで有効である。まず、「情報受容」の「ノダね」の「確認」は相手からの言語的・非言語的刺激により話し手の想定集合に新たに加えられた情報を示し、相手からの肯定的返答により命題が真であることが確定される, という点で説明可能である。そして、「非確認」はすでに認識は話し手の中で真と確信されているものの, 相手が管理すべき情報であるため, 相手に配慮するという点で排他的な知識管理を行う意思がないこと (もしくは計算中であるという態度) を示す「ね」が使用されるものと考えられる。

一方、「情報伝達」場面で使用される「のね」については, 発話継続を意図するものの, 相手からあいづちを引き出す疑問上昇調の「ね」を使用しているということから, 相手の理解を確認しながら会話を展開しているという意味で, 排他的な知識管理を行う意思がないこと (相手の理解を計算中であるという態度) を示す「ね」が使用されると考えられる。従って, 田窪・金水 (2000) 及び加藤 (2001) の「ね」の記述で「ノダね」の「ね」は説明可能である⁸⁹。

「ね」の本質的意味を確認したうえで, 「ノダね」の手続き的意味を考えると, 共通するのは「排他的な知識管理を行う意思がないことを示す「ね」を付加することにより, 当該話題についての会話を継続させようとする意図を伝達する」ということである。

(24), (26) を再掲する。いずれも「ね」を取り除いても問題ないが, いずれの場面でも話し手は相手と円滑な会話遂行のため, 役割を明示する意図で「ね」を使用していると考えられる。

まず (24') についてであるが, この場合, 「ね」は任意であるが, 意図明示的に疑問上昇調の「ね」を用いて, 話し手は相手からのあいづち (492 の (うん)) を引き出している。つまり, 相づちを引き出すことにより, 「あなたに十分な認知効果を与えるために, 私は話し手としての立場を遂行したい」という意図を伝達していると考えられる。

(24')

488 F114 : えっ, ((ベルギーへは)) 冬と夏とどっち行くべき?

489 F147 : 夏かな?

490 (ふーん) うん。

491→ 何かね, あんまり晴れてる日がないのね {の (の)}。

492 ...(うん)...曇りばかりだから。

493 (そうなんだ) 何となく夏かな。

⁸⁹ 井上 (1999 : 83-84) にも, 「「…ね」は「話し手の判断の妥当性に関する検証はいまだ不完全である (話し手の判断は可能な判断の一例に過ぎない) という含みを持つ」とある。

(26') は「女の病気かと思ってた」と発話を続けていることから、当該命題が計算中であるとは考えにくい。従って、「んだ (∅)」で終了しても問題ないが、ここで話し手は計算中の態度をふるまうことにより、「十分な認知効果を得るために（もしくは認知環境が完全に修正されるように）、さらに情報を得たい、聞き手としての立場を遂行したい」という意図を伝達していると思われる。

(26')

99 M010 : あ、それ怖いからー、よっぼどのときでないと飲まないんだけど。

101 F063 : よっぼどのときがあるんだ。

102→F094 : 男の人もさー、便秘になんだね {んだ (∅)}。

103 女の病気かと思ってた。

104 M010 : その女の人の便秘っていうのはわかんないけど、(うん) 俺の場合その、

105 ストレスから来る、(ふーん) あの一、過敏性大腸っていう症状があって。

「情報受容」の「確認」の場合は相手から肯定的返答を引き出すという点で、会話継続の意思を示すのは明らかである。つまり、「ね」を付加することにより、話し手は会話継続の意図を伝達していると考えられる。このように考えると、話し手が対照的な場面で「ノダね」を使用する理由を統一的に説明できる。

以上の考察をふまえ、本節では、二つの調査の結果から、「ノダね」の手続き的意味を以下のように結論づけた。

- I. のね (疑問上昇調) ① : 聞き手の反応を求めながら「情報提示」する。この場合、話し手は相手からあいづちを引き出すことで発話権を保持し、話し手の役割を遂行する意図を明示的に伝達する。
- II. のね (疑問上昇調) ②, んだね (疑問上昇調) : 相手からの言語的・非言語的刺激により、話し手自身に新たに加えられた情報を明示し、その情報についての妥当性を確認する。
- III. んだね (上昇の緩いアクセント上昇調・平坦調) : 相手からの言語的・非言語的刺激により、話し手自身に認識の変化が生じたこと、その内容を自身で確認中であることを示し、聞き手としての役割を遂行しようとする意図を明示する。

このように、「ノダね」はさまざまな手続き的意味を担うが、当該形式の「ね」により当該話題について相手と会話を継続させようとする話し手の意図を明示する形式と結論付けた。

7.3.7 結論

本節では、名大会話コーパス及び母語話者に対する会話の読み上げ実験により、女性が使用する「ノダね」の常体の具現化形式「のね」「んだね」を分析、考察した。コーパス調査及び会話の読み上げ実験により、当該形式は「の (∅)」「んだ (∅)」の手続き的意味を引き継いだ形式であり、「ね」は当該話題についての会話を継続させようとする態度を明示する形式であると結論づけた。敷衍すると、「のね」は相手からあいづちを引き出し、発話権を保持する、及び肯定的返答を要求する場面で選好される形式と考えられる。具体的には、相手の認知環境を修正し、談話展開の担い手として主体的に談話に参加することを明示する、もしくは自身に生じた認識の変化の妥当性を確認する機能があると考えられる。

一方、「んだね」は主に情報受容場面で選好されていた。そして、相手の情報提示により、自身に生じた認識の変化の妥当性を確認、または受容した情報を自身で確認中という態度を示すことで、聞き手として会話に参加する意図を伝達する機能を持つ。そして両者の違いは音調により伝達され、その結果聞き手の発話解釈にかかる処理コストを下げると考えられる。

本調査では女性発話を対象に分析を行ったが、7.3.6 で示したように、特にIの「のね」は男性にも使用が観察されており、同様の音調が使用されると推察される。本稿では指摘にとどめ、別の機会に追調査を行いたい。

7.4 「ノダよね」の手続き的意味

7.4.1 はじめに

(27) A : Would you like something to eat?

(a) B : I've just had lunch actually.

(b) B : No.

A : 何か食べない?

(a) B : お昼を食べたばかりなの。

(b) B : いいえ。

(ブレイクモア, 1994 : 60)

今まで見てきたように、関連性理論では、利用できる処理労力に対して、最大かつ可能な限りの認知効果を得ようとする。(27)のAの誘いに対し、Bが一見「いいえ。」で断るより「食べたばかりなの」のほうが処理労力は高くなるように見えるが、「なぜBは自分の誘いを断ったのか」という次の疑問をAが抱くことはないと考え、たとえ処理コストが高かったとしても、(a)の回答のほうが聞き手にとって関連性が高いと言える。

(27) はブレイクモア (1994) からの引用であるが、本論文ではこのような非選好的な応答場面で「ノダよね」が使われやすいという仮説を立てている。つまり (a) のような場合、母語話者には「お昼食べたばかりなんだよね／のよね」と「ノダよね」が使用されやすいと考える。それは、7.3.6 で確認したように、「ね」が排他的な知識管理を行う意思がないこと (相手の理解を計算中であるという態度) を示すため、「の (∅)」や「のよ／んだよ」を使用するより相手に配慮を示すことができるからである。

例えば名大会話コーパスでは、相手に対し非選好的な応答をする場合には「んだよね」が使用されていた。(28) を参照されたい。

(28) (F072, F151 の会話。2 人は大学の同級生。F072 が自分の部屋に「こたつを置かソファを置くか迷っている」と打ち明ける場面)

622→F072: いまねー, すごいさー, こたつを置こうか, ソファを置こうか迷ってんだよね。

624 こたつ, こたつにしようかなーと思って。

625 F151: こたつねー。

626 寝ちゃうからねー, *どっちがいいか*。

627 F072: こたつ重要だよね。

628 (<笑い>) 寒いからさー。

629 で, 夏場, 机にすればいい話だし。

630 (うーん) みんなで集まるときこたつぐらいのテーブルないと鍋とかできないし。

631 F151: うーん。

632→ でも増えると逆に邪魔になるんだよね。

633 F072: あー, やっぱ, そういうもんなんだ。

(名大 data073 女性 20 代)

F072 はソファよりこたつを購入しようと考えており、こたつの必要性を 626 から 630 で述べているが、F151 はそうした F072 の考えに対し 632 で「(家具が) 増えると逆に邪魔になるんだよね」と応答している。そして F072 はこの発話を「こたつを置くのは勧めないと言っている」と解釈し、「あー, やっぱ, そういうもんなんだ」と発話している。話し言葉コーパスを見ると、こうした非選好的な場面で「ノダよね」が使用される例が散見される。

「ノダよね」のもう一つの使い方として、相手に情報提示する場面で使用されるものがある。具体的な例として、(27) の会話の 622 を参照されたい。F072 はここで初めて自身の今の悩みを F151 に打ち明けているが、「...迷ってんだよね」と「んだよね」を使用している。通常「よね」は「同意・確認要求」の表現とされるが、ノダに後接する場

合、こうした相反する発話意図も観察される。

7.3.6.2 で述べたように、本論文は「ね」の本質的意味を田窪・金水(2000)、加藤(2001)を援用し、「排他的な知識管理を行う意思がないこと(当該命題を計算中であるという態度)を示す」と考える。そこで、このような非選好的な発話に使用される場合の「ね」は、「私はこの問題について決定権を持っていない。この問題はあなたとの交渉により解決されるという立場に立つ」というような「態度保留」を表明するものと考えられる。

本節では、実例及び母語話者に対する読み上げ実験、聞き取り実験から、「んだよね」が異なる発話意図を担い得る理由を音調と当該形式の意味から考察する。

7.4.2 先行研究と研究課題

7.4.2.1 先行研究

当該形式の発話意図に関する先行研究として蓮沼(1992)、日本語記述文法研究会(2003)及び野田(2002)を取り上げる。蓮沼(1992)によると、「よね」には「聞き手に欠けた情報を話し手が伝達する用法」があり、この場合「ね」の使用が任意的であること、そして、この「ね」を使用することにより、「発話権の保持」や相手の発言に呼応して一体感を示すといった協応的態度を示すことができる。さらに、この用法の形式的特徴として「よね」が(29)のように「のだ」や「わけだ」といった説明のムードを表す形式とともに使用されると記述している。

- (29) 法子：彼がね、仕事で南米に行くことになって、彼としては一緒に来てくれるだろうと思っていたの^よね。でも、桐子、その頃、仕事が面白くて仕方なかったの。それで、一緒に行くのいやだ^つって行^つったの。
(蓮沼, 1992 : 65 (6) 点線筆者)

ただし、蓮沼(1992)では、なぜ「のだ」と共起すると「よね」がこうした情報提示の用法を持つのか、という点についての説明がない。日本語記述文法研究会(2003)にも「聞き手に受け入れられると見込まれる話し手の認識を示す」(p.266)用法を説明する中で、(30)のように「話し手の個人的な知識や考えを表す文に「よね」を用いることは難しい」(p.267)が、このような場合は(31)のように「「のだ」によって、聞き手に対して説明しようとする態度を明示すれば、自然な文になる」(同)としているものの、それ以上の言及がない。

- (30) A「海外旅行中に財布を落としたそうですが、大丈夫でしたか？」
B「?あの時は困りました^よね」 (p.267)

- (31) A「海外旅行中に財布を落としたそうですが、大丈夫でしたか？」

B 「あの時は困ったんですよね」

(同)

野田 (2002) では、「のだ」に「確認要求」の「よね」が接続した例として、次の例を挙げている。

(32) 「結婚、しているんですよね？」

突然彼女が僕にそう聞いた。どくんと心臓が嫌な音を打つ。

「指輪」

そう彼女は呟く。僕は黙ったまま、脂肪に埋もれた銀色の指輪に目を落とす。

「右手にしているから、もしかしたら違うのかなって思ってたんです」

(野田, 2002 : 287 (85))

野田 (2002 : 288) によると、この場合、聞き手が指輪をしているという状況の〈事情〉を「結婚している」と把握していることが「のだ」で、その把握が当然のことであるという見込みが「よ」で、その見込みと聞き手の知識の一致を問うことが「ね」で表されているという。

両者の記述をまとめると、「ノダよね」には話し手が相手 (当該発話の聞き手) に「情報提示」する場合と、話し手が相手に知識の一致を求める (「確認・同意求め」) 場合があるということになる。では、この一見相反する発話意図を、母語話者は何を手がかりに解釈するのであろうか。

7.4.2.2 研究課題

先行研究により、「ノダよね」を大まかに類型化すると「同意求め・確認」及び「情報提示」となり、二つの対照的な発話意図を伝達することが分かっている。しかし、なぜ当該形式がこうした相反する意図を伝達するかについてはいまだ明らかになっていない。本論文はこの問題を明らかにする手がかりとして、「ノダね」同様、文末音調に注目することにした。そして、以下三つの研究課題を立てた。

課題 1. 話し手は発話意図により「ね」の音調を区別するのか。

課題 2. 話し手が「ね」の音調を区別した場合、それは聞き手の解釈と整合するのか。

課題 3. 「ノダよね」はなぜ対照的な発話意図を伝達しうるのか。

7.1.2 で示したように、「ノダよね」は男女ともに頻用される形式である。本論文はこれらの課題に対する解答を得ることにより、ノダ形式の中でも性差なく使用される「ノダよね」の手続き的意味を明らかにできると考える。

7.4.3 調査 I : コーパス分析及び読み上げ実験を用いた調査

7.4.3.1 調査概要

調査概要を以下に示す。

目的 : 「んだよね」の発話意図と音調との関係を探る

資料 : 名大会話コーパス (2名~4名の話者による約 100 時間の雑談データ)

手順 : 1. 「ノダよね」の具現化形式を抽出する。

2. 先行研究に基づき「んだよね」の発話意図を類型化する。

3. 各発話意図が含まれた会話文を作成し、読み上げ実験を行う。

4. 発話意図と「ね」の音調との関係を分析する。

7.4.3.2 調査結果

7.4.3.2.1 「ノダよね」の具現化形式

まず、本コーパスにおいて観察されたすべての「ノダよね」を抽出した。各具現化形式の総数及び分析対象数を表 12 に示す。結果、「んだよね」「のよね」「んですよね」(それぞれ「よねえ」「よねー」といった長呼含む) の 3 形式が使用されていた。

表 12 「ノダよね」の具現化形式の出現数 ※ () 内は参加者人数を示す

	総数	対象数	10, 20 代 (104)	30, 40 代 (50)	50, 60 代 (37)	70 代以降 (6)	不明 (1)
んだよね	830	804	559	202	38	4	1
のよね	177	167	31	24	88	24	0
んですよね	314	304	82	114	107	0	1
計	1321	1275	672	340	233	28	2

文字化が不完全な発話、「って」のような引用表現が付加された発話、同一話者の繰返し発話は対象外とした。結果、1275 発話 (96.5%) が対象となったが、本コーパスにおいては本稿で分析対象とした「んだよね」が全体の 63.1% を占めていた。同じ常体の具現化形式である「のよね」と出現数に差があるかを χ^2 検定を用いて調査した結果、有意な差が見られた ($\chi^2 (3)=403.1, p<.01$)。また、40 代以下では「んだよね」、50 代以降では「のよね」の使用数が多い傾向にあった。さらに、男性の使用に注目すると、「のよね」は 4 例 (20 代, 60 代各 1 例, 40 代 2 例) のみであったのに対し、「んだよね」は 97 例観察された。

本調査の結果及び 7.2.1 で示した BTSJ の結果を考慮すると、自然会話において「ノ

ダよね」は「んだよね」としての使用が男女とも多いことが分かった。確かに 50 代以降の女性は「のよね」の使用が多いものの、コーパス調査から「んだよね」の方が汎用性は高いと考えられる。従って、調査資料を「んだよね」で作成することが妥当と考え、「んだよね」を用いた調査を実施した。

7.4.3.2.2 「んだよね」の発話意図

次に、「んだよね」の発話意図を用例とともに示す。先行研究で記述される「確認・同意求め」「情報提示」以外に、「同意」の用例も観察された。「情報提示」については、蓮沼 (1992) がいう「発話権保持」のほか、本調査では「相手の質問に対する応答」場面での使用が観察された。

(i) 確認

(33) (F120 と F049 の会話。二人は大学のサークル仲間。F049 が「学生のころ通っていた地域の英語教室がとても楽しかったが、気がついたら行かなくなっていた」と話した後の場面)

489 F120 : あ、院に行ってるときか。

490 F049 : , あ、だからできたんだね。

491 F120 : あー、そうだよー。

492 F049 : で、事務所入ってー、(うん) 全然平日で行けなくなっちゃったんだ。

493 F120 : あー、そっかー。(うん) じゃ、院に行ってるころはさ、(うん)

494→ もうちょっとは楽しかったんだよねー。

495 F049 : あー、楽しかった。 (data053 女性 30代)

(ii) 同意求め

(34) (F051 と F131 の会話。二人は大学院の同級生。二人が非常勤として勤務する大学の、ある専任教員について話している場面)

856 F131 : でも、いろんなところで見かけるよ、あの人。

857 (<笑い>) 絶対、行けば一回は見るもん。

858 F051 : いるよね。あの、LL のあたりの廊下ですごい見かける。

859 F131 : 絶対見るよ、あの人。

860→F051 : うん。で、9号館の、その講師室にも来るんだよね。

861 F131 : 来る、来る。 (data117 女性 20代)

(iii) 同意

(35) (F004 と F005 の会話。二人は大学院生。日本語の授業中に英語を使いたがる学生についての会話)

192 F004 : そう, (うん) 言ってもだめでしょう。

193 (うん, うんうん) あれがよくわかんないんだけど, 私。

194 F005 : なんかちょっとね, (うん, うん) 授業を投げてるみたいなのが (うん, 195 うん) あるよね。

196 F004 : そうそうそうそう。

197→ そうなんだよね。

198 うん, なんなんだろうね。

199 そう, 目標が高くないんだろうか, なんなんだろうか。

(data052 女性 20代)

(iv) 情報提示 (発話権保持を (36), 応答を (37) に示す)

(36) (F047 と M014 の会話。二人は大学院の同級生。M014 がおとといスープカレーを食べに行ったと話した後の場面)

478 F047 : スープカレー, 最近はやりなんだねー。

479 M014 : そうそうそう。(うん) それでね, なんかー, 土曜日にー, (うん) なんか

480 俺, 図書館にいてー, (うん) なんか, なんだっけ, なんか知らないけど

481 H と I さんと会ってー, (うん) 飯食いに行くかーつつって (うん) 初め

482→ 中華行きたいって (うん) 行ったんだよね。(うん) で, 十五条ぐらいに (うん)

483 最近できたなんか中華の店があったから (うん) 行ってみたんだけど

484 ー, 3時ぐらいに行ったからちょうどさー, 昼の部と夜の部の間でー, (あ

485 ー, 休憩時間みたいな) 終わったたのね。で, 隣, 隣がなんかスープカレー

486 ーのさ, 心っていう店があってー。

487 F105 : あっ, そこうまいらしいー。

(data121 男性 20代)

(37) (F086 が恋人について話した後の会話)

625 F046 : 相手はどこ出身の人, (あっ, あれだよ) どの, 独り暮らし?

626→F086 : ううん, 違う。元から東京の人で, (あ) なんか, 八王子なんだよねー。

627 F046 : あっ, 結構遠いんだね。

(data072 女性 10代)

7.4.3.2.3 発話意図と音調との関係

以上、4つ（下位分類を含めると5つ）のタイプの「んだよね」が観察された。こうしたさまざまな発話意図を母語話者は適切に解釈し、コミュニケーションを遂行している。先述したように、本論文はこの発話意図の手がかりの一つが音調であると考え、各発話意図と音調「ね」との関係性を調査することにした。ただし、名大会話コーパスは文字化資料のみであるため、本調査では当該コーパスで観察された用例を一部修正した会話文を用いて読み上げ実験を行った。調査概要は以下の通り。

調査目的：「んだよね」の発話意図と「ね」の文末音調の対応関係を明らかにする。

被調査者：母語話者 15名（東京（11名）、神奈川（2名）、名古屋（2名）出身の20～50代の女性13名、男性2名）

調査期間：2014年5月から8月

調査手順：1. 被調査者が会話文を黙読する。

2. 筆者と状況を確認した後読み上げる。

読み上げ実験に際し、被調査者には、会話文の中の表現が不自然だと思ふ個所については適宜変更するように指示した。会話読み上げは全て被調査者の同意を得て筆者が名古屋大学内、福井大学内、及び被調査者の自宅において録音した（SONY IC RECORDER ICD-SX77を用いてLPEC形式で録音）。

「ね」の音調は「ノダね」同様、郡（2003）、轟木（2008）を参考に「疑問上昇調」「アクセント上昇調」「上昇下降調」「平坦調」に分類した。7.2.1.1で述べたように、「ね」は同じ上昇音調でも発話意図が異なり、疑問上昇調は「確認要求」、アクセント上昇調は平坦調と同じ「話し手の判断の提示」を示すとされる。さらに、Hasegawa（2006）、森山（2008）の「ね」が計算中の態度を示す場面で長呼する傾向にあるという指摘に加え、非選好的な場面で「ね」が長呼されるという内省から、「ね」が長呼か非長呼かでも発話意図が異なると予想される。ただし、疑問上昇調と上昇下降調はすでにその音調の性質から「ね」が「ねえ」と聞こえるため、非長呼、長呼の区別は主にアクセント上昇調と平坦調で生じると考えられる。そこで、拍内音調4種及びアクセント上昇調、及び平坦調の非長呼、長呼の計6パターンを想定し、聴覚印象に基づき分類した。

「ね」の音調について、高さは筆者が聴覚印象で分類し、長さについては筆者の他2名の母語話者、計3名で判断した。「ね」の長さの判断については、判定協力者に「「ね」と書きたくなるか、「ねー」「ねえ」と書きたくなるか」を問うた。一致率は88.9%で、意見が分かれた場合には、多数決を採用した。

表13に各会話の読み上げ実験で産出された「ね」の音調と産出数を示す。音調を分析した結果、疑問上昇は3回観察されたのみであった。また、各発話意図における産出

音調をみてみると、(i)「確認」は主に上昇下降調及びアクセント上昇調、疑問上昇調、(iii)「同意」及び(iv)「情報提示」は平坦調長呼、アクセント上昇調長呼が観察された。(ii)「同意求め」はアクセント上昇調、上昇下降調、平坦調が観察された。

表 13 各発話意図と産出音調 ※ () は長呼

	(i)	(ii)	(iii) ⁹⁰	(iv) 保持	(iv) 応答
疑問上昇	1	0	0	2 (2)	0
アクセント上昇	4 (1)	7 (5)	8 (5)	5 (5)	6 (5)
上昇下降	10 (10)	5 (5)	0	0	0
平坦	0	3 (1)	5 (2)	7 (4)	9 (6)
下降	0	0	0	0	0

次に、「ね」の長さについてであるが、まず上昇下降調はすべて長呼と判断され、アクセント上昇調、平坦調は概ね 400msec 以上を長呼と判断していた。実際に「ね」の持続時間を測定したところ⁹¹、上昇下降調で最も持続時間が短かった「ね」は 305msec であった。一方、アクセント上昇調及び平坦調の「ね」については、3名の判断が一致しなかったもの(8例)のうち、長呼と判断されたのはアクセント上昇調が 353msec、平坦調が 366msec 以上であった。

7.4.3.3 考察

7.4.3.3.1 「んだよね」の使用

本論文では、「んだよね」の発話意図を解釈する手がかりを探ることを目的に当該形式を分析した。第4章で示したように、BTSJの親しい者同士及び初対面同士の雑談(約16時間分)を用いて「ノダ形式」の使用実態を調査したところ、スピーチレベル及び性別に関わらず、「ノダよね」は使用数がノダ形式の上位5位以内に入っていた。従って、「ノダよね」は使用頻度の高い形式であると言える。そして、偏りのある資料ではあるが、本調査の結果、その「ノダよね」の具現化形式の中で「んだよね」は使用頻度も高く、性差なく使用される形式であるという結果になった。

⁹⁰ (iii)「同意」(iv)「情報提示(保持)」の合計が15に満たないのは、被調査者が非ノダ文の「だよね」と発話したためである。

⁹¹ 持続時間の測定はPraat5.3のSoundEditorを使用し、広帯域サウンドスペクトログラム及び音声波形に基づいて行った。

7.4.3.3.2 「んだよね」の発話意図と音調との関係

次に、「んだよね」の発話意図と音調との関係について考察する。先行研究の指摘通り、当該形式は対照的な二つの場面での使用が観察された。敷衍すると、相手に自身の持つ情報を確認する、もしくは同意を求める場合と、当該情報を保有していない（と考えられる）相手に情報を提示する場合である。そのほか、先行研究ではとり立てて記述されていないが、相手の意見に同意する場面でも使用が観察された。ただし、これは当該形式が「よね」を含むことから、「同意」は当該形式が有する用法であることが当然視されているためであろう。

発話意図と「ね」の音調との関係については、本調査の結果、「同意」「情報提示」と「確認」「同意求め」では異なる音調が使用される傾向にあった。具体的には、「同意」「情報提示」には、「(聞き手が同意しているという前提で)話し手の判断を提示する」アクセント上昇調、及び平坦調が選好されていたのに対し、「確認」には「聞き手に同意を求める」上昇下降調（いずれも轟木，2008）及び先述のアクセント上昇調が、「同意求め」については、上昇下降調、アクセント上昇調、平坦調が使用されていた。轟木（2008）のアクセント上昇調と平坦調が同じ発話意図を伝達するという記述は、本調査でも概ね支持された。ただし、轟木には「有核の語につくときはアクセント上昇のみで、低い拍のときは、同じ機能が対応する音調としては平坦は用いられない」（p.22）とある。今回「ね」が後接する「んだよ」は有核であるため、当該形式については「ね」の平坦調も存在し、その機能はアクセント上昇調と同義であると推測される。アクセント上昇調と平坦調との発話意図の違いについては次の聞き取り調査で分析、考察する。

次に、「確認」及び「同意求め」についてであるが、これら二つの発話意図を伝達する「ね」の音調の違いは話し手の当該情報に対する確信度、もしくは聞き手への同意要求の度合いによるのではないかと推察される。つまり、聞き手に対して積極的に同意を求めたい場合には上昇下降調が、聞き手の同意が当然得られると考える場合にはアクセント上昇調及び平坦調が使用されると言える。ここで興味深いのは、「確認要求」（轟木，2008）とされる疑問上昇調の使用がわずか1例だったことである。本来ならば「確認要求」の用法が指摘される「よね」には「確認要求」を意図する疑問上昇調の「ね」が使用されると考えられるが、本調査においては使用がほぼみられなかった。これは「んだよね」が不確かな情報には使用されにくいということを示唆していると思われる。

一方、「ね」は二つの場面で長呼と判定される傾向にあった。一つは上昇下降調の場合であるが、これは7.4.3.2.3で述べたように、当該音調の性質上「ねえ」となるためと予測される。二つ目は「同意」「情報提示」場面であった。松崎・河野（1998）では、(38)の例を挙げ、「文末の最後の1拍をアクセントの上がり目のように上げて伸ばすと、独り言をしみじみと言っている感じになる」（p.116）と記述している（用例中の記号は松崎・河野（1998）に基づく）。

(38) やっぱり、帰っちゃったか。

(松崎・河野, 1998:117)

この論を援用すると、当該形式が「同意」、または「情報提示」する場面で長呼されやすいのは、「当該情報を話し手自身で処理中である」という心的態度を聞き手に明示的に伝達するためであると考えられる。そして、当該形式に関しては、「ね」が平坦・長呼される場合にも同様の心的態度が表明されるのではないかと推察される。

また、庵他(2001)では1.2で述べたように、自然下降調の「よね」が話し手の意見などを述べる際に使われることがあり、(39)のように聞き手に対する非難を表す場合があることを指摘している。

(39) A: ごめん。待った?

B: 1時間立ってるのは結構疲れるんだ {よね/?ね}。→

(庵他, 2001:276(6))

庵他(2001)のこの記述は、今までの先行研究には記述されていない「んだよね」の使用場面を指摘した重要なものだが、当該発話は、直接聞き手を非難するというより、「当該発話によって私が言いたいこと(当該場面では聞き手に対する非難)を理解してほしい」といった語用論的解釈を期待するものと考えられる。そして、ここでいう「自然下降調」が本稿の「意図的に上昇も下降もしない平坦調」と同義であるとすれば、独話的な態度を示す平坦調長呼はアクセント上昇調と同様に、相手に対する非難や非選好的応答、または(36)のように過去の出来事を回想しながら語る場面で使用されやすいものと思われる。

また、「確認要求」場面で使用が1例のみであった疑問上昇調が、「発話権保持」で2例観察されたことも、少数事例として挙げておきたい。「ノダね」では、発話権保持の場面で疑問上昇調の「ね」が使用されていたが、「ノダよね」の場合も同じような意図で使用が観察されたということは、ノダ形式に使用される疑問上昇調の「ね」は「確認要求」だけでなく相手の反応を伺いながら「発話権保持」する場面で使用される音調と考えられる。この点についても次の調査と合わせて考察したい。

本節ではまず「ノダよね」の実現形式「んだよね」に注目し、その発話意図と音調との対応関係を記述した。提示した用法の一つである「情報提示」以外の用法は非ノダ文で使用される「よね」についてもあることから、それらの用法には同様の音調が使用される可能性がある。もしそうだとすれば、本調査の結果は非ノダ文を指導する場合にも適用できると考えられる。「んだよね」と非ノダ文で使用される「よね」の発話意図と音調との対応関係に関する差異については今後の課題とする。

7.4.3.4 結論

調査 I では、自然会話と母語話者の読み上げ実験により「んだよね」の発話意図と「ね」の音調との関係について記述した。本調査は会話文の読み上げ実験であり、被験者も 15 名という小規模なものであるが、発話意図と「ね」の音調との関係を傾向として記述したことにより、母語話者が使用する「んだよね」の発話意図を理解する手がかりを示せたのではないかと思う。具体的には上昇下降調の「ね」を伴った場合には命題の真偽について判断を求め、アクセント上昇調、平坦調の場合には、話し手自身の判断の提示、さらに「ね」が長呼された場合には話し手が当該命題について自身で確認（回想）中であることを相手（聞き手）に明示する、という傾向があると考えられる。

当該形式は「ノダ」と終助詞が共起しているため、その意味はまだ解明されていない点が多い。しかし、本調査により当該形式は使用頻度が高く、付加された情報が会話の重要な鍵になっていることが示唆された。ただし、本調査は読み上げ実験という擬似的な会話である。そこで、本調査の結果の妥当性を検証するため、日本語母語話者を対象に聴取実験を行い、「ね」の音調と発話意図との対応を調査することにした。

7.4.4 調査 II : 「ね」の音調に関する聞き取り調査

7.4.4.1 先行研究と本調査の仮説呈示

調査 I の結果、「ノダよね」は発話意図の違いにより異なる「ね」の音調が使用されており、上昇下降調の「ね」は命題の真偽についての判断を求め、アクセント上昇調、平坦調は話し手自身の判断の提示、さらに「ね」が長呼された場合には話し手が当該命題について自身で確認（回想）中であることを相手に明示する傾向にあることが分かった。さらに、疑問上昇調はほとんど産出されなかったものの、「情報伝達」場面の、特に発話権保持場面で 2 例使用されていることが分かった。本論文では、こうした「ね」の使用される音調から、「ノダよね」の手續きの意味が考察できるのではないかと考える。そこで、まず「よ」の意味について考える。

7.4.4.1.1 「よ」が伝達する発話意図

「よ」の手續きの意味を記述するうえで本論文では、7.1.2 で示した通り、白川（1992）及び加藤（2001）の記述する「よ」の意味が援用できると考える。両者の「よ」の意味を再掲する。

白川（1992）

その文が聞き手に向けられていることをことさら表明する（p.42）

加藤 (2001)

話題になっている命題内容について、発話者が排他的な知識管理を行う準備があることを示すという、談話構成機能を持った談話標識である (p.43)

これらの論を援用すると、「よ」の手續きの意味は次のように規定できる。

「よ」の手續きの意味：

「当該情報を聞き手が知るべき情報として提示している」と話し手が考えていることを聞き手に伝達する

「よ」をこのように規定すると、当該形式の「ね」が確認要求を示す疑問上昇調と共起しにくいことも説明可能となる。つまり、話し手は「よ」を使うことにより、「(命題)ノダ」を「排他的な知識管理を行う準備がある」と考えていることを聞き手に伝達する。先行文脈から「今この状況において聞き手にとって最も関連性がある情報である」と話し手が解釈した「(命題)ノダ」を聞き手が知るべき情報として提示していることを聞き手に伝達する、ということは、話し手は当該命題が真であると確信しているという態度を示している。従って、不確実情報を確実化する疑問上昇の「ね」は使用されにくいと説明できる。

7.4.4.1.2 仮説

調査 I の結果及び先行研究を基に、本稿では以下二つの仮説を立てた。

仮説 1. 「(命題) んだよね」は「(命題) んだよ」+「ね」である。

先行文脈から聞き手にとって最も関連性があると話し手が解釈した「(命題)ノダ」は今、この状況において聞き手が最も知るべき情報であると話し手が考えている、ということを聞き手に伝達する「よ」が付加された「んだよ」に、「ね」が付加された形式である。

仮説 2. 「んだよね」は「んだよ」の性質上、話し手が真と確信する命題に後接するため、「疑問上昇調」の「ね」は使用されにくい。

7.4.4.2 調査

調査概要は以下の通りである。

調査目的：仮説検証のため、「んだよね」の「ね」の音調と、聞き手の発話解釈の対応を探る

被調査者：10代～20代の南関東（東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県）出身の日本語母語話者20名（男女各10名）

調査期間：2015年6月～7月

調査材料：「彼に会ったんだよね」「あの店美味しいんだよね」「それは嫌なんだよね」の3種類の発話文を男女2人が「ね」の音調6種⁹²（上昇下降調，アクセント上昇調，疑問上昇調，平坦調，アクセント上昇調長呼，平坦調長呼）を用いて作成した36刺激文（筆者が名古屋大学の音声実験室においてSONY IC RECORDER ICD-SX77を用いてLPEC形式で録音した。各刺激音のピッチ曲線は付録5を参照のこと）

刺激音作成者属性：東京都・30代・男性，福井県・40代・女性

ただし，女性発話者は東京式アクセント型地域出身者ではないため，東京式と同等であるかを東京出身話者に確認のうえ使用した。

調査方法：質問紙及びインタビューによる個別調査（付録6）

調査場所：一橋大学，目白大学の教室

調査手順：1. 各刺激音を聞き，会話で使用された場合の自然度「とても自然」「自然」「許容できる」「不自然」「非常に不自然」を判定する。
2. 手順Iで「とても自然」「自然」「許容できる」と判断した音調について，連想する発話意図を回答する。

調査に使用した文は，共起する語の意味により印象が異なる可能性を排除するため，語が中立的（「会った」）なもの，肯定的（「美味しい」）なもの，否定的（「嫌」）なものを選定した。刺激音の提出順はカウンターバランスを採用した。

7.4.4.3 調査結果

7.4.4.3.1 自然度判定

手順Iの回答を1～5まで数値化⁹³し，符号検定を行った結果，18文中，話者間で発話の評価に有意差がみられたのは「それは嫌なんだよね」のアクセント上昇及び平坦の2文であり，ほぼ評価に有意差（ $p<0.05$ ）は認められなかったため，まとめて評価のばらつきをみることにした。

以下，各音調の判断結果を図5～10に示す。

⁹² アクセント上昇及び平坦の非長呼，長呼については，次のような手続きを行った。まず，事前に南関東出身の母語話者3名にすべての刺激文を聞かせ，「ね」を「ね」「ねえ」「ねー」のいずれと判断できるかを依頼した。調査の結果，非長呼はすべて「ね」，長呼は「ね」以外と判断された。従って，本刺激文の長呼，非長呼は客観的に区別できると判断した。

⁹³ 数値化は評価の高さに合わせ，「とても自然」(5)，「自然」(4)，「許容できる」(3)，「不自然」(2)「非常に不自然」(1)とした。

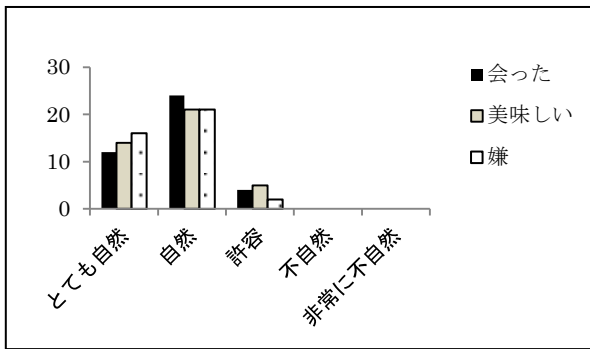


図5 上昇下降調

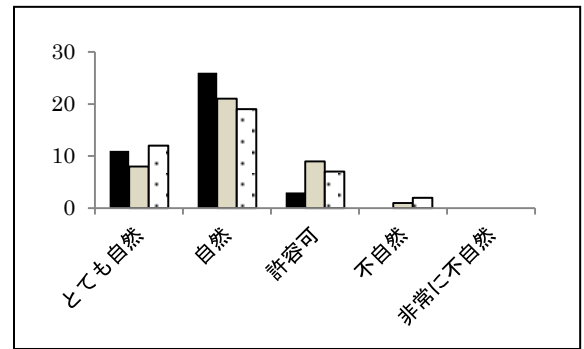


図6 アクセント上昇調

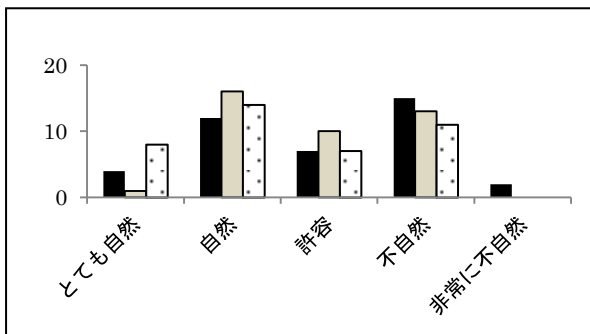


図7 疑問上昇調

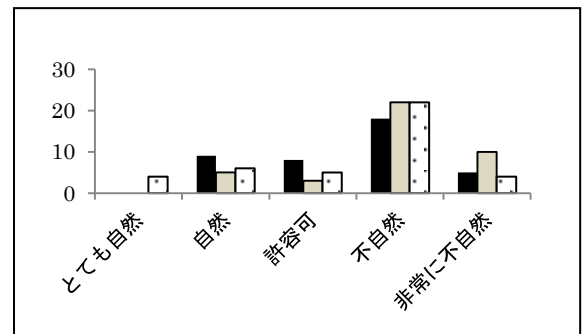


図8 平坦調

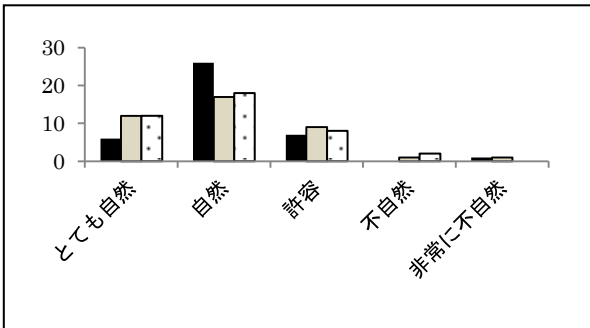


図9 アクセント上昇調長呼

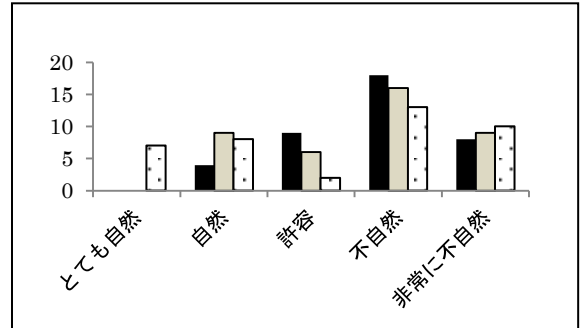


図10 平坦調長呼

自然度判定の結果、1) 話者間で発話文に評価の差はないこと、2) 上昇下降調、アクセント上昇調、アクセント上昇調長呼はすべての文で相対的に評価が高いが、疑問上昇調は評価にばらつきが見られたこと、3) 平坦調、平坦調長呼は相対的に評価が低かったものの、「嫌」の平坦調、平坦調長呼は「とても自然」という判断もあったことなどが分かった。

7.4.4.3.2 「ね」の音調と連想する発話意図

次に、手順2として「非常に自然」「自然」「許容できる」と判断された刺激文に対し、

「ね」の音調と連想する発話意図を調査した。まず、発話意図を回答してもらう前に、被調査者には連想した発話意図は全て回答すること、そして、当該刺激文だけで意図が連想できない場合は無理に回答せず、「わからない」と回答するように指示した（回答は付録7を参照のこと）。

調査後、先行研究に基づき、被調査者の回答を主に「情報提示」「同意・確認要求」そして「わからない」の3つに分類した。本論文では相対的に許容度の高かった上昇下降調、アクセント上昇調、アクセント上昇調長呼、及び評価にばらつきのみられた疑問上昇調についての結果を表14から表16に示す。

表14 各音調と発話意図の対応（彼に会ったんだよね）

	情報提示	同意・確認要求	わからない	合計
上昇下降調	0	40	0	40
アクセント上昇調長呼	36	5	1	42
アクセント上昇調	25	18	0	43
疑問上昇調	11	8	4	23

表15 各音調と発話意図の対応（あの店美味しいんだよね）

	情報提示	同意・確認要求	わからない	合計
上昇下降調	0	40	0	40
アクセント上昇調長呼	35	5	1	41
アクセント上昇調	25	13	2	40
疑問上昇調	9	15	3	27

表16 各音調と発話意図の対応（それは嫌なんだよね）

	情報提示	同意・確認要求	同意	わからない	合計
上昇下降調	0	40	0	0	40
アクセント上昇調長呼	35	6	1	0	42
アクセント上昇調	20	17	1	1	39
疑問上昇調	12	15	2	4	33

発話解釈の回答を調査した結果、以下の点が明らかになった。

- 1) すべての文において、上昇下降調は一貫して「同意・確認要求」、アクセント上昇調長呼はほぼ「情報提示」と解釈された。
- 2) アクセント上昇調、疑問上昇調はやや差がみられたものの、いずれの文においても解釈に顕著な偏りはみられなかった。

3) 疑問上昇調は許容できるが「発話意図が分からない」という回答が複数みられた。

その他、各音調で共通して得られた意見として、上昇下降調は「事前に聞いたことを確認する」「確信を持って確認する」、アクセント上昇調長呼は「独話的」「さりげなく伝える」、アクセント上昇調は「答えが分かっているうえでの同意求め」「軽く伝える」、疑問上昇調は「その発話を会話の切り口にして話題をふる」「疑問」などがあつた。

7.4.4.4 考察

7.4.4.4.1 「ね」の音調と自然さ

自然度判定から、すべての文において上昇下降調、アクセント上昇調、アクセント上昇調長呼の「ね」はほぼ許容できる以上の評価を得た。このことから、この3つの音調は「んだよね」で使用された場合に聞き手の発話解釈を制約しうる音調であることが示唆された。一方、同じ上昇調であっても、疑問上昇調は評価にばらつきがみられた。これは、「んだよ」に「確認要求」を意図する疑問上昇調の「ね」が適さないためと推察される。

平坦調、平坦調長呼は相対的に評価が低かったが、轟木（2008）の記述及び調査Ⅰの結果を踏まえると、これは文脈と切り離れたためと考えられる。従って、当該形式の場合、非上昇調の「ね」は聞き手に発話解釈の手がかりを与える音調とは言えず、文脈依存型の音調といえる。一方で、「嫌」は「とても自然」という判断もあつた。そのため、否定的な発話には非上昇調の「ね」の容認度が上がる可能性が示された。

7.4.4.4.2 「ね」の音調と発話解釈

次に、文単位で聞き手の発話解釈を制約しうる3つの音調（上昇下降調、アクセント上昇調、アクセント上昇調長呼）について、本調査での回答結果と先行研究で示される発話意図とを比較する。各音調と発話意図の対応について、轟木（2008）の記述及び調査Ⅰの結果と調査Ⅱの結果を表17に示す。

表17 「ね」の音調と発話意図の対応

	轟木（2008），調査Ⅰ	調査Ⅱ
上昇下降調	同意要求	同意・確認要求
アクセント上昇調	（聞き手が同意しているという前提での）話し手の判断提示	同意・確認要求 情報提示
アクセント上昇調長呼	情報提示	情報提示

表 17 から、上昇下降調及びアクセント上昇調長呼は先行研究を概ね支持する結果となったが、アクセント上昇調は聞き手が同意しているという前提での判断提示から、そのような前提のない情報提示とも解釈された。この点を踏まえると、アクセント上昇した後の長さ、高さが発話意図に関係していると指摘できそうである。

次に、「ね」の産出音調と発話意図の対応を基に、「んだよね」の手續きの意味について、実例を踏まえて考察する。まず、「同意・確認要求」と判断された上昇下降調、アクセント上昇調はそれぞれ「事前に聞いたことを確認」「答えがわかっているうえでの同意求め」というニュアンスがあるという意見があった。その点を踏まえると、この場合の「んだよね」は「(命題) んだよ」に「(聞き手の同意が前提の同意要求の) ね」が付加された形式であり、話し手は何らかの目的で会話を継続させるために、真と確信する情報を呈示し、相手から肯定的返答を引き出す場面で当該形式を使用していると考えられる。(40) を参照されたい。

(40) (F093 と F101 の会話。二人は友人。東京見物に行った話を聞いて、以前も同じ話を聞いたことがある、と思い出した F093 の発話)

- 1375 F093 : あれなんだったっけ？
1376 なんかいきなりはとバスツアーとか乗ってなかった？
1377 F101 : 乗った，乗った。
1378 F093 : 1人で行ってたよね，あれー。
1379 F101 : そうだね。
1380 あれもね，なんか，あの，浅草寺とか行ってねー，隅田川下りとかしてねー，***。
1381→F093 : 1人で行ったんだよね。
1382 F101 : うん，そう。
1383 F093 : 1人で行って楽しいかな，東京って。
1384 F101 : ま，でもね，私結構好きだよそういうの。
1385 F093 : ほんとい。
1386 F101 : うん。
1387 F093 : 私一人旅嫌いじゃないけどそういう都会に1人でなんかいるのあんまり好きじゃない，私は。
1388 好きじゃない，私は。
1389 F101 : あー，そっかー。
1390 F093 : うん。 (data080 女性 20代)

F093 は 1378 で「(東京へ) 1人で行ってたよね」と一度確認し、「そうだね」と肯定されているにも拘らず、再度 1381 で「1人で行ったんだよね」と確認している。これは、1383, 1387-1388 で反論する環境を整えるために、相手と共通認識を明示する必要があ

ったためと説明できる。一方、次の(41)では、異なる意図で会話継続の意思を伝達していると考えられる。

(41) (F004 と F090 の会話。二人は高校時代の同級生。F004 が「友人と正月に旅行の計画を立てていたが、友人が倅約家のため旅行先を探すのに苦労した」と言っている場面)

1466 F004 : で、しかもさ、最初にメールで書いてきたのが、(うん) なんだっけ、3

1467 0万だったかなー、(うんうん)

1468 30万以内で(うん) 抑えたいっていうのでー。

1469 で結構シーズンもー、(うん、うん) なんて言うの、あの一。

1470→F090 : お正月とかだから高いんだよね。

1471 F004 : そう、そう、そう。

1472 結構高いシーズンで。

1473 F090 : うんうん。

(data022 女性 20代)

この場合、1469でF004が「なんて言うの、あの一」と言葉が出てこないのを聞き、言いたいことを察し、1470で真と確信する命題を呈示することで、相手が話しやすい環境を作っていると推察される。(40)、(41)のように、形は同意、確認要求であるものの、話し手は真と確信する命題に当該形式を使用していた。このような場合は、上昇下降調、アクセント上昇調の「ね」が使用されやすいと考えられる。

次に、情報伝達と解釈されたアクセント上昇調、アクセント上昇調長呼について考察する。まず、アクセント上昇調は先述したように、「同意・確認要求」だけでなく「情報提示」とも解釈された。これは、「(聞き手の同意が前提の) 判断提示」であったものが、聞き手にとって最も関連性のある情報であると解釈した情報であると話し手が考えていることを伝達する形式「んだよ」に後接するため、「聞き手の同意を不要とする判断提示」まで使用が拡張されたものと思われる。この場合は「よ」で言い切らないことで、「ね」を付加することにより、会話継続の意図を表明していると考えられる(「ノダよ」と「ノダよね」の違いについては7.4.4.4.3で後述)。

(42) (F072 と F151 の会話。二人は大学の同級生。F151 が「帰省するから髪を黒く染めないといけない」と話した後の場面)

809 F072 : えっ、でもさー、F151 んちは大丈夫でしょう、茶髪とか。

810 F151 : うん、たぶん大丈夫なんだけど。

811 F072 : うん。

812 じゃ、問題ないって。

813→F151 : 大丈夫な中で、なんか圧力をかけてくるんだよね。

- 814 <笑い。>
 815 F072：あ，そうなんだ，そうなんだ。
 816 F151：おばあちゃんとか一緒に住んでいる。
 817 住んでいるっていうか，なんか，庭に（あー）家があって
 818 <笑い>
 819 F072：庭？
 820 F151：<笑い>わけわかんないけど，家が建ってた。
 821 （へー）そこに住んでるからね。 (data073 女性 20代)

ここでは，812 で「F151 が実家に帰るのに茶髪のまままで問題ない」と言ったのに対し，813 で「なんか圧力をかけてくるんだよね」と相手に対し否定的な発話をしている。その後も発話が続き，816 から 821 で同じ敷地内に住んでいる祖母が（茶髪で帰省した）自分に対して圧力をかけてくるということを示唆している。つまり，「大丈夫な中で，何か圧力をかけてくるんだよ」と相手の発話を否定するだけでは不十分であり，相手を納得させる理由を話すために，「ね」を付加し，その後も会話を継続させる意図を相手に伝達していると考えられる。

次に，アクセント上昇調長呼であるが，これはほぼ「情報提示」と解釈された。アクセント上昇調長呼はアクセント上昇調と基本的に機能は同じであるが，さらに「ねー」と引き延ばし，独話的，つまり自身の中で当該命題を処理中という態度を示すことで，当該話題についての会話を継続させる発話意図が明確になることから，当該音調は上昇下降調，疑問上昇調との違いを明示するために発展的に生まれた音調であると思われる。

(43) (F004 と F005 の会話。F005 が自分は兄弟と仲がいいと言った後の場面)

- 633 F004：うん，なんかさ，M1 のさ，F さんって知ってる？
 634 F005：F さん。
 635 F004：うん。
 636 F さんは，すごい仲いいんだって，（うん）兄弟。
 637 ていうか，家族仲いいんだって，（うん）むちゃくちゃ。
 638 （うん）そういう人もいるんだと思って。
 639→ ちは全然なんだよねー。
 640 （そっか）うん，お姉ちゃんとは，まあまあ，普通に仲いいけど，（うん）
 うん。
 641 でも，そうだね，弟とは，全然だねー。

(data052 女性 20代)

639 で，F004 は自分たちの兄弟の仲について「ちは全然なんだよねー」と長呼し，当

該発話以降も談話を展開させているが、この発話により聞き手に回想中の態度を明示することで、そこで会話を終了する意図がないことを伝達していると考えられる。

最後に、評価にばらつきが見られた疑問上昇調について考察する。当該音調の「ね」は「自然」と判断されたものもあるが、これは調査 I の読み上げ実験ではほとんど観察されなかったという点及び第 6 章で提示した郡 (2003) の「アクセント上昇調と疑問上昇調の区別は難しい」という指摘を踏まえると、聞き取りの場合は容認度の高かった「アクセント上昇調」の変種と認識した可能性も考えられる。

一方で、「許容できる」以上とした回答の中に、「その後に文が続きそう「私彼に会ったんだよね、その時彼が～してたんだよね」という感じ」(20 歳女性)「自分が嫌だということを伝えて、次に話がつながりそう」(19 歳男性)というように、その発話を話題提示と解釈する意見があった。これは疑問上昇調の音調が「(命題) なんだよ」とは共起しにくいいため、「発話権保持のための反応要求」という別の発話意図を示す音調として使用が拡張されたものと思われる。

疑問上昇調が注目要求として使用されているのは郡 (2003) ですでに指摘されているが、「ね」が会話継続の意図を伝達する標識と考えると、当該形式を疑問上昇調で使用することでその意図がより明示的に伝達されると考えられる。7.3 で「のね」の疑問上昇調にも同様の発話意図が示されたことから、「ノダよ」に後接する疑問上昇調の「ね」は「確認要求」というより、発話権維持の意図を伝達する手続き的意味を持つと言える。

7.4.4.4.3 「ノダよ」と「ノダよね」の手続き的意味の違い

次に、「ね」が当該話題についての会話継続の意図を伝達するという手続き的意味を、「ノダよ」と「ノダよね」の違いから考える。本論文は「ノダよね」を「ノダよ+ね」と捉えているため、両形式の差異は単に「ね」の有無と考える。「ノダよね」の同意要求場面は当然「ノダよ」に入れ替えることはできないため、ここでは、情報提示場面で「ね」が付加できない場合をみる。

本論文の考察が正しければ、話し手が当該話題について会話を継続する意図がない場面では「ノダよね」は使用不可である。継続する意図がないとは、その文脈において、当該発話で聞き手に十分な関連性が満たされると話し手が考えていることを意味する。特にそのような意図が伝達されるのは相手に助言 (例 (44)) や命令 (例 (45)) をするような場面である。

(44) (F059 と F043 の会話。二人は親子。娘の F043 が「10 時から歯医者に行かなければならないと言った後の場面)

293 F059: 10 時からだから、何時のん乗る?

294 F043: うーんとねー。

- 295 F059 : 8時17分のバスに乗っていけばいいよね。
- 296 F043 : うーん、それだと早いんだよね、ちょっとね、たぶん。
- 297 F059 : でも9時では遅いでしょう。
- 298 遅いもん。
- 299 10時からでしょう。
- 300 F043 : そうそう。
- 301 ぎ、あー、歩く時間がないね。
- 302 (***, うん) 9時14分か、14分に乗って、えーとー、37分ぐら
いに。
- 303→F059 : え、もっと前に乗っちゃえばいいのよ {*乗っちゃえばいいのよね}。
- 304 いいの。
- 305 (そう) 8時17分に乗って、(うん) 8時半ぐらいでしょう。
- 306→ 8時半ぐらいのに乗っちゃって、名古屋に行っちゃっていてもいいのよ。
- 307 それで名古屋でゆっくり、あの一、どっか入っとればいいじゃん。
- (data085 女性 50代)

F059 が 295 で 10 時に間に合うように「8時17分のバスに乗っていけばいいよね」といったのに対し、F059 が 296 で「それだと早い」としぶり、302 で「9時14分に乗って、えーとー」と決断できずにいるのを見た F059 が 303 で「もっと前に乗っちゃえばいいのよ」と助言している。これは「ノダよね」に言い換え不可であるが、この場合は当該発話で聞き手に十分な関連性を与えることができるためと考えられる。

(45) (F001 と M033 の会話。二人は高校の同級生。F001 が M033 に「しらたきを切らずに鍋に入れる」と言ったことを非難され、「自分は料理ができなくてもいい」と言った後の場面)

- 1179 F001 : 料理ができる人と一生暮らせればいい。
- 1180 M033 : 子どもができてお前、運動会とか行ったら、子どもはお前、弁当が楽し
- 1181 みなんだぞ。
- 1182 F001 : じゃあ、お父さんが作ればいいじゃん。
- 1183 M033 : お前も作れよ。
- 1184 F001 : 別にお父さんが作ればいいじゃん。
- 1185 M033 : お前が作れよ。
- 1186 F001 : 私が作らなかつたって。
- 1187→M033 : お前も作るんだよ {*作るんだよね}。
- 1188 F001 : どっちか作ればいいじゃん。
- 1189 M033 : お前、そんなふうに言われるのはな、お前が稼いだら言え。

(data046 男性 20代)

(45) の場合は、「自分は料理ができなくても料理ができる人と結婚すればいい」といった F001 に対し、M033 が 1183, 1185 で「お前が(も)作れよ」といい、それを受け入れようとしなない F001 に 1187 で「(父親が作れたとしても子供のために母親である)お前も作るんだよ」と発話している。ここで M033 は、先行文脈から聞き手にとって最も関連があると解釈した命題を聞き手に受け入れさせようとする話し手の態度を「よ」で伝達している。これは当該話題についてこれ以上新たな情報を加えて会話を継続する必要はないと判断しているため「んだよ」がふさわしく、「作るんだよね」と発話することはできない。

以上、「ノダよね」に言い換えることのできない「ノダよ」の例を挙げ、「ノダよね」の「ね」が伝達する意図を再考した。筆者の内省では、このような助言、命令のみならず、「ノダよ」の場合は下降音調を伴うことが多いと考える。それは、当該命題が先行文脈から話し手が聞き手にとって最も関連性があると解釈した命題を聞き手に明示的に伝達している、という意図を聞き手に伝達するという性質上、聞き手の反応を伺う必要がない下降調が自然であるためと考えられる。「ノダよ」の音調と発話意図との対応については指摘にとどめ、今後の課題とする。

7.4.4.5 結論

7.4.4.1.2 で提示した課題の解答を述べ、本論文のまとめとする。

仮説 1. 「(命題) んだよね」は「(命題) んだよ」+「ね」である。

本調査においては当該の仮説が支持される結果となった。つまり、「んだよね」は「んだよ」で先行文脈から聞き手にとって最も関連性があると話し手が解釈した命題であることを「んだ」で述べ、「よ」を用いてそれを聞き手に受け入れさせようとする意図を聞き手に伝達する。そして、「ね」を共起させることにより、当該話題について会話を継続する意図を伝える。会話継続の方法として、例えば上昇下降調の「んだよ↑ね↓」により相手から同意を引き出す、アクセント上昇調長呼の「んだよ↑ねー」により話し手自身で当該命題を処理中という態度を示す、という意図を明示することができる。

仮説 2. 「んだよね」に「疑問上昇調」の「ね」は使用されにくい。

聞き取り調査の結果、疑問上昇調は評価にばらつきがみられた。話し手は真と確信する命題に「んだよね」を使用するため、「確認要求」の疑問上昇調は共起しにくいと考えられるが、別の発話意図を示す音調として今後使用が増える可能性が示された。

「んだよね」は自然会話で頻用される形式であるが、それは「ね」の音調により多様な発話意図を伝達しうる有用な形式であるためと考えられる。同じ同意要求であっても、文脈によって反論する環境を整えたり、相手の意図を察して話しやすい環境をつくる、もしくは情報提示する場面で回想中の態度を示したり、直接的な反論を避けるために話し手自身で確認中という態度を示したりすることができる。

7.4.5 第7章のまとめ

以上、本章ではコーパス分析、及び「ね」の産出音調に注目し、「ノダね」「ノダよね」の手続き的意味を考察した。「ノダね」は裸の形式「の (∅)」「んだ (∅)」の手続き的意味をそのまま引き継いだ形式であり、「のね」で話し手として発話権維持を明示し会話を継続する、もしくは「んだ↑ね」で相手の発話から解釈して得た情報を示し、その後も聞き手としての立場を明示するといった態度を伝達することがわかった。一方、「ノダよね」は「ノダよ」+「ね」であり、本質的には話し手が真と確信する命題に付加され、一方的な会話遂行を避けるために、「んだよ↑ね↓」で「同意要求」したり「んだよ↑ねー」で「情報提示」したりしていると結論づけた。

両形式の語末に使用される「ね」は音調により様々な発話意図を伝達するが、共通するのは「当該話題を継続する」という話し手の態度を示すという点である。これは「ね」が「当該命題を計算中であるという態度を示す」「排他的な知識管理を行う用意がない」という意味によると考えられる。話し手はこの「ね」を付加した「ノダね」「ノダよね」を使用することにより、相手と円滑に会話を遂行している。本論文では文末音調が聞き手の発話解釈にかかる処理コストを軽減するという立場に立ち、「ね」の産出音調の違いにより異なる発話意図を伝達するとした。本論文の分析・考察により、これまで単純な意味の加算とみられていたノダ形式をより具体的な形で示せたように思う。「ノダね」「ノダよね」の使用は相手と良好な関係を構築しようとする話し手の語用論的動機付けによるものであるといえよう。

第8章 結論及び日本語教育への示唆

8.1 本論文の議論のまとめ

本論文では、自然会話で使用される「ノダ（＋終助詞）」の形式について語用論的な分析に加え文末音調の分析を踏まえ考察した。具体的には、既存の自然会話コーパスを分析し、発話意図に応じてどのような形式が使用されているかを調査した。さらに、文末音調に注目し、音調と発話意図の対応についても考察した。

第1章では本論文の研究動機及び研究背景について述べた。そして、ノダに関しては既に膨大な研究の蓄積があり、その本質的意味も明らかになりつつあるが、終助詞との複合形式の分析や文末音調と発話意図との対応関係など、いまだ研究の余地があることに触れ、本論文の意義について述べた。第2章では本論文の理論的枠組みとなる関連性理論の主張、及び本論文が援用する知見について確認した。第3章ではまず発話を考えるうえで重要な概念となる「陳述」を定義し、発話が「述定的モード」と「伝達的モード」に類型化できることを述べた。その後、現代日本語における主要なノダ研究を概観し、その研究意義と問題点を指摘した。そして、自然会話で使用されるノダの手続き的意味を明らかにするためには、語用論的な観点から考察する必要があることを、さらに発話で使用される具現化形式や文末音調を取り入れた考察が有効であることを述べた。

第4章ではノダの文体差及び使用の性差に注目し分析を行った。まずノダを平叙文の「情報提示」のノダ、「情報受容」のノダ、及び疑問文のノダに類型化し、既存の自然会話コーパスの使用実態を基に、常体の「の(Ø)」 「んだ(Ø)」の語用論的機能を考察した。その結果、ノダの具現化形式の「の(Ø)」は平叙文の「情報提示(説明)」のノダ及び疑問文のノダとして、「んだ(Ø)」は平叙文の「情報受容(発見)」のノダとして使用される傾向にあることを明らかにした。特に「情報提示」のノダに「の(Ø)」が選好されるのは、確言、断定を意図する「だ(Ø)」を伴わないという点で聞き手配慮が含意されるためと指摘した。また「情報提示」のノダとして使用される「の(Ø)」は先行研究の記述とは異なり、男性にも使用が観察されたこと、「んだ(Ø)」と「んです(Ø)」は単純な異形態とは言えないことを指摘した。そのうえで、「の(Ø)」 「んだ(Ø)」 「んです(Ø)」の手続き的意味を仮説として呈示した。そして最後に、ノダは命題内容の真理値には関与せず、聞き手の発話解釈にかかる処理コストを下げる手続き的意味を持ち、「明意」及び「高次明意」を制約するが、当該形式は文末形式であるため、話し言葉进行分析する場合は産出音調を伴った形式を考察する必要があることを主張した。

第5章では「の(Ø)」 「んだ(Ø)」の語用論的機能の違いを生じさせる文末の「だ」に着目し、その語用論的機能を考察した。本論文は「だ」を「確言、断定」を表す判定詞と位置付け、先行研究の知見及び本論文のモードの類型化に基づき「だ」が使用され

る文を以下のように類型化した。

<伝達的ムードの「だ」>

「当該命題の提示により聞き手に認知効果を与える意図がある」ことを聞き手に伝達するもの。事柄の内容や、話し手の態度を聞き手（時には客体化された話し手自身）に向かって持ちかけ、伝達する。「意見」文、「事実」文、「質問（自問を含む）」文などに使用される。

<述定的ムードの「だ」>

話し手自身に認知効果が起ったことを明示するもの。当該発話に先行して客体的に表現された事柄の内容についての、話し手の態度の言い定め。「想起」文、「（発話に基づく）発見」文、「（発話外の情報に基づく）発見」文に使用される。

そして、既存の話し言葉コーパスを分析した結果、「だ」はいずれのムードも特定の語と共起する傾向があり、特に「の」との共起は「だ」全体の約 65%を占めること、述定的ムードの「だ」は「の」との共起が顕著であることを示した。そして「だ」を「必須の「だ」と「任意の「だ」」に分類し、自然会話における当該の「だ」の使用傾向を調査した。調査の結果、対者的場面において聞き手に情報提示と解釈される場面では使用が任意であるが、拒否や独話的な発話など、聞き手に配慮する必要のない場合には「だ」で言い切る傾向があることを指摘した。

一方、対事的な場面で使用される述定的ムードの「だ」は、「想起」文から「（発話外の情報に基づく）発見」文、「（発話に基づく）発見」文へと「だ」の省略容認度は連続体をなしており、「想起」文は名詞文、動詞文、形容詞文とも必須であるが、「（発話に基づく）発見」文はいずれの場合も任意であることを示した。その理由として、「想起」文は話し手内部での修正であり、聞き手には伝達されにくいため、断定の「だ」を用いて「認知環境の修正」を意図明示的に伝達する必要があるのに対し、「（発話に基づく）発見」文は認知環境の修正に聞き手の介入があり、発話意図が伝達されやすいため、「だ」が省略可能であることを述べた。そして、「情報受容」のノダに「んだ (∅)」が頻用されるのは、「だ」を使用する必要性から必然的に「（動詞文・形容詞文）んだ」となる場合と、「だ」の使用が任意であるものの、使用が選好される場合があることを述べた。「だ」の使用が任意の場合とは、「（発話に基づく）発見」文を指すが、この場合「んだ」を使用して「相手の発話により私は十分な認知効果が得られた」という態度を明示することで、聞き手に配慮しながら会話を円滑に進めようとする態度を伝達することが可能になるため、自然会話で頻用されると結論づけた。

最後に、「んだ」は主に述定的ムードとして使用されるものの、伝達的ムードとしても使用されており、対照的な意図を伝達する形式であることから、話し手が聞き手の発

話解釈を容易にする何らかの手がかりを与えていると考え、両ムードで使用される「んだ」の音調を踏まえた分析が必要であることを述べた。

第4章、第5章の分析及び仮説を検証するため、第6章では裸のノダ形式の文末音調を分析した。具体的には、先行研究で示される文末音調で作成した刺激文（「の (∅)」は疑問上昇調、アクセント上昇調、平坦調の3種、「んだ (∅)」は疑問上昇調、アクセント上昇調、上昇下降調、下降調の4種の音調を使用して母語話者に対する聴取実験を行い、文末音調と解釈される発話意図との対応を探った。その結果、音調を踏まえた分析においても「の (∅)」は疑問文のノダ、平叙文の「情報提示」のノダとして解釈され、「んだ (∅)」は平叙文の「情報受容」のノダとして解釈される傾向があることがわかった。特に「んだ (∅)」を「情報提示」のノダとして聞き手に解釈させるためには「だ」を明示的に上昇させる必要があることが示唆された。そして、両形式の主要な手続き的意味を次のように規定した。

「の (∅)」の手続き的意味 :

その状況において、当該情報が会話の相手、もしくは話し手自身にとって最も関連性のある情報であると話し手が認識していることを聞き手に伝達する。そして、以下3つに下位分類される。

- ① 「の」(低接・疑問上昇調) : 当該命題 (もしくは疑問の解答) が話し手の認知環境に修正を与えるものであること、そしてその修正が相手の確認により完了すると考えていることを聞き手に伝達する。
- ② 「の」(低接・アクセント上昇調) : 先行文脈 (状況) と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手の想定を破棄させる意図があることを聞き手に伝達する。
- ③ 「の」(低接・平坦調) : 先行文脈 (状況) と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手に認知効果を与えるものであると話し手が考えていることを聞き手に伝達する。

「んだ (∅)」の手続き的意味 :

その状況において、当該情報が話し手もしくは会話の相手もしくは双方にとって最も関連性のある情報であることを明示する。そして、以下2つに下位分類される。

- ① 「んだ」(下降調) : その状況において話し手にとって最も関連性のある情報 (当該命題) が新たに登録されたことを明示する。
- ② 「んだ」(アクセント上昇調) : 先行文脈 (状況) と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手に認知効果を与えるものであると話し手が考えていることを聞き手に伝達する。

両形式の手續きの意味は相補分布をなすものではなく、使用傾向として示したものであるが、日本語学習者に日本語でのコミュニケーションを理解させるための指針として示すうえでは有用であると考えられる。

第7章では、裸の具現化形式と同様に自然会話で頻用される「ノダ+終助詞」の特に「ノダね」「ノダよね」に注目してその手續きの意味を分析、考察した。両形式に注目した理由はいずれの形式も相対する発話意図を伝達するためである。例えば「ノダね」は情報提示場面及び情報受容場面で使用され、「ノダよね」は相手への同意要求場面及び情報提示場面で使用される。こうした対照的な発話意図を伝達する理由を明らかにすることで、両形式の構文上の特徴及び手續きの意味を明らかにすることができる考えた。

まず、既存の自然会話コーパス及び母語話者に対する会話の読み上げ実験により、主に女性が使用する「ノダね」の常体の具現化形式「のね」「んだね」を分析、考察した。その結果、当該形式は「の (Ø)」「んだ (Ø)」の手續きの意味を引き継いだ形式であり、「ね」は当該話題についての会話を継続させようとする態度を明示する形式であると結論付けた。疑問上昇調をともなった「のね」は相手からあいづちを引き出し、発話権を保持する、及び肯定的返答を要求する場面で選好される形式と考えられる。具体的には、相手の認知環境を修正し、談話展開の担い手として主体的に談話に参加することを明示する、もしくは自身に生じた認識の変化の妥当性を確認する機能があると考えられる。

一方、非上昇調、もしくは上昇調の程度が緩い「んだね」は主に情報受容場面で選好され、相手の情報提示により、自身に生じた認識の変化の妥当性を確認、または受容した情報を自身で確認中という態度を示すことで、聞き手として会話に参加する意図を伝達する機能を持つ。そして両者の違いは音調により伝達され、その結果聞き手の発話解釈にかかる処理コストを下げると考えられる。

「ノダよね」は具現化形式を調査した結果、「んだよね」「のよね」が使用されており、「んだよね」の使用が多いことがわかった。ただし、当該形式の場合、男性が「のよね」を使いにくいといった点を除くと、両形式が伝達する発話意図に違いはないと考えられる。そこで「んだよね」を用いて母語話者に対する読み上げ調査（調査Ⅰ）及び聞き取り調査（調査Ⅱ）を行った。まず、先行研究及びコーパス調査を基に、「んだよね」の用法を「確認、同意要求」「情報提示」「同意」の3つに分類し、それぞれの発話意図が使用される会話文の読み上げ実験を行った。その結果、発話意図と「ね」の音調には対応関係がみられた。具体的には上昇下降調の「ね」を伴った場合には命題の真偽について判断を求め、アクセント上昇調、平坦調の場合には、話し手自身の判断の提示、さらに「ね」が長呼された場合には話し手が当該命題について自身で確認（回想）中であることを相手（聞き手）に明示する、という傾向があることが分かった。

次に、読み上げ調査による考察を検証するため、母語話者に対する聞き取り調査を行った。裸の形式「の (Ø)」「んだ (Ø)」と同様に、先行研究、調査Ⅰの結果を踏まえ、

筆者らが作成した「んだよね」の刺激文を用いて母語話者に自然度判定，及び連想する発話意図を調査した。調査の結果，調査 I の結果を概ね支持する結果となり，上昇下降調の「ね」は相手から肯定的返答を引き出すと解釈され，アクセント上昇調長呼は相手に情報提示すると解釈された。さらに母語話者の詳しい回答と自然会話での「んだよね」の使用場面を調査した結果から，当該形式を「んだよ+ね」と規定した。まず，「んだよ」で先行文脈から聞き手にとって最も関連性があると話し手が解釈した命題であることを「んだ」で述べ，「よ」を用いてそれを聞き手に受け入れさせようとする意図を聞き手に伝達する。そして，「ね」を共起させることにより，当該話題についての会話を継続する意図を聞き手に伝達すると考えた。会話継続の方法として，例えば上昇下降調の「んだよ↑ね↓」で相手から同意を引き出す，アクセント上昇調長呼の「んだよ↑ねー」で当該命題を話し手自身で処理中という態度を示す，という意図を伝達することができる。また，当該形式が不確実情報を確実化する場面では使用されにくいことから，疑問上昇調の「ね」は「のね」同様「注目要求」として解釈される傾向にある点についても述べた。

8.2 日本語教育への示唆

8.2.1 ノダ形式の困難点と解決案の呈示

次に，本論文の考察を基に日本語教育への提言を試みる。その前提として，ノダ形式が日本語学習の中でも習得が難しい項目である点について述べる。この点については第 1 章で述べたが，まずその原因として考えられるのは，命題レベルではノダの使用が必須ではないという点にある。つまり，ノダは概念的意味を持たず，手続き的意味を持つ形式であるため命題の真理値に関わらない。従って，ノダを使わずとも必要な情報は伝達できる。そうしたノダの性質が，「使用すると伝えたい気持ちを強調できる」「やわらげや丁寧さを表す」といった言外の意図を伝達する形式と誤解されるのであろう。

菊地（2000）はノダの使用場面を示し，指導の仕方について具体的に提言している数少ない論考である。菊地（2000）は，「《共有されている知識・状況に関連する，未共有の付加的な情報を補う》ときに「のだ（んです）」を使う。」（p.36）とする。このような例は特に（1）の「どうして～んですか」「～んです」のやりとりや（2）のような応答文をうまく説明する。

- (1) A「どうして遅れたんですか」
B「バスが来なかったんです」 (菊地, 2000: 30 (2))
- (2) A「郵便局へ行くんですか」
B「ええ，友達に手紙を出すんです」 (同 p.33 (4))

これらの発話ではまさに B が当該状況及び先行発話から聞き手である A にとって最も関連性があると解釈した情報を伝達する場面でノダが使用されている。また、平叙文についても同様に先の既定で説明できるとする。

- (3) [ベイリーを山田に紹介した後で、スミスが山田に]
ベイリーさんはこの十二月に日本へ行くんです。 (菊地, 2000: 34 (6))

「(3) (原文では (6)) の場合、ベイリーの存在がスミスと山田の間で共有された後、「スミスだけが知っている情報を付加的に添えたわけ」である。そしてその情報は「聞き手が求めている情報ではないが、話手の判断で付け加えたものである。」(同) という。しかし、「話手の判断で付け加えた」というだけでは平叙文でノダを適切に使用することはできない。たとえば、菊地 (2000) の主張に従うと、共有の情報があれば他の未共有の情報は何でもノダを使用できることになる。

- (4) ベイリーさんはアメリカ人なんです。(独身なんです／日本語を勉強しているんです) (作例)

このようなノダの使用は発話に関連性を求める聞き手を混乱させることになる。重要なことは、「どのような意図で未共有の情報を提示するか」ということを明確にすることであろう。つまり、菊地 (2000) の「話し手の判断」をさらに具体的に、「当該状況において聞き手にどのような未共有の情報が最も関連性があると解釈したか」を示すことにより、ノダを適切に使用することが可能になると考える。例えば (4) の発話も、山田が英会話教室に通っており、英語母語話者と話す練習をしたがっているとスミスが知っていれば、次のように発話が自然につながるであろう。

- (4') ベイリーさんはアメリカ人なんです。ぜひ彼と英語で話す練習をしてみたらどうですか。

また、青木 (1993) が先行研究の問題点として挙げたノダの「話題提示機能」についても触れており、たとえ共有情報があったとしてもその場で顕在的な共有情報がない場合にはノダの使用は不自然であるとし、「急に話題を変えて「そうそう。私、今度、京都へ行くことになったんです。いいホテルご存じありませんか」などと切り出すような場合は (略) 筆者の語感としては、こうした場合「私、今度、京都へ行くことになりました...」のように非「のだ」形の方がふさわしい感じがする」(p.44) とある。確かにこのような発話は全く先行文脈と関係ない場面で使用されると唐突であり不自然である。しかし、菊地 (2000) は話題提示する場合には非ノダ文のほうが「ふさわしい感じ

がする」と述べるにとどまり、なぜ非ノダ文の方がふさわしいのかについては言及がない。このようなノダについても、第3章で指摘したとおり、例えば(5)のように、話し手が当該状況で聞き手に最も関連性があると解釈した場面で使用され、その命題を聞き手に文脈含意として顕在的知識に加えさせることにより、次の依頼や希望などを言いやすくする環境を整えるためと考えれば、説明できる。

- (5) (会話の中で相手が京都出身である、もしくは京都に詳しいという話が出てきた後) そうそう、私、今度、京都へ行くことになったんです。いいホテルご存じありませんか。
(菊地(2000:44)を修正引用)

もう一つのノダ形式の難しい理由として、頻用される終助詞との複合形式が複雑な発話意図を伝達するという点が挙げられる。これらは単純な意味の加算では説明できない複雑さを帯びている。山内(2004)がノダの複合形式は超級話者しか産出がみられないとしているのは第1章で述べたとおりであるが、例えば、筆者が新日本語能力試験を調査した結果、「ノダよね」は4級レベルから聴解問題の重要な発話に使用されていることがわかった。以下、N4で観察されたそれぞれの用例を挙げる。

① 「確認・同意求め」の例

(6) 【課題理解問題⁹⁴】

M: 明日、お婆さんのうちに持って行くのって、この大きい箱でいいんだっけ?

F: うん、そう。白い方じゃなくて、黒い方ね。

M: わかった。あと、お皿とカップ、持って行くんだよね。

F: あ、お婆さんに聞いたら、お皿は要らないって言ってたからおいていく。

M: そうなんだ。じゃあ、これで用意できたね。

問題: 女の人は家から何を持って行きますか。(選択肢は絵で表示)

(「予想問題集 N4」 p.78)

② 「情報提示」の例

(7) 【ポイント理解問題】

F: 来週、引っ越すんだ。

⁹⁴ 「課題理解問題」とは、「具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適当か理解できるかを問う」問題であり、「ポイント理解問題」とは「事前に示されている聞くべきことを踏まえ、ポイントを絞って聞くことができるかを問う」問題である(国際交流基金, 2012: 83)。

M: え, どうして? まだ住んで1年ぐらいだよ。

F: うん。駅も近いし, 部屋も広くていいんだけど, 近所に意地悪なおばさんが住んでるんだよね。

M: そうなんだ。

F: 何もしてないのに, 家の前を通ると必ず文句を言ってくるんだよ。もう怖くてさ。

問題: 女の人はどうして引っ越しをしますか。

- <選択肢> 1. 駅が遠いから 2. 部屋が狭いから 3. 意地悪な人がいるから
4. 友達がいないから

(「短期マスターN4」 p.9)

いずれの例も, 「(命題) なんだよね」の発話が解答を得る鍵となっている。N4は旧日本語能力試験の3級レベル(日本語学習時間300時間程度)であり, 初級修了レベルとされる。従って, 「ノダよね」は産出レベルでは非常に難易度が高い一方で, 自然会話においては初級修了レベルから理解が求められていることが示唆される。しかし, 超絶話者でしか使用が観察されないという当該形式の場合, 「のだ」「よ」「ね」それぞれの意味を個別に指導しても, その発話意図を適切に理解するのは困難であろう。その場合は, 一つの形式として学習者に使用場面と手がかりを指導した方が, 学習負担も軽減され, なおかつ実践的であると考えられる。初級終了レベルの日本語学習者にはまず理解優先という形で, 本論文の考察を基に, 「「なんだよね」の「ね」が「↑ね↓え」となった場合には同意が求められている, 「「んだよ↑ねー」となった場合には話し手が情報を伝えている」といった手がかりを与えることで発話解釈の処理コストを下げる可以考虑される。

8.2.2 日本語教育への示唆

本節では, 本論文の考察を踏まえたノダ形式の指導を提案したい。日本語学習者がノダの使用を理解し適切に使用できるようになるためには, 当該形式の使用が適切な場合と不適切な場合の両面を明示的に指導する必要がある。この点を踏まえ, まず当該形式の使用場面を裸の形式, 複合形式の2点に分けて呈示する。その後, 使用が不適切な場面について述べる。

8.2.2.1 裸の具現化形式「の(∅)」「んだ(∅)」の指導

まず, 話す・聞く指導において, 裸の形式「の(∅)」「んだ(∅)」については, 以下のような指導が可能であろう。無論, 本論文の呈示は各形式が伝達するすべての発話意

図を網羅しているわけではないが、すべての発話意図を指導し、学習者に心理的負担を与えるよりも、「今の自分の日本語レベルならこれさえ覚えておけばとりあえずの会話はできる」という形で呈示することも一案と考える⁹⁵。小林（2009）では、日本語教育において使用傾向の記述は重要な役割を果たすとされている⁹⁶。従って、本論文のコーパス調査、母語話者に対する聞き取り調査は自然会話におけるノダの使用傾向を探るうえで意義があると考えられる。

それぞれの発話意図を文末音調、日本語能力試験聴解問題に出題された発話例と共に呈示する。本節は主に理解レベルの指導を想定しているが、産出レベルで考えた場合の注意点についても適宜示す。

(a) 「の」 （平叙文の「情報提示」のノダ、疑問文のノダ）

I. (命題) のノダ : 当該命題もしくはそれに対する回答が話し手の認知環境に修正を与えるものであること、そしてその修正が相手の確認により完了すると考えていることを聞き手に伝達する。

(10) (男の人と女の人がスーパーで話している場面)

F: あら、田中君、お買い物?

M: うん、夕飯を買いにね。

F: お弁当? 自分で作らないの? (「公式問題集 N3」 p.57 より抜粋)

(11) (女の学生と男の学生が美容院について話している場面)

F: 吉田君、駅前の美容院に行ってるって言ってたよね。

M: うん。

F: 私も行ってみようかなと思ってるんだけど、どう?

M: 俺は気に入ってるよ。でも、駅前にあるからか、いつも混んで結構待つよ。

F: ふうん。

M: あ、あとなんか、店員が無口で冷たい感じがするって、嫌がる人もいるみたいだね。

F: そうなんだ。じゃあ、吉田君は、どうしてあの店がいいの?

(「公式問題集 N2」 pp.61-62 より抜粋)

⁹⁵ 例えば森（2011）では、コーパス調査及び日本語母語話者に対するアンケート調査を基に、初級日本語学習者は着点を表す助詞として「に」が分かればよく、従って「へ」の指導は不要としている。

⁹⁶ 小林（2009）では、既存の会話コーパスで使用されたイ形容詞を調査し、「いい、ない、すごい」の三つの形容詞を知っていれば日常会話の約 6 割をこなせる (p.52) こと、学習項目である 4 つの活用形の使用には偏りがあることなどを明らかにしたうえで、学習の目標設定や教室活動を見直すべきであると述べている。

当該の「の」は本論文で調査した自然会話コーパスにおいても性差なく頻用されていた。インプットが多いことが影響しているためであろうが、筆者の内省では初級後半レベルから産出がみられる。一方で使用しやすい反面、過剰使用による問題も生じるため(8.2.2.3で後述)、産出レベルでの使用には注意が必要である。

II. (命題) の↑ : 先行文脈と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手の想定を破棄させる意図があることを聞き手に伝達する。

(12) (スケジュールを管理してくれる便利なソフトの紹介を聞いた後の男女の会話)

M: おおっ, いいじゃん, これ。俺, ペットボトルとかのゴミ, いつも, 出すの忘れるんだよね。

F: そんなこと, わざわざパソコンに管理してもらわなくても。カレンダーにでも書いとけば済むことじゃない。

M: いやいや, それこそ, パソコンなら, 一回入力しておけば済むんだよ。あとは, 自動的に教えてくれるようになるから, 忘れない!

F: でも私, パソコンに教えられるのはやだなあ。自分で管理したい。手で書くと, 書くことで覚えることができるし。

M: 覚えなくて済むようにパソコンを使うんだけど...

F: 私は覚えておきたいの! その時考えたこととか, 感じたこととかも書いておけるもん。
(「完全模試 N2」 p.83 より抜粋)

当該の「の」はアクセント上昇調を伴うことにより、相手の想定を破棄させる意図を伝達するものである。次に呈示する平坦調とは異なり、同じ情報提示のノダであっても伝達する発話意図は異なるため、誤って使用すると聞き手に不快感を生じさせることになる。産出レベルで指導する場合も、その点を留意し、注意させる必要がある。

III. (命題) の→ : 先行文脈と話し手自身の顕在的知識から推論し、当該命題がその状況において聞き手に最も関連性がある情報であると話し手が考えていることを聞き手に伝達する。

(13) (男の人が女の人に電話をしている場面)

M: これから帰るけど, 何か買って帰ろうか。

F: あ, ありがとう。えっとね, 牛乳, それから。

M: ちょっと待って, 牛乳は1本でいいの?

F: えっと, 2本お願い。それから, チーズ。

M：あれ，チーズはまだたくさんあったよね。

F：ごめん，今日のお昼に全部食べたの。

M：分かった。じゃ，買って帰るね。

(「公式問題集 N4」 p.56)

当該の「の」は情報提示のノダとして使用されるものであるが，第6章の結果が示すように，前接する語によって男性の使用は「幼稚」「女性っぽい」といった印象を与える場合がある。従って，特に男性学習者の場合は理解レベルにとどめたほうが無難であろう。

(b) 「んだ」(平叙文の情報提示のノダ，情報受容のノダ)

I. (命題) ん↓だ：当該状況において，話し手にとって最も関連性のある情報が新たに話し手の想定に登録されたことを明示する。

(14) (姉と弟が話している場面)

M：姉ちゃん，最近，いいことあったの？

F：わかる？実はね，最近食生活が乱れてるなあと思って，ちょっと前から野菜ジュース，飲み始めたんだ。

M：ふうん。

F：その野菜ジュース，25種類も野菜が入ってるんだよ。

M：へえ。たくさん入ってるんだね。あ，わかった。それでちょっと痩せたんでしょ？前より細く見えるよ。

F：うーん。残念ながら，そんなことはないけど。何か，肌がすべすべになってきたんだ。ほら。

M：あ，ほんとだ。だから最近機嫌いいんだ。

(「模擬テスト N1 〈1〉」 p.16)

第5章でも述べた通り，当該の「んだ」は特に相手の発話により認知環境が修正された場面で頻用され，相手の発話を傾聴し受け入れるといった態度を伝達するため，会話で使用することにより，相手との良好な人間関係の構築にもつながる。ただし，相手の発話をその場で適切にまとめ，呈示するのは非常に難易度が高い。従って，まずは理解項目として指導し，産出レベルでは「そうなん↓だ」といった表現を呈示すればよいと考える。

II. (命題) ん↑だ：先行文脈と話し手自身の顕在的知識から推論し，当該命題がその状況において聞き手に最も関連性のある情報であると話し手が考

えていることを聞き手に伝達する。

(15) (女の人が男の人に安い映画館について聞いている場面)

F: ねえ, 山田君, この辺の映画館のことよく知ってるよね。今度, 友達みんなで映画を見に行くんだけど, どこかいいとこ教えてくれない? できるだけ安く見たいんだ。

M: この辺の映画館なら, 1,000 円で見られるサービスがあるよ。例えば, 1 丁目の映画館は, 毎週水曜日は女性は 1,000 円で見られるよ。

(「模擬テスト N2 〈4〉」 p.28 より抜粋)

当該の「んだ」は確言の「だ」を伴うことから, 下降調を伴うと相手に押し付けがましさや不快感を与える恐れがある。従って, 指導する場合, 音調には特に留意すべきである。ただし, 本論文で扱った会話コーパスでは当該のノダの場合, 「んだよ」「の」が選好されていた。従って理解レベルでの指導にとどめるというのも一案であろう。

8.2.2.2 「ノダね」「ノダよね」の指導

次に, 終助詞との複合形式についての指導法を提案する。特に「ノダね」「ノダよね」は文脈により対照的な発話意図を伝達する。8.2.1 で述べたように, 当該形式は産出可能レベルと理解が要求されるレベルが異なるという点で難易度が高い形式である。そのような場合は発話意図を解釈する手がかりとして「ね」の音調や具現化形式に注目させるのが効率的である。本論文の考察を踏まえ, 各形式の手続き意味を日本語能力試験の聴解問題, 既存の日本語教科書の用例とともに提示する。

(b) 「ノダね」(平叙文の情報提示のノダ, 平叙文の情報受容のノダ, 確認要求のノダ)

I. (命題) のね¹ : 当該命題がその状況において聞き手に最も関連性があると考えていることを聞き手に伝達する。この場合, 話し手は相手からあいづちを引き出すことで発話権を保持し, 話し手の役割を遂行する意図を明示的に伝達する。

(16) (男子学生と女子学生が発表時に引用する資料について話し合っている場面)

学生女: じゃあ, あとは, 具体例ね。いい本見つけてきたんだけど。どう, これ。『インターネットビジネス白書 2001』。ぱらぱらっと見たんだけど, インターネットビジネスのいろんな例も載ってるし, データもあるから, これ使ってみよっか。

学生男: へーえ。いい本見つけたね。あ, すごい, すごい! 全部載ってるよ。さすがだ

ね、どこで見つけたの？

学生女：駅前の本屋さん。「白書」のコーナーにあったわよ。ビジネスのところじゃなくて。

学生男：そっかあ。よし。じゃあ、ピックアップしよう。うわっ、「インターネットビジネス」って一口に言っても、たくさんあるね。全部挙げると散漫になるから、代表的なものだけにしよう。

学生女：そうね。じゃあ、まず、「オンラインショッピング」。これは「販売料」と、バナー広告を載せればその「広告料」が入るのね。えっと、これには、「書籍、パソコン、音楽CD、衣料、食品、ギフト、玩具、オフィス用品」のほかに、「イベント」や「オンライントレード、オンラインスーパーも含まれるのね。

(「アカデミック・ジャパニーズ」 p.20 より抜粋)

II. (命題) のね¹, (命題) んだね² : 相手からの言語的・非言語的刺激により、話し手自身に新たに加えられた情報を明示し、その情報についての妥当性を確認する。

(17) (女の人が男の人に予定しているイベントの際に車での来場を減らしたい理由について話している場面)

女：あ、就職説明会の準備？手伝おうか。いる物段ボールに入れればいいのね。

男：あ、助かるな。
(「完全マスターN2」 p.35 より抜粋)

(18) (即時応答問題より)

女：旅行のあいだ、これ、あずかってくれない？窓のそばにおいて、朝、水を忘れないでね。

男：わかった。からさないようにするんだね。

(「合格できる N2」 p.24 より抜粋)

III. (命題) んだね³, (命題) んだ⁴ね : 相手からの言語的・非言語的刺激により、話し手自身に認識の変化が生じたこと、その内容を自身で確認中であることを示し、聞き手としての役割を遂行しようとする意図を明示する。

(19) (女の人が男の人に写真を撮ることの一番の魅力について話している場面)

M：いいカメラ持ってるね。どんな写真撮るの？

F：何でも。風景でも、人物でも、気になるものは何でも。自分の作った料理や町の看板なんかもなかなか面白い写真になるよ。できあがった写真はインターネットで、たくさんの人に見てもらえるようにしてるんだ。

M: へえ。カメラの楽しさって、いろいろな瞬間をあとに残せるってことなのかな。
F: うーん。どうかな。というより、私は、カメラを持つようになって、道端の花とか、
雨上がりの空とか、今まで見過ごしていたようなちょっとした事にも目を向けるよう
になったの。
M: へえ、そうなんだ。
F: うん、カメラのおかげで、なんだか毎日が楽しくなってきた。それが私にとっての
カメラの楽しさかな。
M: そっか。カメラの魅力は、出来上がった写真だけじゃないんだね。
F: うん。私の場合は、できあがりには二の次って感じかな。まっ、良い写真が撮れると
うれしいけどね。

(「公式問題集 N1」 pp.63-64)

(d) 「ノダよね」(平叙文の情報提示のノダ, 同意要求のノダ)

I. (命題) ノダよ↑ね↓, (命題) ノダよ↑ね: 当該状況において、話し手が何らかの
意図で会話を継続させるために、真と確信する命題を呈示し、相手
から肯定的返答を引き出そうとする意図を伝達する。

(20) (女の人が同僚の男の人に課長に怒られた理由について話している場面)

M: さっき、課長にいろいろ言われてたみたいだね。どうしたの?
F: 課長から新しい仕事について指示があったんですけど、私、また怒られちゃって...。
M: え、また? たしか、前は、頼まれた仕事をその場で「できません」って言って怒ら
れたんだよね?
F: はい。だから、今回は「頑張ります」って言って、ちゃんと仕事を引き受けたんで
す。

(「模擬テスト N1 <4>」 p.18 より抜粋)

II. (命題) ノダよ↑ね(一): 当該状況において、聞き手と会話を継続させるために、
最も関連性のある情報を聞き手に伝達しようとする意図を明示す
る。さらに長呼することにより、話し手が当該命題を話し手自身で
処理中であるという意図を聞き手に伝達する。

(21) (男の人が最近 CD を買わなくなった理由について話している場面)

女: CD が売れなくなったって言われて、もうずいぶん経つね。
男: そうだね。僕もあんまり買わなくなったな。
女: CD レンタルで借りられるから、わざわざ買わなくてもよくなったしね。
男: あー、あれは返すの面倒なんだよね。

女：じゃ、インターネットでダウンロード？

男：うん、たまにね。でも、実はもう 100 枚ぐらい CD 持っててさ、それだけでほとんど間に合ってるんだよね。昔から好きな曲って変わらないみたい。

女：ふーん。まあ、最近の曲ってどれも同じように聞こえるしね。

(「完全マスターN1」 p.17)

(22) (女の人が男の人に実家に帰りたくない理由について話している場面)

M：妹さんはもう結婚してるんだっけ？

F：すぐ下の妹はね。一番下の妹も、こないだ家に恋人を連れて来たの。それが私の高校の同級生なのよ。それで母がまた焦って電話してきて、あなたはまだなのって、うるさく言ってきたの。

M：そうなんだ。それはお母さんも焦るだろうな。

F：まあね。来週もその彼を連れて来るそうなんだけど、彼が問題なのよね。私の親友と付き合ってたことがあって、私もよく知ってる人なのよ。あったら気まずいんじゃないかと思うと気が重いわ。

(「模擬テスト N2 〈1〉」 p.20 より抜粋)

8.2.2.3 ノダの過剰使用を防ぐために

以上、裸のノダ形式及び「ノダよね」「ノダね」の具現化形式と使用場面を呈示した。次に考えるべきはノダのどのような使用が不適切となるかという点である。第 1 章では「先生、明日も大学へ来るんですか？」という実例を呈示したが、本論文の考察を基に、この発話の不適切さを考える。

ノダは「その状況において、当該情報が聞き手もしくは話し手にとって最も関連性の高い情報であると話し手が解釈した」ことを示す手続き的意味を持つ。従って、例えば(23)のように話し手が聞き手に自己開示する場面で使用されると、聞き手への信頼感、親しみを明示することができる⁹⁷。

(23) (いつもと様子が違う友人 B に)

A：元気ないみたいだけど、何かあった？

B：うん…、実は、就活うまくいってないの。(作例)

⁹⁷ 京野 (2015 : 150) では、「ノダ文は「話者世界」の情報を「共有世界」の情報として提示するものとなり、非ノダ文は「話者世界」の情報をそのままに示すものと捉えることができる。そして、その為にノダ文は聞き手との近さや親しみを、非ノダ文は距離感や正確さを重視した態度を伴うと捉えることができる」と述べている。

しかし、疑問文のノダを使用する場合は注意が必要である。それは、話し手が「今自分にとって最も関連性のある情報の妥当性を聞き手に確認したい、または相手から必要な情報を得たいと考えている」という態度を伝達するため、状況によっては自己開示を強要したり、聞き手の行動を詮索したりするような意図を明示的に伝達するためである。例えば(24)と(25)では、聞き手の許容度は異なると考えられる。(24)は聞き手の領域とは異なる次元の質問であり、この状況で聞き手に問うことは問題がないと考えるが、(25)は聞き手が行動や予定を詮索されていると感じ、不快に思う恐れがある。

(24) (濡れた傘を持って研究室に入ってきた友人に対し)

あ、雨降ってるの？

(25) (普段研究室の飲み会に参加しない友人 A が B に)

A：明日の飲み会何時からだっけ。

B：？ え、明日来るの？

確認する相手が自分より立場が上の場合、さらに注意が必要である。このように、聞き手の感情や行為について問うということは、聞き手領域に立ち入ることになるため、たとえ「今その状況で話し手自身に最も関連性がある情報」と解釈した場面であっても、非ノダ文の使用が適切である。ノダの過剰使用は学習者と日本語母語話者の良好な関係の構築に支障をきたす恐れがあるため、産出レベルで指導する場合には注意すべき点と考える。ノダの使用の適切性については、今後さらに考察したい。

8.3 課題と展望

最後に、今後の課題と展望を述べる。まず、課題は以下の4点である。まず1点目は、調査に使用した話し言葉コーパスが偏りのあるものであるという点である。本論文では2つの既存の話し言葉コーパスを基に、現代日本語におけるノダ形式の使用を記述した。しかし、いずれのコーパスも話者に偏りがあり、幅広い年齢層、性差については言及することができなかった。今後は特に30代以降の男性話者が使用する日本語も分析対象とし、本論文の結果の妥当性を検証する必要がある。また、情報提示のノダに使用される「の(Ø)」については、前接する接続形式、品詞による性差はみられなかったものの、文末音調や前接する語の種類により、使用の許容度に差があることが示唆された。「の(Ø)」の使用の性差についての記述的研究は、自然会話におけるノダ形式の使用実態を記述するうえで意義があると考えられる。

2点目は文末音調の調査に関する妥当性の検証が必要である。本論文では、音調がどの程度聞き手の発話解釈にかかる処理コストを軽減するかという点を記述するため、文

脈から切り離して調査を行ったが、自然会話において文脈のない状況で発話するという状況はほぼないと言っている。文脈の中で、文末音調がどの程度手続き的意味として機能するのか、という点は更なる検証が必要である。無論、本論文の調査手法は文末音調と発話意図の対応が話し手側と聞き手側からみて類似していたという点を示した点で意義があると考えるが、実際の発話では文脈から発話解釈にかかるコストが低いと考えられた場合、話し手は文末音調を意識せず発話していると推察される。文脈の中で話し手がどの程度文末音調を意識して発話するか、という点は今後分析が必要であろう。

3点目は、ノダの本質的意味の再考である。第5章でノダの本質を明らかにするために、ノダを一義的ではなく、複眼的にみる必要があると指摘した。具体的には関連性理論のいう発話の「記述的用法」と「解釈的用法」という知見を分析に取入れることにより、ノダを「(ノ)ダ」と「ノ(ダ)」に類型化できると主張した。このように多面的にノダを捉えることで、ノダ研究に新たな知見を提供することができると考える。

4点目に、本章で呈示したノダ形式の妥当性を検証する必要がある。本論文では、日本語教育への示唆として、ノダ形式の具体的な呈示方法を提案した。ノダ形式の音調や具現化形式に関する明示的指導は現在あまり行われていないと推察されるが、学習者が自然な会話を理解するうえで、重要な指導項目である。今後はこうした日本語学、語用論の研究結果をどのように日本語教育に還元していくか、という点を考えなければならない。本論文がそうした議論の出発点となれば幸いである。

参考文献

- 青木惣一 (1993) 「「のだ」文の基本的意味をめぐる諸説の検討と今後の課題 「のだ」文に対する語用論的分析試案その1」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』16, アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター, pp.1-27.
- 青木惣一 (1996) 「「確信度」を用いた「のか」の語用論的分析」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』19, アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター, pp.1-27.
- 新井恭子 (2006) 「関連性理論における「広告のことば」の分析」『経営論集』68, 東洋大学, pp.79-91.
- Allott, Nicholas (2014) 今井邦彦 (監) 岡田聡宏・井門亮・松崎由貴・古牧久典 (訳) 『語用論キーターム辞典』開拓社.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 白川博之 (監) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 石黒圭 (2000) 「「のだ」に関する一詩論」『一橋大学留学生センター紀要』3, 一橋大学留学生センター, pp.43-58.
- 石黒圭 (2003) 「「のだ」の中核的機能と派生的機能」『一橋大学留学生センター紀要』6, 一橋大学留学生センター, pp.3-26.
- 市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク.
- 犬飼隆 (2001) 「低く短く付く終助詞「ね」」音声文法研究会 (編) 『文法と音声Ⅲ』くろしお出版, pp.17-30.
- 井上史雄 (1997) 「イントネーションの社会性」杉藤美代子 (監) 国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫 (編) 『日本語音声2: アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, pp.143-168.
- 井上優 (1999) 「状況説明と終助詞「ね」の機能」『日本語学』18 (9), 79-86, 明治書院.
- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』大修館書店.
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう』岩波書店.
- 内田聖二 (1998) 「「(の)だ」ー関連性理論からの視点ー」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会 (編) 『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』大修館書店, pp.243-251.
- 内田聖二 (2011) 『語用論の射程 一語から談話・テキストへ』研究社.
- 内田聖二 (2013) 『ことばを読む, 心を読む ー認知語用論入門ー』開拓社.
- NHK 放送文化研究所 (編) (1998) 『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会.
- 片桐恭弘 (1997) 「終助詞とイントネーション」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』く

- ろしお出版, pp.235-256.
- 加藤重弘 (2001) 「文末助詞『ね』『よ』の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』35, 富山大学人文学部, pp.31-48.
- 川上夔 (1963) 「文末などの上昇調について」『国語研究』16, 國學院大學, pp.25-46.
- 菊地康人 (2000) 「「のだ (んです) の本質」『東京大学留学生センター紀要』10, 東京大学留学生センター, pp.25-51.
- 北原保雄 (編) (2010) 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店.
- 京野千穂 (2015) 『聞き手領域に対する配慮が言語形式の選択に与える影響 —テクレル・テモラウ及びノダ文・非ノダ文の場合—』名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.
- 金水敏・田窪行則 (1998) 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂下修司・白井克彦・溝口理一郎・新美康永・田中穂積 (編) 『音声による人間と機械の対話』オーム社, pp.257-271.
- 国広哲弥 (1984) 「「のだ」の意義素覚え書」『東京大学言語学論集'84』東京大学文学部言語学研究室, pp.5-9.
- 国広哲弥 (1992) 「「のだ」から「のに」・「ので」へ —「の」の共通性」カッケンブッシュ寛子他編 『日本語研究と日本語教育』, 名古屋大学出版会, pp.17-34.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 郡史郎 (1995) 「日本語の音調の音声的表記法の一試案」『音声言語 v』近畿音声言語研究会, pp.93-101.
- 郡史郎 (1997) 「『当時の村山首相』の2つの意味と2つの読み: 名詞句の意味構造とアクセント弱化について」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』くろしお出版, pp.123-146.
- 郡史郎 (2003) 「イントネーション」上野善道 (編) 『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』朝倉書店, pp.109-131.
- 郡史郎 (2012) 「東京方言における文末の強調型上昇調の機能について」『音声言語の研究』4, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp.15-22.
- 郡史郎 (2014) 「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『大阪大学言語文化研究』41, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp.85-107.
- 郡史郎 (2015) 「日本語の疑問型上昇調と強調型上昇調の音声的特徴について —聴取実験による検討—」『大阪大学言語文化学』24, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp.33-46
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』国立国語研究所報告 3, 秀英出版.
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) —対話資料による研究』国立国語研究所報告 18, 秀英出版.

- 小林ミナ (2009) 「基本的な文法項目」とは何か」小林ミナ・日比谷潤子 (編) 『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』 凡人社, pp.40-61.
- 小矢野哲夫 (1981) 「「のだ」をめぐる諸問題」, 島田勇雄先生古稀記念論文集刊行会編 『島田勇雄先生古稀記念論文集 ことばの論文集』, 明治書院, pp.215-232.
- 小山哲治 (1997) 「文末詞と文末イントネーション」 音声文法研究会 (編) 『文法と音声』 くろしお出版, pp.97-119.
- 近藤安月子 (2002) 「会話に現れる『ノダ』『談話連結語』の視点から」 上田博人 (編) 『日本語と日本語教育』, 東京大学出版会, pp.225-246.
- 斎藤純男 (2006) 『日本語音声学入門 改訂版』 三省堂.
- 三枝令子 (2001) 「「だ」が使われるとき」 『一橋大学留学生センター紀要』 4, 一橋大学留学生センター, pp.3-17.
- 三枝令子 (2011) 「話し言葉における文末「の」の機能」 『日本語／日本語教育研究』 2, ココ出版, pp.221-235.
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』 ひつじ書房.
- 佐治圭三 (1993) 「「の」の本質－「こと」「もの」との対比から－」, 『日本語学』 12-11, 明治書院, pp.4-14.
- 佐治圭三 (1997) 「「ノダ」の中心的性質」 『京都外国語大学研究論叢』 L, 京都外国語大学機関紙編集委員会, pp.208-217.
- 佐治圭三 (1999) 「「～のだ」補説」, 『無差』 6, 京都外国語大学日本語学科, pp.13-25.
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構－心的操作標識「ええと」「あの一」」 『言語研究』 108, 日本言語学会, pp.74-93.
- 白川博之 (1992) 「終助詞『よ』の機能」 『日本語教育』 77, 日本語教育学会, pp.36-48.
- 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代 (1999) 『日本語教科書の落とし穴』 アルク.
- 新屋映子・守屋三千代 (2003) 阪田雪子 (編) 『日本語運用文法 一文法は表現する一』 凡人社.
- 杉藤美代子 (2001) 「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」 音声文法研究会 (編) 『文法と音声Ⅲ』 くろしお出版, pp.3-16.
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」 文化言語学編集委員会 (編) 『文化言語学－その提言と建設－』 三省堂, pp.1097-1110.
- 田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘 (編) (1999) 『談話と文脈 (岩波講座言語の科学 7)』 岩波書店.
- 田窪行則・金水敏 (2000) 「複数の心的領域による談話管理」 坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 ひつじ書房, pp.251-280
- 武内道子 (1994) 「関連性に関する制約－「のだ」をめぐる一」, 『ふじみ』 16, 富士見・言語文化研究会, pp.3-16.
- 田中望 (1979) 「日常言語における「説明」について」 『日本語と日本語教育』 第8号,

- 慶應義塾大学国際センター, pp.49-64.
- 田中葉子・松崎寛 (2007) 「議論における「よね」の使用パターンとイントネーション」
『日本語教育研究』17, 広島大学, pp.81-89.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書店.
- 辻幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』研究社.
- 鶴久 (1970) 「終助詞」, 『文法』, 2-3, 明治書院, pp.49-57.
- ディアドリ・ウィルソン/ティム・ウォートン (2009) 今井邦彦 (編) 井戸亮・岡田聡
宏・松崎由貴・古牧久典・新井恭子 (訳) 『最新語用論入門 12 章』大修館書店.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第 1 巻』くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第 2 巻』くろしお出版.
- 富樫純一 (2000) 「非文末「ですね」の談話語用論的機能—心内の情報処理の観点から」
『筑波日本語研究』5, 筑波大学人文社会科学研究所日本語学研究室, pp.70-91.
- 富樫純一 (2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6, 筑波大
学人文社会科学研究所日本語学研究室, pp.19-41.
- 富樫純一 (2002) 「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』7, 筑波大学文芸・
言語研究科日本語学研究室, pp.15-31.
- 富樫純一 (2002) 「談話標識「ふーん」の機能」『日本語文法』2 (2) : 95—111.
- 富樫純一 (2005) 「驚きを伝えるということ —感動詞「あっ」「わっ」の分析を通して」
『活動としての文と発話』ひつじ書房, 229-251.
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』岩波書店 (復刊 岩波書店 2005) .
- 轟木靖子 (1993) 「「よ」「ね」の音調と機能 —東京語の場合—」『1993 (平成 5) 年度
春季大会予稿集』日本語教育学会, pp.7-12
- 轟木靖子 (1995) 「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会会報』208, 日
本語音声学会, pp.1-8.
- 轟木靖子 (1998) 「東京方言の終助詞「ね」「な」「か」の音調について」言葉の科学研
究会 (編) 『ことばの心理と学習 河野守夫教授退職記念論文集』金星堂, pp.79-92.
- 轟木靖子 (2008) 「東京語の終助詞の音調と機能の対応について —内省による考察—」
『音声言語IV』近畿音声言語研究会, pp.1-25.
- 轟木靖子・山下直子 (2004) 「終助詞の音調と意味の対応について—日本語母語話者及
び留学生への聞き取り調査より—」『香川大学教育学部研究報告 第 I 部』125, 香
川大学, pp.43-61.
- 轟木靖子・山下直子 (2008) 「終助詞の音調における地域差と共通点 —東京・大阪・岡
山・香川を例として—」『日本語教育』136, 日本語教育学会, pp.68-77.
- 轟木靖子・山下直子 (2013) 「終助詞「よ」「ね」の音調について —日本語音声教育の
視点から—」『香川大学教育学部研究報告 第 I 部』139, 香川大学, pp.103-112.
- 中野伸彦 (1993) 「終助詞の接続形「よね」について」松村明先生喜寿記念会 (編) 『国

- 語研究』明治書院, pp.743-763
- 名嶋義直 (2000) 「ノダの分析に向けて—諸説の検討とその問題点—」『ことばの科学』13, 名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会, pp.117-139.
- 名嶋義直 (2001) 「ノダの分析に向けて—「解釈」という観点から」『ことばの科学』14, 名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会, pp.71-92.
- 名嶋義直 (2002) 「「文末のノ」に関する試案」『ことばの科学』15, 名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会, pp.65-86.
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から— (Frontier series 日本語研究叢書 19)』くろしお出版.
- 西山佑司 (1999) 「語用論の基礎概念」田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘 (編)『談話と文脈(岩波講座 言語の科学 7)』岩波書店, pp.1-54.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版.
- 野田春美 (1993) 「「のだ」と「の」の境界をめぐって」『日本語学』12-11, 明治書院, pp.43-50.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能 (Frontier series 日本語研究叢書 9)』くろしお出版.
- 野田春美 (2002) 「終助詞の機能」『モダリティ (新日本語文法選書 4)』くろしお出版.
- 芳賀綏 (1954) 「陳述とは何もの?」『國語國文』23 (4) 中央図書出版社, pp.284-303.
- 橋本進吉 (1934) 『国語法要説』明治書院.
- 蓮沼昭子 (1992) 「終助詞の複合形『よね』の用法と機能」筑波大学つくば言語文化フォーラム (編) 『対象研究—発話マーカーについて』筑波大学つくば言語文化フォーラム, pp.63-77.
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為—『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法—」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (下)』くろしお出版, pp.389-419.
- 林大 (1964) 「ダとナノダ」, 時枝誠記・遠藤嘉基監修 森岡健二編 『講座日本語 6 口語文法の問題点』, 明治書院, pp.282-289.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 原口庄輔・中島平三・中村捷・川上誓作 (編) 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション (英語学モノグラフシリーズ 21)』研究社.
- 古田東朔 (1969) 松村明 (編) 『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社 p.292-297.
- 堀江薫・ブラシャント・パルデシ (2009) 山梨正明 (編) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ (講座 認知言語学のフロンティア 5)』研究社.
- マグローイン・花岡直美 (1993) 「第 2 章 日本の女性語 終助詞」『日本語学』12-11, 明治書院, pp.120-124.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版.

- 松下大三郎 (1930) 『改選 標準日本文法』 中文館書店.
- 松木正恵 (1993) 「「の」と終助詞の複合形をめぐって」『日本語学』 12-11, 明治書院, pp.51-64.
- 松崎寛・河野俊之 (1998) 『よくわかる音声 (日本語教師・分野別マスターシリーズ)』 アルク.
- 丸山岳彦 (2007) 「デスネ考」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『時間の中の文と発話』 ひつじ書房, pp.35-65.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院 (復刊 くろしお出版 1972) .
- 村中淑子 (1995) 「句末・文末のイントネーションの機能と分類」『音声言語 V』 近畿音声言語研究会, pp.49-59.
- メイナード, K・泉子 (2000) 「「だ」文と「じゃない」文」『情意の言語学 —「場交渉論」と日本語表現のパトス—』 くろしお出版, pp.189-220.
- メイナード, 泉子・K (2005) 『日本語教育の現場で使える 談話表現ハンドブック』 くろしお出版.
- 森篤嗣 (2011) 「着点を表す助詞「に」と「へ」における日本語母語話者の言語使用について」森篤嗣・庵功雄 (編) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 ひつじ書房, pp.319-341.
- 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一 (編) (2012) 『集英社 国語辞典 [第3版]』 集英社.
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』 1, 大阪大学文学部日本学科, pp.63-88.
- 森山卓郎 (2001) 「終助詞「ね」のイントネーション —修正イントネーション制約の試み—」 音声文法研究会 (編) 『文法と音声Ⅲ』 くろしお出版, pp.31-54.
- 森山卓郎 (2008) 「談話におけるエコー表現 —相手の発話を受ける「ね」「ねえ」「か」を中心に—」 串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『「単位」としての文と発話 (シリーズ文と発話 2)』 ひつじ書房, pp.27-44.
- 柳田征司 (1993) 「「の」の展開、古代語から近代語へ」『日本語学』 12-11, 明治書院, pp.15-22.
- 山内博之 (2004) 「語彙習得研究の方法—茶釜とNグラム統計—」『第二言語としての日本語の習得研究』 7, 第二言語習得研究会, pp.141-161.
- 山口佳也 (1975) 「「のだ」の文について」『国文学研究』 56, 早稲田大学国文学会, pp.12-24.
- 山崎久之 (1970) 「「の」による終止」『文法』 2-11, 明治書院, pp.96-102.
- 山田孝雄 (1936) 『日本語文法学概論』 宝文館.
- 山本多恵子 (2003) 「日本語接続詞「だから」と「だって」の関連性理論による分析」『国際基督教大学学報. I-A, 教育研究』 45 国際基督教大学 pp.187-198.
- 山森良枝 (1997) 「終助詞の局所的情報処理機能」 谷泰 (編) 『コミュニケーションの自

- 然誌』新曜社, pp.130-172
- 吉田金彦 (1970) 「現代文における「の」の意味・用法」, 『文法』2-11, 明治書院, pp.18-31.
- 吉田茂晃 (1988) 「ノダ形式の構造と表現効果」, 『国文論叢』15, 神戸大学文学部国語国文学会, pp.46-55.
- 吉村あき子 (2010) 「日本語のメタ言語否定と「わけではない」」『奈良女子大学人間文化研究科年報』, 25, 奈良女子大学大学院人間文化研究科, pp.1-12.
- 和田實 (1969) 「辞のアクセント」『国語研究』第29号, 國學院大學, pp.1-20.
- 和田實 (1975) 「アクセント・イントネーション・プロミネンス」文化庁・国立国語研究所『日本語と日本語教育 一発音・表現編一』文化庁(徳川宗賢(編)(1980)『論集 日本語研究2 アクセント』有精堂出版社, pp.268-294 所収) .
- 渡辺実 (1953) 「叙述と陳述 一述語文節の構造」『國語学』13・14, 国語学会, pp.20-34.
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房.
- 渡辺実 (1974) 『国語文法論』笠間書院.
- Alfonso, Anthony 1996 *Japanese language patterns*. Sophia University L.L.Center of Applied Linguistics, Tokyo.
- Blakemore, Diane 1987 *Semantic Constraints on Relevance*, Blackwell, Oxford.
- Blakemore, Diane 1988 “So as a Constraint on Relevance,” *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, ed. By Ruth Kempson, 183-195, Cambridge University Press, Cambridge.
- Blakemore, Diane 1992 *Understanding Utterances*, Blackwell, Oxford. (D. ブレイクモア(著) 武内道子・山崎英一 [訳] 1994. 『ひとは発話をどう理解するか: 関連性理論入門』東京: ひつじ書房)
- Blakemore, Diane 2002 *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers* Cambridge University Press, Cambridge.
- Carston, Robyn 1998 *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. University College London. (R. カーストン(著) 内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子 [訳] 2008. 『思考と発話 一明示的伝達の語用論一』東京: 研究社)
- Carston, Robyn 2000 “Explicature and Semantics,” *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 1-44, University College London.
- Grice, Paul H. 1989 *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press, Cambridge, MA (清塚邦彦 [訳] 1998. 『論理と会話』東京: 勁草書房)
- Hasegawa, Yoko 2006 “A study of Soliloquy in Japanese,” *Proceedings of the 31st Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 145-156.
- Hasegawa, Yoko 2011 “Soliloquy for linguistic investigation,” *Studies in Language*, 35(1), John Benjamins, Amsterdam, 1-40.

- House, Jill 2006 “Constructing a context with intonation,” *Journal of Pragmatics*, 38(10), 1542-1558.
- House, Jill 2007 “The role of prosody in constraining context selection : a procedural approach,”
In
Nouveaux Cahiers de linguistique française 28, 369-383.
- Imai, Kunihiko 1998 “Intonation and relevance,” In:Carston, R, Uchida, S. (Eds) *Relevance Theory:Applications and Implications*. John Benjamins, Amsterdam, 69-86.
- Itani, Reiko 1996 *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*, Hitsuzi Syobo, Tokyo.
- Maynard, Senko K. 1993. Interactional functions of formulaicity : A case of utterance-final forms in Japanese.*Proceedings of 15th International Congress of Linguists*, 1, Quebec City, Canada : Laval University, 355-357.
- Narahara, Tomiko 2002 “Forms and Functions of the Modern Copula,” *The Japanese Copula : Forms and Functions*, Palgrave macmillan, 133-202.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson 1986 *Relevance : Communication and Cognition*. Blackwel, Oxford. (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 [訳] 1993. 『関連性理論 -伝達と認知-』 東京：研究社)
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson 1995 *Relevance : Communication and Cognition*. Second Edition. Blackwell, Oxford. (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 [訳] 1999. 『関連性理論 -伝達と認知-』 <第二版> 東京：研究社)
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber 1993 “Linguistic Form and Relevance,” *Lingua*90, 1-25.
- Wilson, Deirdre and Tim Wharton 2005 “Relevance and Prosody” *UCL Working Papers in Linguistics* 17, 427-454, University College London.
- Yoshimura, Akiko 2013 “Descriptive/metalinguistic dichotomy? : Toward a new taxonomy of negation,” *Journal of Pragmatics*, 57, 39-56.

調査資料

宇佐美まゆみ監修 (2011) 「BTSJ による日本語話し言葉コーパス(2011 年版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究 B(課題番号 20320072)研究成果.(BTSJ) 名大会話コーパス 科学研究費基盤研究 (B) (2) 「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成 13 年度~15 年度、研究代表者：大曾美恵子) の一環として作成 (名大)

- 朝倉美波・瀬戸口彩・山本京子（2010）『合格できる日本語能力試験 N2』アルク（「合格できる N2」）
- 国書日本語学校（編）（2013）『日本語能力試験予想問題集 N4（改訂版）』国書刊行会（「予想問題集 N4」）
- 佐々木瑞枝・村澤慶昭・細井和代・藤尾喜代子（2001）『中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』The Japan Times（「アカデミック・ジャパニーズ」）
- スリーエーネットワーク（編）（1998）『みんなの日本語 初級Ⅰ』スリーエーネットワーク。
- スリーエーネットワーク（編）（1998）『みんなの日本語 初級Ⅱ』スリーエーネットワーク。
- 千駄ヶ谷日本語教育研究所（2011）『日本語能力試験 N1 模擬テスト〈1〉』スリーエーネットワーク（「模擬テスト N1 〈1〉」）
- 千駄ヶ谷日本語教育研究所（2011）『日本語能力試験 N2 模擬テスト〈1〉』スリーエーネットワーク（「模擬テスト N2 〈1〉」）
- 千駄ヶ谷日本語教育研究所（2013）『日本語能力試験 N1 模擬テスト〈4〉』スリーエーネットワーク（「模擬テスト N1 〈4〉」）
- 千駄ヶ谷日本語教育研究所（2013）『日本語能力試験 N2 模擬テスト〈4〉』スリーエーネットワーク（「模擬テスト N2 〈4〉」）
- 独立行政法人国際交流基金（2012）『日本語能力試験 公式問題集 N1』凡人社（「公式問題集 N1」）
- 独立行政法人国際交流基金（2012）『日本語能力試験 公式問題集 N2』凡人社（「公式問題集 N2」）
- 独立行政法人国際交流基金（2012）『日本語能力試験 公式問題集 N3』凡人社（「公式問題集 N3」）
- 独立行政法人国際交流基金（2012）『日本語能力試験 公式問題集 N4』凡人社（「公式問題集 N4」）
- 中村かおり・福島佐知・友松悦子（2011）『新完全マスター聴解 日本語能力試験 N1』スリーエーネットワーク（「完全マスターN1」）
- 中村かおり・福島佐知・友松悦子（2011）『新完全マスター聴解 日本語能力試験 N2』スリーエーネットワーク（「完全マスターN2」）
- 凡人社編集部（2010）『短期マスター日本語能力試験ドリル N4』凡人社（「短期マスターN4」）
- 渡邊亜子・大場理恵子・清水知子・杉山ますよ・野原ゆかり・作田奈苗（2013）『日本語能力試験 完全模試 N2』Jリサーチ出版（「完全模試 N2」）

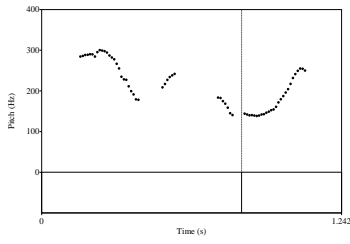
付録1 第3章 BTSJ15-1-F11-F12の会話(一部)

791	750	*	F12	韓国料理いいね、ほんと。
792	751	*	F11	いいねー。
793	752	*	F12	うん。
794	753	*	F11	へー。
795	754	*	F11	そー、「人名6あだ名」とさ、タイ料理屋にいったんだよ。
796	755	*	F12	うん。
797	756	*	F11	こないだ、結構前だけど。
798	757	*	F12	うん。
799	758	*	F11	うん。
800	759	*	F11	いつだっけ、忘れたな、結構前か、行ったの。
801	760	*	F11	そしたらさ、そのタイ料理がほんとおいしかったの。
802	761	*	F12	ふーん。
803	762	*	F11	辛かったけどおいしくってー、あんね、かなも一緒に、行って(ふんふんふん)、そんときにね、吉祥寺のね(うん)、「店舗名1」とか言うところに>{<}。
804	763	*	F12	<あ、なんか>{<}、聞いたことある。
805	764	*	F11	ほんと?。
806	765	*	F12	うん、うん。
807	766	*	F11	おいしかったよ。
808	767	*	F12	ほーん。
809	768	*	F11	で、「人名6あだ名」曰くー、やっぱけっこう本場に近めにしてあるって。
810	769-1	/	F12	あー、
811	770	*	F11	<言ってた>{<}。
812	769-2	*	F12	<そうなん>{<}だ。
813	771	*	F11	うん。
814	772	*	F11	おいしいって。
815	773	*	F12	ほーん。
816	774	*	F11	<い>{<}【。
817	775	*	F12	】<知>{<}らないもんな、タイ料理。
818	776	*	F11	いいよ、いいよ。
819	777	*	F11	行ってみ[→]。
820	778	*	F11	'=あんね(うん)、あたしね、あるよ、なんか、名刺みたいなのが、ある。

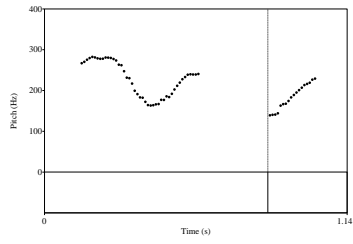
付録2-1 第6章 調査で使した「の」刺激音(女性)

彼に会ったの

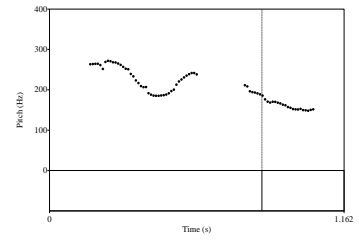
低接・疑問上昇調



低接・アクセント上昇調

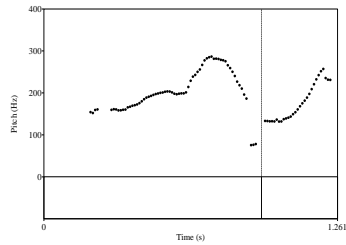


低接・平坦調

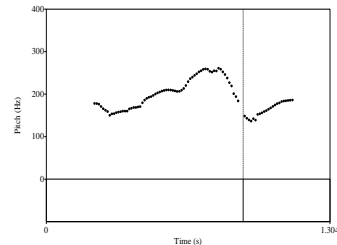


それは嫌なの

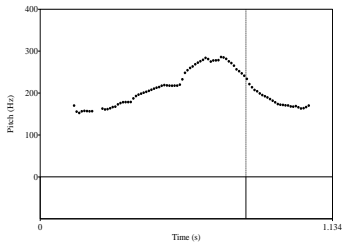
低接・疑問上昇調



低接・アクセント上昇調

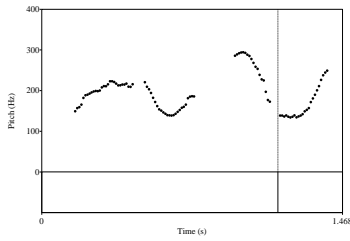


低接・平坦調

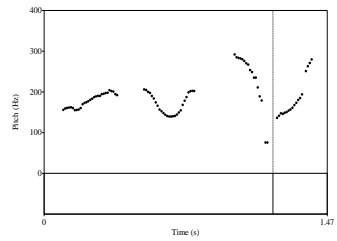


あの店美味しいの

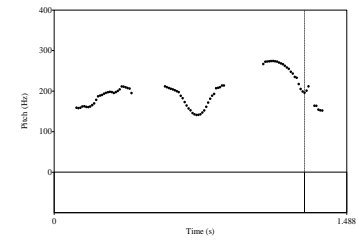
低接・疑問上昇調



低接・アクセント上昇調

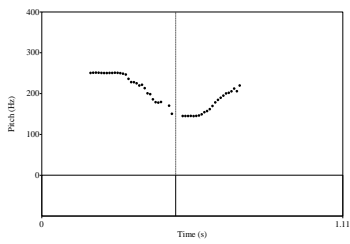


低接・平坦調

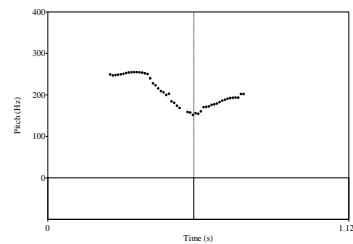


そうなの

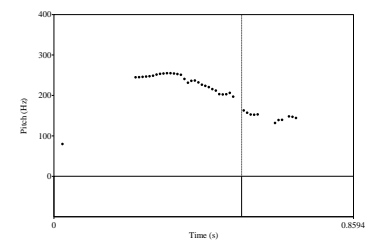
低接・疑問上昇調



低接・アクセント上昇調



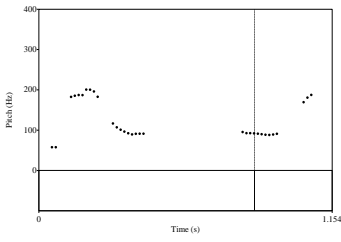
低接・平坦調



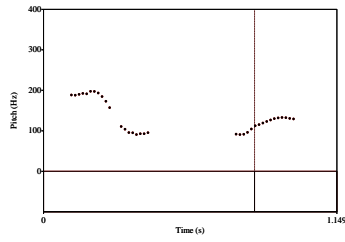
付録2-2 第6章 調査で使した「の」刺激音(男性)

彼に会ったの

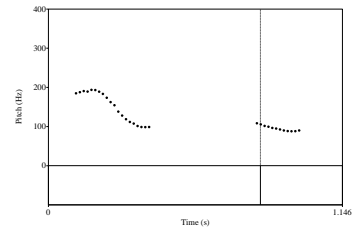
低接・疑問上昇調



低接・アクセント上昇調

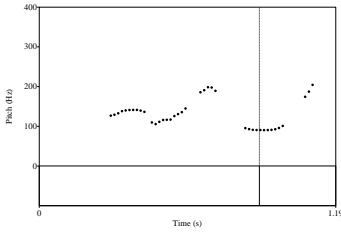


低接・平坦調

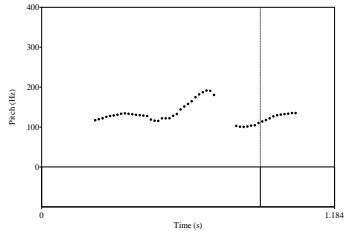


それは嫌なの

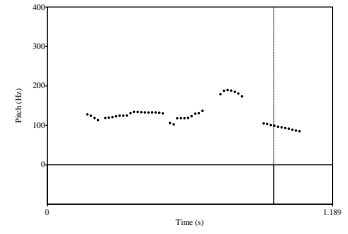
低接・疑問上昇調



低接・アクセント上昇調

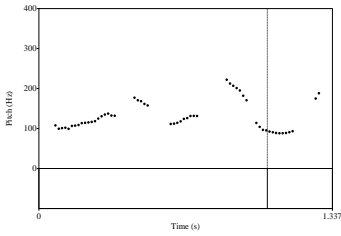


低接・平坦調

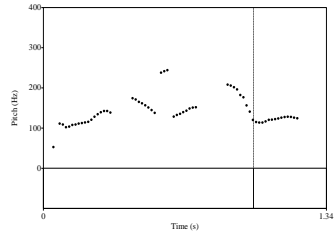


あの店美味しいの

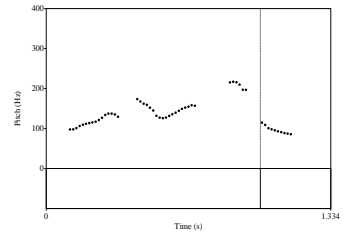
低接・疑問上昇調



低接・アクセント上昇調

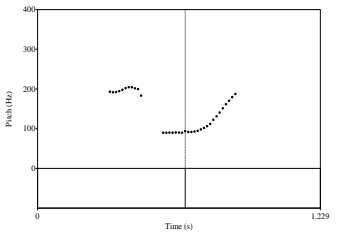


低接・平坦調

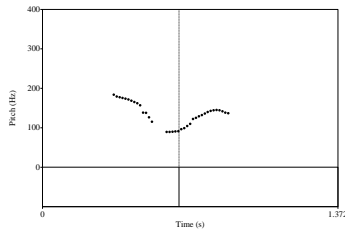


そうなの

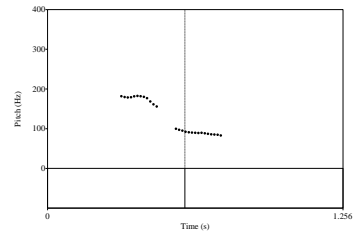
低接・疑問上昇調



低接・アクセント上昇調



低接・平坦調

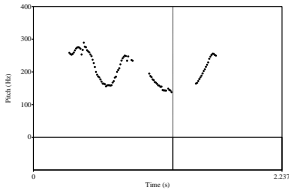


付録2-3 第6章 調査で使した「んだ」刺激音(女性)

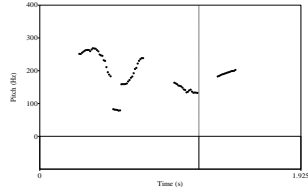
※「だ(d)」の開始点を縦線で示す。

彼に会ったんだ

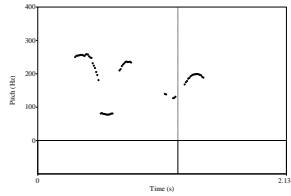
疑問上昇調



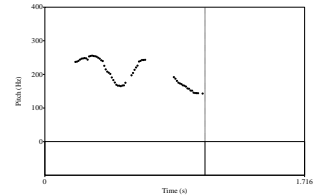
アクセント上昇調



上昇下降調

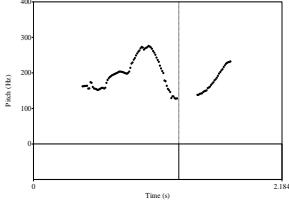


下降調

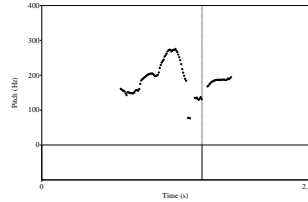


それは嫌なんだ

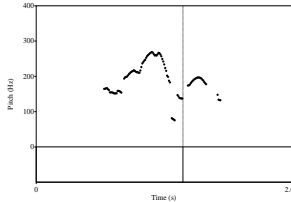
疑問上昇調



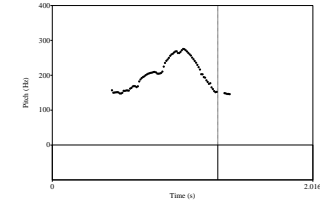
アクセント上昇調



上昇下降調

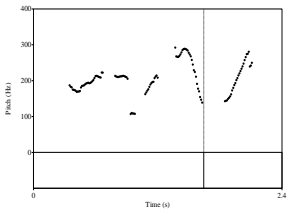


下降調

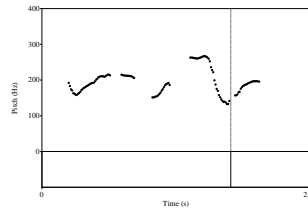


あの店美味しいんだ

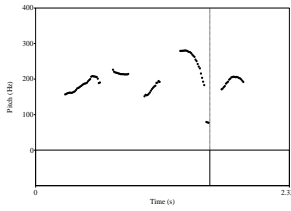
疑問上昇調



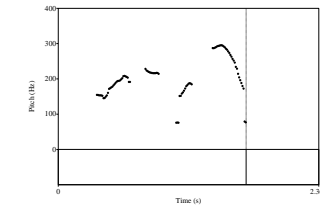
アクセント上昇調



上昇下降調

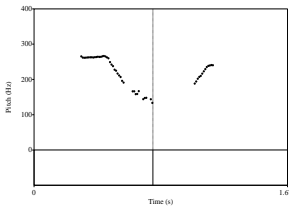


下降調

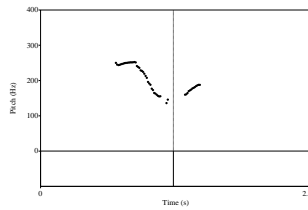


そうなんだ

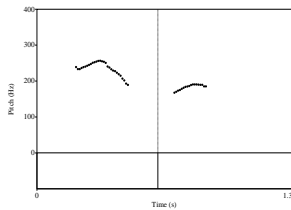
疑問上昇調



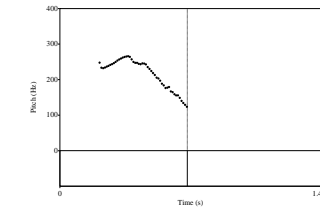
アクセント上昇調



上昇下降調



下降調

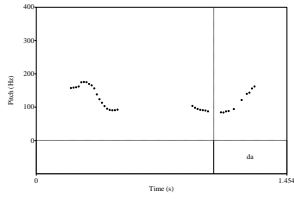


付録2-4 第6章 調査で使用した「んだ」刺激音(男性)

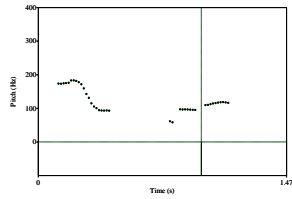
※「だ(d)」の開始点を縦線で示す。

彼に会ったんだ

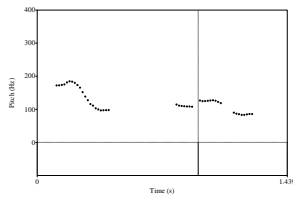
疑問上昇調



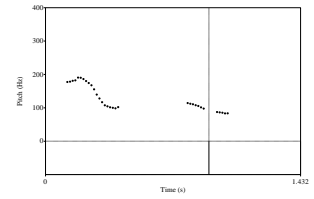
アクセント上昇調



上昇下降調

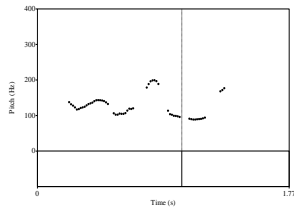


下降調

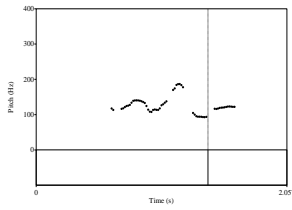


それは嫌なんだ

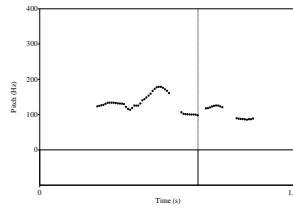
疑問上昇調



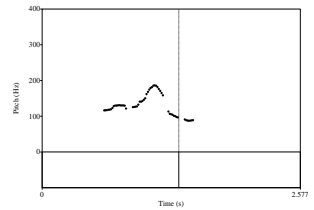
アクセント上昇調



上昇下降調

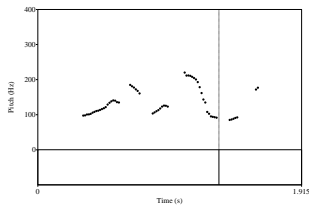


下降調

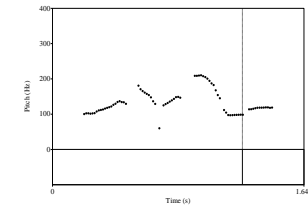


あの店美味しいんだ

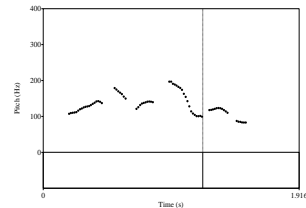
疑問上昇調



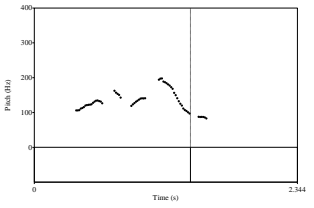
アクセント上昇調



上昇下降調

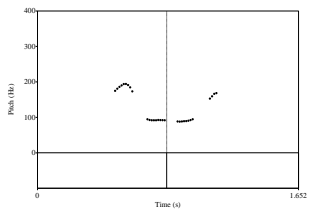


下降調

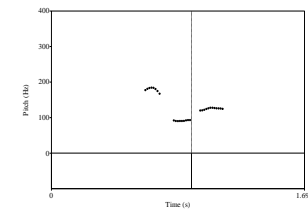


そうなんだ

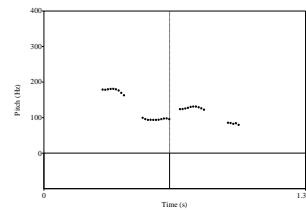
疑問上昇調



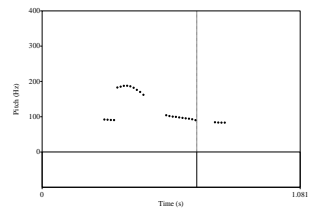
アクセント上昇調



上昇下降調



下降調



付録3 第6章調査回答結果

刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	平坦調
彼に会ったの (女性発話)	男	30	東京	相手に彼に会ったことを聞いている	相手に単に事実を述べている	(相手に彼に会ったと聞いて)何かショックを受けたような
	男	30	千葉	相手に「彼に会ったの？」というように聞いている。	相手が「本当に彼に会ったの？嘘でしょ～」と言ってくるのに対して「彼に会ったの！本当だから！」というように、会ったことを断定して伝えている	「実は、彼に会ったの」と言うことにより、「彼に会った」という話題を切り出している感じがする。
	男	40	東京	「会ったの？」と聞いている	会ったことを断定して伝えている	私が彼に会っちゃった、会っちゃいけないのに会ってしまったと伝えている
	男	50	東京	質問だけど、含みがある あってほしくなかったみたい	複雑だけど、彼に会ったという情報を相手に伝えたが、相手にうまく伝わらなかった時に再度伝えている	自分が会ったことを伝えている
	男	40	千葉	彼に会ったんですか？と他の人に質問している	自分が「会ったんですよ」と伝えている	彼に会ったんですよ、と相手に伝えている
	男	40	埼玉	話し相手が彼にあったのか興味があり、その上で話し相手に対して、彼に会ったかどうか聞いている。	話し相手には彼に会ってほしくないと思っていて、その上で話し相手に対して、彼に会ったかどうか聞いている。	話し相手には彼に会ってほしくないと思っていて、その上で話し相手に対して、彼に会ったかどうか聞いている。
	男	50	東京	会ったことを言わなかったのかの問いかけも含んでいる感じ	聞いている感じ。	確認している感じ。
	男	40	神奈川	彼に会ったかどうか、質問しようとしている。	彼に会ったという事実を強調しようとしている。	彼に会ったことを述べている。(淡々とした感じ)
	男	20	神奈川	ちょっと興味を持って聞いている	相手に普通に軽く聞いている	自分が会ったよと言っている
	男	10	東京	疑問	疑問	不自然
	男	20	東京	疑問	相手に聞いている	会ったことに対して「そうなんだ」と言っている
	男	20	東京	えっ？という驚きを伴う尋ね方	会ったかどうかを聞いている	報告している
	男	40	東京	「会ったの？」と聞いている	会ったんだもん！と言っている	会ってほしくなかったんだけど、聞いて、会っちゃったんだと言っている
	男	10	埼玉	本当に彼に会ったか聞いている	こちらがあったよ、と言った	彼に会ったと報告
	男	10	東京	質問している	質問(若干敵対心がある感じ)	不自然
	男	10	東京	自然な質問	質問している	会ったと伝えている
	女	10	千葉	質問。何か相手の様子から察して確認している。	自分の起きたでき事を相手に伝えている。でもゆっくりで感情が薄いので、昔話の語り手のよう。	分かりにくい。「こんな遅くまで何してたんだ」と親に言われて、不満そうにしぶしぶ、いやいや？答えた感じ。
	女	50	東京	相手が彼に会ったかどうかを聞いている	誰かに自分が彼に会ったことを強く言いたい	誰かに自分が彼に会ったことを伝えている
	女	30	神奈川	相手に聞いている	お互いに知っている彼について「彼に会ったの」と新しい文脈を話し始める	深刻な話をこれから相手に伝える感じ
	女	50	東京	意を決して、会ったことを告白する感じ	軽い感じで会った事実を伝え、それから、的な感じ	軽い感じで純粋に会ったかどうかを知りたい、質問
	女	40	東京	質問	「会っちゃいけないの？会いましたが、それが何か？」というような感じ	会った事実を伝えている
	女	30	神奈川	発話している方は、相手が彼に会った方がいいと考えて、相手に「彼に会ったの？」を質問している(詰問の感	発話している方は、相手が彼に会った方がいいと考えて、相手に「彼に会ったの？」を質問している(詰問)	自分が「彼に会った」という事実を相手に伝えている
	女	40	東京	もっと強く聞いている	自分が会ったんだという報告	自分が会ったんだという報告
	女	30	千葉	彼に会ったの？と聞いている	彼に会ったの？と相手に聞いて詰めている	自分が彼に会ったと言っている
	女	40	東京	会わなければならないのに会っていない彼(人物)に、話し相手が会ったかどうかを発話者が確認している言葉。	会わなければならないのに会っていない彼(人物)に、話し相手が会ったかどうかを発話者が確認している言葉。	発話者が会ったべき彼(人物)に会ったことを、話し相手に伝えた時の言葉。
	女	30	神奈川	相手に会ったかどうか聞いている	相手に会ったかどうか聞いている	本人があったことを伝えている
	女	50	東京	相手に聞いている	自分が会ったことを言っている	自分が会った
	女	10	東京	相手に聞いている	相手に聞いている	自分が会ったことを伝えている
	女	20	神奈川	確認(親しい聞いて)	確認	話し手があったことを伝えている
	女	20	神奈川	相手に聞いている	使わない	会ったことを伝えている
女	20	埼玉	他の人からあったことを聞いて「ほんとにそうなの？」と聞いている	会ったことを伝えている	会ったことを伝えている	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	平坦調
あの店美味しい (女性発話)	男	30	東京	質問 率直な疑問 相手から情報を得ようとするコメント	おかしい	おかしい
	男	30	千葉	美味しいかどうかを訪ねている	美味しいと伝えている	不自然
	男	40	東京	疑っている	疑い「おいしいのか？」	相手に伝えている
	男	50	東京	ちょっと疑っている感じ	質問	美味しいという感想、意見を述べている
	男	40	千葉	あの店は本当においしいのか聞いている。自分は美味しくないと思っている。	相手が疑っているが、自分はあの店がおいしいんだということ強調している	相手がおいしいと思っていることを自分はちょっと否定している
	男	40	埼玉	そのお店が美味しいかどうかは知らないけれど、なんとなく美味しくないのではと思っていて、本当は美味しいかどうか話し相手に尋ねている。	自分はそのお店が美味しくないという感想をもっているのに、話し相手は美味しいと思っているよと分かかって、本当に美味しかったかどうか話し相手に尋ねている。	そのお店は美味しくないさそうな店構えなのだけど、本当は美味しいという意外な気持ちを話し相手に伝えている。
	男	50	東京	本当においしいの、と疑問視している感じ。	食べてすぐの感想を言っている感じ。	美味しいよ、と相手に伝えている感じ。
	男	40	神奈川	美味しいかどうか聞いている。(自分は美味しいと思わない)	不自然	美味しいことを述べている。
	男	20	神奈川	聞いている	自分がおいしいと言っている	自分がおいしいと言っている
	男	20	東京	疑問	疑問	不自然
	男	20	東京	美味しいかどうかを聞いている	疑問	美味しいと伝えている
	男	40	千葉	相手に質問している	美味しいと言っている	美味しいと言っている
	男	10	埼玉	美味しいかどうか尋ねる	美味しいことを強調	美味しいことを伝えている
	男	10	東京	美味しいことを疑っている	疑っている(疑問と同じ)	分からない
	男	10	東京	相手に質問	事実を述べている	不自然
	女	10	千葉	美味しいかどうかわからないのを聞き手に聞いている	美味しいのを伝えているが、怒った感じに聞こえる(美味しくないと言われて、自分がおいしいということ向きになっていっているよう)	話し手が言ったことがあって、美味しさを相手に伝えている
	女	50	東京	疑っている。自分はずっと思っていたのに、美味しいという情報を聞いて信じがたいという感じ	おいしいと主張している	美味しいと言った人にその情報を確かめて納得する
	女	30	神奈川	お店がおいしいかどうか聞いている(「おいしそうではないが」と思っている)	「あの店がおいしい」と聞いて「そうなんだ」と思っている(少し疑っている)	「あの店がおいしい」と聞いて「そうなんだ」と思っている
	女	50	東京	行ったことないけど、本当においしいの？という感じ	美味しいと言っている	自分は前に言ったことあるけど、あなたは美味しいと思えるの？という感じ
	女	40	東京	相手に質問している	相手に聞いている「言ったことないけど、味はどうなの？」	食べたことあるけど、相手から美味しいと聞いて「あ、おいしかったのね。ふーん」と思いついている感じ
	女	30	神奈川	美味しいかどうかを誰かに聞いている	伝えているとも質問もどちらともとれる	誰かにあの店がおいしいことを紹介している
	女	40	東京	美味しいと思っていなくて疑問	美味しいのか聞いている	自分がおいしいと思っていて伝えている
	女	30	千葉	自分は美味しくないと思っているが、あの店は本当においしいと思ってるの？と聞いている	自分は知らないが、あの店は美味しいのか、と聞いている	不自然
	女	40	東京	あるお店が、美味しいかどうかを尋ねている言葉。	あるお店が美味しいという事を、相手に伝えている言葉。	あるお店が美味しいという事を、相手に伝えている言葉。

	女	30	神奈川	あの店は美味しいのかと聞いている	あの店は美味しいと伝えている	あの店は美味しいと伝えている	
	女	50	東京	相手に聞いている	美味しいと人に言っている	自分がおいしいよと言っている	
	女	10	東京	美味しくないんじゃないかと思いつながら聞いている	相手に聞いているけど、若干不自然	相手に伝えている	
	女	20	神奈川	見た目美味しくないさそうなお店を見て「おいしいの？」と聞いている	不自然だけど、食べたことがあって、美味しいんだよって言うてる	分からない	
	女	20	神奈川	相手にあの店が本当においしいか聞いている	聞いているのか、美味しいと言っているのかわからない	あまりおいしいと思っていないけど、こそこそと言っている	
	女	20	埼玉	疑ってかかって、質問している	普通に質問している(美味しいかどうか聞いている)	人においしいことを伝えていて、あまり他の人には教えてくれない感じ	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	平坦調	
(女性発話)	それは嫌なの	男	30	東京	相手に聞いている	ちょっと甘えた感じでそこまで嫌ではない	自分の態度を示している
		男	30	千葉	相手に疑問を呈している。相手が「～したくない」と言っているのに対して、「それは嫌なの？じゃあ、あれならいいの？」というような形。	相手に対してだだこねている感じ。相手が「～やって！」と言ってきたのに対して、「それは嫌なの！ やりたくないの！」と反応しているような感じ。	相手に「～して」と言われたのに対して「それは嫌なの」と拒絶している。その点で②と似ているが、③の方がより必死に拒絶しているように感じられる。
		男	40	東京	疑問「あなたが嫌？」	「私はそれが嫌だ！」と主張	「私はそれが嫌ですよ、遠慮したい」ということを伝えている
		男	50	東京	質問	自分の気持ちを強く言っている	相手の言ったことに同意しているのと、自分が言っていることと両方とれる
		男	40	千葉	相手の気持ちを質問している。いやなんですか？と聞いて	自分の気持ちを断定している	相手の気持ちを確認している
		男	40	埼玉	話し相手が、やってもいいこととやりたくないことを話していて、やりたくないことを聞いた後に、それが本当にいやなことなのか確認している	話し相手から、自分にやってほしいことを伝えられて、それに対して自分はやりたくないことを伝えている。	話し相手が、やってもいいこととやりたくないことを話していて、やりたくないことを聞いた後に、それに共感して話している。
		男	50	東京	相手に聞き返している感じ。	相手に聞き返している感じ。	小さい子供に確認している感じ。
		男	40	神奈川	自分は嫌ではないが、相手が嫌がっているらしい事柄を聞いている。	相手が具体例をあげて、もしくは具体的な行動で好きか嫌いか聞いてきた際、嫌なことを強調している。	軽く肯定しながら聞き返す。(相槌として。但し少し不自然)
		男	20	神奈川	相手に聞いている	自分が嫌だと言っている	自分が嫌だと言っている
		男	20	東京	疑問	嫌だということを伝えている	意図が分からない
		男	20	東京	疑問	嫌だという気持ちを伝えている	相手が嫌だということをつかっていた
		男	40	東京	相手が嫌がっていて、それに対して尋ねている	これはどうなの？と聞かれて、嫌だと言っている	不自然
		男	10	埼玉	嫌なのか聞いている	嫌だと報告	わからない(不自然ではない)
		男	10	東京	質問している	自分の意見を言っている	不自然
		男	10	東京	疑問	断定	断定
		女	10	千葉	質問している。相手の考えを確認しようとしている。	反論。	理由、意見を述べている。反論ではなく、単なる説明。
		女	50	東京	誰かの気持ちを聞いている	誰かに自分の気持ちを強く伝えている「それは」を強調したい気持ち	誰かに自分の気持ちを伝えている
		女	30	神奈川	確認	嫌だという気持ちを強調	他のことならいいが、それは嫌だ(報告)
		女	50	東京	軽い感じで質問している	(平坦と同じ断言だが)より感情がこもった複雑な気持ちを伝えている	嫌だという事実を、ためらいなく断言している
		女	40	東京	疑問(質問っぽい)	自分が嫌だと伝えている	そうなんだ、嫌なんだ、とだめめている
		女	30	神奈川	話の流れで何かを確認する	「じゃあこれはどう？」と聞かれて、「それは嫌なの、知っているでしょ？」と甘えるような言い方	自分の意志で何かの決定を言う
		女	40	東京	相手に嫌かどうかを聞いている	平坦より自分がかもつと嫌だと思っていると伝えている	自分が嫌だと思っている
		女	30	千葉	相手に対して「あなたは嫌なの？」と確認している	自分が嫌だという思いを強く主張している	(アクセントより軽い)自分が嫌だということを行っている
		女	40	東京	話し相手が嫌がっている事を発話者が確認している言葉。	発話者が嫌なことを、軽く念を押す言葉。	子供など、若い年代に向かって、その子たちが嫌がっている事を確認している言葉。
		女	40	神奈川	アクセントと同じ。相手が嫌なのかどうかを確認しているでも意外に思っていて、この後に「どうして」などと理由を聞いたりする	相手が嫌なのかどうかを確認している	「それが嫌かどうかを確認している。この後に「じゃあこれは」と他のことを勧めよう
	女	50	東京	疑問文「相手が嫌なのね」	自分が嫌	相手が嫌だと聞いた「相手が嫌なんだね」	
	女	10	東京	相手に聞いている	自分が嫌だと言っている	自分が嫌だと言っている	
	女	20	神奈川	聞いている(さきより意図が分かりやすい)質問という意図が分かりやすい	自分が嫌だということを(ムキになって)言っている感じ	相手が嫌だと思っていることを聞いている感じ(疑問より意図が分かりにくい)	
	女	20	神奈川	質問している	嫌だと言っている	子どもに対して、「嫌だったね」と言っている	
	女	20	埼玉	嫌なことが分からないくて聞いている	自分が嫌なことをストレートに伝えている	相手が嫌で、それに対して「そうなんだ」と言っている感じ	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	平坦調	
(女性発話)	そうなの	男	30	東京	相手が何か言ってきたことに対して「ほんとなの？」と尋ね	強調している「いや、こうなんだよ！」と言っている	肯定の「そうなの」
		男	30	千葉	相手に問いかけているコメント	ニュアンスが取りづらいが、向こうがこちらの気持ちを理解していることを伝えるコメント	相手の気持ちを察するコメント
		男	40	東京	疑問「ほんとにそう思っているの？」	自分の意見を主張「こうなんですよ！」	相手の意見を聞いて納得している「そうなのね」
		男	50	東京	疑っているほどではないが、ちょっと納得できない感じ、聞き返している	確認を求めている	納得
		男	40	千葉	相手に質問している。自分は若干疑問視している	相手には否定されたが自分はそう思っているんだ、ということ強く主張している	相手からの質問に肯定で返している
		男	40	埼玉	相手が話してくれたことが少し意外だったので、本当にそうなのか聞き返している。	自分が思っていることを言った後に、相手がそれに疑問を投げかけたので、再度自分が思っていることを伝えてい	相手の話を聞いて、それに共感している。
		男	50	東京	本当なの。という疑問視している感じ。	詰問している感じ。	相手に肯定している感じ。
		男	40	神奈川	疑問形。相手に確認しようとしている。	肯定を強調している。	わからない。(相槌のように聞こえる)
		男	20	神奈川	疑問	疑問	納得した感じ
		男	20	東京	疑問	不自然	あいづち
		男	20	東京	確認	事実の確認(冷たい言い方)	あいづち
		男	40	東京	相手に質問	相手を納得させている	質問に対して納得
		男	10	埼玉	そうなの？と尋ねている	そうなの？と尋ねている 確認みたいな感じ(いわれて「そうなの？」)	肯定の「そうなの」
		男	10	東京	相手への質問	自分の気持ちを強く主張している	相手に対する同情
		男	10	東京	納得、確認	あいづち	疑問
		女	10	千葉	聞き返している(質問)	相手に肯定している	相手に肯定している感じ。
		女	50	東京	驚きに満ちた状態で、相手が話している情報にびっくりしている感じ	自分の意見を強く押し出している	相手が言ったことに対して単順に納得
		女	30	神奈川	それは本当なの？という感じ	自分の気持ちがそうであると主張している	相手の言うことをそうなんだと同意している

	女	50	東京	疑問	断言している	もっと断言までいっていいけど、肯定している
	女	40	東京	質問 本当かどうかもう少し知りたい その先に会話が発展しそう	自己完結 それ以上相手に物を言わせない感じ	肯定
	女	30	神奈川県	質問している	念を押して「そうだ」ということを伝えている	誰かに質問されたことに対し肯定している
	女	40	東京	何かを言われて本当？と聞いている	相手に同意を求めている	何か言われて唖いている
	女	30	千葉	本当にそうなの？と相手に聞いている	自分がそうだという思いを強く主張している	自分が言ったことに対する相手の反応に対して自分が改めてそうだと伝えている、再度肯定している
	女	40	東京	会話中に、発話者が納得しながら言う相槌のような言葉。	何回か相手から確認されている事を、少し強く肯定している時の言葉。	会話している内容について、納得しているときに使う言葉。
	女	30	神奈川県	相手から話を聞いていて、相づちを打っているが、その内容に疑問を持っている。相手に対していろいろと質問して、最後に確認として聞いている(詰問調)	相手に対していろいろと質問して、最後に確認として聞いている(詰問調)	相手から話を聞いていて、相づちを打っている
	女	50	東京	疑問文	そうなんだよ、ということ人を言っている	相手が言っていることをへへ～という感じで聞いている
	女	10	東京	疑問形	肯定している	あまりよろしくない状態を肯定している
	女	20	神奈川県	疑問を持っている	肯定している	そうだよと言っている
	女	20	神奈川県	半信半疑。「ほんとに？」と確かめている	相手が反論してきたことに対して再反論	言われたことに対して肯定する
	女	20	埼玉	聞いている	問い詰められている感じ「あなたやったの？」	あいづち
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	平坦調
(それは嫌なの (男性発話))	男	40	埼玉	発話者が話し相手に提案したことについて、話し相手が乗り気でないように思えたので、発話者は話し相手がその内容をいやがっているかどうか尋ねた。	話し相手からの提案について、発話者はそれをしたくないと思ったので、その提案を拒絶するために話し相手にはっきりと伝えた。	話し相手からの提案について、発話者はそれをしたくないと思ったので、その気持ちを話し相手に理解してほしいと思って話し相手に伝えた。
	男	30	埼玉	疑問	嫌なことを強調	報告
	男	30	埼玉	相手に質問	相手に自分の意見を主張	相手に自分の意見を伝達
	男	20	埼玉	疑問形	強い拒絶	拒絶
	男	20	東京	相手に嫌なことを優しく聞いている感じ。	相手に少し嫌なことをふざけながら伝えている感じ。	不自然
	男	50	千葉	相手の気持ちを確認した状態。	念を押した状態。(頼まれても嫌！)	相手が自分の気持ちをストレートに出している。
	男	40	神奈川県	相手に質問している。	強く主張している。	軽く主張している。
	男	20	千葉	嫌かどうか聞いている	嫌なことをはっきり伝えてる	少し遠慮がちに言っている
	男	10	埼玉	男女関わらず相手に確認(とても自然)	自分が嫌だと言っているのはわかるが、幼い女の子が使う以外はどうかなという印象 自分が使わない	アクセントよりより女性的 自分が嫌だと言っていることは分かる 自分は使わない
	男	10	神奈川県	相手にそれが嫌かどうか聞いている	不自然 気持ちが悪い 語尾がなのだから気持ちが悪いかも(男が使うから)	オネエっぽい(自分が嫌だということを相手に伝えようとしている)
	男	40	神奈川県	相手に問いかけている	少し怒った風で相手を自分の考えるようにコントロールしたい	自分の気持ちを正直に伝えたい
	男	40	千葉	相手の気持ちを尋ねている。	強く念押ししている。	強く主張している(女性風)
	男	50	東京	質問	強く主張	主張
	男	10	千葉	相手に訪ねている。	かわいく言ってる感じ。	ホントにいやだと思っている。
	男	20	東京	嫌が聞いている	嫌だと主張	嫌だと主張(会話で出ても自然)
	女	50	東京	相手に聞いている	自分が嫌	自分が嫌
	女	40	神奈川県	相手にそれが嫌かどうかを尋ねている感じ	自分が嫌だと言いつつも、確認している感じ	相手が嫌なのをわかりつつ、確認している感じ
	女	30	埼玉	嫌なんですか？と聞いている	それは嫌だと強調したい感じ	相手に嫌だと言われて、それをおうり返している感じ
	女	30	埼玉	嫌かどうかを他者に聞いているように聞こえる	自分が嫌だという意見を伝えている。意図は通じるが、棒読みに聞こえて不自然。	女性がしゃべるようなニュアンスに聞こえる。自分が嫌だと言った意見を伝えようとしているのはわかる
	女	50	東京	質問	いや、と言っている	あいづち
	女	40	神奈川県	嫌かどうか相手の意思を確認する	「嫌」という意思を、相手に伝える際に使用する(何回も繰り返して、もう飽き飽き)	子どもが「嫌」と言ったことに対して、子どもの言葉を繰り返す
	女	20	千葉	相手に聞いている。	相手に訴えている。	相手に伝えている。アクセントよりも柔らかい言い方。
	女	10	千葉	疑問	幼稚(強い主張)	主張
	女	30	埼玉	疑問	自己主張	相手に理解を求めている
	女	20	東京	相手に対して質問している	駄々をこねている	女性言葉を男性が話していることに違和感を感じる
	女	40	東京	相手が嫌であるのかを聞いている。	自分が嫌であることを伝えている。	相手が嫌であることを確認している。
女	20	東京	相手に嫌かどうか聞いている。	自分が嫌であることを伝えている。少し拗ねているような印象。	わからない	
女	30	埼玉	相手に嫌が質問している。	嫌だと強く主張している。	アクセントと同様だけど、少し可愛く言っている。	
女	40	千葉	相手がいなやのか聞いている。	強く主張している。	強く主張はしていないが、いやな気持ちはきちんと伝えている。	
女	20	神奈川県	相手に嫌が聞いている	嫌だと言っている	嫌だと言っているが女性っぽい	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	平坦調
(彼に会ったの (男性発話))	男	40	埼玉	発話者は話し相手が彼に会ったのを知らず、話し相手が彼に会ったことを教えてくれたので、そのことが意外だとい	発話者は自分が彼に会ったことを話し相手に伝えたところ、話し相手はそれを信じなかったため、発話者は自分が	発話者は自分が彼に会ったことを話し相手が知らないと思いい、そのことを話し相手に伝えた。
	男	30	埼玉	疑問	強調	報告
	男	30	埼玉	相手に質問	相手に報告(①より強く彼に会ったことの実事を主張)	相手に報告
	男	20	埼玉	疑問形	強い肯定	肯定
	男	20	東京	相手に彼に会ったことを聞いている感じ。	ふざけて相手に彼に会ったことを伝えている感じ。	不自然
	男	50	千葉	相手に確認を求めている。	自分の意志で会ってきた。	相手にその状況を伝えている。
	男	40	神奈川県	相手に質問している。	事実を強く伝えている。	事実を軽く伝えている。
	男	20	千葉	少しいらだちを含んだ疑問	会ったことを強く主張している	ちょっと深刻な話っぽい
	男	10	神奈川県	相手に質問している。	ぶりっこ 男が言うの不自然	自分が彼に会ったことを言っている(会話でも自然)
	男	40	神奈川県	相手に問いかけている	なんで理解してくれないの、と思いながら事実を伝えている	事実を淡々と伝えている
	男	40	千葉	相手に尋ねている。	自分の経験を強く相手に伝えている。	過去の出来事を相手に伝えている。

男	50	東京	質問	不自然	不自然	
男	10	千葉	相手が会ったのか尋ねている。	相手に信じてもらえないので強く言っている感じ。	自分が会ったのを伝えている。	
男	20	東京	会ったか聞いている	会ったと主張	会ったと言っている	
男	10	埼玉	疑問	男性話者が使うべきではない(会ったことを主張)	男性話者が使うべきではない(自分が会ったことを言っている)	
女	50	東京	相手に会ったか聞いている	会ったんだと言っている	会ったと言っている	
女	30	埼玉	質問	苛立ち(で報告)	報告	
女	40	神奈川	話し相手が彼に会ったのかと尋ねている	話し相手に自分が彼に会ったことを伝えているが、言い張っている感じ	話し相手に自分が彼に会ったことを伝えている	
女	30	埼玉	会ったのかどうか聞いている疑問調	会ったということを念押ししている	本を読んでいる感じ(棒読み)	
女	30	埼玉	彼に会ったかどうかを他者に尋ねている	不自然	自分が彼に会ったことを他者に伝えている	
女	50	東京	質問	会った、と伝えている	会った、と伝えている	
女	40	神奈川	相手に対して、会ったかどうかを質問している	平坦と同じだが、何回か相手に聞き返しをされて、「言うのはこれで最後」というニュアンス	話し相手に対して、「彼に会った」という事実を伝える	
女	20	千葉	相手に聞いている。	相手に、自分が会ったんだということを平坦よりも強く伝えている。(断っている)	相手に伝えている。	
女	10	千葉	疑問	強い主張	会ったことを報告	
女	20	東京	相手に対して質問している	彼にあったことに対して意地を張っている、言い張っている彼にあって、その話を続けようとしている	女性言葉を男性が話していることに違和感を感じる	
女	40	東京	相手が彼に会ったのかきいている。	自分が彼に会ったことを伝えている。	相手が彼に会ったのかきいている。	
女	20	東京	彼にあったのか、人に聞いている。	彼に会ったことを人に伝えている。平坦より軽いトーン?	彼に会ったことを人に伝えている。	
女	30	埼玉	相手に彼と会ったかどうか聞いている。	彼と会ったことを強く主張している。	彼と会ったことを聞き手に報告している。	
女	40	千葉	相手が彼に会ったかどうか聞いている。	不自然	事実を淡々と伝えている。	
女	20	神奈川	相手に会ったか聞いている	不自然	不自然	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	平坦調
あの店美味しいの (男性発話)	男	40	埼玉	話し相手があのお店について好意的に話していたので、あのお店は美味しいとは思っていなかった発話者があのお店は美味しいのかと尋ねた。	話し相手があのお店について美味しくないというような感想を伝えてきたので、あのお店が美味しいと思っている発話者がそのことを強調して話した。	話し相手からあのお店のおいしさについて聞かれて、あのお店が美味しいと思っている発話者がそう伝えた。
	男	30	埼玉	あのお店の料理は美味しいのか聞いている疑問	お店の味を否定された後の自己主張	不自然
	男	30	埼玉	相手に質問	相手に自分の意見を主張	相手に自分の意見を伝達
	男	20	埼玉	疑問形	肯定	不自然
	男	20	東京	相手に問いかけている	なんで理解してくれないの、と思いつながら事実を伝えている	事実を淡々と伝えている
	男	50	千葉	疑っている感じがある。	同意を求めている状態。	相手に自分の気持ちや伝えようとしている。
	男	40	神奈川	相手に質問をしている。	強く自分の意見を述べている。	軽く自分の意見を述べている。
	男	20	千葉	質問している	不自然だけど、事実を示している	事実を示している
	男	10	埼玉	疑問	幼稚だけど主張	きつめに聞いただしている
	男	10	神奈川	相手に質問している	意味が分からない	疑っている
	男	40	神奈川	その店で食べたことがある人に対して、好奇心から美味しいかどうかを訊きたいと考えている	不自然	初めてその店のことを知った相手に対してその店が美味しいということ伝えてたい
	男	40	千葉	相手が行ったお店について聞いている。	相手に自分の経験を軽く伝えている。	不自然
	男	50	東京	質問	不自然	美味しいことを伝える
	男	10	千葉	人に尋ねている。	人は違うと思っているが、自分はそう思っている。	相手の知らないお店の感想を言っている。
	男	20	東京	美味しいか聞いている感じ。	不自然	美味しいか疑っている感じ。
	女	50	東京	美味しいの？と聞いている	美味しいんだよ、と強調している	違和感はないけどわからない
	女	40	神奈川	美味しいのかどうかを尋ねている少し疑いながら尋ねているような	美味しいのだと言い張っている感じに聞こえる	話している相手に確認している感じ、前に「へー」がつきそう
	女	30	埼玉	あのお店が美味しいのかどうか聞きたい	あのお店は美味しいということを念押ししている	あのお店は美味しいということを念押ししている
	女	30	埼玉	おいしいかどうかを他者に尋ねている	不自然	不自然
	女	50	東京	質問、問いかけ	美味しいと言っている	美味しいと言っている
	女	40	神奈川	相手に、美味しいかどうか質問する	不自然	相手は「美味しいよ」と言ったことに対して、それを繰り返す
	女	20	千葉	本当においしいのか伺いながら聞いている。見た目ではおおいそうに見えない店。	おいしい店なんだよということを相手に訴えている。相手はおいしそうに見えていない。	質問と主張の意図が混ざっているようでわからない。
	女	10	千葉	疑問	音としてはすねてるっぽいけど、状況が分からない	美味しいと思っていないけど、美味しいと言われて、発話している
	女	30	埼玉	質問	不自然	報告
	女	20	東京	日常会話の中で、店にはいったことがない状況で質問している	日常会話の中で、店の料理がおいしいことに自信をもっている	アクセントと同じだが意図がわかりづらい
	女	40	東京	店のことを知っている人に本当においしいのか尋ねている。	自分が店のことを知っていて、人に美味しんだから！と伝えたい。	店が美味しいと知っている人に美味しいんだね、と確認している。
	女	20	東京	おいしくないのではないかと認識を持っていて、おいしいのか疑って聞いている。	わからない	わからない
女	30	埼玉	相手が行ったお店が美味しかったか聞いている。	自分が行ったお店が美味しかったよ！と強めに言っている。	相手があのお店美味しかったという感想に対して「へー」といったように復唱している。	
女	40	千葉	美味しいかどうか聞いている。	不自然	不自然	
女	20	神奈川	相手に会ったか聞いている	美味しいと主張している	美味しいと確認している	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	平坦調
そうなの (男性発話)	男	40	埼玉	話し相手の話してくれた内容が発話者にとって意外だったので、それが本当の話かどうか話し相手に確認した。	発話者が話した内容について、話し相手が否定的な見解を伝えてきたので、発話者が話した内容を話し相手に理解してほしいと思っ再度強調した。	話し相手の話してくれた内容について、肯定も否定もせず相づちしている
	男	30	埼玉	疑問	自己主張	同意
	男	30	埼玉	相手の意見に対する疑問	相手に自分の意見の主張	相手の意見に対する肯定・同意
	男	20	埼玉	疑問形	強い肯定	肯定

男	20	東京	疑っている感じ。	不自然	納得はいかないけど、とりあえず同意している感じ。
男	50	千葉	相手に確認をしている。	念を押した感じ。理解を求めている。	自分の気持ちを伝えようとしている。
男	40	神奈川	相手の発言に対し「本当なの？」と聞き返している。	自分が正しいんだと強く主張している。	相手に質問され、軽い感じで肯定している。
男	20	千葉	質問している	相手に自分の意見を押し付ける感じ	人の話を聞いた後の軽い相槌
男	10	埼玉	確認として自然	嫌なの強調と同じで強めに自分の意思を表明していることはわかるが、女性的で不自然	相手の話を肯定 語尾が女性的
男	10	神奈川	相手に質問している	甘えた感じ きもちがわるい	相手が言ったことを受け入れている
男	40	神奈川	疑問に思っている。確かめたい	自分の意見を押し通したい	別の人の話を受けて、その人の話を肯定している
男	40	千葉	相手の言ったことを軽く疑って確認している。	自分の思いを強く主張している。	相手の質問に肯定で回答している。
男	50	東京	質問	不自然	不自然
男	10	千葉	聞いている	怒って言っている	わからない
男	20	東京	疑問	肯定(ちよつと不自然)	肯定
女	50	東京	疑問文	強調している「そうだ」と言っている	違和感
女	40	神奈川	少し驚いた感じでそうなのかを尋ねている	言い張っている感じ	同意している感じ、相づちをうっている
女	30	埼玉	そうなのかな？	そうなんだってばと念押ししている	肯定している
女	30	埼玉	そうかどうかを他者に尋ねている	不自然	事実であると伝えている
女	50	東京	疑問、問いかけ	あいづち	断言
女	40	神奈川	相手の言ったことに対して、多少疑問がある気持ちで相槌を打つ	相手の言ったことを肯定することを強調する(すこしきつい印象。子どもが何度も聞くことに対して親が返事をするの相手に本当に？と疑われているため、そうなのと訴えている。	相手の言ったことに対して、否定も肯定もせず相槌を打つ
女	20	千葉	本当にそうなのだろうか、質問している。		相手に何か教えてもらってそうなのと受け止めている。
女	10	千葉	疑問	強い主張	肯定
女	30	埼玉	確認	主張	あいづち(同意、受け入れるようなニュアンス)
女	20	東京	何か言われたことに対して疑問を持っている	何か言われたことに対して意地を張っている	何か言われたことに対して驚いている
女	40	東京	人に確認している。	自分はそうだと思うことをアピールしたい。	人にそうなのかを尋ねている。ニューハーフっぽい。
女	20	東京	疑問に思っただけ聞いている。	不自然、もしくは強く意味づける念押し。	あいづちのような相手の内容に理解を示す返事。
女	30	埼玉	相手に訝しげに聞いている。そうなの…？	相手に念を押している。そうなの！	相手に訪ねている。そうなの？
女	40	千葉	問いかけている。	自分の考えを強く主張している。	肯定している。
女	20	神奈川	相手に会ったか聞いている	主張	あいづち？

刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
彼に会ったんだ (女性発話)	男	40	千葉	(下降)をもっとフランクに話す	(下降)を親しい中の相手に伝える	相手に会ったことを質問する	自分の経験を話す
	男	50	東京	相手が自分に会ったと伝えている	彼に会えてよかったと相手が出て	たまたま彼に会ったことを伝えている	相手がたまたま会ったと聞いて
	男	30	千葉	彼に会ったことを自慢している	仲のいい友達に会ったことを言っている	昔を思い出して話す	相手が会ったことを「そうなんだ」と聞いている
	男	40	東京	会ったことを伝えている	(疑問と同じ)会ったことを伝えているが、後ろめたそう	相手が会ったことに対して疑っている「ほんとに会ったの？」	相手の話を受け止めている
	男	50	東京	不自然	告白、白状(新情報として相手に伝えている)	不自然	告白ともとれるし、相手の話を聞いて納得しているともとれる
	男	40	東京	会ったことを言っている	会ったことを言っている つい今会ったんだという感じ	不自然	相手が会ったと聞いた
	男	40	埼玉	わからない	話し相手は私が彼に会ったことを知らないだろうと思い、そのことを伝えた。	わからない	話し相手は彼に会わないだろうと思っていたが、話し相手から彼に会ったことを聞き、それが意外だったと思いつ
	男	40	神奈川	わからない。	自分が彼に会ったことを、相手に伝えようとしている。	彼にあったことを述べ、次の発話を準備している。また、相手には相槌を求めている。	1)だ、である体(会話の一部ではなく、朗読や独白のように聞こえる)会話としては不自然 2)相手の発話内容を、軽く再確認している。
	男	20	神奈川	不自然	自分が会ったことを伝えている	不自然だけど、こんな感じで話し始める人もいる(会ったのは自分)多分若い人の口調	相手が会ったことに対して、そうなんだと言った
	男	20	東京	不自然	事実を伝えている	不自然	彼に会ったことを知らされて、へこんでいる
	男	20	東京	会ったことを伝えている	会ったことを伝えている	不自然	あいつち 相手の話に「へー」
	男	30	東京	かなり不自然	報告	少し不自然	相手が会っていて、「いや、会ったんだ。お前」みたいな感じ
	男	10	埼玉	会ったと報告	会ったと報告	不自然	会ったと報告
	男	10	東京	不自然	事実を話している	不自然	事実を話している
	男	10	東京	不自然	事実を述べている	不自然	相手が会ったということを知った
	女	30	千葉	久しぶりに会ったことを伝えている	偶然会えてうれしいと話している	あまりうまくいっていない彼に会ったことを友人に話している	合わせたくない相手と彼があっけなかったことを聞いた
	女	10	千葉	相手の話を聞いて言う	彼に会えたことを嬉しそうに話す	いとおしそうに相手に伝える	相手の話を聞いて言う
	女	40	東京	自分が会ったことを話している	自分が会ったと話している	自分があったと話している	相手が会ったことを聞いて
	女	30	神奈川	友達や親しい人との会話で、彼に会ったことを報告している	友達との雑談で彼に会った話をして	友達と話していて、あまり好きではない人に逢った時のことを話している	友達と話していて、友人が彼に会ったことを聞いて確認している
	女	50	東京	言っているとも聞いているともとれる曖昧な言い方	事実を述べている	方言っぽい 自分自身のような聞いているような	ちょっと意外な感じで「あ、会ったんだ」と驚いている感じ
女	50	東京	本人があつたと言っている	言った人が会ったが、恥じらいの気持ちがある 彼に会うとういうことが、特別まではいかないけど、聞いた人が「えー会ったの」という感じ。嬉しそうに報告する 会ったことを打ち明ける。い	わからない	相手に会ったことを聞いている感じ	
女	50	東京	偶然彼に会ってしまって、ちょっとうれしい気持ちが入っている感じ	彼に会ったけど、結果があまり良くなかった感じ 自分の思うような結果ではなかった	相手に「えー思いがけない そんなことありうるはずないのにどうして会ったの？」「会う必要があったの？」と非難	彼に会ったと相手に質問している	
女	30	神奈川	わからない	自分が会ったことを思い出して話している(聞き手がいて)	まるで高校生が話しているような、友達に向かって「自分が会った」ことを話している	状況説明 ただの棒読み	
女	40	東京	不自然	発話者が会うべき彼(人物)に会ったことを、話し相手に伝えた時の言葉。「会ったの」(下降)と同じ	不自然	発話者が、本当は会わないほうが良いと思っているのに、相手が会ってしまつた事を聞いて、少し責めるような感覚を持つ言葉。	
女	40	神奈川	わからない	この後に「そうしたら」などと続けて、その時の状況や様子、自分の気持ちなど、会話を続けて話す。	この後に「そうしたら」などと続けて、その時の状況や様子、自分の気持ちなど、会話を続けて話す。	自分が「彼に会った」という事実を伝える。もしくは「彼に会った」と言ったことを繰り返す	
女	40	東京	自分が会ったと言っている(違和感ある)「のね」と同じ	自分が会ったと言っている	方言	相手が会ったと聞いた	
女	10	東京	相手に伝えていて、少しうれしそう	相手に伝えている	相手に会ったことを伝えている	相手が会ったことを知って、もう一回聞いている	
女	20	神奈川	自分が会ったことを相手に伝えている	相手に伝えている	わからない(この「だ」は使わない)友達同士だとくはない使い方 その後に文が続くとき「会ったんだけど」の意味 その後に何もないと、違和感がある	相手が彼に会ったことを聞いて	
女	20	神奈川	わからない	会ったことを伝えている	会ったことを伝えている	不自然(文を読んでる感じ)	
女	20	埼玉	テンションが上がった感じ 彼に会ったことを伝えている	ただ事実を述べている	自分が会った話をした後には話が長く言い方「会ったんだ、それで」みたいな	相手が会ったんだと言って、それに対して「あ、会ったんだ」と言っている	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
あの店美味しいんだ (女性発話)	男	20	東京	自分もおいしいと思っている	相手においしいと薦めている	わからない	相手は美味しいと聞いていたが、自分は同意できない
	男	40	千葉	甘えているような、誰かに賛同してもらいたい、同じ気持ちに乗ってもらいたいようなコメント	甘えるように旦那さんに「あそこ行ったおいしいお店だったから食べに行こうよ」と暗示をかけているよう	わからない 読み取れない	ちょっとサブライズ的な、意外とおもしろいんだ、意外性を持ったコメント
	男	20	千葉	「あの店は美味しい」という情報を相手に伝えようとしている。①とほぼ同じだが、①の方がデートに誘う感はあるかも。	「あの店は美味しい」という情報を相手に伝えようとしている(あわよくば、それによって相手をデートに誘おうとしている)。	分からない。「あの店は美味しい」という情報を伝えようとしている感じがするが、私はこのようなイントネーションで発音しないし、他の人がこのようなイントネーションで発音することを聞いたこと	話し手が「あの店は美味しい」という情報を(相手から聞くなどして)得て、理解し、「なるほど、へー」という感じを表現している。
	男	40	東京	美味しいんだよと気持ちを伝えている	誰かに言われて納得している	疑い 誰かに言われて、「あーおいしいんだ」と言っている	言われてちょっと疑っている
	男	50	東京	不自然	告白、相手の知らない情報を伝えている	不自然	自分の意見を強調している
	男	40	東京	行ったことがあって美味しいということアピールしている	食べたことがあって、美味しいと相手に言っている	不自然	言われたことに納得
	男	30	千葉	不自然	自分の経験。あの店は美味しかったことを親しい人に伝えている	不自然	あの店がおいしいということを他の人から聞いてちょっと驚いている。自分はそのではないと想像していた。

男	40	埼玉	わからない	女性が、同年代で同性の友達に、おいしい店として紹介している。	自分ではおいしいと思っていた店について、他の人が美味しくないと聞いて、自分では美味しいと思っているということを伝えている。	女性が、自分ではおしくないと思っていたお店のことについて、おいしいと他の人から聞いてその人に対して話している。	
男	50	東京	自分の思いを相手に伝えたい感じ。	自信のある感じ。	相手に情報を知らせる感じ。	知らなかった感じ。	
男	40	神奈川	わからない。(会話の中で強調しようとしているように聞こえる)	相手にに対して、自分の経験を伝えようとしている。	相手にに対して、自分の経験を伝えようとして、相手の次の発言を促している。	相手の言ったことを確認しようとしている。	
男	10	神奈川	不自然	自分が実際に行って美味しいと知っていて、相手に伝えている	不自然	人においしいと聞いて、あそうなんだという感じ	
男	20	東京	美味しいことを伝えている	美味しいことを伝えている	不自然	美味しいことにへーという感じ	
男	30	東京	かなり不自然	誰かにおいしいことを教えている	かなり不自然	へえーと言う意図を伴うひとりごとみたいな感じ	
男	10	埼玉	美味しいと報告	美味しいと報告	不自然	自然 惜しいと思っていなかったの、ビックリしている	
男	10	東京	不自然	事実を話している	不自然	へえーと言う	
女	10	千葉	分からない。方言にも聞こえる。	かわいい感じで相手に情報を伝える。。	思い浮かべながら相手に自分の意見を伝えている。	相手から「おいしいよ」と知らない情報を聞いた時の受け答え。	
女	50	東京	疑問を含んでいる	誰かに伝えている	こういう言い方はしない	美味しいと認識した	
女	30	千葉	相手のおいしいという意見に納得できない	わからない	相手に、「その店がおいしいから(例えば一緒にいこう)」と伝えたい	相手(またはだれか)から、美味しいと聞き、「そうなのか」という感じ	
女	50	東京	「おいしいの?」と疑問を持ちながら訪ねている	自分で納得して相手に伝えている「おいしいのよ」って	方言っぽい	誰かから美味しいと聞いて、「いいお店なんだ、そうなんだ」と納得	
女	30	神奈川	相手の言ったことを納得している	食べたときのことを思い出しながら回想している	相手から言われて納得している	相手の言ったことを受けて納得している	
女	40	東京	分からない	友達とお茶していて、行くことを進めている	食べたときの思い出に何かしみじみした感じが加わっている	美味しいと聞いて繰り返す	
女	40	東京	方言?(自分が思っている)	自分がそう思っている	方言?(相手がそう思っていることに対して、繰り返している)	自分は知らなくて、相手にそう言われ詰まっている	
女	40	東京	分からない	自分がおいしいと思っている	自分がおいしいと思っている	美味しいと言われて疑問に思った	
女	30	神奈川	わからない	発話者が、好んで良く行くお店で、どうして良く行くか、その理由を相手に伝えている言葉。	あるお店の味を、相手がおいしいと聞いた時に、にわかに信じられず言った言葉。	発話者が気になっているお店を話し相手から知っていて、おいしいという言葉に納得し、行ってみようと思った時の言葉	
女	40	神奈川	わからない	店の近くを通った時に、いっしょにいた友達に教えている	わからない	誰かから、あの店がおいしいということを知っていて「(自分は言ったことがなく)そうなんだ」ともいながら話す	
女	50	東京	わからない(相手に言っているか、聞いたのかわからない)	自分がおいしいと思っている	わからない 違和感もある	へえ~おいしいんだと言っている(相手から聞いて)	
女	10	東京	伝えている	伝えている	美味しいよと言われて、それに対する返答	美味しいないだろうと思いつつ相手の話を聞いた	
女	20	神奈川	話手に伝えているが、聞き手に薦めている感じがする	話し手が言ったことがあって、相手に伝えている	わからない どちらかという話し手がおいしいということを知っている感じでも、聞き返すかも	相手に聞いて、驚いている「おいしいんだよ」初めて知ったという感じ	
女	20	神奈川	食べたことがあって、美味しいことを伝えている	美味しいことを伝えている	使わない	わからない	
女	20	埼玉	自分があの店に実際に行って、意見を伝えている(アクセントより口だけ感)	自分があの店に実際に行って、意見を伝えている	自分もよく使う 自分がおいしいことを言っていて、その他鬼はなしが続く「今日バイトなんだあ。めっちゃめんどくさいわあ」みたいなここで話が終わると「え?で?」と言	人から言われて認識	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
それは嫌なんだ (女性発話)	男	40	千葉	自分の想いを伝える	過去のことを思い出しながら話す	相手の言ったことを肯定する	相手の言ったことを疑問に思っている
	男	50	東京	自分が嫌だと思っている	相手の気持ちを代弁している	嫌だからやめてほしいと言っている	嫌だと考えている
	男	30	千葉	わからない	仲のいい友達に話している	相手に嫌だと言いつける	深刻に言われて
	男	40	東京	自分が嫌だと言っている「それだけは嫌だ」	「私は嫌だよ」と伝えている	「あなたはそれが嫌なのね」と納得	選択肢がいくつもある中の「それが嫌なんだ」と納得「それは嫌なんだね」という感じ
	男	60	東京	不自然	自分の気持ちを告白	不自然	自分の気持ちも言うけど、相手の言ったことを確認する気持ちもある
	男	40	東京	不自然	自分が嫌だということをアピールしている	相手を納得させている	相手が嫌だとわかった
	男	40	埼玉	わからない	話し相手が提案してくれたことに対して、自分はやりたくないということを相手に気分を害さないように、でもはっきりと伝えている。	わからない	話し相手が嫌だと思っていることに対して、多少意外に思いつつも気持ちが理解できるような気がして相づちをしている。
	男	40	神奈川	(単独だと多少不自然だが、上記②と同じ。)	自分がある事柄が嫌であることを述べている。	自分がある事柄が嫌であることを述べ、次の発言を準備している。また、相	相手の発話内容を軽く再確認している。
	男	20	神奈川	不自然	嫌だと言っているけど、軽い感じ	不自然	相手が嫌だと言っていることを知って、分かったという感じ
	男	10	東京	不自然	事実を伝えている	不自然	相手が嫌だと言った後にそれを繰り返す
	男	10	東京	不自然	相手が嫌だと言ったことにそうなんだと肯定	不自然	相手が嫌だと言ったことにそうなんだと受け止めた感じ
	男	30	東京	不自然	軽く嫌だと伝えている	不自然	相手がいやがっているのを見て、ああそうなんだね、と確認
	男	10	埼玉	嫌だと言っている	嫌だと言っている	不自然	納得している
	男	20	東京	不自然	自分の意見を言っている	不自然	納得している
	男	20	東京	不自然	不自然	変	嫌と言われてああそうなんだみたいな感じ
	女	40	東京	嫌な気持ちをできる限りソフトに、でも確実に相手に伝えたい	嫌だと言っているがあまり嫌そうではない	わからない	友達の話聞いて同調している
	女	10	千葉	相手に嫌だと伝えている	過去のことを思い出して話す	相手に嫌だと伝えている	相手に言われた
	女	40	東京	自分が嫌だと話している	嫌だと呟いている	わからない	深刻な状況を聞いたことを示す
	女	30	千葉	友達どうして雑談をしているときにあることについて文句を言っている	友達にどうしてもではないけど避けたいことがある	友達かもっと親しい人に、できるだけそれを避けたいから、何か他の案を考えてほしいと言っている	真剣な場面で、どうしてもそれは避けたいと思っている
	女	50	東京	本人が嫌だと思っている	言っている人が嫌だという気持ちを言っている	言っている人が嫌だとしたら、「嫌」を強調している感じ	相手のことを聞いている感じ

女	50	東京	優しい言い方だが、嫌だという意味表示をしている	優しい言い方だが、嫌だという意味表示をしている	聞いているような、自分の意見であるようなあいまいな言い方	嫌なんだね、ということを確認している	
女	30	千葉	すごく嫌だという感じを伝えている	自分が嫌だということを伝えている	わからない	(アクセントと同じ)自分が嫌だということ伝えて	
女	40	東京	わからない	いくつか選択肢がある中で、それだけが嫌だと伝えている言葉。	不自然	いくつかの項目の中で、相手が嫌がっている物を確認しながら、発話者も理解した(へえと思う)時に使う言葉。	
女	40	東京	相手から「こうしたらいい」などの意見を言われて、自分がそれを否定する(したくない)時に話す(少し冗談めかしてい	相手から「こうしたらいい」などの意見を言われて、自分がそれを否定する(したくない)時に話す	わからない	相手が「嫌だ」と言ったことに対して、相手の言葉を繰り返す	
女	50	東京	わからない	自分が嫌だと言っている	不自然	相手が嫌なんだと納得	
女	10	東京	自分が嫌だと思っている	自分が嫌だと思っている	相手が嫌だと言っているのをちょっと意外だと思いつつ相づちを打っている	相手が嫌だと言っているのを聞いて、相づちを打っている	
女	20	神奈川	自分が嫌だということを伝えている(アクセントより親しい相手に言っているみ	話手に自分の気持ちを伝えている	自分が嫌なのか相手が嫌だと思っていることを聞き返している	聞き手が嫌だと思っていることを確認している	
女	20	神奈川	わからない	自分が嫌なことをされてそれは嫌だと伝えている	わからない	自分以外の人の嫌なことを理解した	
女	20	埼玉	相手云々じゃなくて、「嫌いな食べ物なんだ」みたいな、2人がいたら、そこ間の問題ではなく、個人的な問題 相手には関係ないことで、そんな大したことじゃない嫌	嫌なもの事実だし、嫌だけど、感情をストレートに出さないで、相手に配慮して伝えている	自分が嫌で、相手に強めに出ないでちょっと優しく目に行っている(アクセントに似ている)	相手が嫌なことを認識した	
女	30	神奈川	自分が嫌だと思っていることを言っているけど、あまり嫌に感じない	自分が嫌だと伝えているがあまり嫌そうでない	自分が嫌なことがあって、それをきつうでない	相手が嫌だと言ってきて、それが分かった	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
そうなんだ	男	20	東京	相手に肯定(うわべだけ)	肯定	共感	疑問を持ちながらも一時的に同意
(女性発話)	男	40	千葉	変、おかしいイントネーション	相手の理解に対して認識するコメント、肯定	共感している	続きがありそうな共感性 話し手がそのあと何かアイデアを出そう ただの聞き手ではなく、そこから情報発信しそうな感じ
	男	20	千葉	相手が自分に何かを言ってきた、それに対して疑問とともに確認している。	自分が相手に何かを告白し、相手が「え、そうなの!？」と言ってきたことに対する反応。	分からない。相づちをうっているように理解可能であるが、イントネーションに違和感を感じる。	相手の言ったことなどに対して、情報を受け取ったことを表明している。相づちをうっている。
	男	10	千葉	(アクセントと同義)相手に聞かれたことに対する肯定	相手に聞かれたことに対する肯定	わからない	相手の言ったことに対するあいづち
	男	40	東京	「そういうことか」みたいな感じ	同意 肯定	聞いてへえ〜みたいな感じ	納得「あなたが言っていることを理解しました」
	男	50	東京	不自然	自分の意見を相手に同意を求めていると、相手の言っていることに納得しているともとれる	自分の言ったことを相手が同意して、再確認(肯定)	相手の言ったことを自分が了解して、肯定
	男	40	東京	強くアピールしている	相手にアピールしている	不自然	相手が言ったことに納得
	男	40	埼玉	わからない	自分の話していることを、話し相手が聞いてくれ、それを肯定的に感じてくれたことを、自分で再度確認して話し相手に伝えている。	わからない	話し相手が話してくれたことから、自分で思っていたこととは違うということがわかり、それを話し相手につたえている。
	男	50	東京	相手の言葉を肯定している感じ。	軽く肯定している感じ。	相手の話に相づちを打っている感じ。	納得している感じ
	男	40	神奈川	わからない。(相手の発言を肯定し、確認しているようにも聞こえる)	相手の発言を肯定している。(相づち)	自分の発言を確認(再度繰り返し)している。	相手の発言を軽く肯定している。(相づち)
	男	30	東京	不自然	不自然	何かを聞いて「そうなんだ」と言っている	何かを聞いて「そうなんだ」とても自然
	男	30	千葉	不自然	相手がそうなの?と聞いて、そうなんだよ、と肯定している	かなり不自然	普通にわかったの「そうなんだ」
	男	10	埼玉	不自然	会ったと報告	不自然	会ったんだと確認
	男	10	東京	不自然	不自然	不自然	納得いった
	男	10	東京	不自然	事実を肯定している	不自然	納得
	女	60	東京	疑問を含んでいる	誰かにひっそりと伝えている	こういう言い方はしない	納得。初めて認識した
	女	30	千葉	相手が言ったことについて本当かと疑っている	相手が言ったことを肯定する(認める)	わからない	相手が言ったことへのあいづち
	女	50	東京	聞き返し	相手に聞かれて肯定	わからない	納得
	女	50	東京	同意も入っているけど、ちょっと疑問も入っている	自分の意見 自分で自分の意見に納得	方言っぽい	相手の意見に同意する「わかりました」
	女	40	東京	「そうなのかな」というような、疑問がありつつ納得してふりをしているが引っかかっている	独り言のような聞こえる 会話が一通り終わって、間があってからポツリ	自分で何かを聞いて自分の中で消化している「そういうことね」と納得している	「あ、そういうことね」と理解していて、何も疑問を持っていない
	女	40	東京	それで、のニュアンス これから本題に入る(肯定?)	好意的なあいづちとして	好意的、あいづちとして	本当にそうなのか疑問に思っている
	女	40	東京	方言(感情が分からない)	自分が「そうだ」と思っていて、相手に伝えている	方言(相手に頷いている)	相手に相づちを打っている
	女	30	東京	自分が主張したことに相手が反応し、それに対して改めて「そうなんですよ」と肯定している	自分が主張して事に相手が反応し、それに対して改めて「そうなんですよ」と肯定している	相手が言ったことに対して、相手の気持ちの寄り添っている感じ	(上下と同じ)相手が言ったことに対して、相手の気持ちに寄り添っている感じ
	女	30	神奈川	わからない	相手に話した事を最後におさらいのために、そういう事なんだよ、と締める言	不自然	手の言葉を理解(納得)した時の言葉。
	女	40	神奈川	わからない	相手に、何かを聞かれて、その通りだという意味で答える	わからない	何かの情報を教えられて、それを知らなかった場合に発する
	女	50	東京	どっかわからない 違和感はない	自分のことを言っている 自分のことを言って、相手がそれを言っている通り、といっている	わからない	相手に対してそうなんだよね、と言っている 相手の言ったことを受けている
	女	10	東京	相手が自分に何かを聞いてきて、それに対して肯定している	相手から何かを聞かれて肯定している	あいづち	あいづち
	女	10	千葉	相手から聞かれて肯定	相手に聞かれて肯定「そうですよ」	分からない(意図が読めない)	相手の話していることを聞いて受け入れた 納得
	女	20	神奈川	分からない	事実を言われて、肯定している「そうだよ」	分からない	分かったと言っている
	女	20	埼玉	相手から「〜の?」と聞かれて肯定	聞かれて肯定	不自然	相手の話にあいづち
	女	20	神奈川	相手に肯定	自分の言ったことに対して、相手の反応を肯定	あまり使わない不自然	相手の言っていることに納得

刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
彼に会ったんだ (男性発話)	男	40	埼玉	不自然	発話者は自分が彼に会ったことを話し相手は知らないだろうと思いつつ、彼に会ったことを話し相手に伝えた。	不自然	話し手が彼に会ったことを知って、発話者は話し手が彼に会うとは思っていなかったの、その感想を伝え
	男	30	埼玉	不自然	明言。報告	不自然	過去の出来事という意図と彼と会ってしまっがっかりした意図
	男	30	埼玉	不自然	相手へ報告	不自然	確認(相手が"彼"に会った事実を知っていないながら、確認するようなニュアンス)
	男	20	埼玉	疑問形	肯定	不自然	納得
	男	20	東京	相手に彼に会ったことをはっきり伝えている感じ。	相手に彼に会ったことをはっきり伝えている感じ。	不自然	近い過去に会ったことを相手に話している感じ。
	男	50	千葉	不自然	相手が話の続きをしようとしている。	相手が話の続きをしようとしている。	相手の話を理解した。
	男	40	神奈川	イントネーションが不自然な気がします。	事実を軽く伝えている。	事実を軽く伝えている。(とても近い関係の相手に対し)	事実を伝えている。
	男	20	千葉	話の導入な感じ	あった事実を紹介してるだけ	わからない	会ったと聞いた
	男	10	埼玉	自分が彼に会ったことを強調	自分が会ったことを軽く強調する	会話の中で使うのは不自然だが、相手が会ったことにほおっという感じ(自分が会ったけど、あまり聞かない言方 女の人が言うんは不自然ではな)	相手が会ったことを聞いて理解
	男	10	神奈川	会ったんだと言って、その後話がつながりそう	ひとりごとっぽい 甘えた言方(男は使わない)	不自然	会ってほしくなかったのに、相手が会ったと聞いた。
	男	40	神奈川	相手が彼に会った、という話を受けて確認する意味で尋ねている	少し得意げな気持ちで相手に事実を伝えている	不自然	淡々と事実を伝えている
	男	40	千葉	自分の経験を相手に伝えている。	自分の経験を軽く相手に伝えている。	不自然	相手の経験を聞いて受け入れている。
	男	50	東京	不自然	報告	不自然	納得、理解
	男	10	千葉	わからない	久しぶりに会った感じ。	かなり昔のことを懐かしんでいる感じ。	ついさっき起こったことを話している。
	男	20	東京	不自然	彼に会ったことを伝えている	不自然	相手が会ったことに対して、へえ~そんなんだという感じ
	女	50	東京	わからない	会ったということを言っている	違和感	相手が会ったんだよね、ということをもう一度確認している
	女	40	神奈川	不自然	上昇下降と同じ印象だが、会ったことだけを伝えて終わり	自分が会ったことを相手に伝えてる、そのあとに話が続く感じ	相手が彼に会ったことの確認
	女	30	埼玉	会ったの?という疑問調	不自然(本を読んでいる感じ)	彼と会ったということを強調したい感じ	不自然(本を読んでいる感じ)
	女	30	埼玉	彼に会ったかどうかを他者に尋ねている	棒読み。自分が彼に会ったことを他者に伝えている	不自然	自分が彼に会ったことを他者に伝えている
	女	50	東京	質問	わからない	自分が会った、と言っている	あいづち
	女	40	神奈川	不自然	相手に対して「会った」と言う事実を伝える	相手に「彼に会った」と言う事実を伝え、その後会話が続く感じ	相手が「会った」と言うことに対してそのまま繰り返す
	女	20	千葉	相手に質問している。	自分が彼に会ったということだけを相手に伝えている。	自分が彼に会って、そのあとどうい話をしたか続きそう。相手に伝えている話の途中。	相手が会ったんだと言っている。
	女	10	千葉	軽い疑問にも聞こえるが、確認にも聞こえる	報告	方言(主張っぽい)	相手が会ったことを理解
	女	30	埼玉	相手に彼に会ったということを報告している(その後の彼とのやり取り等話してくれそう)	相手に彼に会ったということを報告している	わからない	相手から彼に会ったことを聞き、あいづちで復唱している
	女	20	東京	わからない	彼にあって、その話を続けようとしている	わからない	相手が彼に会ったことに対して驚いている
	女	40	東京	相手が彼に会ったのかききたい。	自分が彼に会ったことを伝えている。	相手が彼に会ったらしを確認している。	相手が彼に会ったのを知っていてあらかじめそれを確認している。
	女	20	東京	不自然	自分が彼に会ったことを人に伝える。	自分が彼に会ったことを人に伝える(下降より少しなまりがある)。	自分が彼に会ったことを人に伝える。もしくは人が彼に会ったことを聞いて、リピートしている。
	女	30	埼玉	わからない	自分が彼と会ったことを強く主張している。	自分が彼と会ったことを聞き手に説明している。	自分が彼と会った。
	女	40	千葉	不自然	不自然	不自然	過去の事実を伝えている。
	女	20	神奈川	不自然	会ったことを伝える	会ったことを伝えてそのあと何か話をしそう	相手に会ったと聞いて繰り返す感じ
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
あの店美味しいんだ (男性発話)	男	40	埼玉	不自然	発話者はあの店が美味しいことを話し相手は知らないだろうと思いつつ、彼に会ったことを話し相手に伝えた。	不自然	話し手があの店が美味しいと言っているのを聞いて、発話者はあの店が美味しいかどうか知らなかったの、意外だという気持ちを話し相手に伝える
	男	30	埼玉	不自然	良い方の報告	不自然	美味しいと聞いて分かったと言っている
	男	30	埼玉	不自然	相手に自分の意見を伝達	不自然	相手の意見に対する理解
	男	20	埼玉	疑問形	肯定	わからない	納得
	男	20	東京	おいしかったことを感情をこめて相手に伝えている感じ。	おいしいことを相手に勧めている感じ。	不自然	おいしかったことを相手に伝えている感じ。
	男	50	千葉	アクセントに対し、続きの話をしたい意志があるが、内容に不満がある状態。	自分の気持ちを伝えようとしている。	アクセントに対し、続きの話をしたい意志がある。	相手に確認を求めている。
	男	40	神奈川	わからない	会話の中で相手に情報を伝えている。	会話の中で相手に情報を伝えている。(アクセントよりは軽い調子で)	会話の中で相手に情報を伝えている。(アクセントよりは強い調子で)
	男	20	千葉	わからない	人に押し付けられない感じの感想	わからない	相手の発話に驚き
	男	10	埼玉	不自然	幼い印象 自分の気持ちを言っている	不自然	相手がおいしいと言ったことに関して、へえ~と自分の中で再確認
	男	10	神奈川	美味しいと言って、その後一緒に行かない?と誘いそう	自分が言ったことを伝えようとしている	会話がつながりそうだけど、この言い方は聞いたことがない	自分は美味しくないと考えていたけど、他の人がおいしいと言ったので驚いて
	男	40	神奈川	疑問に思っている。問いかけている	相手にも気に入ってもらいたいと考えている	この一文をつなぎに使っている(本題はこの後にある)	納得している
	男	40	千葉	不自然	自分の言ったことを念押ししている。	相手の言ったことを確認している。	相手の言ったことを初めて聞いた感じ。
	男	50	東京	不自然	主張	不自然	納得
	男	10	千葉	わからない	人に伝えたい。	懐かしむ感じ。	人が言ったことに驚いている感じ。
	男	10	東京	不自然	不自然	不自然	事実を述べている

女	50	東京	方言？	自分が言って美味しいと言っている	方言	相手がおいしいといったことに対して いっている	
女	40	神奈川	不自然	自分が知っているお店をおいしいと教 えている	①と似た感じだが、自分が知っている お店をおいしいと教えてさらにどんな ふうか話が続きそうな印象	相手を知っているお店が美味しいこと を確認している感じ	
女	30	埼玉	上下と大体同じ様な感じですが、おう む返ししながら、そうは思っていないと あの店がおいしいかどうかを他者に聞 いている	道を通り過ぎながらなんとなく思い出し たので言ってみた感じ	あの店がおいしいと相手に言われてお うむ返ししている	不自然 本を読んでいる感じ(棒読み)	
女	30	埼玉	不自然	不自然	自分が感じた気持ちではなく、他者か ら聞いたことを伝えているように聞こえ	自分が実際に行って感じたことを言っ ている	
女	50	東京	あいづち	美味しいと言っている	あいづち	わからない	
女	40	神奈川	わからない	お店の前を通っている時に、一緒にい た人に教える。	わからない	相手に「美味しいよ」と教えてもらって、 「そうなんだ。自分は知らなかった」と	
女	20	千葉	「おいしいの？」ならわかるが、言葉が 「だ？」で終わり、よくわからない。方言	相手にそれだけを伝えている。	相手に伝えて、それでねと話しが続き そう。	相手から話を聞いて、へえおいしいん だと自分が知って応答している。	
女	10	千葉	意図が読めない	主張	方言	人においしいと聞かされてそれに対す る返答	
女	30	埼玉	意見を伝えている	思い出したような様子で伝えている	わからない	相手に対するあいづち	
女	20	東京	わからない	この言葉のあとに話を続けようとしてい る	わからない	あの店がおいしいことに感心している	
女	40	東京	相手にあの店が美味しいのか尋ねて いる。	自分があの店美味しいことを知っている のを伝えている。	相手があのお店のことを知っていて、お いしいと言っていることをそうなんだ、 と確認している。	相手があのお店のことを知っていて、お いしいと言っていることをそうなんだ、 と確認している。	
女	20	東京	不自然	不自然	わからない	事実を知らなくて、人から聞いてリ ビートして認識している。	
女	30	埼玉	わからない	相手にお店が美味しかったことを楽しく 伝えている。	わからない	自分があのお店が美味しかったかを 知らなかったため「へー」という意味を 含めている。	
女	40	千葉	不自然	不自然	不自然	自分が行ったことのない店に対して人 が美味しいというのを聞いて、あ そう なんだって感じている。	
女	20	神奈川	不自然	美味しいと教えている	美味しいと言っている そのあと何か 話が続きそう	美味しいと聞いて繰り返す感じ	
刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
それは嫌なんだ (男性発話)	男	40	埼玉	不自然	話し相手の提案について発話者が気 に入らないので、そのことを話し相手 に伝えた	不自然	発話者が提案した内容について話し相 手が気に入らない様子だったので、発 話者は話し相手が気に入っていないこ とを認めた。
	男	30	埼玉	不自然	強調	不自然	報告、明言
	男	30	埼玉	不自然	相手に自分の意見を伝達	不自然	肯定(相手の意見を聞き入れるような ニュアンス)
	男	20	埼玉	質問形	強い肯定	わからない	相手の気持ちを理解
	男	20	東京	不自然	相手の発話に対して、ふざけて返して いる感じ。	不自然	相手に提案に自分の意志で拒絶して いる感じ。
	男	50	千葉	相手にやって欲しい意図がある状態 の確認。	自分の気持ちをストレートに出してい る。	面倒くさい気持ちがある。(頼まれたら やっても良い)	相手の気持ちを理解した状態。
	男	40	神奈川	不自然	上下よりは弱い調子で主張している。	強く主張している(イントネーションが少 し不自然な気もします)。	アクセントよりさらに弱い調子で主張 している。
	男	20	千葉	わからない	軽い拒否	わからない	相手の感想を聞いてそれに納得してい る
	男	10	埼玉	主張だと思うが、アクセントよりはよく ないが上下よりはまし	あまり好まれないけど上下よりはいい 主張	主張 会話の中で使うのはよくない 使うと会話の流れが不穏になる	相手の気持ちを理解した 自分の気持ちだとするとひとりごと
	男	10	神奈川	嫌だと言っていてまだ話がつながりそ う	甘えている印象 相手に嫌だとわかっ てほしい まだ話がつながりそう	意味が分からない	ひとりごとっぽく言っている
	男	40	神奈川	相手が嫌だと思っている前提で問い かけている	「初めて話すけど」というニュアンス を含んで、嫌だということを伝えたい	不自然	淡々と事実を伝えている
	男	40	千葉	不自然	自分の思いを軽く相手に伝えている。	不自然	相手の気持ちを理解している。
	男	50	東京	不自然	強く主張	不自然	納得
	男	10	千葉	わからない	率直な感想。	わからない	相手がいやだと思っている。
	男	10	東京	不自然	不自然	不自然	事実を示している
	女	50	東京	もう一回聞き直すかも 何が言いた いの？つまりわからない	嫌なんだよ、と自分の意見を言ってい る	違和感有	相手が嫌なのね、ということが分かっ た
	女	40	神奈川	不自然に聞こえる「それは」のイント ネーションが変わると相手に尋ねてい るように聞こえると思う	単純に自分が嫌だと断言している	相手に自分が嫌だということを伝えたい ときのはじめの部分という感じ後ろ に説明が続きそう	相手が嫌だということを確認している、 相づち的な印象
	女	30	埼玉	嫌なの？という疑問調	少しだけ嫌なんだよねーと思っている 感じ	嫌だと念押ししている	少しだけ嫌なんだよねーと思ってい る
	女	30	埼玉	嫌かどうかを他者に尋ねている	棒読み。自分が嫌だということを他者 に伝えているように聞こえる。	不自然	自分が嫌だということを他者に伝えて いる
	女	50	東京	わからない	あいづち	嫌だ、と言っている	あいづち
	女	40	神奈川	不自然	不自然	不自然	相手が「嫌」と言ったことをそのまま繰 り返す
	女	20	千葉	相手にそれは嫌なんだね？と質問し ている。	相手に上昇下降よりも明るく伝えてい る。	相手に訴えている。	相手が嫌なんだねということを改めて 相手に言っている。
	女	10	千葉	意図が読めない	主張(強い主張)	不自然(方言)	独り言のように言っている
	女	30	埼玉	相手に嫌なんだと伝え理解を得ようと している	相手に嫌なんだと伝えたことで自己完 結	わからない	今実際に起きていることに対し嫌なん だと伝え、すぐやめて欲しいと言う意味 が含まれている
	女	20	東京	わからない	何かに対して言い切っている	わかりづらい	相手が嫌だと聞いてすこしさびしそ う
	女	40	東京	相手に嫌なんだね？と確認したい。	自分が嫌だと思っていることを伝えたい。	「嫌だ」と思っていることを相手に確認 したい。	自然な感じで相手に嫌なんだね？と確 認したい。
	女	20	東京	不自然	不自然	相手が嫌であるという認識を受け止め 繰り返している。	自分の嫌という認識を伝える。
女	30	埼玉	相手に嫌なの？って聞いている。	自分が嫌だと言っている。	小さい子が嫌だと言っていることに対 して嫌なんだね、と優しく復唱。	相手が嫌だと言っていることに対し て「へー」という意味を込めて復唱。	
女	40	千葉	不自然	不自然	不自然	納得	
女	20	神奈川	わからない	嫌だと軽く言っている	嫌だと言っている	あーそうかと納得している	

刺激文	性別	年代	出身地	疑問上昇調	アクセント上昇調	上昇下降調	下降調
そうなんだ (男性発話)	男	40	埼玉	不自然	発話者が話した内容を話し相手が知らなかった様子だったので、発話者は話した内容が本当のことだと伝えた。	不自然	話し相手が話してくれた内容を発話者は知らなかったので、話し相手に対して自分が知らなかったということを伝え
	男	30	埼玉	不自然	興味のある同調	不自然	あまり興味のない同調
	男	30	埼玉	不自然	相手に自分の意見を伝達	不自然	相手の意見に対する理解
	男	20	埼玉	疑問形	強い肯定	不自然	納得
	男	20	東京	相手の言っていることを疑っている感じ。	ちょっと相手の言っていることに冷めて聞いている感じ。	不自然	相手の言っていることに同意している感じ。
	男	50	千葉	相手の話に疑問を感じている。	自分の気持ちをストレートに出した状態。	不自然	相手の話に同意した状態。
	男	40	神奈川	不自然	相手の質問に対し「その通りだ」と肯定している。	アクセントよりは軽い調子で肯定している。	相手の意見に対して相槌をうっている。
	男	20	千葉	わからない	明るく肯定してる	わからない	単なる相槌
	男	10	埼玉	不自然	会話で使うとしたら相手の話に関してあまり理解せず、適当に話を着る時に使う(表現としては不自然)	不自然	相手の話を理解(とても自然)
	男	10	神奈川	わからない	甘えている 自分が話したことを相手に分かってもらおうとしている	次に話しがつながりそう	とても自然 相手が言ったことにあいづち
	男	40	神奈川	相手の話を受けて確認している	(別の人が話す)話を受けて肯定している	不自然	相手の話を受けて納得した
	男	40	千葉	不自然	不自然	相手の言ったことを再確認している。	何も感情なく相手の言ったことを受け入れている。
	男	50	東京	不自然	肯定	不自然	肯定
	男	10	千葉	わからない	ちょっとハイテンションでそうだよと言っている。	わからない	初めて知った感じ。
	男	10	東京	不自然	前に言った話題について肯定	不自然	納得
	女	50	東京	わからない 違和感もある	自分がそうだよと言っている(意見を言っている)	相手がそう思ってるよね、ということをもう一回言っている	「ああ、そうなんだね」と言っている
	女	40	神奈川	不自然	自分のことを相手に伝えている	自分のことを相手に伝えるときのはじめ、「それで」とさらに話を続けたい感じ	相手の話に同意、相づち的な印象
	女	30	埼玉	そうなんだと思って、言っている最中にやっぱり違うんじゃないかと思直した	そうなんだということを強調している	相手が話していることに同意しつつ、ふーんそうなのかあと思ってる感じ	本を読んでいる感じ(棒読み)
	女	30	埼玉	不自然	自分の意見を相手に伝えようとしている	不自然	他者の話をきいて相づちをうっている
	女	50	東京	わからない	肯定	あいづち	あいづち
	女	40	神奈川	わからない	相手の質問に対して肯定の意味で答える(例えば(1)③や(2)①に対して)。	わからない	相手から教えてもらった情報について「自分は知らなかった」という意味の相
	女	20	千葉	相手の話を聞いて、受け止めているが、まだ話の途中で続きそう。自分は「でも・・・」と相手にまだ聞きたいことが	相手に質問されて、そうなんだと応答している。	相手に質問されて、応答しているが、まだ話の途中で続きそう。追加してまだ自分から言いたいことがありそう。	相手の話を聞いて、受け止めている。
	女	10	千葉	意図が読めない	「～だったんだよね」と言われて肯定	方言	自分の意見ではなく、相手の意見を聞いたという感じ
	女	30	埼玉	相手に対し、納得しているようなニュアンスのあいづち	諦めの気持ちで伝えている	わからない	腑に落ちたり、納得、理解するようなニュアンス
	女	20	東京	わからない	何かいったことに対する相手の驚きを肯定している	わからない	すこし驚いたような、さめたような様子
	女	40	東京	相手にそうであることを尋ねている。	自分がそうであることを伝えている。	相手にそうであることを尋ねている。	相手にそうであることを確認している。
	女	20	東京	不自然	わからない	不自然	認識して受け止めている。
	女	30	埼玉	わからない	強い主張。	わからない	納得。
	女	40	千葉	自分は疑問に思っている感じ。	自分の言ったことに対して念を押している。	不自然	相手の考えを受け止めている。
	女	20	神奈川	不自然	相手にそうだよと言っている	相手にそうだよと言っている その後話が続きそう	相手から何かを聞いてへえーという感じ

付録5 第7章 「んだよね」調査Ⅱ同意書

同意書

本調査者(市村葉子、宇都木昭)は日本語話者がどのように会話を進めていくかということに興味があり、現在日本語で行われる会話を収集しています。今回いただいたデータは厳重に管理し、我々の研究にのみ使わせていただき、他の目的には一切使用しません。報告として、発表や論文に会話の一部を呈示することはありますが、その際は名前を公表することはありません。

名古屋大学大学院生 市村葉子
名古屋大学 准教授 宇都木昭

上記の趣旨を理解し、データ収集に協力します。

日付： 年 月 日

お名前：

差支えない程度に以下のアンケートにお答えください。

質問1. 年齢、性別

年齢：10代 20代 30代 40代 50代 60代

性別：女性 男性

質問2. 現在の職業（身分）

質問3. 出身地及び現在の居住地

出身地（ ）

居住地（ ） 居住期間（ ）

ご記入ありがとうございました。

付録5 第7章 「んだよね」調査Ⅱ同意書

同意書

本調査者(市村葉子、宇都木昭)は日本語話者がどのように会話を進めていくかということに興味があり、現在日本語で行われる会話を収集しています。今回いただいたデータは厳重に管理し、我々の研究にのみ使わせていただき、他の目的には一切使用しません。報告として、発表や論文に会話の一部を呈示することはありますが、その際は名前を公表することはありません。

名古屋大学大学院生 市村葉子
名古屋大学 准教授 宇都木昭

上記の趣旨を理解し、データ収集に協力します。

日付： 年 月 日

お名前：

差支えない程度に以下のアンケートにお答えください。

質問1. 年齢、性別

年齢：10代 20代 30代 40代 50代 60代

性別：女性 男性

質問2. 現在の職業（身分）

質問3. 出身地及び現在の居住地

出身地（ ）

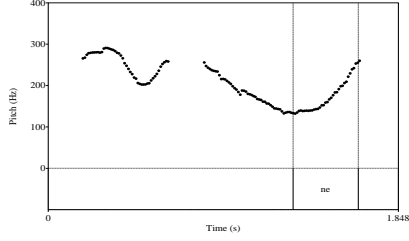
居住地（ ） 居住期間（ ）

ご記入ありがとうございました。

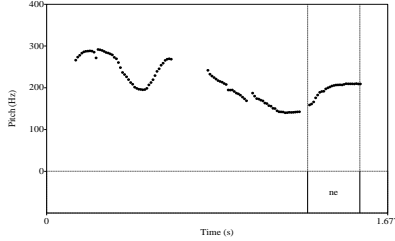
付録6-1 第7章 調査Ⅱで使用した刺激音(女性)

彼に会ったんだよね

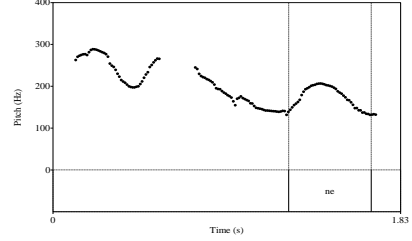
疑問上昇調



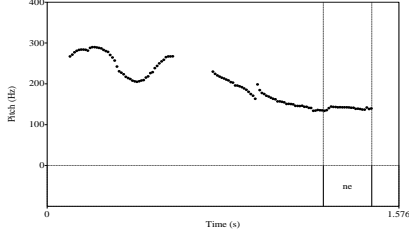
アクセント上昇調



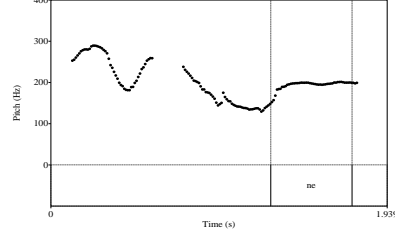
上昇下降調



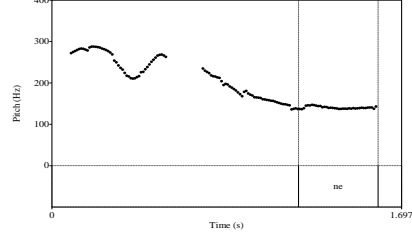
平坦調



アクセント上昇調長呼

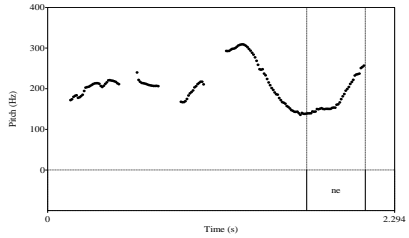


平坦調長呼

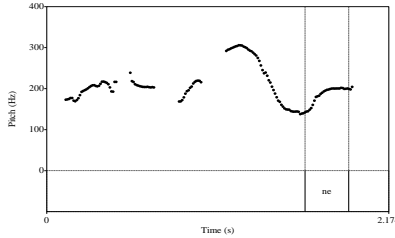


あの店おいしいんだよね

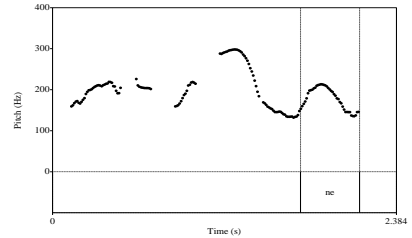
疑問上昇調



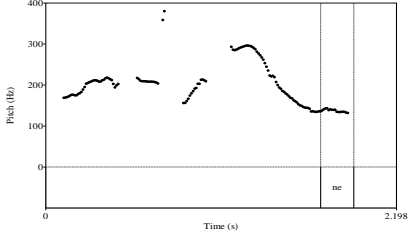
アクセント上昇調



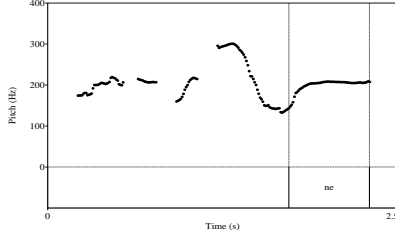
上昇下降調



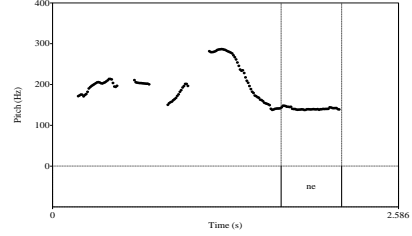
平坦調



アクセント上昇調長呼



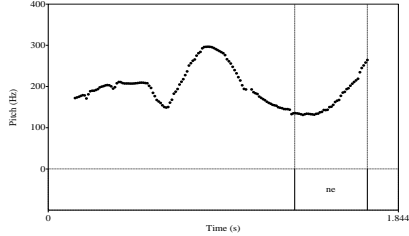
平坦調長呼



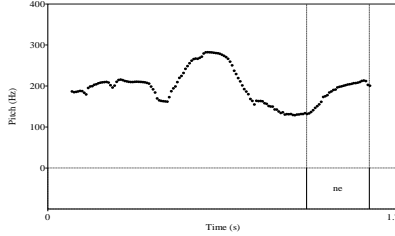
それは嫌なんだよね

※ 疑問上昇 上昇下降 平坦長呼のピッチ曲線は音声を確認後主導で加筆修正

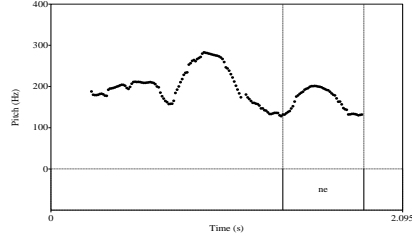
疑問上昇調



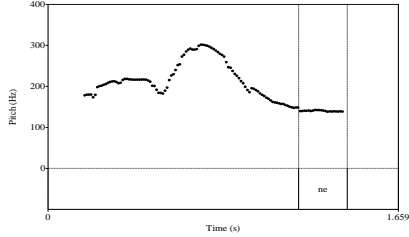
アクセント上昇調



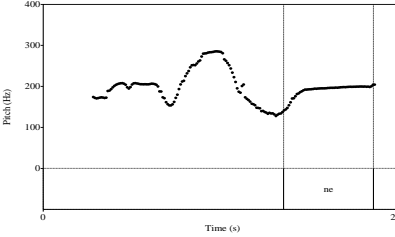
上昇下降調



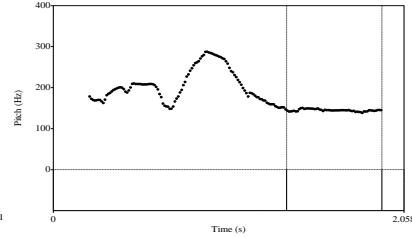
平坦調



アクセント上昇調長呼



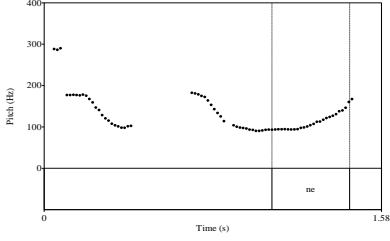
平坦調長呼



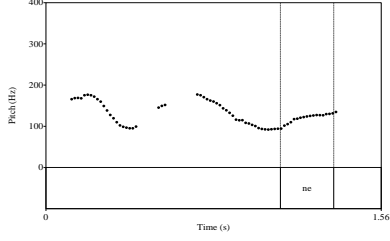
付録6-2 第7章 調査Ⅱで使用した刺激音(男性)

彼に会ったんだよね

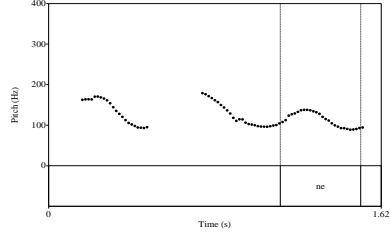
疑問上昇調



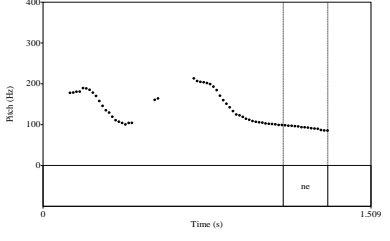
アクセント上昇調



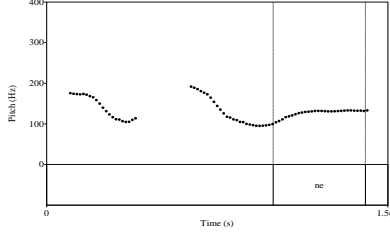
上昇下降調



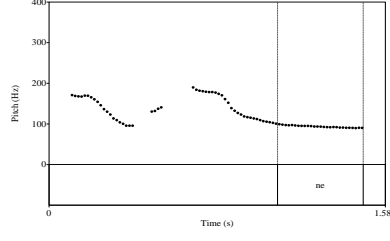
平坦調



アクセント上昇調長呼

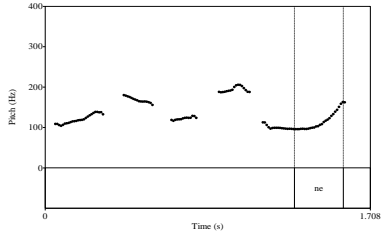


平坦調長呼

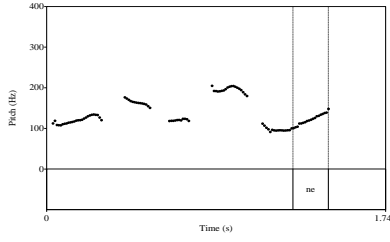


あの店おいしいんだよね

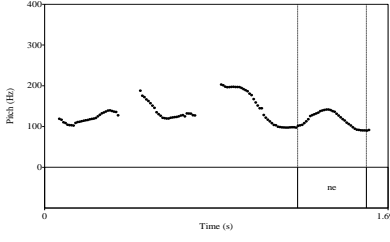
疑問上昇調



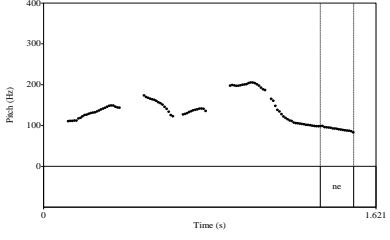
アクセント上昇調



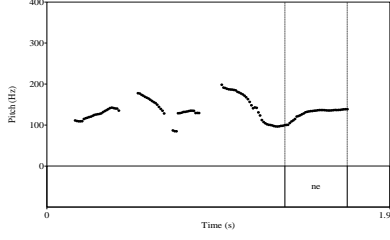
上昇下降調



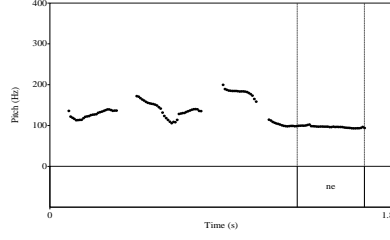
平坦調



アクセント上昇調長呼

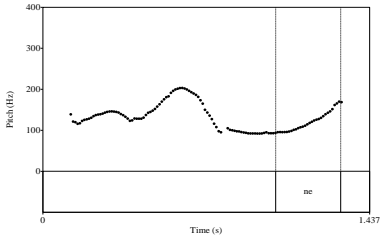


平坦調長呼

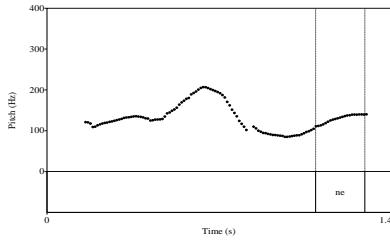


それは嫌なんだよね

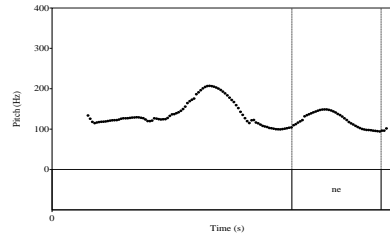
疑問上昇調



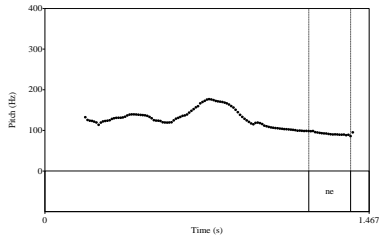
アクセント上昇調



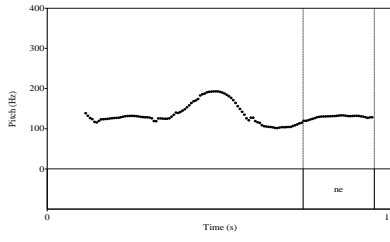
上昇下降調



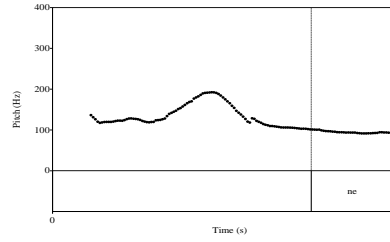
平坦調



アクセント アクセント長呼



平坦調長呼



付録7 第7章「んだよね」調査Ⅱで使用した質問紙

<調査のお願い>

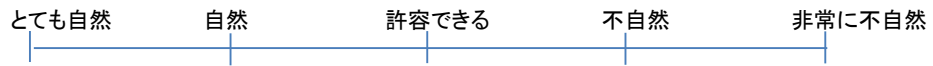
1. 出身地, 性別, 年代(何歳代か)をご記入ください。 出身地() 性別() 年代()
2. 回答の仕方は以下のようにお願いいたします。
 - ・文を聞いて, 該当番号で使用されているイントネーションが自然かどうかについて, 該当するものを○で選択してください。
 - ・「とても自然」「自然」「許容できる」と選択した場合は, 発話者がどのような意図で話しているかを記入してください。
 - ・他の状況と同じだったら, 「○番と同じ」のように回答していただいても構いません。(ただし, ニュアンスの違いがあれば, その点もご記入いただけるとありがたいです)

<音声ファイルについて>

- ・音声は基本的に1回ずつ流します(聞き取りにくかった場合は複数回聞いてくださっても構いません)。

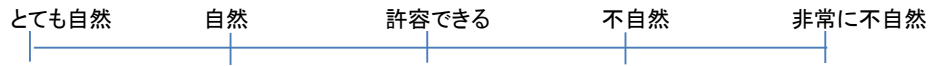
文：明日は木曜日ですか。

①



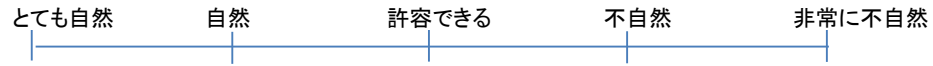
発話意図()

②



発話意図()

③



発話意図()

文：あの店おいしいんだよね。



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()

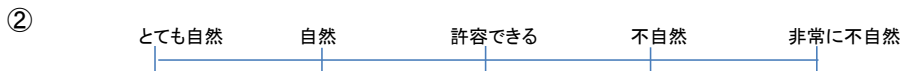


発話意図 ()

文：彼に会ったんだよね。



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()

文：それは嫌なんだよね。



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()



発話意図 ()

付録8 第7章「んだよね」調査Ⅱの回答結果

彼に会ったんだよね(女)

		疑問上昇		アクセント上昇		上昇下降		平坦		アクセント長呼		平坦長呼		
10	埼玉	男	1		4	自分で咳いている感じ 自分が会った	4	相手に向かって同意を求めている(確信を持っている)	4	相手にちょっと怒って尋ねている	4	ひとりごとっぽく呟いてそれをきっちり相手に伝えている 自慢している感じ	2	
10	神奈川	男	2		4	相手が会ったことに対していっている	4	自分は相手が会ったことを分かっている、念押ししている	4	相手が会ったことを問い詰める	4	何気ない感じ 話のネタで相手に「会ったんだよね、どうだった」と言っ	2	
10	東京	男	4	確認と疑問どちらともとれる(確信がある場合もない場合)	4	確認	4	確認している	4	確認している	5	友人と一緒に会ったことを確認し合っている(二人とも)	4	事実を伝えている
10	東京	女	3	相手に聞いている	4	相手に確認を取っている	4	確認を取りながら怒っている	3	意図が読み取れない	4	自分が彼に会って、少し自慢げ	3	相手に会ったかを聞いている
10	東京	男	3	意図は伝わらない	4	確認	4	彼に会ったということを聞いている	2		4	会ったという事実を伝えている	2	
20	東京	男	3	確認している	4	相手に報告している	4	確認みたいな感じで聞いている	3	会ったということを報告している	4	自慢げに報告している	2	
10	東京	男	2		3	事実を確認している	4	確認	2		3	会ったことを自慢している	1	
20	神奈川	女	4	聞き手の方に会ったかどうか聞いている	5	軽く聞いている(疑問より親しくない相手に)	4	聞き手に会ったことを確認している	4	話し手が会ったことを相手に伝えている	5	会ったことを伝えている	3	話し手の方があったことを伝えている(あまり使わないか)
20	神奈川	女	2		4	会ったことを伝えている(嬉しそう)	4	相手に聞いている	2		3	会ったことを伝えている	1	
21	埼玉	女	2		5	(直感的)に会おうと思ってあったのではなく、たまたま会って、それがしかかも自分はあってとてもうれしかった感じを出している	5	会ったことを聞いている 彼に会ったことがあまり良くない感じで聞かれている感じ(会ってほしくなかったなおに、会ったんだよね、み	4	あまり感情が分からない 自分が会った	5	友達に会ったことを報告している(やった！みたいな)	3	
20	神奈川	女	2		4	自分が会ったことを言っている	4	相手に聞いている	2		3	相手が会いたがっていた人に「私はあったんだよねー」	3	ちょっと会ったことが嫌だった気持ちを伝えている
20	東京	女	4	人に会ったんだよねと聞いている	3	自分が言っているかもしれないし、相手に聞いているか	4	相手に聞いている	1		4	自分が会ったんだよねと思いついたことを言っている	2	
10	千葉	女	4	意図が読みにくい	5	しみじみと思いついてあったことを伝えている	5	確認	4	脅迫めいている 会ったことを威圧をかけつつ聞いている	4	友達が3人いて、2人で会ったんだよね、と同意を求めつつ、もう一人に聞かせている感じ	2	
10	埼玉	男	2		4	自分が会ったことを言っている	4	相手に確認している	3	「私は会いましたよ」を暗示	4	自分が会ったことを伝えている	2	
10	神奈川	男	5	自分が会ったことを話しのとっかかりとして話す	5	相手が会ったことを確認	5	確認	2	※ロボット音声みたい	4	自分が会ったことを言っているちょっと軽く相手を挑発して	4	含みがある 自分が会ったと言っている
10	東京	男	2		5	事実を示している(アクセント長呼より自然)	4	疑問	2		3	事実を示している	2	
10	東京	男	3	意図は分かりづらい	5	会話の流れで出てきた感じ 自分が会った場合も、相手が会ったことを聞く場合も有り得る	5	嫌味っぽく確認している	4	相手が会ったことを確認 念押し	4	軽い調子で会ったことを聞いているとも明るく会ったことを伝えているともとれる	2	
20	千葉	女	4	「あなたは彼に会ったんだよね？」と事実の確認している。	4	自分自身が彼に会ったんだという事実を相手に伝えている。	4	「あなたは彼に会ったんだよねえ？」と疑いながら相手に聞いている。	2		4	自分自身が「彼にあったんだー」と事実を相手に伝えている。アクセントより友人同士で話	1	
20	埼玉	女	2		4	会ったことを感想的に伝えている	4	会ったかどうかを確認している	2		4	会ったことを自慢げに伝えている	2	
20	東京	女	1		4	相手に会ったことを伝えている	4	相手に対して座敷そうに問いかけて	1		4	相手に対して共感を示している	1	

彼に会ったんだよね(男)

			疑問上昇	アクセント上昇	上昇下降	平坦	アクセント長呼	平坦長呼
10	埼玉	男	3 自分が会ったことを 呟いている	4 自分が彼に会った ことを呟いている	4 相手に尋ねている	2	4 自分が会ったことを 呟いている(疑問上 昇より自然に会話 に出てきた感じ)	2
10	神奈川	男	2	4 相手に聞いている	4 普通に相手に聞い ている	3 意味はよくわから ない	4 自分が会ったとい うことを言っている	2
10	東京	男	2	4 会ったことを伝えて いる	5 ある程度確信を 持って相手に確認 している	2	5 友達と会ったこと を確認し合っている (二人とも会った)	3 意図はわからない
10	東京	女	4 相手に伝えている	4 話している人が3人 いて、この人と友人 がその彼に会って いて、その旨を別 の友人に言ってい る	4 相手に会ったかど うかを聞いている	3 よくわからない	3 相手に伝えてい て、少し自慢げ	3 自分が会った
10	東京	男	2	4 会ったことを伝えて いる	4 会ったことの確認を している	1	4 会ったことを伝えて いる	2
20	東京	男	2	4 会った楽しさを友達 に伝えている	4 会ったことを確認し て尋ねている	2	4 自慢げに報告して いる	1
10	東京	男	2	3 確認している	3 相手に聞いている	3 確認している	1	3 事実を述べている
20	神奈川	女	5 話し手があって、そ う言えばこないだ 会ったんだよね、と 話の話題をふって	5 聞き手の方が彼に 会って、話し手がそ れを確認している	5 聞き手に会ったか どうか確認している	3 確認だが、この言 いはあまり聞か ない	5 相手に会ったかど うか確認している (相手に言ってるか もしれない)	3 相手に会ったかど うか確認している (あまり聞かない)
20	神奈川	女	5 会ったことを伝えて いる	5 会ったことを話され て繰り返している	4 疑問	2	3 会ったことを伝え ている?(自分が言 われたら違和感 は感じないけど、	2
21	埼玉	女	5 ちょっとくだけてい る感じ その後に文 が続くそう「私彼に 会ったんだよね、そ の時彼が～してた んだよね」という感	5 報告している	5 疑問	2	4 人に聞いているの と、自分が会った ことを言っている のと二通り考えら れる	1
20	神奈川	女	4 自分が会ったことを 言っている	4 「そう言えば会った んだよね」と相手に 聞いている	3 相手に対して聞い ている	4 彼に会ったことが 少し嫌だったけど あったんだと伝え て	4 会ったことを伝え ている	4 嫌だけど会っちゃ ったと言っている(語 尾が伸びると嫌度
20	東京	女	4 自分が会ったことを 言っている	4 相手に聞いている	3 相手に聞いている	2	4 彼にまつという事 実を他人に伝えて いる	2
10	千葉	女	3 意図が読めない	4 確認している	5 相手が会ったこと を知っていて、そ れを確認している	4 早急に会ったこと を相手に確認した い	4 友達3人いて、別 の人に聞こえよ がしに会った二人 が同意を求めている	2
10	埼玉	男	4 自分が会ったことを 会話の切り口として 話している	4 相手に会ったんだ よねと確認	4 相手に聞いただ し	3 相手に聞いただ し	4 相手に言っている が独り言的なニュ アンスが入っている	2
10	神奈川	男	4 自分が会った次に 話を続けようとし ているよう	4 自分が会ったと 言っている(ちよ つと甘えた言い方)	5 相手に確認してい る 会ったのは相 手	2	3 「彼女」だったら、 ほかの男を挑発し ているようだが、 この場合は挑発 ではない 会った のは自	4 自分が会ったこと を言って次に話し が つながりそう だが、あまりいい 話ではない
10	東京	男	2	4 相手に聞いている	5 疑問 アクセント より自然な聞き 方	2	4 事実を示している	1
10	東京	男	4 会ったことを相手 に聞いている	5 さりげなく聞か れているか、話し 手が あったかど ちらともとれる	5 はっきり相手に 聞いている	2	4 話し手があった と言っている(軽 い調子で)平長 より自然で、よ り聞き手に伝	3 話し手が会った と言っている ひと りごとっぽい
20	千葉	女	4 あなたは彼に会 ったんだよね?と 事実の確認を相手 にしている。	5 自分が彼に会った んだということを 相手に伝えている。	4 あなたは彼に会 ったんだよね?と 事実の確認をして いる。疑問上昇 よりも会ったと 言う事実が合っ ているかどうか	1	5 自分が彼に会 ったんだとい うことを相手 に伝えている。 語尾を伸ばす ことで、友人 との会話に 近い表現。	1
20	埼玉	女	3 会ったことを誰 かに伝えている	4 会ったことを誰 かに伝えている	5 会ったかどう かを相手に確 認している	1	4 会ったことを 相手に得意 気に伝えてい る	1
20	東京	女	2	4 相手に会ったこと を伝えている	4 相手に確認してい る	2	4 相手に会ったこと を伝えている	2

あの店おいしいんだよね(女)

			疑問上昇	アクセント上昇	上昇下降	平坦	アクセント長呼	平坦長呼
10	埼玉	男	4 相手に同意を求めている	4 相手に対して呟いている	4 確認 相手をいぶかっている感じ	2	4 自分がおいしいということを相手に伝えている	2
10	神奈川	男	2	2	4 相手に聞いている	4 美味しいという前情報があって、それを相手に疑いながら聞いている	4 自分がおいしいと言っていて、今度行かないという誘いが続きそう	4 自分がおいしいと相手に知らせている
10	東京	男	4 疑問	5 ひとりごとで言っそう	4 疑問なんだけど、ちょっと怒っている	3 事実を伝えている	5 友達と確認し合っている	3 意図はわからない
10	東京	女	3 相手においしいんだよと伝えている	4 軽い調子で伝えている	3 相手に確認を取っている	2	3 相手においしいことを伝えている	3 よみとれない(意味と音調があつてい
10	東京	男	2	4 美味しいことを伝えている	4 美味しいことを確認している	2	5 美味しいことを伝えている	2
20	東京	男	2	4 美味しいことを教えている	3 確認している	2	3 美味しいことを報告している	1
10	東京	男	2	3 確認している	3 相手に質問している	2	3 事実を話している	2
20	神奈川	女	4 美味しいかどうか聞いている	5 一緒に行ったことがあって、「そう言えば美味しかったよね」と同意求め	5 美味しいかどうかわからず、相手に聞いている	2	5 美味しいのを紹介している	3 一緒に行ったことがあって、「そう言えば美味しかったよね」と同意求めでも、美味しいという感じが伝わらないので、ちょっと言わないかも
20	神奈川	女	3 あいまい 食べたことあるのかなのかかわからないけど、疑問のように聞こ	4 多分一回繰り返し食べたことがあって、美味しいと言っている	4 2人で話していて、美味しいんだよねと聞いている(確認)	2	4 美味しいと呟いている	2
21	埼玉	女	2	5 ア長、平坦よりおいしい度が高い 美味しいことを伝えて	5 美味しいかどうか聞いている	4 美味しいことを伝えている(ア長と同じ)	5 美味しいことをそのまま伝えている	4 美味しいことを伝えているが、テンションが低い
20	神奈川	女	4 ほんつとにあの店美味しいんだよねと言っている	4 自分がおいしいと思っている	3 相手においしいかどうかちょっと不信感を持って聞いて前に相手がその店美味しいんだよと言っていたのを思い出して言っている	2 ※美味しいって言っているのに不快感があるのが不	4 自分が行ったことがあって、他の人に同意を求める	2 平坦と同じ理由で不自然
20	東京	女	4 相手に聞いている	4 自分が相手に伝えている	4	2	4 自分が相手に言っている その店を丁度通り過ぎたときに行っている感じ	2
10	千葉	女	4 しみじみと美味しいと言っている	4 ひとりごとで言っそう(誰に聞かせるでもなくしみじみと言っている感じ)	5 確認	1	5 同意を求めている	1
10	埼玉	男	2	3 ひとりごと的に自分で思いつきながら	4 相手に本当においしいんだよね、と念	2	4 自分がおいしいと言っている	2
10	神奈川	男	4 美味しいということを言って話をつづける感じ	3 ひとりごとっぽいけど、内容がひとりごとっぽくないので、許容)	5 相手に確認 もしかしたらちょっと疑っているかも	2	5 意図はわからないがこの音調はよく聞く	2 ※美味しいと音調が合わない
10	東京	男	2	5 事実を示している	4 問いかけ(疑問と同じ)	1	3 事実を示しているが、語尾を上げる口癖をするような人が話している	2
10	東京	男	3 美味しいか聞いている	5 聞いているか、会話の中でおいしいという情報を伝えているかどうかどちらも取れ	4 確認している	1	4 美味しいという気持ちかが伝わってくる言い方	1
20	千葉	女	4 あのお店が本当においしいのか、相手に確認している。	4 相手とそのお店の話になり、「あの店っておいしいんだってね」と相手とその店の評価を共有している。	5 あの店っておいしいんだよね？と相手に確認している。疑問上昇に似ているが、疑問上昇よりも本当においしいのか疑っている。	1	5 「あの店おいしいんだってね」と相手と聞いた情報を共有している。アクセントと似ているが、こちらの方が友人同士の会話で話す機会が多い表現。	1
20	埼玉	女	4 複数人で話をしている、もう一人の聞き手に美味しいよね(美味しいという気持ちを察しながら)確認している	3 相手に美味しいと伝えている	3 相手に美味しいお店かどうか聞いている	1	4 独り言のように美味しかったと言っている	3 相手に美味しいと伝えている
20	東京	女	2	4 気持ちを伝えて共感を求めている	4 相手に問いかけている	2	4 気持ちを伝えて共感を求めている	2

あの店おいしいんだよね(男)

			疑問上昇	アクセント上昇	上昇下降	平坦	アクセント長呼	平坦長呼
10	埼玉	男	3 つぶやき ひとりごとのよう	4 確認と自分の気持ち両方とれる	4 同意を求めている	2	4 確認と自分の気持ちを伝えているのと次に今度一緒に行かないみたい誘いが来る 話し手がおいしいと思っ	4 普通においしいんだよと伝えている 相手がおいしいと思っ
10	神奈川	男	3 あまりこういう風には言わない	3 あまりこういう風には言わない	4 相手に尋ねている	4	4 あの店が美味しいことを疑っている	4 思っているようだが自分は美味しいとは思って
10	東京	男	3 意図がわからない	3 意図が分からない	5 ちょっと不安な感じで確認している	2	1 美味しいと伝えようとしている	3 分からない
10	東京	女	4 自分がおいしいと思っている	4 自分がおいしいと思っている	4 確認を取っている	4	3 人に伝えている	4 確認を相手に取ろうとしている
10	東京	男	4 店がおいしいということを伝えようとし	4 確認している	5 あの店がおいしいという情報を確認し	2	4 店がおいしいということを伝えようとし	2
20	東京	男	2	3 誰かに教えている	4 相手に聞いている	2	4 誰かに薦めているような感じ	1
10	東京	男	2	3 確認している	4 疑問、確認	4	5 事実を述べている	2
20	神奈川	女	5 確認(上下の様な含みはない)	5 同意を求めている	5 聞き手に確認している(聞き手は美味しいと言っていたけど、自分は美味し	3	5 一緒にいった相手に同意を求めている	3 話し手がおいしいことを伝えていると思っ
20	神奈川	女	4 自分は食べたことなくて聞いている	5 食べたことがあって言っている	5 美味しいことを知らずに聞いている	1	5 美味しいことを伝えている	1
20	埼玉	女	2	4 確認している 美味しいってすでにその人が言っていて、本当にあの店美味しいんだよね、と確認	5 疑問 ちょっと疑っている感じ「本当においしいの？」	2	4 自分にも言い聞かせているし、人にも伝えている感じ 伝えているんだけど、改めてあの店美味	4 あまりおいしいと思っ
20	神奈川	女	2 ※意図が伝わりづらい	3 美味しいことを伝えている(分かるけどあまりおいしいという気持ちが伝わ	4 相手に聞いている	2	4 ※言っていることと発話の仕方が不自然	4 自分がおいしいと思っ
20	東京	女	4 相手に聞いている	4 多分相手に聞いている	4 相手に聞いている	1	3 場合によって、自分が言っているか相手に言っ	2
10	千葉	女	3 意図は読めないがきくかな、という感じ	4 疑問に聞こえることもあるし、確認にも聞こえる おおざっぱに分類したら同じだが、美味しいと聞いたことはあるけど食べにいったことはないの	5 確認 同意求め	2	5 感嘆 しみじみと気持ちを伝えている	4 ひとりごとっぽい
10	埼玉	男	3 自分で思い返しなが	4 疑問と同じで、思い返しなが	4 相手に聞いかけ	2	3 自分がおいしいと言っ	2
10	神奈川	男	4 それをとっかかりにして、誰かを誘おう	4 小さい子に聞いている(確認)ような	5 相手に確認している	2	3 相手に質問するといっ	4 ひとりごとっぽい
10	東京	男	2	4 事実を示している	4 疑問	1	2	1
10	東京	男	4 疑問なんだけど、本当にそうかと確かめる感じ ちよ	4 聞かれている 疑問上昇より軽い調子で聞かれている	5 美味しいことを聞かれて	1	3 会話の流れの中で自分がおいしいことを言っ	2
20	千葉	女	4 「あの店って美味しいんだよね？」と相手に聞いている。上下と似ているが、	5 「あの店っておいしいんだよね？」と相手と情報の確認している。②と似て	5 「あの店っておいしいんだよね？」と疑いながら、相手に聞いている。	2	5 「あの店っておいしいんだよね？」と相手と確認している。	1
20	埼玉	女	3 相手に美味しいお店を確認している	4 美味しかったことを感想として述べて	4 以前行ったことある相手に美味しいかどうか確認している	3	4 相手に美味しかったことを伝えている	2
20	東京	女	3 相手に聞いている	4 相手が経験したことについて共感して	4 相手に同意を求めている	1	4 相手においしいと伝え、同意を求めている	1

それは嫌なんだよね(女)

			疑問上昇	アクセント上昇	上昇下降	平坦	アクセント長呼	平坦長呼						
10	埼玉	男	4	自分が嫌であることを相手に伝えて	4	確認と同意求め	4	確認 相手に尋ねている	2	自分が嫌だということを言っている	2			
10	神奈川	男	2		4	場合によって、自分が嫌だと言っているのと、相手に確認しているのとど	4	相手に確認している	4	自分が嫌だと言っている	4	自分が嫌だと言っている		
10	東京	男	3	意図が分からない	4	意図はわからない	4	子どもに教えている感じ 親が子どもに、「それはみんないやなことだよ」と言っている感じ	2		5	友人とお互いの意見を確認し合っている感じ(同意求め)	2	
10	東京	女	4	相手に聞いているかもしれないし、自分が嫌だと思っているかもしれない	5	相手に聞いているかもしれないし、自分が嫌だと思っているかもしれない	4	相手に聞いている	5	自分が嫌だと思っている	4	自分が嫌だと思っ	5	自分が嫌だと思っ
10	東京	男	4	多分相手に聞いている	5	嫌ですという意思を伝えている	5	嫌かどうかを聞いている	2		5	嫌だということを伝えている	2	
20	東京	男	2		3	自分が嫌であることを教えている	3	相手に尋ねている	3	嫌であることを報告している	4	嫌だということを伝えている	1	
10	東京	男	2		3	確認	3	確認	4	強く主張している	2		4	主張している
20	神奈川	女	5	相手に聞いている	5	相手に同意を求めている(確認だが、上下よりは嫌だということを知っていて確認している)	5	相手に嫌かどうか聞いている	2		4	自分が嫌だと思っ	4	自分が嫌だと思っ
20	神奈川	女	3	意図が分からない	5	同意	5	嫌なんだよ、と相談されて、返す言葉 相手が嫌だということが分かっている状況での確認	2		4	嫌なんだよね、と自分の気持ちを伝えている	2	
21	埼玉	女	5	疑問 聞いている	5	上下よりちょっと押しつけがましくない共感	5	確認 相手の気持ちに共感している(うんと言って!みたいな感じ)	4	自分の気持ちを伝えているけど、平長に比べて主張が強い	5	平坦と対照的で、嫌感が少ない、軽く嫌だと言っている	5	自分の気持ちを伝えている
20	神奈川	女	2		4	相手に対して気持ちを言っている	4	相手に聞いている	4	ケンカ口調で気持ちを伝えている	3	会話というより、ちょっと離れたところ	4	嫌味っぽく相手に気持ちを伝えている
20	東京	女	4	小さい子に嫌だと言っている	5	自分が嫌だと言っている	5	普通に会話をしている、こういうことがあったんだよね、と言って相手が嫌だったんだと言ったら「あ、いやだった	2		3	自然じゃないが、普通にしゃべっておかしくなった時に出てきそう	4	若い子同士が他のことをしながら気持ちを伝えている
10	千葉	女	5	自分の意思を相手に伝えている	5	自分の気持ちを伝えている	5	母親が子供に対して諭す感じ「そういうことしたらいやでしょ」と反語的な言	5	相手を気遣うことなく自分の気持ちをズバツと単刀直入に言っている	4	同意を求める感じ 気持ちを伝えているかも	3	自分の気持ちを伝える場合によっては少し脅迫めいた感じを受ける
10	埼玉	男	2		3	相手への確認	4	相手への確認	3	自分が嫌だと言っている	3	自分が嫌だと言っている	3	自分が嫌だと言っている
10	神奈川	男	5	自分が嫌だということを伝えていて、次に話しがつながりそう	5	自分が嫌だということを伝えている	5	相手が嫌がっているんだなと思ひ確認している	5	自分が嫌だと言っているが、アクセント長、平長より冷たい言い方	5	ひとりごとっぽい	5	ひとりごとっぽい
10	東京	男	2		4	嫌だと思っ	4	疑問(問いか)	2		4	事実を示している	1	
10	東京	男	4	聞かれているような感じ 小さい子に嫌だと聞いている感じ	4	聞いている	4	相手に嫌であることを聞いている	3	嫌だということをぼそつと言っている	3	軽く気持ちを呟いているか質問しているかどちらも取れる	2	
20	千葉	女	4	「あなたはそれは嫌なのよね?」と確認している。子どもに話しているように聞	5	自分が「それは嫌なんだよね」と相手に伝えている。	5	私はいいいけれども、あなたはそれが嫌なんだよね?と確認している。	2		5	私ほそれは嫌なんだよねーと相手に伝えている。友人同士で話す表現。	1	
20	埼玉	女	2		4	嫌だと思っ	4	相手に嫌かどうかを確認している	2		3	選択肢が複数ある中で「それ」が嫌であることを伝えてい	4	いやだと思っ
20	東京	女	4	相手に対して起こった事例について、仲介に入って同意を表している	4	相手に嫌だと伝えている	4	相手に確認している	2		4	相手に嫌だと伝えている	1	

それは嫌なんだよね(男)

			疑問上昇	アクセント上昇	上昇下降	平坦	アクセント長呼	平坦長呼
10	埼玉	男	4 相手に対して確認している	4 自分が嫌だと相手に伝えている	4 確認 自分があらかじめ相手が嫌だと知っていて、改めて確認している	2	4 咬いていて、相手がいるとは思いますが、自然なひとりとっぼい	2
10	神奈川	男	3 意味はよくわからない	4 自分が嫌だと軽く言っている	4 相手に聞いている	2	4 自分が嫌だと言っている感じ	2
10	東京	男	4 意図はわからない	4 友達と確認している	5 ある程度確信があって確認している	2	5 事実を伝えている	2
10	東京	女	3 相手に嫌って伝えているかもしれないし、目下の人に確認を取っているかもしれない	4 話している人が3人いて、それが嫌だと認識を持っている人が二人いて、片方に答えが分かっている上で、もう一人の人に聞こえよがしに同意を求め	4 相手に聞いている	2	4 嫌だということをとげとげしくならないように言っている	4 自分が嫌だと言っている
10	東京	男	3 相手に聞いている	3 嫌だということを伝えている	3 嫌だということを確認している	1	4 嫌だということを伝えている	1
20	東京	男	2	4 嫌であることを教えている	4 嫌であることを確認しながら訪ねている	2	4 プリがいいけど嫌なことを伝えている(深刻ではない)	2
10	東京	男	2	3 確認している(正しいと確信しながら一応聞いている)	4 相手に質問している(正しいかどうかわからないから聞いている)	4 主張している	2	2
20	神奈川	女	5 相手に嫌かどうか聞いている	4 話し手が嫌だということを伝えている	5 確認 平長よりもっと親しい相手に言っている	3 話し手の方が嫌だと言っている ちよつと意図が読みにくい	5 確認 親しいというより、先生が生徒に言うような上下関係がありそう	5 相手が嫌だと思っていて、それを確認している
20	神奈川	女	4 相手に合わせて同意している	2	4 相手に聞いている	2	4 相手に同意している	5 相手に同意している
21	埼玉	女	4 自分が嫌なことを伝えているのと相手に嫌かどうか聞いているのと二通り	2	5 相手に嫌かどうか聞いている(平長より親身に聞いている 相手のことをちゃんとわかっている上で聞いている)	2	5 自分の気持ちを伝えているけどそんなにいやじゃない	5 相手に嫌かどうか聞いている(相手のことをあまりわからず臆測で言っている)
20	神奈川	女	4 相手に対して聞いている	4 相手に対して嫌味っぽく言っている	4 相手に聞いている	4 自分が相手に対していっている 注意している感じ	4 さりげなく嫌だということを伝えている (オブラートに包んだ言い方)	2 ※嫌って言っている割にそんなにいや度が伝わらないという点で不自然
20	東京	女	4 相手に嫌なんだよねと聞いている 自分がそれを嫌に感じることを軽めに伝えている	3 相手に聞いている	5 小さい子に確認している	2	3 片手間に嫌なんだよねーと言っている感じ	5 普通に軽い感じで嫌なことを伝えている
10	千葉	女	5 嫌だと拒絶している	5 自分が会ってしまったことをいじけながら言っている	5 確認 事前に聞いていて、改めて確認	1 ※語尾が下がっていて、感情が読めない	5 アクセントと似ている いじけ度合いは下がっているけれど、友達どうして自分の主張をするために言っている	1
10	埼玉	男	3 話し手が幼い印象を受けた 自分が嫌なことを暗示	4 相手が嫌そうにしているのを見て確認	4 確認だが、話し手が上から目線っぽい	3 自分が嫌なことを暗示しているようだが、話し方が幼稚	3 嫌だということと言っている	2
10	神奈川	男	4 相手に嫌だということを知って分かってもらおうとしている 自分が嫌がっている	5 小さい子に向かって、嫌がっている子供に確認している	5 小さい子に向かって、嫌がっている子供に確認している	5 自分が嫌だけど、相手にどうしてほしいというより、ただ言っているだけ	5 自分が嫌だと言っている	4 意図はわからない
10	東京	男	2	3 相手に聞いている	4 確認している	1	3 確認	1
10	東京	男	5 発言した相手が軽く嫌等主張しているようにも、嫌なんだろと聞かれているようにも取れる	4 自分に対して、嫌であることを確認している	5 はっきりと確認されている	2	4 これだけだと、自分が嫌なのか相手に聞いているのかわからない	1
20	千葉	女	5 相手が嫌とは知っているけれど、改めて確認する時。②と似ているが、さみしそうではない。	5 自分がいやだということを、相手に伝えている。ア長呼と似ている。	5 相手がいやと知ってて、改めて「いやなんだよね」と確かめるとき。さみしそう。	1	5 誰かに「これはどう？」などと意見を求められて、応答するとき。	1
20	埼玉	女	3 複数人で話をしている、もう一人の聞き手に嫌かどうか(嫌だという気持ちを察しながら)確認している	4 相手が提案してきたことについて嫌だと感想を述べている	4 相手に嫌かどうかを確認している	2	5 相手が提案してきたことについて嫌だと感想を述べている	2
20	東京	女	2	4 確認している	4 確認している	2	4 自分の気持ちを伝えて相手に共感を求めている	1